

2021-2023 年度

特定非営利活動法人ほしはら山のがっこう

島根県中山間地域研究センター共同研究報告書

自然体験による子どもの豊かな育ち及び

「ふるさと」への心理的基盤の形成に関する総合的研究

～20年間の自然体験がもたらしたもの～



本研究における言葉の定義

「ふるさと」

1. 一般的に、その人に古くからゆかりの深い所、生まれた土地や住みなれていた所
2. また、豊かな自然に囲まれて、その自然の恵みを受けて人々が暮らしている地域
3. さらに、その人がふるさとだと感じる場所

ふるさとへの心理的基盤

「ふるさと」との心のつながりによる、人生を支える物事の捉え方や考え方の基礎

人生の土台

人生を支える物事の捉え方や考え方の基礎

農村

漁村も含む（農山漁村）

ほしはら

ほしはら山のがっこう

（旧上田小学校を拠点とした体験の場を示す。なお、ほしはら山のがっこうは団体名でもあるため、団体を指すときはNPO法人ほしはら山のがっこうまたは当NPOと記載する。）

はじめに

中山間地域の人口減少が進む中で、移住者を増やすという視点だけでは立ちゆかなくなるため、出身地を離れた後も出身地に関わり続けたり、生まれ育った場所ではないが「ふるさと」と思える場所に関係人口として関与していったりする人材が今後さらに必要となっていくことが考えられる。

しかし、社会の様々な変化により農村や自然との接点が減少しており、「ふるさとへの心理的基盤」を形成できる機会は激減している。長期的な視点に立ち、特に次世代を担う子どもたちが「ふるさと」に愛着を持つ体験の機会をつくることは、今後の中山間地域づくりにとって重要な視点である。

この調査研究は、「子ども時代の自然体験が、次世代の移住や関係人口などこれからのふるさとを担う人づくりにつながる」という仮説のもと、自然体験活動参加者の「ふるさと」に対する意識変化を明らかにし、さらに中山間地域における子どもの自然体験の場づくりを検証することを目的として実施するものである。

調査対象は、広島県三次市にある「特定非営利活動法人ほしはら山のがっこう（以下、当NPO）」が長年実施するふるさと自然体験塾と7泊8日子どもキャンプの参加者とした。当NPOは親子をメインターゲットに「ふるさと」の自然や地域とふれあう体験活動を約20年間続けているため、過去の参加者を調査対象とし、活動参加後の長期的な変化を把握するための追跡調査が可能である。また、自然観察や沢登り、登山などアウトドアを楽しむ体験だけでなく、田植え、里山整備、地域の食文化など農村ならではの自然体験に加え、地域住民との交流や子ども同士で協力し合ったり面倒を見合ったりする関係性づくりを行っていることから、農村における自然体験について調査することができる。

本研究では、体験参加者に対するアンケート及びインタビュー調査をもとに、①農村における自然体験が個々にどのような影響をもたらしているか、②参加者が農村地域や「ふるさと」をどのように捉えているのか、また今後農村地域や「ふるさと」の関係人口や移住者になりうるかを検証し、さらに③「ふるさと」への心理的基盤形成に対し、社会（教育機関・行政・地域住民等）に必要なことはなにかを検討する。

目次

本研究における言葉の定義

はじめに	1
1章 研究の概要.....	7
1. 研究の目的.....	7
2. 調査の手法.....	7
3. 研究全体のフロー	7
2章 特定非営利活動法人ほしはら山のがっこうの紹介.....	11
1. 活動拠点地域：上田町について.....	11
2. 設立の経緯.....	12
3. 活動実績	13
3章 参加者へのアンケート調査結果からみえたこと	19
1節 ほしはら山のがっこうでの活動	19
1-1. 回答者の属性	19
1-2. 参加者のほしはら山のがっこうでの活動経験.....	23
1-3. 活動の思い出	25
1-4. 活動に参加した理由	30
1-5. 体験の感想.....	32
1-6. ほしはら山のがっこうでの体験によって成長したこと・影響を受けたこと.....	34
1-7. ほしはら山のがっこうや体験地域との今後の関わり	39
2節 子ども時代の農業や自然体験と暮らしの選択の関わり	41
2-1. 農業体験や自然体験の有無、育った環境	41
2-2. これまでの農業体験や自然体験から考え方や暮らし方に影響を受けたこと.....	49
2-3. 農村への移住希望と「ふるさと」に対する思い	53
3節 ほしはら山のがっこうの活動に参加している子ども（小学生以下）の回答.....	57
4節 考察.....	63
4-1. ほしはら山のがっこうの活動への参加によって生じていること	63
4-2. 地域との関わり.....	63
4-3. 「ふるさと」観.....	64
4章 インタビュー調査結果からみえたこと	67
1節 11人の参加者のケース分析	67
1-1. 調査の方法、対象者の概要	67
1-2. 分析方法.....	67
1-3. インタビューから抽出した9つの項目と考察	68
(1) 項目ごとの考察	68

(2) 11人のインタビュー全体を通した考察	85
2節 3人の地域住民のケース分析	92
2-1. 調査の手法、対象者の概要	92
2-2. 分析方法	92
2-3. インタビューから抽出した3つの項目と考察	92
5章 まとめ	97
1節 自然体験による子どもの豊かな育ち及び「ふるさと」への心理的基盤の形成に関する総合分析～調査結果より明らかになったこと～	97
1-1. 前提となる社会の捉え方	97
1-2. 調査結果より明らかになったこと	97
1-3. 今後の課題と社会に必要なことについて	99
1-4. 持続可能な社会づくりの担い手育成に向けた追加の視点	100
2節 体験交流による地域づくり	102
2-1. 体験に必要な地域住民の様々な関与	102
2-2. 効果的な活動を実践していくための体制の工夫	104
2-3. 農村の自然体験の場づくりにおいて必要な整備とその工夫	105
2-4. 体験交流と移住定住	105
おわりに	107
資料編	111
ストーリー記録	111
1. 11人の参加者のストーリー	111
2. 3人の受入地域住民のストーリー	157
アンケート調査票	168

1 章

研究の概要

1章 研究の概要

1. 研究の目的

自然体験による子どもの豊かな育ちと、「ふるさと」への心理的基盤形成に与える影響について、農村における自然体験を約20年間継続してきたほしはらの参加者を対象としたアンケートやインタビューによって明らかし、これからの「ふるさと」を担う人づくりについて検証する。

さらに「ふるさと」への心理的基盤形成に対し、社会（教育機関・行政・地域住民等）に必要なことはなにかを検討する。

2. 調査の手法

<アンケート調査>

期間：2022年9～12月

方法：郵送配布、回答はwebまたは郵送

送付数：497通(その内100通返戻)

回答数：大人90人、子ども32人

対象：①大人 過去にほしはらの活動に参加した方で現在中学生以上の方
②子ども 過去にほしはらの活動に参加した方で現在小学生以下の方

<インタビュー調査>

期間：2022年10～12月、2023年7月

方法：オンライン会議システム及び対面

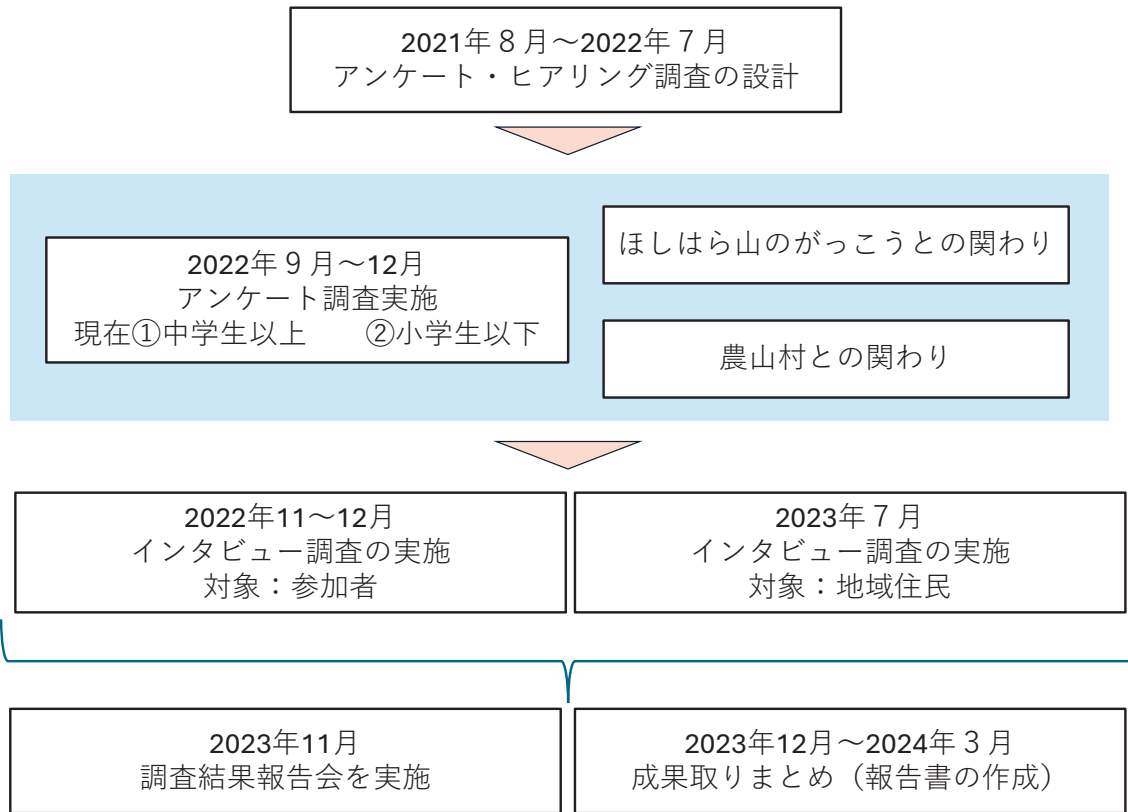
人数：参加者11人、地域住民3人

対象：①過去にほしはらの活動に参加した方で現在中学生以上の方
②ほしはらの活動に関わっている地域住民

3. 研究全体のフロー

研究期間は2021年8月～2024年3月までの3年間である。2021年8月～2022年7月までは、研究の全体像の検討、アンケート及びインタビュー調査の設計、2022年9月～12月に、アンケート調査①（大人対象）およびアンケート調査②（子ども対象）を実施した。アンケート調査①でインタビュー調査に協力すると回答された方に、オンライン会議システムを活用したインタビュー調査を実施した。また2023年7月に、ほしはらの活動に関わっている地域住民3人に対面でインタビュー調査を実施した。その後、調査結果を取りまとめ、共同研究により検証を重ねた。2023年11月にはほしはらの20周年記念式典に合わせて、上記の調査結果の報告会を開催した。

図1-1 研究全体のフロー図



2 章

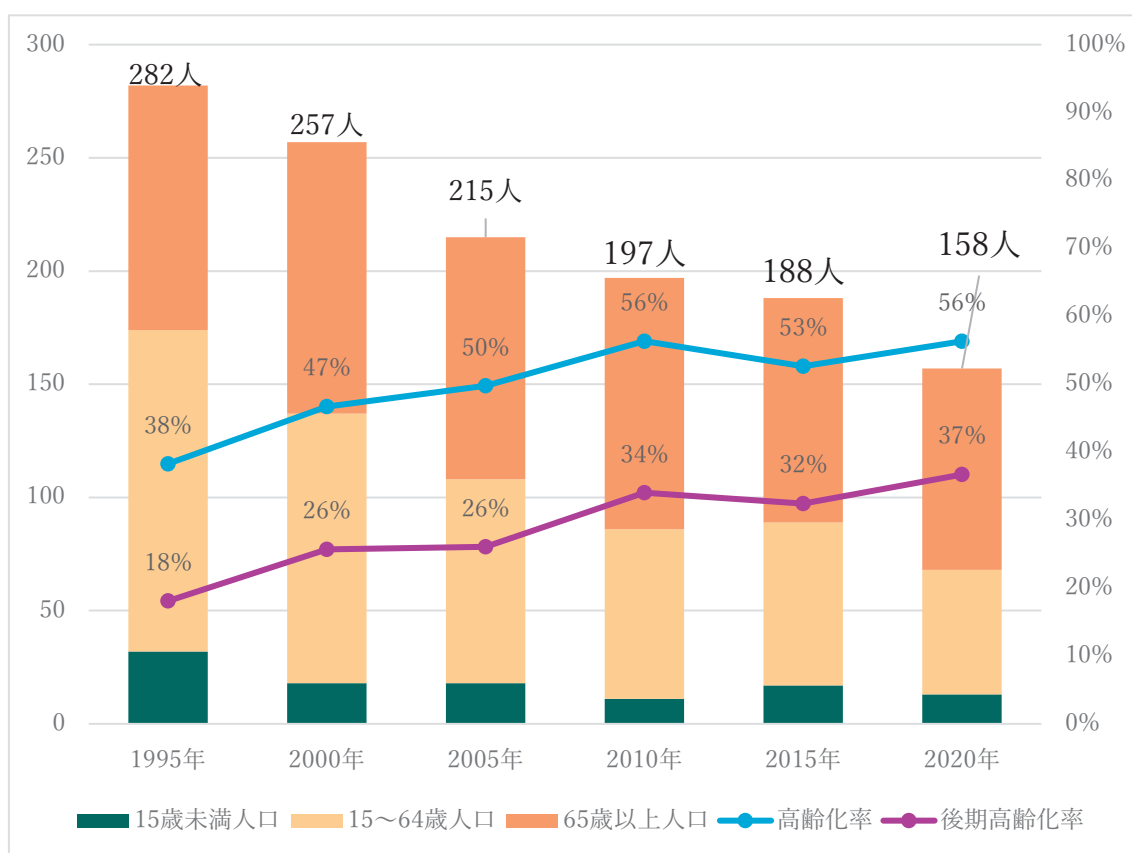
特定非営利活動法人
ほしはら山のがつこうの紹介

2章 特定非営利活動法人ほしはら山のがっこうの紹介

1. 活動拠点地域：上田町について

活動拠点施設である元上田小学校は、広島県三次市上田町の標高 450m 地点にある。上田町は三次市街地から 20 km ほど離れた山間部に位置し、集落や田畑が谷あいと丘陵地に点在している。また三次市名物の「霧の海」が望める岡田山山頂や、一年中果物狩りが楽しめる平田観光農園がある。

図 2 - 1 三次市上田町の人口推移



データ：国勢調査（各年）

上田町の人口は 2003 年には約 250 人、高齢化率 50% だったが、2024 年には約 150 人、高齢化率 59% となり、この 20 年間、廃校に始まり商店 2 店両方の閉店、芸能保存会の解散や地域行事の縮小、耕作放棄など、少子高齢化・人口減少による影響が出ている。

一方で、運動会や夏祭り、とんどなどは、町外からの交流者と一緒を実施することにより、人手やにぎわいを得て継続している。また人が集ったり学んだりできる機会が縮小しない

よう、住民も交流者も参加できる場づくりを町内会と当 NPO が協働で実施している。中には数年にわたってこの地域を第 2 のふるさととし、交流し続けている方や家族もあり、近況を伝えあったり子どもの成長に目を細めたりと心が通いあう姿が見られる。



移住者については、この期間に I ターンが 11 戸 35 人、U ターンが 9 戸 18 人あった。I ターンの内、2 戸は当 NPO と地域が実施する体験交流が移住のきっかけとなった。2024 年 1 月現在、高校生以下の子は 15 人（6 戸）いる。町内会や消防団員など地域役員においては IU ターン者が担い手になっている。

若い世代の活動も起きている。地域を盛り上げつつ自分たちの交流も楽しもうという緩やかな若者グループ「グリーン会」は、町外居住の出身者も一緒に草刈り受託や町内会行事の屋台などの活動をしている。ある I ターン女性は同町の茶畑を守るため、六次産業化の取組で「Tetoteto」を起業し、周辺の I ターン女性 3 名とほうじ茶シロップを加工販売している。農地の耕作を引き受ける若い U ターン者もある。

同町は三次市川西地域に属する 5 町のひとつである。川西自治連合会では住民ワークショップにより策定した地域づくりビジョン「田舎暮らしが楽しい里」（2006 年 3 月）に沿った地域づくり活動を展開しており、当 NPO を含め、地域内 3 つの農事組合法人や住民出資でつくった株式会社が運営する買い物交流拠点「川西郷の駅」などの地域運営組織も連合会の連携組織としてビジョンを共有し、行政とも連携しながら一体となった協働のまちづくりを推進している。

2. 設立の経緯

2003 年 3 月に廃校となることが決定した三次市立上田小学校の活用方向について、上田町内会による公募委員と三次市がプロジェクトチームを組んで廃校 2 年前より協議した結果、地域が主体となって都市農村交流施設として利活用することになった。2003 年 5 月、任意団体「上田町まちづくりセンター」を町民有志により設立。2012 年に法人格を取得し、「特定非営利活動法人ほしはら山のがっこう」となった。

3. 活動実績

2003年、廃校と同時に施設を市から無償で借り受け、町民有志が中心となって県内外の有識者や協力者の支援を得ながらワークショップや現地調査を行い、ふるさと資源の掘り起こしやモデルプログラムづくりをした。その夏から月一回ペースで「ふるさと体験スクール」を試行した。民泊を含めた農村ならではの体験プログラムは、2003年度トムソーヤスクール企画コンテスト（財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団）において「おじいちゃんおばあちゃんの活躍」が評価され、最優秀賞・文部科学大臣奨励賞を受賞した。

2004年度から2年間、国（農水省）の補助金を受けて地域連携システム整備事業（ソフト事業）や施設整備事業（ハード事業：国1/2・三次市1/2）が行われ、校舎は体験交流宿泊施設として生まれ変わった。以降、県内外から活動趣旨に共感して集まったボランティアスタッフが町民有志と共に企画運営を行い、年間を通して地域と人、自然と人、人と人をつなぐ取組を継続している。

具体的には、年間を通した「ふるさと自然体験塾」の主催に加え、様々な団体や行政との協働事業、また人材育成や環境教育によって、ミッションである「これからのふるさとづくりと未来を担う人づくり」を推進している。

中でも、開設当初から毎年実施地域として受け入れてきた「夏休み7泊8日子どもキャンプ（自遊人楽校主催・当NPO共催・町内会協力の実行委員会形式で実施）」は、「ふるさと」の自然と人にどっぷり浸かって過ごす長期キャンプとして力を入れてきた。地域全体のあたたかな受け入れに支えられ、野山や川で遊び、キャンプ期間の1日は農家の軒下や裏山などに野営してくる冒険を行い、また地域の盆まつりに出店し、時には地域の方から野菜が届くなど、参加者にとってもスタッフにとっても濃い体験と交流の場となっている。リピーターも多く、数年前からはかつて小学生・中学生の参加者だった子どもたちがジュニアスタッフや大人スタッフとして活動に帰ってきている。当NPO主催の体験交流活動の参加につながるケースも多い。

近年は、多様な主体による里山保全と活用に力を入れ、荒れていた里山や耕作放棄地を体験交流の場として整備する活動を参加型で行う「ほしはらの森づくり（2010年～）」や「里山いきもの探険フィールドづくり（2022年～）」によって、里山環境を共有し、恵みや学び・里山コミュニティを分かち合える場づくりをすすめている。この活動の一環で、（一社）ひろしま森のおもちゃ協会主催（当NPOが共催）の「森のようちえん（月一・親子型・2018年度～）」がスタートした。

2013年には簡易旅館業を取得し、学校や子ども会、様々なグループの受入（日帰り・宿泊・体験）がスタートした。2020年度より指定管理制度が導入され、当NPOが三次市指定管理施設「上田山の学校」の指定管理者となった。

○2023 年度実績（延べ人数・約）

ふるさと自然体験塾参加者：1000 人

体験プログラム提供：700 人、交流の場：280 人

宿泊：1400 人、日帰り：1400 人、体育館：200 人

環境整備ボランティア：170 人

○会員数

正会員 20 名・2 団体

賛助会員 130 名（家族会員を含む）・3 団体

○各賞

2011 年内閣府特命担当大臣表彰（子ども若者育成支援）／2019 年ひろしま環境賞（広島県）／2020 年度あしたのまち・くらしづくり活動賞内閣官房長官賞／2021 年環境保全功労者等表彰（環境省）他



設立趣旨

自然豊かで昔からの暮らしが今なお残るわたしたちの「ふるさと」は、過疎化・少子高齢化、農林業や伝統文化の担い手不足などの問題を数々抱え、コミュニティー機能の維持が不可能になってきています。耕作放棄地、荒れた森、廃校、廃屋、その末には廃村…という現象も水源地から順々に起こっています。

わたしたちは、ここで起きていることは、地球全体が抱えている環境問題や、「本当に豊かな暮らし・生き方」「これからの開発の在り方」を求める人々の姿とつながっていると考えます。

平成15年3月、わたしたちの「ふるさと」にあった三次市立上田小学校も時代の流れに逆らえず廃校となりました。小学校は地域の人々にとってふるさとのシンボリックな存在であり、またさまざまな意味で「つながり」の接点でもありました。「大切なものを失った」という逆境の中で、わたしたちは「ふるさと」が持つ教育力・癒しの力・居場所としての機能・自然と人の共生力・農的な暮らしの知恵や結の精神・農村景観などの「豊かな価値」について再認識させられました。また、その豊かさは人々の幸せ感につながっていることに気付きました。

そして、旧上田小学校（通称ほしはら山のがっこう）を拠点としたふるさと自然体験による交流事業や地域づくり活動を重ねる中で、都市住民・大学生などの若者・子どもたち・自然体験活動指導者・諸外国からの訪問者・アーティスト・農林業ボランティア・地域おこしボランティアなどにつながる機会を得ました。そのなかで農山村の持つ豊かな価値や資源そして課題を「ふるさと」とつながる人々とシェアし、共有・活性化または解決に向かえる仕組みを構築することが、これからの持続可能な地域社会づくりに貢献することができる一つの形であるという考えにいたりました。

さらに、このような活動を行うにあたって社会的な信用を得て活動を推進していくため、また今後の諸事業を遂行していく上で様々な契約の必要性が生じたため法人化が急務となりました。ただし、営利を目的とはしていないので会社法人の形式は似つかわしくありません。そこで、特定非営利活動法人ほしはら山のがっこうを設立することにいたしました。



3 章

参加者へのアンケート
調査結果からみえたこと

3章 参加者へのアンケート調査結果からみえたこと

当NPOが2003年度から2022年度の期間に実施した「ふるさと自然体験塾」と「7泊8日子どもキャンプ」の参加者を対象に、中学生以上向けのアンケート調査（以下、大人アンケート）と小学生以下向けのアンケート調査（以下、子どもアンケート）を実施し、回答から自然体験参加者に与えた効果や影響を把握した。

1節 ほしはら山のがっこうでの活動

1-1. 回答者の属性

回答者の属性について、現在の年代は40歳代が30.0%と最も高く、続いて50歳代が22.2%と高い（表3-1）。職業は、公務員・団体職員が22.2%と最も高い。職業の具体的な内容やその他の職業は、表3-2の通り多岐にわたる。教育や学習支援に関わる仕事が多くみられる。

表3-1 回答者の属性 n=90

属性	回答者数
現在の年齢	10歳代：14.4% 20歳代：15.6% 30歳代：8.9% 40歳代：30.0% 50歳代：22.2% 60歳代：7.8% 70歳代：1.1%
性別	男性：41.1% 女性：58.9%
職業	農林水産業：3.3% 自営業・個人事業：10.0% 主婦・主夫：10.0% パート・アルバイト：16.7% 会社員：21.1% 公務員・団体職員：22.2% 中学生：5.6% 高校生：8.9% 専門学校・大学生：3.3% その他：7.8%
出身地	広島県：74.4% 中国地方（広島県以外）：6.7% 中国地方以外：18.9%
現在お住まいの都道府県	広島県：77.8% 中国地方（広島県以外）：7.8% 中国地方以外：14.4%

データ：大人アンケート

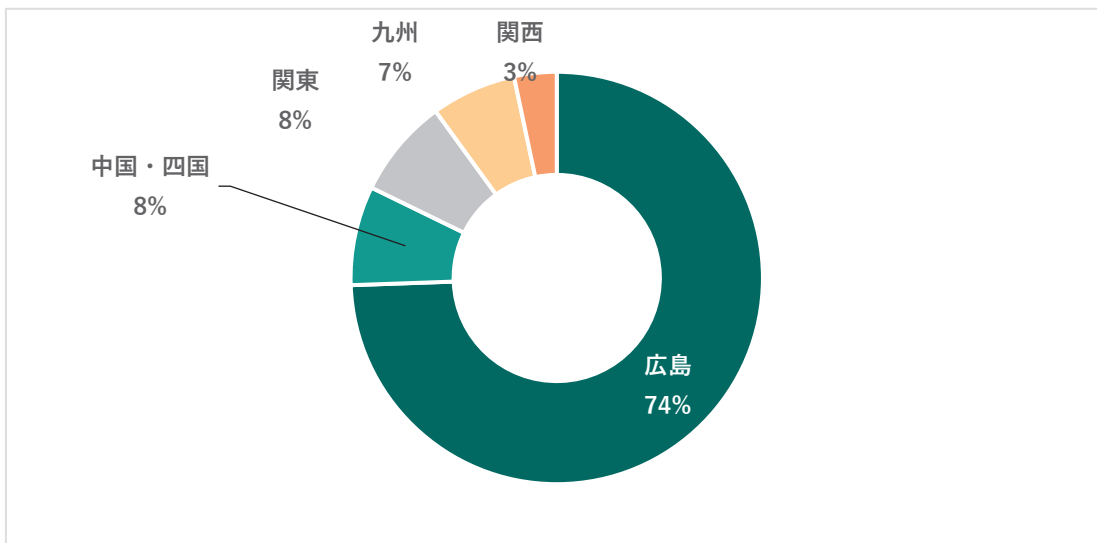
表3-2 回答者の職業（詳細）

教育関連	保育士（2名）、小学校学校司書、塾講師、不登校の子どもたちの学習支援、児童養護施設（児童指導員）、教員、学童保育、小学校の非常勤講師、高校の実習助手、英語講師、大学教員（2名）、幼児向け英語教師、学校業務員、学校運営委員
自然・環境	広島きのこ同好会会員・広島県キャンプインストラクター・瀬野川ホテルの会長（公民館と小学校でホテル講座）、一般社団法人ひろしま森のおもちゃ協会会長、ほしはら山のがっこうエコツアーリズム事務局、日本自然保護協会の自然観察指導員
医療・福祉	看護師（2名）、市立三次中央病院、保健師、作業療法士（リハビリ）、歯科医、介護福祉士、重度障害生活介護（デイサービス）、薬剤師&副業
公務員等 団体職員	市役所職員（動物行政に関する仕事）、市役所で土木技術に関する仕事、県庁農村振興課（農機具等の補助事業・直売所や地産地消の推進・山村振興に係る事業）、広島県の衛生一般職、自治体研究機関研究員、JA尾道市、海上保安庁、尾道海上保安部、消防吏員
民間	金融業（銀行）、銀行員で外為業務（法人の仕向外国送金の事務）、エネルギー関係、ECコンサル、IT企業のエンジニア、スーパーの水産部門、西日本旅客鉄道株式会社（地域共生部・鉄道沿線の地域や企業と地域への交流人口を増やす為の新規ビジネスの提案）、オーストラリア旅行代理店スタッフ（インバウンド対応）、日本郵便吉舎局、法人役員（監事、評議員）、建設業（プラントエンジニア）、機械部品の設計、経理・総務事務、ビル管理、不動産、不動産賃貸、デザイン等、イラストレーター、グラフィックデザイナー、通訳、日本酒造業
農林業	農業、ぶどう園
地域づくり、ボランティア	地域おこし協力隊の専門相談員、移住定住専門員、NPO ボランティア、任意団体の事務局、地域の活動、消防団、子育て支援サークル、金工教室、わらべうた
その他	大学院生、美大生、年金生活者

出身地、現在の住まいともに「広島県」が最も多い。広島県内の内訳は、広島市が最も多く、次いで三次市が多い（図3-1～4）。

現在の住まいについて、広島県外が約2割存在しており、ほしはらで自然体験に関わった人が全国各地で生活している。現在は近くに居住していない者も、「上田地域で祭りがあるから訪問する・帰省する」「7泊8日のキャンプがあるからスタッフとして参加する」といったきっかけをつくることで今後も関係性を継続させることが可能となり、また、それぞれの役割や居場所が存在していることが定期的な、継続的なほしはらへの訪問につながると考えられる。

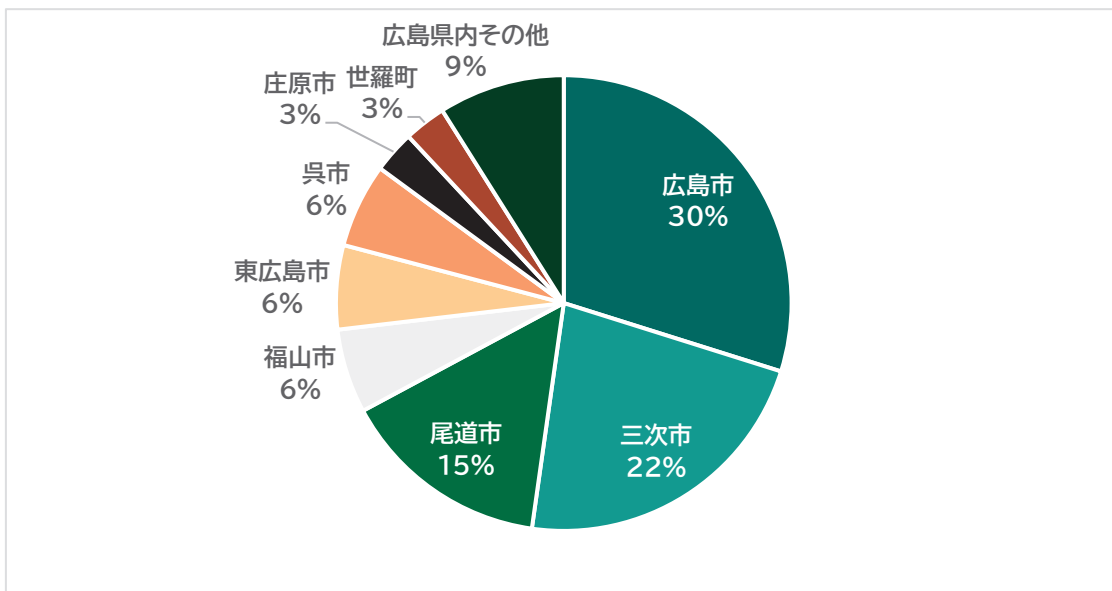
図3-1 回答者の出身地（都道府県・市町村） n=90



データ：大人アンケート

注：中国・四国…岡山、愛媛、島根、山口 関西…大阪、奈良、滋賀
 関東…東京、千葉、神奈川 九州…福岡 東北…青森

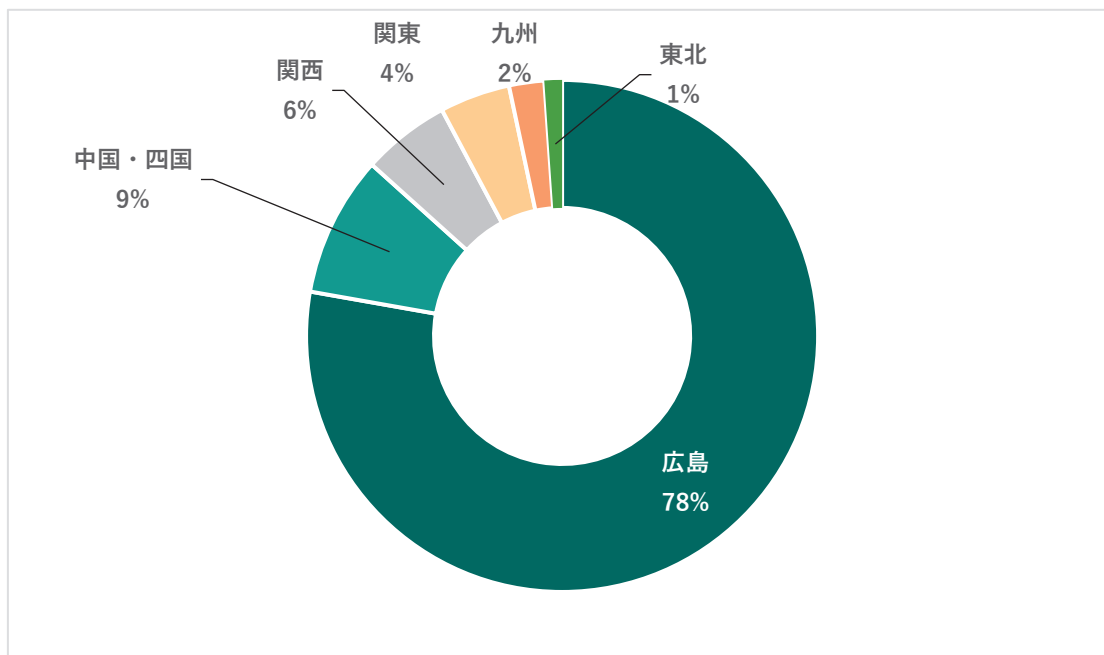
図3-2 回答者の出身地（広島県内の内訳） n=67



データ：大人アンケート

注：広島県内その他…大竹市、東城町、海田町、府中町、三原市、竹原市

図 3 - 3 回答者の現在の居住地 n=90



データ：大人アンケート

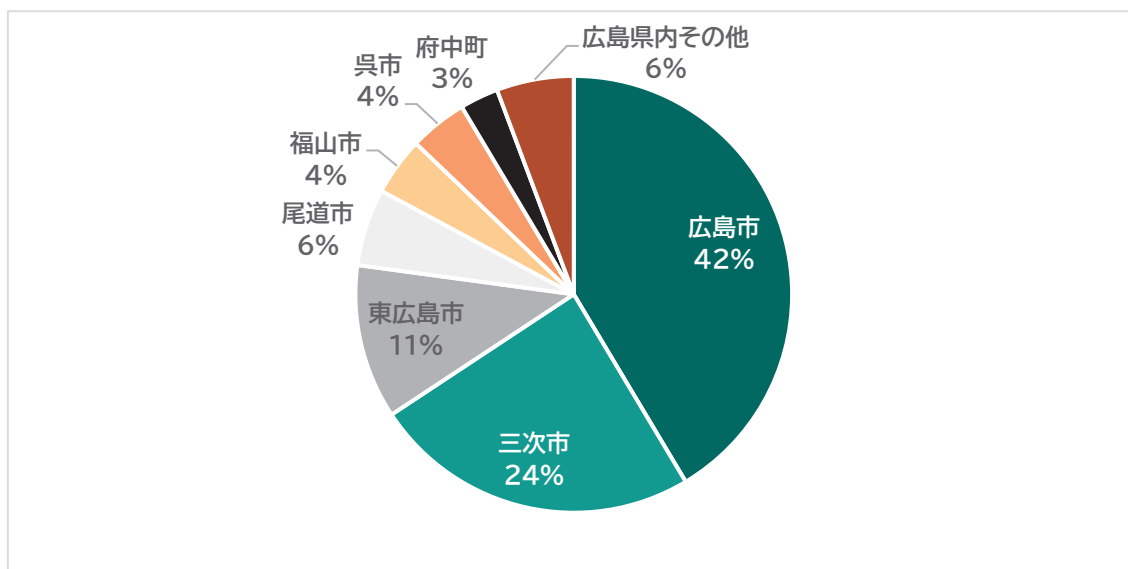
注：中国・四国…岡山、愛媛、島根、山口 関西…大阪、奈良、滋賀

関東…東京、千葉、神奈川

九州…福岡

東北…青森

図 3 - 4 回答者の現在の居住地（広島県内の内訳） n=71



データ：大人アンケート

注：広島県内のその他…庄原市、世羅町、廿日市、海田町

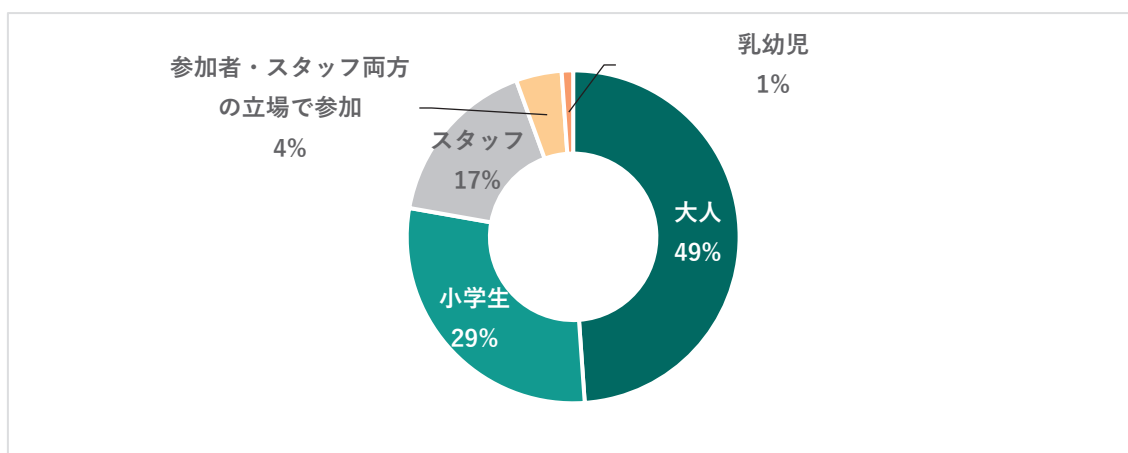
1-2. 参加者のほしはら山のがっこうでの活動経験

アンケート回答者のうち、「初めて参加した当時の属性」は、小学生での参加者が26名、大人の参加者が44名、スタッフとしての参加が15名である（図3-5）。

また、「初めて参加したのは何年前か」という質問に対しては、「6～10年前」が27名と最も多く、次いで「1～5年前」が23名と多い。10年以上前に初めて参加した者も約半数存在する（図3-6）。

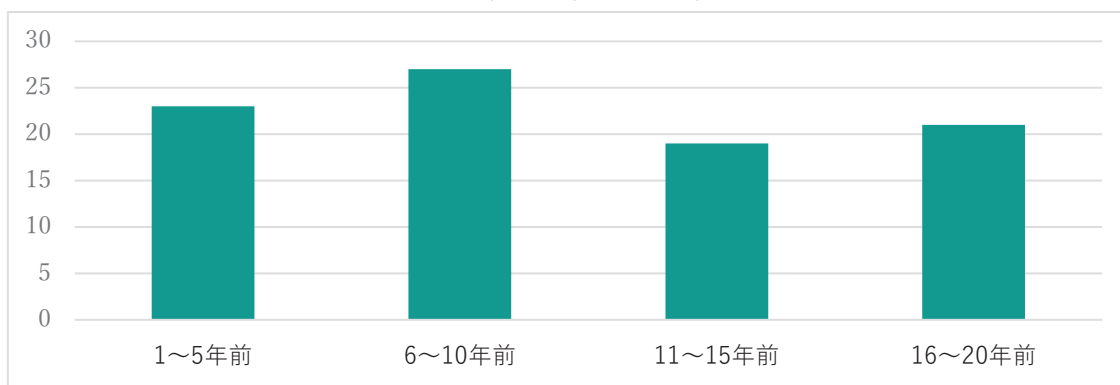
「初めて参加した当時の属性」と「何年前に初めて参加したか」を合わせてみたところ、初めて参加した当時は小学生で、現在20歳以上の方が15名存在しており、子ども時代に自然体験をし、成人した者がアンケートに回答していることがわかる。そのうち3名については、インタビュー調査を実施し、ほしはらで体験したことの長期的な影響について聞き取りを行った（その内容については、4章に記載）。

図3-5 初めて参加した当時の属性 n=90



データ：大人アンケート

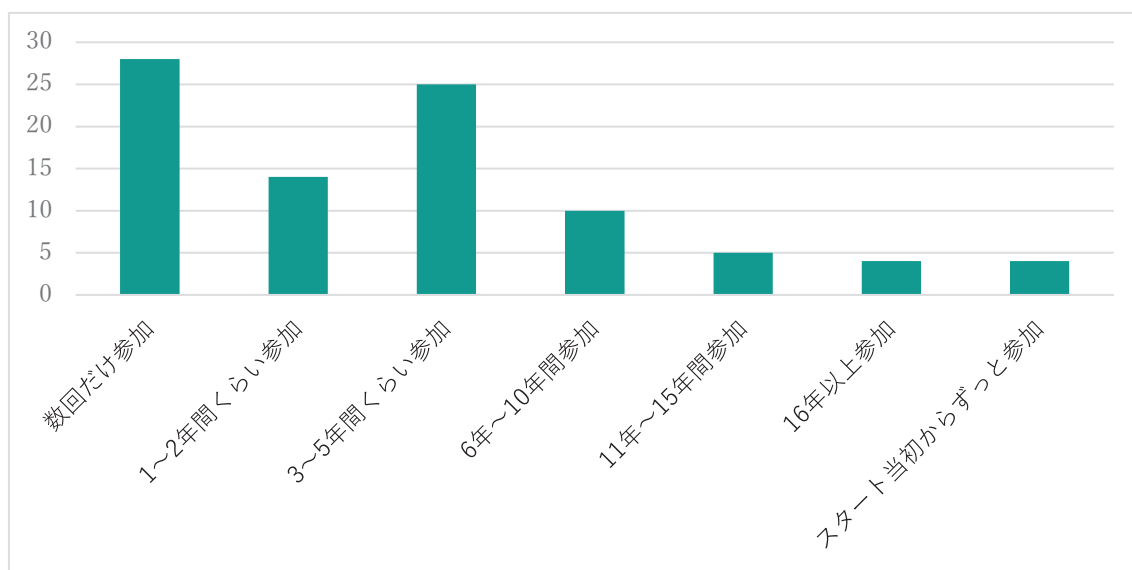
図3-6 初めて参加した年 n=90



データ：大人アンケート

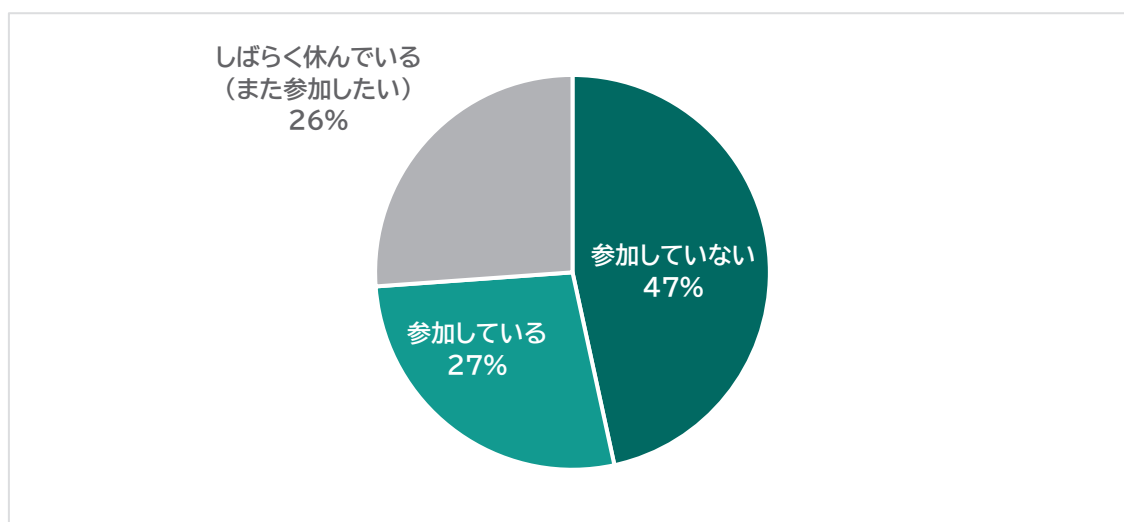
アンケート回答者の「参加回数・期間」は、「数回だけ参加」が28名と最も多く、「3～5年間くらい参加」が25名である（図3-7）。ちょうど子どもが小学生から中学生に進学するくらいまでの参加者が多いと考えられる。「現在の活動への参加状況」は、「参加している」が24名、「参加していない」が41名、「しばらく休んでいるがまた参加したい」が23名である（図3-8）。

図3-7 参加回数・期間 n=90



データ：大人アンケート

図3-8 現在の活動への参加状況 n=90

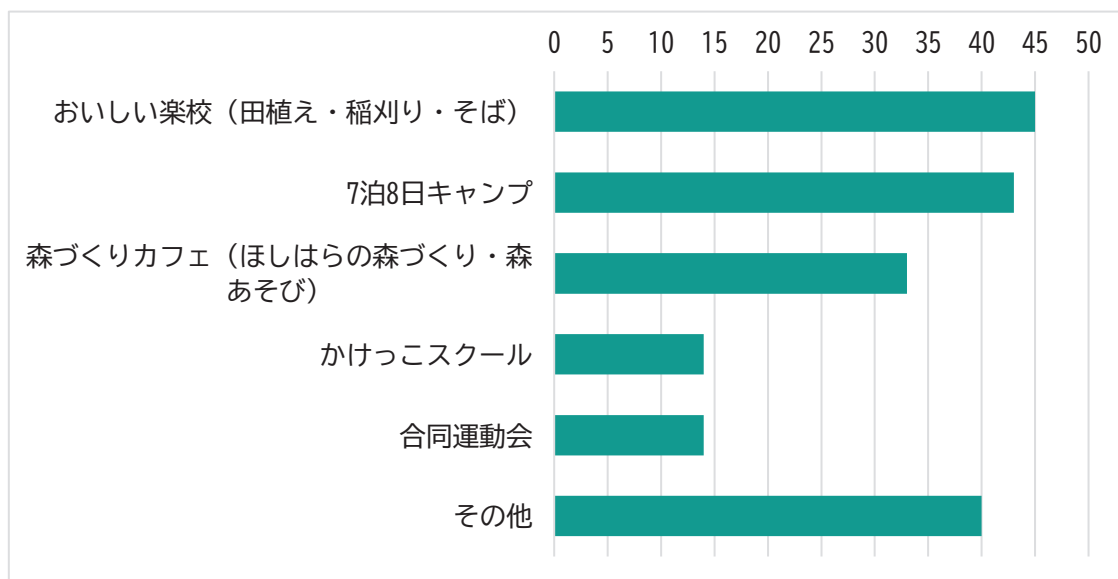


データ：大人アンケート

1-3. 活動の思い出

アンケート回答者の「参加したことがある活動」は、「おいしい楽校」が45名、「7泊8日キャンプ」が43名である（図3-9）。また、その中で特に印象に残っている活動については、「7泊8日キャンプ」と回答した者が35名と最も多い（図3-10）。

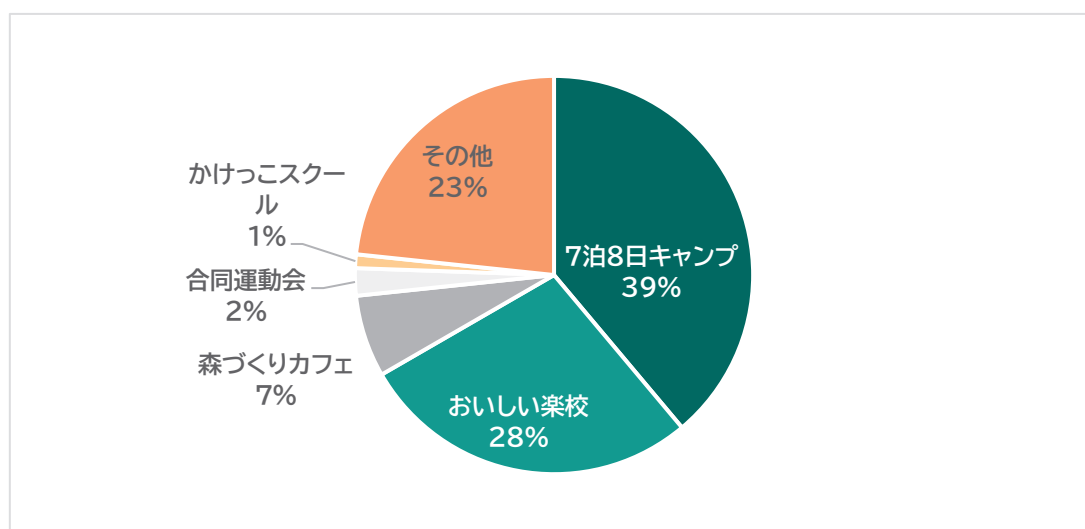
図3-9 これまでに参加したことがある活動 n=90（複数回答）



データ：大人アンケート

注：その他の内容については回答欄を設けていない

図3-10 特に印象に残っている活動 n=90



データ：大人アンケート

特に印象に残っている活動に関する自由記述について、活動ごとに、参加した当時の年齢順に整理した（表 3-3）。

表 3-3 特に印象に残っていること

（ ）内は参加した当時の推定年齢である。

活動	具体的な内容
おいしい楽校	<ul style="list-style-type: none"> ・蕎麦打ち体験（8歳） ・田植えです！（10歳） ・田舎に暮らしていたけれど、山菜をしっかりと食べたのは体験塾が初めてでした。その調理法も天ぷらだけでなくパスタやサラダ、山菜の特徴に合わせたもので、それを知るのも毎年楽しみでした。“でこちゃん先生”のお話も参加者の方々とのおんびり歩く道も、帰ってからお母さんたちとおしゃべりしながら調理場でお料理するのも、外にシートを広げみんなで田んぼの前で食事をするのもどれも良い思い出です（23歳） ・子どもたちが稲刈りで迷路をつくったシーン。はで棒にぶらさがって遊んだり。子どもも大人もワイワイ集まって出来る稲刈りは楽しいな—と思った（29歳） ・田植え（稲刈り）後に保井さん宅の倉庫で、みんなで食事をしたこと（34歳） ・娘が田んぼに入る事ができた（35歳） ・山菜取り&料理いただく。山野を歩き、山菜をとる。空気がおいしいし、のんびり、心がいやされ、そして家族、参加者と交流。よい思い出（37歳） ・田植えは何度か体験させてもらって、子どもの成長を感じることができたので印象深いです（39歳） ・田植え（40歳） ・いつも美味しいご飯をいただきました！（40歳） ・田植え、稲刈り、蕎麦打ちなどたくさん（40歳） ・稲刈り（40歳） ・そば作り、ピオーネジャム作り（41歳） ・野草を調べて食べて感動。雑草は命の宝だと思った（41歳） ・田植えに初めて参加した時、田んぼの中に入ることが最後まで出来ず、畦で固まってただ見ていた長男が、コロナで中止の年をはさんで、2度目の参加時に、下半身が泥だらけになるくらい、楽しんで、田植え体験が出来たこと（洗濯は大変だったけど）（41歳） ・美味しいものができるまでの行程を体験すること（41歳） ・かしわ餅作り、葉っぱ茶作り（42歳） ・おいしい楽校で子どもの成長を感じられたこと、スタッフさん含めいろんな方とのコミュニケーションで自分自身も学びが多かったこと（42歳） ・蕎麦打ち、キャンプ、山菜採り（42歳） ・山菜取り（42歳） ・稲刈り等の農作業体験（51歳）
森づくり カフェ	<ul style="list-style-type: none"> ・森がステキ（35歳） ・子どもがしいたけをもらって、自分で探してきた棒に刺して焼き火で焼いて食べたこ

	<p>と。しかも焦げたのに最後まで食べました。あまり食に興味がない子だったのでとても嬉しかったです。その後もしいたけを食べる度にあのときのしいたけほどおいしくないと言われます (36 歳)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生き物観察や農作業体験などで、子どもたちの発見や感動を共に喜び、保護者やスタッフが感性の成長を育んでいる様子が印象に残っています (60 歳)
かけっこ スクール	<p>焚き火ご飯 (39 歳)</p>
7泊8日キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての人と仲良くなって気持ちを打ち開けあったり、この場限りの出会い、別れを感じたりする (0 歳) ・見知らぬ人と1週間協力し合って行動した緊張と自然とふれあう楽しさ (8 歳) ・沢登り、飯ごう炊さん (9 歳) ・キャンプインキャンプ (9 歳) ・直近の7泊8日キャンプ (9 歳) ・キャンプファイヤー、沢登り、ドラム缶風呂 (9 歳) ・長い竹で釣り竿をつくった (9 歳) ・従兄弟のお母さんに誘われて初めて行った7泊8日キャンプ。こんな長い間家族と離れて生活するのは初めてで、最初は、不安で帰りたい！と泣いていましたが、7泊8日も経てば帰りたくないに変わっていました。毎日ご飯を一緒に食べて、お風呂洗濯など、共に過ごすことで家族同然。それからは毎年の楽しみでした大人になって、キャンパーからスタッフとして参加した時も、ワクワク感はその時のままだなぁと思いました。いつまでも続いてほしい！7泊8日キャンプ。そしていつか、自分の子どもが産まれたら参加してほしいです♪ (9 歳) ・夜空の下での1泊(神社)、亀を捕まえた (9 歳) ・滝登りと、島の浜辺で両親からの手紙を読んだこと(夜光虫と懐中電灯の光の中・・・今思うとエモいですね笑)。他の活動でも、とんどで書をとばしたり、しめ縄を作ったり、沢山の印象的な思い出があります。(10 歳) ・7泊8日キャンプの初日、他の子が話しかけてくれて友達になれたこと (10 歳) ・自然体験全て (10 歳) ・滝登り (10 歳) ・悪いことをちゃんと悪いと怒ってくれたこと (10 歳) ・友達が沢山できたこと (10 歳) ・ライフジャケットを着て川に入った体験が面白かったです。プールとは違う不規則な水の流れ、思うように動かない自分の体。学校では味わえない特別な体験をしていると高揚しました。また、大学生のスタッフのお兄さんたちが当時はものすごく大きく見え、非常に頼もしく、それでいて歳の近い友達のような朗らかさもあり、とても新鮮な存在として認識していたことが印象的です (10 歳) ・流れ星をみたこと (13 歳) ・キャンプインキャンプ (15 歳) ・キャンプ in キャンプで、初めて子どもたちとリーダーだけでテントを張って過ごす日。テントを忘れてしまい、みんなで夜露に濡れつつも、草の上で本当の野宿をしたこ

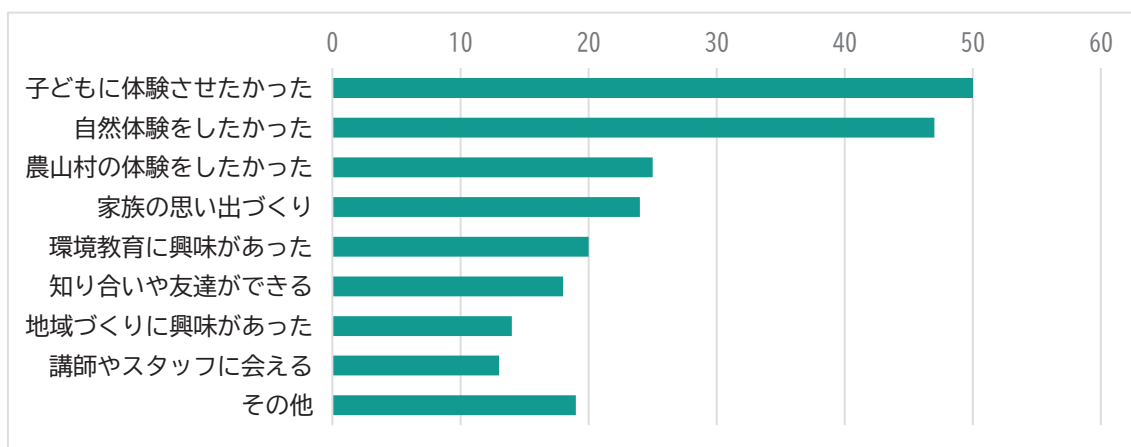
	<p>とは衝撃的で印象的です。その不安で少し寒い夜中、ずっと鹿が鳴いていたことも忘れません。(キャンプファイヤーのときみんなで大合唱したことや、最初寂しくて夜泣いてた子がだんだん馴染んで1人で寝たこと、沢登りではみんなで応援しつつ全員沢登りでできたこと、本当に綺麗な夜空とか、カメレオンゲームで山に座っていたら猪の息づかいが聞こえたこととか、、、、一つに絞れません!!) (18歳)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・20歳の頃、初めて7泊8日キャンプにキャンプスタッフとして参加し、子どもたちの感性の豊かさを感じられたこと (20歳) ・子どもの人との壁のなさ、コミュニケーション力、短期間での成長率。子どもからたくさん教わることもあるし、失わないようにしないといけないことを気づかされる。もちろん自然も大好き! (20歳) ・北木島でのキャンプ、イカナゴを素手でとって夜天ぶらに……。おいしかったー。ジャックのキャンプファイヤーのバンティ、サイコー!! (24歳) ・地域を巻き込んだキャンプの受け入れ、地域の協力 (25歳) ・流しうどんをしたこと。海で魚を手づかみで取ったこと (26歳) ・前々から友人伝えに聞いており、子どもを参加させてみたいと思っておりました。昨年参加資格が出来き、念願の7泊8日キャンプへ参加させてもらえました。昨年は途中で、お熱が出て帰宅をしたものの復活することができました。コロナウイルスという状況化の中、他のキャンパーへご迷惑が掛かったら…という思いが脳裏をよぎって思っておりましたが、“あいあい”からは『子どもは、風邪を引いて大きくなるからねー』と優しいお言葉をもらって、涙したのを覚えております。本年度も世の中がコロナウイルスで縮小や見送りする行事が多い中、開催頂き感謝しております。子どもは今を生きていて学びを止めてはいけないという、“あいあい”の素敵な考えで、子どももとても有意義な7泊8日を送られたと思います。 (35歳) ・ドラム缶風呂 (36歳) ・子どもが7泊キャンプに参加した (38歳) ・沢登り (39歳) ・キャンプ (40歳) ・沢登り (41歳) ・新しい仲間と毎年会える事 (44歳) ・子どもの成長 (47歳) ・毎年の成長していく子どもたちとその笑顔 (62歳)
合同運動会	<ul style="list-style-type: none"> ・あいあいと風船割り (36歳) ・地域の方々とのふれあい。縄?でなにかした。 (44歳)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・タタラでの鉄づくりで、鉄がマグマみたいに流れてきたこと (8歳) ・体育館で寝る (9歳) ・雪の中 動物の足跡見つけた事 (30歳) ・年越しキャンプの初日の出、吾妻山登り、田植え、そば打ち、むささびの森の伐採 (30歳) ・いのししカレー (34歳) ・おもちゃフェスタ (35歳)

	<ul style="list-style-type: none">・民泊体験をさせてもらいました（貞野家です）。初めてお茶葉摘みや田舎ぐらしを体験し、とても親切に頂きました。お米がおいしく、星がきれいだった事が忘れられません。貞野さん、お元気にされているでしょうか（38歳）・吾妻山のハイキング（39歳）・つばき油を作ろう！に参加しました。日常では体験出来ない企画で、親子共々大満足でした（40歳）・竹取合戦で生い茂った竹を人力で切り出し、穴に投げ込んで燃やしたワイルドな体験と竹に覆われていた大榎の全容が見えた時の感動（40歳）・吾妻山登山で昆虫や植物のいろいろな話を聞きながら登り、今まで気がつかない事を知れた事（41歳）・シカの解体ショー。シカの脳みそを見た。子どもと見た！（41歳）・どの活動ももちろん楽しかったのですが、季節によって変わる山や地域をただお散歩したり眺めたり、色んな方とワイワイしながら焚き火をして美味しいものを食べたり、どれも印象に残っています。冬の三瓶山は雪まみれでソリ遊びしたり、歩くスキーで動物の足跡を見つけたり特に印象に残っています。息子はツリーハウスやブランコをよく覚えていて「ブランコ楽しかったなあ、マシュマロも美味しかったなあ、あいあいとキャンプファイヤーで歌ったなあ～」と思い出しています（42歳）・椿油絞り（44歳）・お月見会。タマゴタケが大量に見つかっておいしく食べたこと（47歳）・きのこ狩り（47歳）・タタラでの鉄づくりに参加。釘を熱してペーパーナイフ作り。BBQの焼き林檎（48歳）・粘菌観察会。そばの森が最適なフィールド。すぐにアクセス。腐木が多く存在（67歳）
--	--

1-4. 活動に参加した理由

アンケート回答者の「はじめて参加した理由」は、「子どもに体験させたかった」が50名と最も多く、「自然体験をしたかった」が47名であった(図3-11-①)。現在、活動に参加している子どもの回答は、「おやにすすめられた」という回答が最も多い(図3-11-②)。

図3-11-① (大人) はじめて参加した理由 n=90 (複数回答)

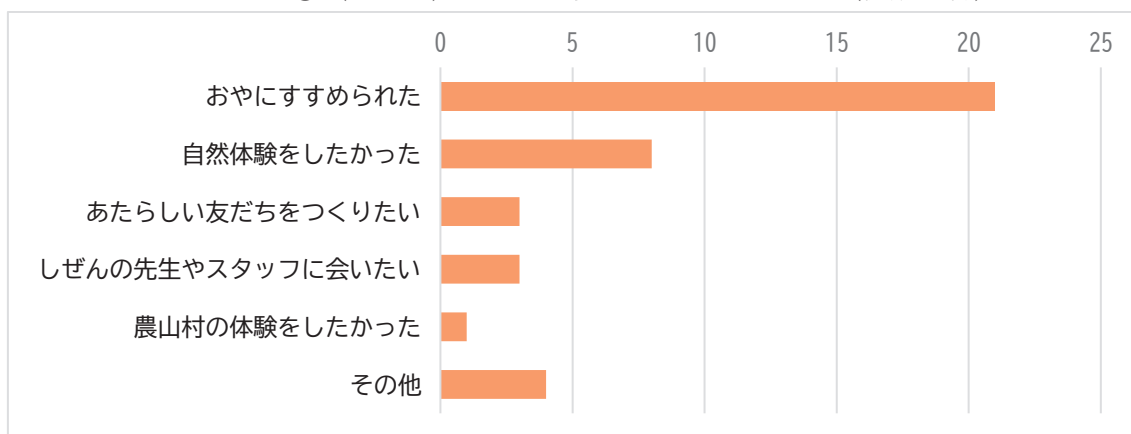


データ：大人アンケート

その他の理由は、以下の通りである。

知人に誘われたため/友達に誘われた (3名) /紹介/成り行きだった/親に連れて行かれた/親に半ば無理やりに参加させられました/赤ちゃん/スタードームの作り方を知れるから/子どもたちと過ごす時間が好きだったから/もともとアウトドア好き&撮影&専門スタッフとして頼まれた

図3-11-② (子ども) はじめて参加した理由 n=32 (複数回答)



データ：子どもアンケート

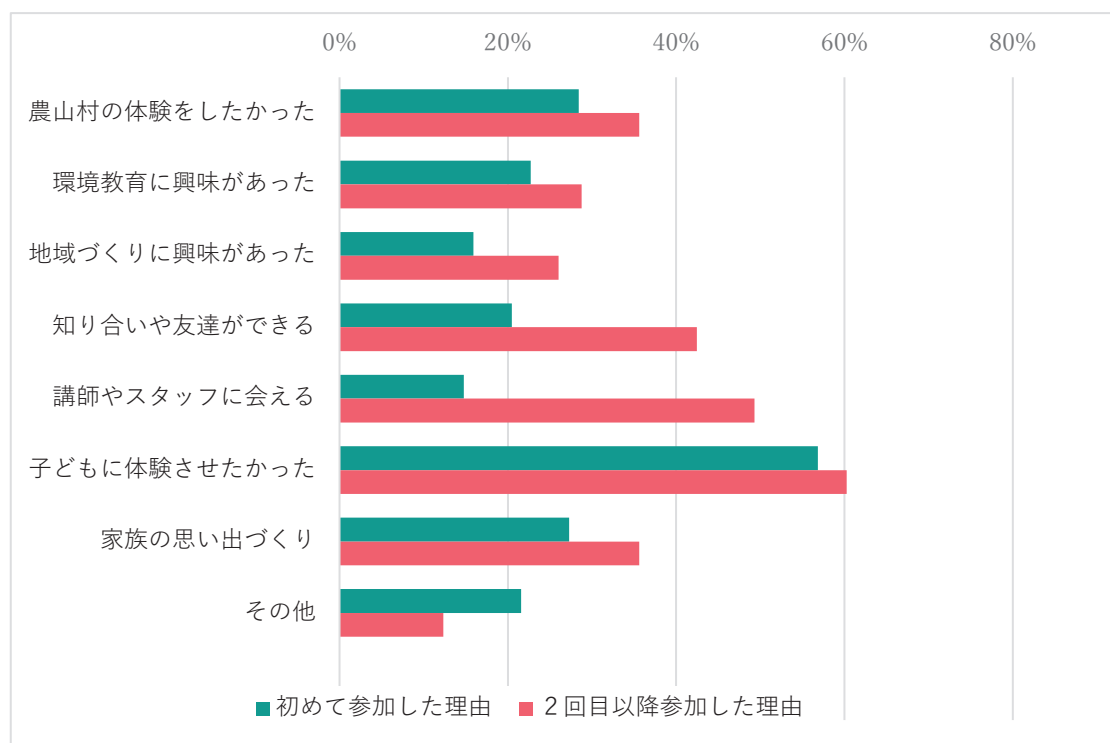
注：その他の内容については回答欄を設けていない。

2回目以降の参加理由は、「自然体験をしたかった」が47名、「子どもに体験をさせたかった」が44名であった。はじめて参加した理由と比較して、「講師やスタッフに会える」「知り合いや友達ができる」という回答が多くなっている（図3-12）。

初めて参加する動機は、子どもに体験させたい思いがきっかけになっていることから、大人世代が体験の意義を感じていることが重要である。現在、ほしはらの活動に参加している子育て世代は自身が子ども時代に自然や農業とふれあえる環境が日常の生活にあった方が多く（図3-18、19や4章を参照）、自身の体験があつてこそ、自分の子どもにも体験させたいという思いがあると考えられる。一方、現代社会においては、学校からの帰り道の寄り道や外遊びなどで地域の大人や自然と出会う機会や子ども同士群れて遊ぶ機会が減っている。したがって、意識して自然体験できる環境づくりに取り組まなければ、子どもに自然体験をさせたいと考える大人が減ってしまうことが考えられる。

2回目以降の参加理由は“講師・スタッフ・友達”との出会いへと大きく変化しているため、人との出会いと継続的な交流機能を持っているということがわかる。また体験の場において安心できる人間関係づくりが重要な要素の一つであると考えられる。

図3-12 はじめて参加した時と2回目以降の参加理由の比較 n=90（複数回答）

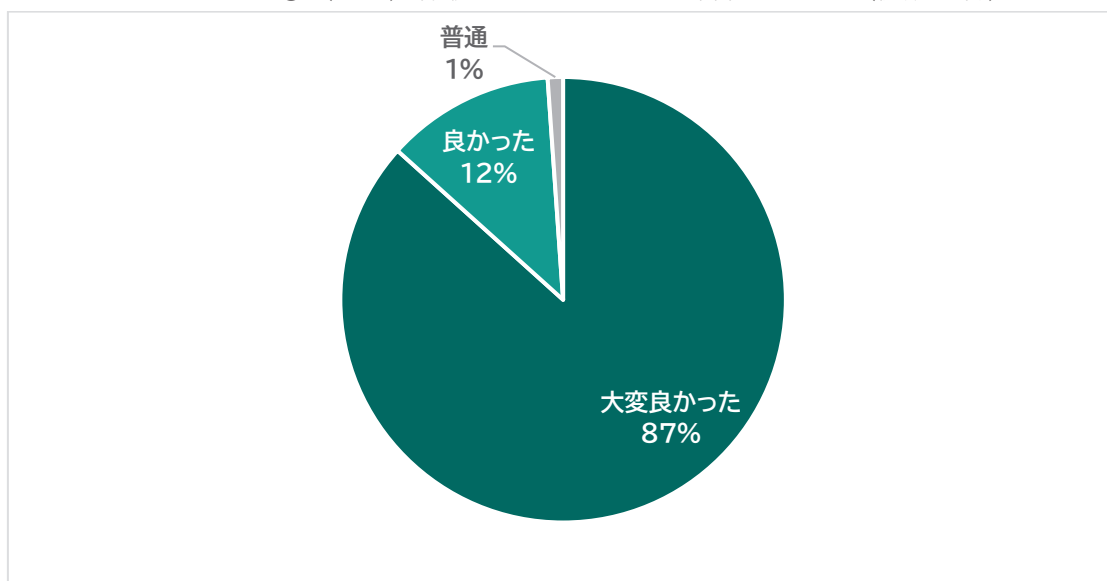


データ：大人アンケート

1-5. 体験の感想

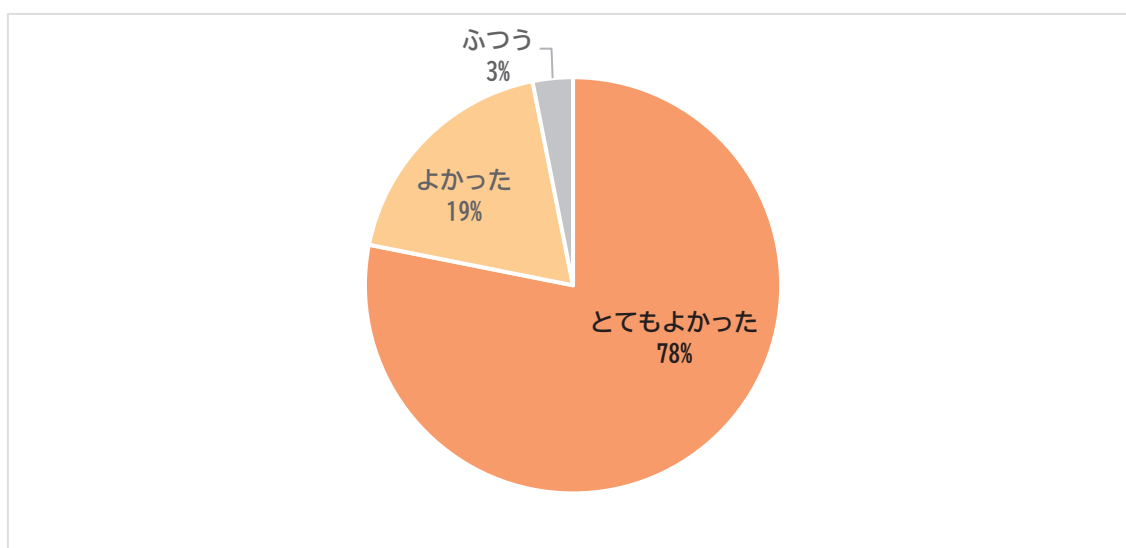
アンケート回答者の「体験したことに対する評価」は「大変良かった」という回答が78名（87%）であった（図3-13-①）。現在の年齢が小学生以下の子どもを対象にしたアンケート調査結果でも同様に、「とても良かった」「良かった」の回答が9割を占める（図3-13-②）。

図3-13-①（大人）体験したことに対する評価 n=90（複数回答）



データ：大人アンケート

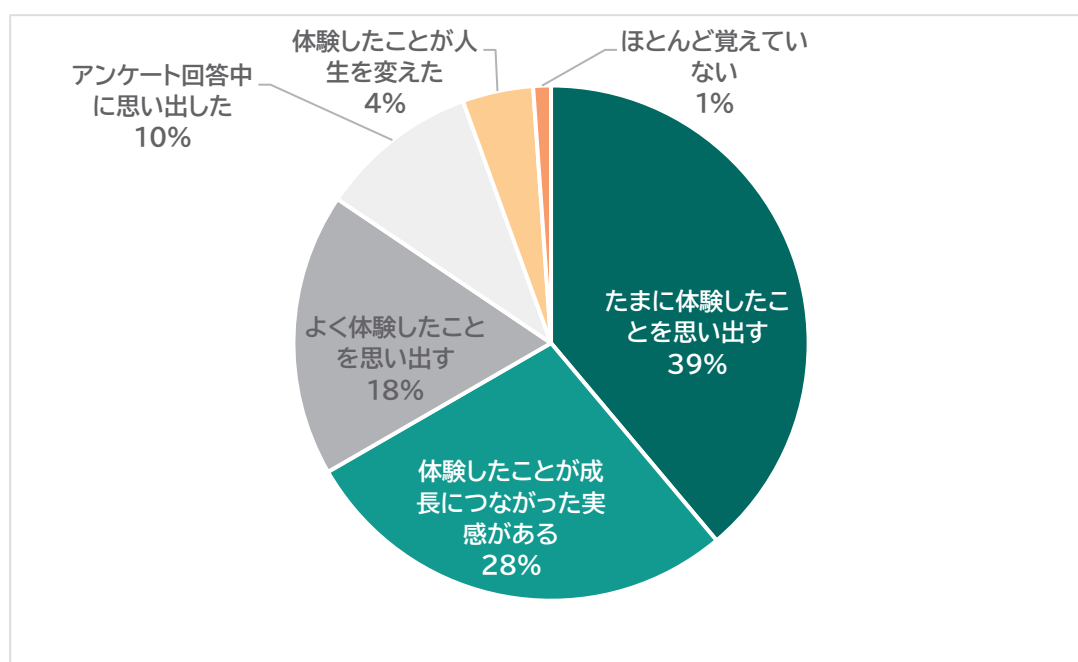
図3-13-②（子ども）体験したことに対する評価 n=32



データ：子どもアンケート

「体験したことはどのようにあなた自身に残っているか」については、「たまに体験したことを思い出す」が35名、「体験したことが成長につながった」は25名の回答があった(図3-14)。体験したことを覚えている者が6割、体験したことが自身の成長につながった者と人生を変えたと回答している者が3割存在していることから、参加者それぞれの体験の日数や期間は異なるものの、参加した当時が子ども、大人に関わらず、参加者個人に大きな影響を与えていると考えられる。(これについては、4章で参加者へのインタビュー調査と合わせてより考察を深めた。)

図3-14 体験したことが記憶に残っているか n=90



データ：大人アンケート

1-6. ほしはら山のがっこうでの体験によって成長したこと・影響を受けたこと

ほしはらでの体験の思い出について、「思い出に残っているシーン、成長を感じたことや影響を受けたこと、今役に立っていることなど」を自由記述で回答してもらった。内容を各カテゴリ、年齢順に整理した(表3-4)。ほしはらの活動に参加した思い出や参加後の成長の内容は多岐にわたっている。表3-4をさらにキーワードごとに分類し、ほしはらの活動の現場で何が生じているのかについての考察を加え、「3章4節」に記載した。

表3-4 ほしはらでの体験の思い出

()内は活動参加当時の推定年齢である。

カテゴリ	内容
思い出に残っているシーン	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンプでのバームクーヘン作りが思い出に残っている(8歳) 皆が甘やかしてくれたことを結構思い出します。今となっては小3、小4であそこまで甘やかしてもらったのは大変恥ずかしい思い出です(*1w/) (8歳) ・朝起きたらめっちゃ寒かったこと、五右衛門風呂、雑巾掛け、竹で野球したこと、窯焼きピザ、バームクーヘン、キャンプ(8歳) ・他の子どもがunoをしていた(8歳) ・仲間と協力してモノを作成したり食事を作ったりしたこと(9歳) ・子どもたちがくれた物、メッセージ、笑顔、その他全てが今でも心に強く残っています(9歳) ・キャンプファイヤーがとにかく好きでした。火を囲ってみんなでギターに合わせて歌を歌ったり、ダンスを踊ったりして、日常を忘れられました(9歳) ・ほしはらでは、地元で見る星空とは全く違う、無数の星が広がっていて、最高にきれいでした!(9歳) ・亀を捕まえた、スタッフの大学生に仲良くしてもらった(9歳) ・キャンプファイヤーを囲んでのレクリエーション(10歳) ・7泊8日キャンプの川流れで皆んなで協力して進んでいったこと。(10歳) ・キャンプファイヤー(10歳) ・近くの池でザリガニを取ったり、遊んだりする事で、自然の良さ、三次市もしくは田舎の良さ時々懐かしく思います。また、このまま廃れさせてはいけないとも思います。(10歳) ・外で星を見ながら寝たこと。(11歳) ・親の手紙(15歳) ・周りの自然が美しくて圧倒されたこと(16歳) ・就職活動や資格試験等で忙しく過ごしていた大学院生2回生の頃、ほぼ毎月、地元である滋賀県からほしはら山のがっこうに行き、おいしい楽校や森づくりカフェ等に参加し、落ち着いた時間を過ごしなが、自然の四季を感じることができたこと(20歳) ・朝一裏山?に登った事(30歳) ・いのししカレーがとても美味しかった(34歳) ・小さかった子どもたちと一緒に夢中になってカプラで遊んだことを思い出す(35歳) ・薪の割り方(36歳) ・森の方での活動時、たしか中川さんが穴を掘り落葉を入れ、ホカホカ状態にして、飛び込み、きもちよさそうに寝ていたこと。自分もしたかったな。カメラマンの兄さん(名前

	<p>すみませんと忘れ) が笑顔で楽しそうにシャッターを押す様子、いい顔です (37 歳)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ものすごく開放的で、あの時間だけ大らかになれた気がします (39 歳) ・いい香りがする黒い木の名前忘れてしまって、それと吾妻山で巡りあえて嬉しかった (39 歳) ・小さな子どもも付き添いで参加していた時、小さいながらも出来るなら一緒にと行って頂いて、家族全員での思い出になりました (40 歳) ・子どもも小さくて、家族として動けたので、楽しかったなあ、と家族の良き時代と結びついています (40 歳) ・自然の中で、ふだんできない体験を子どもにさせることができたことが本当に貴重だった (40 歳) ・年末年始の初日の出 (40 歳) ・春の草花を食べたのが楽しかったです。クッキーの生地につくしやオオイヌノフグリの花などを載せて焼くというアイデアに感動しました。可愛いし、美味しいしで、子どもたちも大喜びでした。家でもやってみるつもりです。田植えや、稲刈りの体験によって、お米を子どもたちが大切に食べるようになりました。また、川で遊ぶことの楽しさを知ることができました。椿油の作り方を知った長男が、祖母の家に一人で遊びに行った時に、庭に落ちていた椿の実を拾って、頭に残った記憶だけで、祖母と椿油を作り、見事に工程を一つ間違えて作った椿油を、祖母がひとため！喉がただれてしまい暫く大変そうでした。が、今では家族の笑い話になり、良い思い出です。 (41 歳) ・キャンプファイヤー (41 歳) ・たくさん子どもたちに出合えました (41 歳) ・自然にふれあい、スタッフ、講師のわかりやすい説明。忙しい日々の毎日だったがほしはらで過ごす時間はゆったりして心が和むホッとする体験でした (41 歳) ・みんなで手を動かしたこと、元気をもらったこと (42 歳) ・あまり参加していないので書けませんが、葉っぱ茶がおいしくて印象に残っています (42 歳) ・田んぼ、体育館に泊まったこと、鶏肉のスープが美味しかったこと (44 歳) ・金末さんが、参加者のためにぶどう園を整備してくださったこと (44 歳) ・椿油で火を灯した時の息子の瞳の輝き (44 歳) ・お月見、神楽、森あそび、ツリーハウス作り、雲海、豊原先生との森あそび、三瓶山歩くスキー、雪でアイスクリーム作り、ワイン作り、お茶づくり、ソバ作り、おもちゃフェスタ、とんど、ほしはら山のがっこう新聞 (47 歳) ・ハンモックでほしはらの森に泊まったこと (47 歳) ・地域の人の輝き (47 歳) ・廃校の校舎の佇まい (48 歳) ・一緒に連れて行った愛犬を、子どもたちがキャンププログラムに時々参加させていたこと (62 歳)
成長を感じたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフに上がってから、だんだんスタッフの動きを知って行って、より想いが伝わってきたこと (0 歳) ・人見知りじゃなくなったこと。積極的に話をかけれるようになった！ (10 歳) ・身を取り囲む自然や初対面の人だらけの環境は、最初は恐ろしかったですが、八日間のなかで徐々にそれは自分の敵なのではないと知り、少しずつ心が開いていったこと、そしてそれがなんだか恥ずかしかったことをよく覚えています (10 歳) ・我が子と友たち子どもと、公園で待ち時間があつた際、樹液観察や昆虫採集を一緒にして楽しめました。ほしはらで、教えてもらっていたので楽しく過ごせました。子どもたちが、自然が大好きな子どもたちに育ってくれました。特にこうたは、自分で触って感じ

	<p>る、ということをお大事にしているようです。ほしはらで実際に触って、感じるが多々あったのだと思います。お母さんたちで集まったとき、学校の子どもたちと話すときなど、話の種になります。桃の種にはムカデがいることがある、山椒の木は切り倒すだけで香りが広がるなど、みんな興味津々でした。田植えがしたい、山にのぼりたいなど、自然で遊びたいな—と思っている人は多いようで、よくほしはらの話が出ます。三次と聞いて、遠いな—と言われることも多いですが（汗）我が家は、ほしはらや自然が身近に感じられる環境であって、非常にありがたいと感じています。子どもたちが遠足に行った際、昆虫を見つけた話をたくさんしてくれました。家で見る番組は、ダーウィンが来たです。生き物や自然が好きで、フットワーク軽く楽しめているので、とても嬉しいです。（30歳）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7泊8日キャンプでのお別れの時、とても楽しく過ごせて別れを惜しんでいました。別れ際は、大粒の涙を流していました。家族でテントを建てる時に、今までは手伝いができませんでした。要領がわかったようで、即戦力となり組み立てを手伝ってくれました！（35歳） ・子どもがスタッフになってくれたこと（35歳） ・子どもたちが遅く成長した（40歳） ・田植えでは輪に入れずもじもじしていた5歳息子が稲刈りでは積極的に輪に入りいろんな人に話しかけていて俺、ともだちいっぱいづくりたい！と話していて成長を感じました。また私自身もたくさんの方とお話しすることで子育てや生き方のヒントをいただいています（42歳） ・ほしはらのボランティア研修で、子どもが工夫して少し高い屋根に登っていた。リーダーはそれを危ないと否定しないで、安全を確認しながら見守っていることがあった。それを見て、ほしはらの活動に関わることを決めた。 <p>7泊8日のキャンプで、最初から最後までみんなと交えることなく本ばかり読んでいる気になるメンバーがいた。後でその子の感想文を読む機会があり、その感想文には、楽しかった、また参加したいと書いてあった。その子にとってこのキャンプがとても心地良い居場所だったのだろう。そんな子を見守り受け入れる優しさが此処にはある。そのメンバーは、それから継続してキャンプに来ている。今では率先して他のメンバーと交わり、年下のメンバーのサポートをしグループを引っ張ってゆく存在にまで成長している。スタッフにとっても頼もしい存在だ。そんな、様々な子どもたちのドラマと成長の姿が此処にはある。</p> <p>7泊8日のキャンプで、子どもたちが言うことを聞かないで悩み葛藤をするリーダーがいた。試行錯誤をし自らも自分を変えながら努力し、最後には子どもたちもその努力を感じ受け止めて、グループの心が一つになった。そんな子どもたちのための思う目的の為に努力するする姿とそれを受け止める優しさが此処にはある。</p> <p>森のようちえんで、初めてのノコギリで苦心して最後まで木を切った時の子どもの得意げで自信に満ちた顔、自分で新しい遊びを考え発明した時のほんとうにうれしそうなお顔をみるにつけても、子どもたちの発想の豊かさや心の柔軟さに驚き感動させられます（60歳）</p>
<p>影響を受けたこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・体験の中で学んだこれ！というよりも、あの穏やかで豊かな自然と人々が感覚的にですが、自分の中で色濃く残っているように感じます。伝統的な地域に残る行事に参加できたことや、子ども時代に自然と交流できたこと、あいあいの考えや行動を身近で知ることができたことなど、今の私の内面に大きく影響していると思います。思い出に残っているシーンは沢山ありますが、例えば、初めての7泊8日キャンプのときの滝登りでオオサンショウウオに出会えた場面、自由人楽校とのコラボのキャンプで島へ行き、夜光虫が浜辺に沢山いて美しい！と思った場面、民泊で苦手だった茄子を食べたり初めて柏餅を食べてトリコになった場面、とんどで自分の書が高く舞い上がって嬉しかった場面、あいあいの一

度だけ本気で怒られた場面（私がスタッフに失礼なことを言ったんですけど笑）、落とし物の持ち主を探すときほどんど自分だった場面笑、あいあいにも人の話聞けないんだよねと相談したら”昔からそうだけど、いつもそれでうまくやってるからいいじゃん”と言ってくれて嬉しかった場面など（10歳）

・学校以外の世界があることを知ることができた（10歳）

・大学在学中に沢山の活動に参加させていただきました。学生同士の交流はもちろん、スタッフとして、沢山の大人の方々との交流はとても良い経験となりました。子どもから大人への変化？社会へ出るための準備？表現の仕方がわかりませんが、スタッフ同士の会話や、活動をより良くするためのミーティングなど、学生同士ではできなかったことを大人の輪の中に入れてもらえたような感覚で、とても刺激的で楽しい時間でした（17歳）

・山の楽校キャンプでは子どもたちはとても楽しそうだけど、実際の生活では複雑な問題を抱えている子どもたちもたくさん来ている。場所が変われば、楽しめたり輝けたりすること。一つの世界がすべてではない。自分なりに一生懸命やっただめなら、場所を変えてもいいかと思うと気持ちにゆとりができる（20歳）

・どんなに、むずかしい事や人でも、アプローチを変えれば、その事や人は心を開いてくれる。ふとところに入ってしまうと、みんな良い人（24歳）

・自然のインタープリターを目指していましたが、自然の怖さを感じて諦めていました。しかしほしはら山のがっこうの活動を手伝わせていただいて自然の中で活動して怖さより楽しさを味わわせてもらえました（26歳）

・ほしはらがなかったら、今のわたしはいないし、ここで出会えたかけがえのない友だちもいない。そして、わが子の人生も変えた。こんなふうに豊かな時間があちこちの地域にあったらいいなあと思う（29歳）

・子どもの「興味を持つ」という行動に関心を持てるようになりました（34歳）

・素足で田んぼに入り、素手で山菜をつみ、食べる事。街中で暮らしている一方で里山で暮らす人々を知る事ができる（35歳）

・もともと自然に興味があるので、もちろん自然のことを学べるのも大きいのですが、子どもへの態度（声かけの仕方など）がとても刺激になり、毎回勉強させてもらうことがたくさんあり、ありがたいです（36歳）

・長女：親、親戚以外の方にあんなに親切にされた事は初めての経験でした。人を信じる心を養えたと思います。次女：野外体験をしたことで、キャンプが好きになりました。そして今、山登りが趣味になっています。山のがっこうでの体験が、自然を好きになるきっかけになったと思います（38歳）

・今動植物など自然にふれる機会があった時、必ずほしはらのあの時の、と関連付けて思い出すのは、それほど色濃く記憶に残っていると感じます。家族で経験出来たことというのも大きく、夫婦でお互い知らなかった一面を知ったということも多かったです（39歳）

・あいあいはじめスタッフのみんなが、子どもを優しく見守りながら、子どもたち以上に楽しく過ごしている事に日々自分が子どもに余裕なく接していると考えさせられた。思い出：稲刈りと野草、そば打ち楽しかった（41歳）

・お米やそばを育て、食べるまでのたくさんの仕事を知ったり、子どもと一緒に体験することができました。手触りや匂い、音、五感を働かせる素敵な経験です。普段の生活の中で意識することがなくなっていることを、改めて確認できる貴重な機会です（41歳）

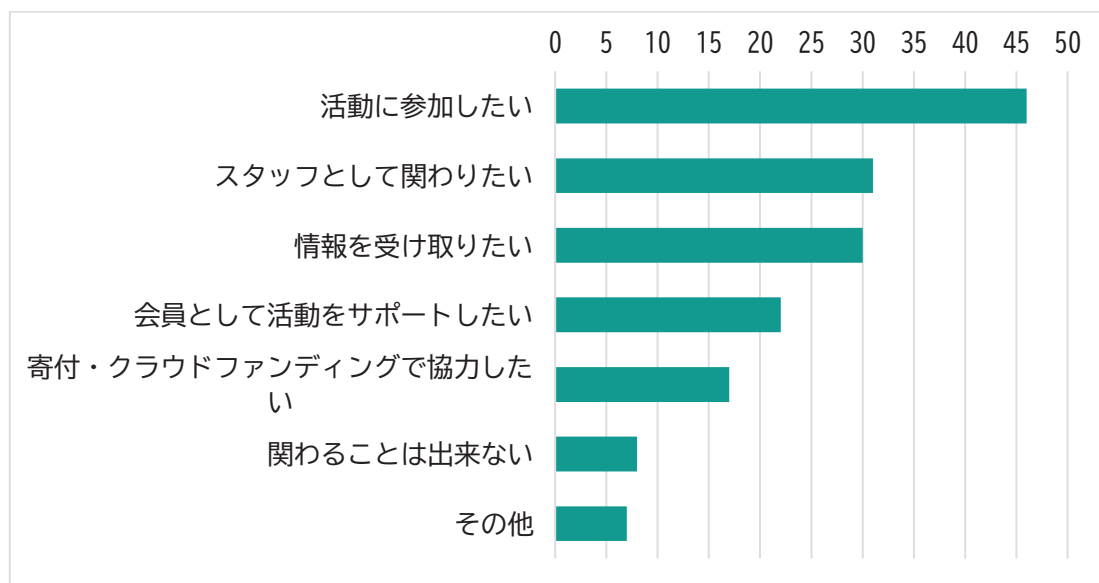
・最初は息子に自然の中で思いっきり走り回ったり、自然を感じてもらいたいという想いで参加しましたが、皆（子ども、大人関係なく）がのびのびと主体的に活動を楽しんでいる姿を見て、私も夫も「そっか、私たちも一緒に楽しめばいいんだ」と気づいたことは大きなことでした。それと様々な年代の方が一緒に楽しめる場所ということが印象的でした（42歳）

	<ul style="list-style-type: none"> ・自然とともに生きること（44歳） ・子どもたちがカエルや昆虫に触れるなか、苦手な子どもが他の子どもたちに感化されて生き物を好きになってくれたこと。生き物を好きになった子どもたちがリピーターになって何度も来てくれるようになったこと。生き物を見つけた参加者とのコミュニケーションを通じて、インタープリターとして成長できていると感じたこと。生き物の紹介を通じて、彼らのくらしぶりに興味を示す子どもが増えていること（60歳）
<p>今、役に立っていること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンプで1人で生活する力がついた（9歳） ・ネイチャーゲームリーダー育成講座で体験したゲームの数々は、目から鱗で夢中になりましたし、大変勉強になりました。年齢、性別関係なく、その場にいる全員で自然を感じ共有する、あの数日間は貴重で、ネイチャーゲームと出会えて良かったと思います。子ども教育関係の仕事をした際にネイチャーゲームをしました。今後も機会があればネイチャーゲームを使うと思います。また、沢山の子どもたちと色々な経験をしたことも、自信に繋がり、役に立っていると感じます（18歳） ・子育てに役立っていると思う。初めての子育てで悩むことやうまくいかないことももちろんあったけど、戸惑うことは少なかった様に思う。知らず知らずのうちにほしはらの活動を通して、子どもってこんな感じというのを見て来れた。活動に関わり始めた頃は独身だったけど、今は家族で関わっていて、子どもたちにとってほしはらが第2のふるさとになっていると思うし、自分の住んでいる地域だけでなく他の場所にも仲間が居ること、今までしてきた活動の体験などが子どもたちの自信にも繋がっていると感じていて親子で関われる有り難さも感じている（23歳） ・地域住民が活躍できる場面を上手くコーディネートするノウハウを学んだ（25歳） ・まさに今エコツーリズム事業の担当をさせてもらっていること（40歳） ・清心女子高校と共催で観察会が実施できたことは科学教育の普及になった（67歳）

1-7. ほしはら山のがっこうや体験地域との今後の関わり

今後の「ほしはらとの関わり」については、「活動に参加したい」が46名、「スタッフとして関わりたい」が31名であった（図3-15）。

図3-15 今後のほしはらとの関わり n=85（複数回答）



データ：大人アンケート

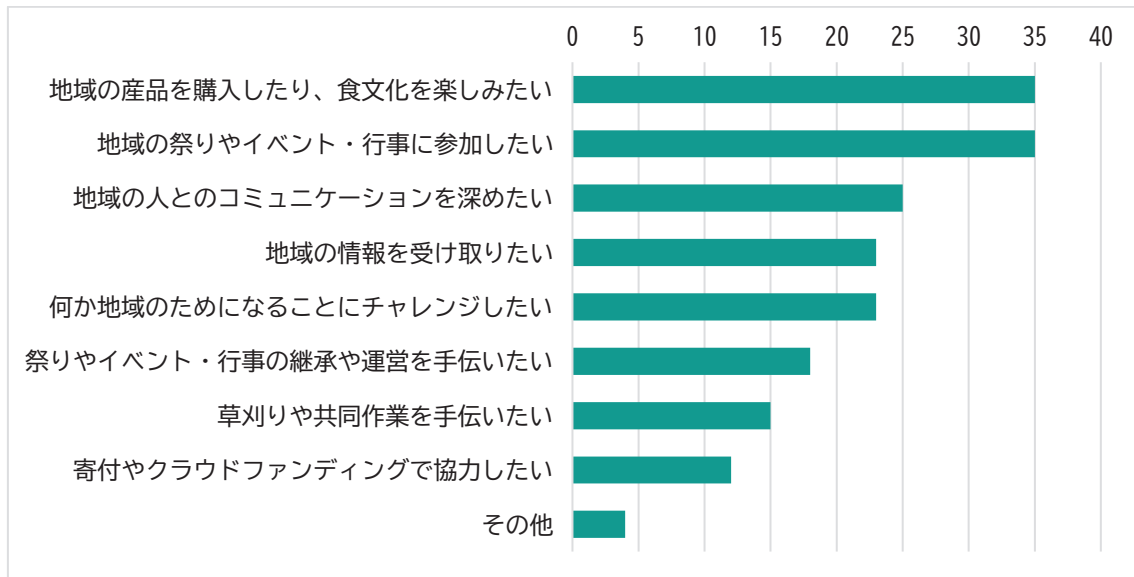
その他の内容は、以下のとおり。

仕事が不定休なので、なかなかお手伝い出来ないと思うのですが、都合が合えば関わりたいです。/懐かしいが、ちょっと遠い/キャンプ デザイン/たまに FB で活動の様子をみてます。/愛さんなど関係者の SNS を楽しみに拝見してます/応援しています。/今は時間がとれないけどまた機会あれば！

今後の「体験地域との関わりについて」は、「地域の産品を購入したり、食文化を楽しみたい」「地域の祭りやイベント・行事に参加したい」が35名と最も多い（図3-16）。

現在の参加状況として、「参加していない」という回答が約半数であるため（図3-8）、ほしはらの活動や体験地域に関心のある方々が参加を継続できるよう、今後どのように交流をしていくか、またつながりを作っていくかを検討することは重要であり、様々な関わり方の選択肢を用意しておくことが必要である（具体的には、地域の行事に関する情報発信、特産品の販売など）。また、多様な人材と地域づくりの場をつなげる役割も重要であると考えられる。

図 3-16 今後の体験地域との関わり n=78 (複数回答)



データ：大人アンケート

その他の内容は、以下のとおり。

- ・地元では何があるかな、と探すきっかけをもらった
- ・JR西日本の事業を通して、地域共生の一環として何が出来るのか考えてみたい。
- ・興味のある活動が有れば参加させていただきます

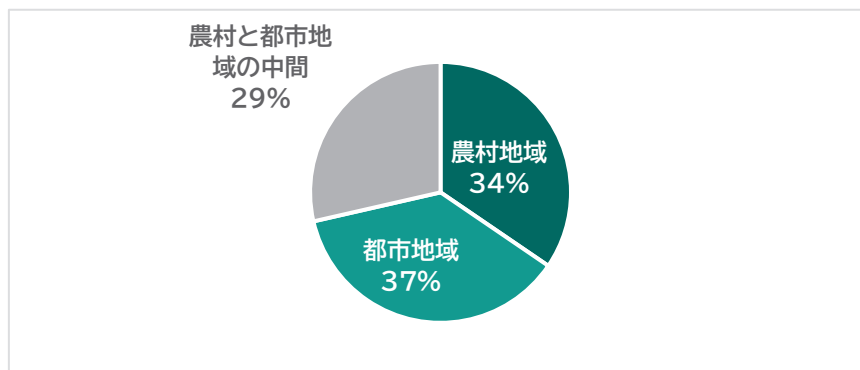
2節 子ども時代の農業や自然体験と暮らしの選択の関わり

2節は、ほしはらの参加者が持つ背景（育った環境や、子ども時代の自然や農業とのふれあい）、現在のIターンやUターンの意向、また「ふるさと」に対する愛着や考え及び「ふるさと」と自身の関係についての設問のまとめである。

2-1. 農業体験や自然体験の有無、育った環境

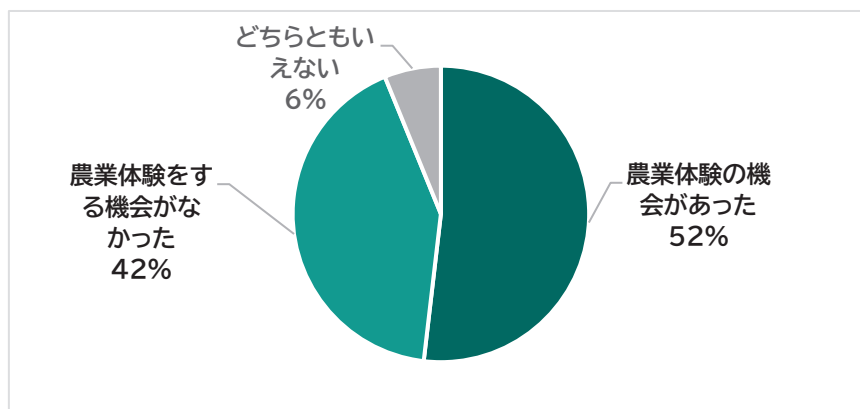
3～10歳くらいまでの期間、育った環境は、「都市地域」が31名、「農村地域」が29名、「農村と都市地域の中間」が24名であった（図3-17）。農業体験の機会の有無については、「農業体験の機会があった」が42名、「機会がなかった」が34名であった（図3-18）。3～10歳くらいまでの期間の、農業体験で覚えていることについては、祖父母の家での田植え、生き物とのふれあいや学校教育を通じた農業体験に関する記述が多くみられる（表3-5）。

図3-17 3～10歳くらいまでの期間の育った環境 n=82



データ：大人アンケート

図3-18 3～10歳くらいまでの期間の農業体験の機会 n=82



データ：大人アンケート

表3-5 3~10歳くらいまでの期間の農業体験で覚えていること

()内は現在の年齢

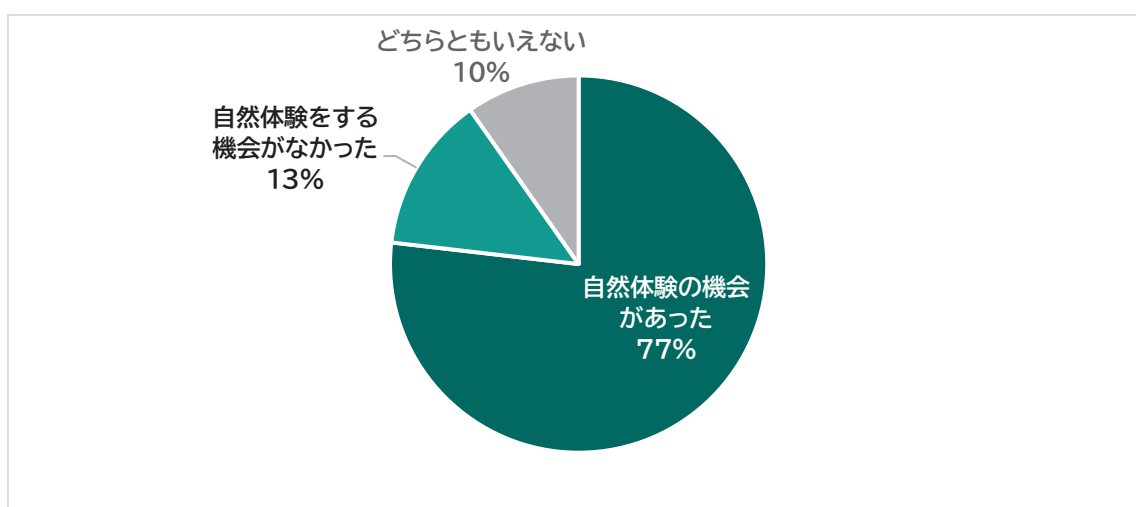
年代	具体的に覚えていること
10歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・家の畑で芋掘りをしたこと (13歳) ・幼稚園で毎年田植えと稲刈りやりました (14歳) ・小学校や幼稚園のときに田植えや畑で芋を収穫してたべて「おいしいー」とか言っていたのをおぼえています (14歳) ・5歳の頃、幼稚園の隣にあった田んぼで田植えをさせてもらった (17歳) ・祖父の田んぼの田植え畑のいろいろ (17歳) ・ほしはら山のがっこう、家の農作業 (17歳) ・自分の家や学校での田植え (18歳)
20歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・行きつけのお店の人の田んぼにいった (22歳) ・ほしはら山のがっこう、あーと村 (22歳) ・体験学習のそば粉植えるやつ (24歳) ・祖父母の家の田植え (26歳) ・葡萄栽培、田植え、稲刈り (27歳) ・おばの家でのみかん摘み (28歳) ・自然学校のような体験に参加 (29歳)
30歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・家では、籾撒き、苗箱運び、野菜の種まきと収穫、山菜採りや柿、梅、栗拾い等、小学校の授業では、手植え体験、稲刈り、脱穀(千歯扱き、とうみ)体験、一升瓶で精米体験、地元の子ども会では、臼と杵で餅つき (31歳) ・農家の生まれなので物心つく頃には祖父と一緒にトラクターに乗っていました (32歳) ・自宅の庭で、野菜づくりをしたこと (34歳) ・学校教育を通した近隣農家や農業試験場での農作業体験 (37歳) ・家の手伝いで、みかんや八朔などの収穫。農業宿泊体験行ったことも。牛にミルクをあげたりしたり (38歳) ・農村に住む知人の田植えを手伝わせてもらった (38歳)
40歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父母の家近くでの田植え (40歳) ・祖父母の家の田植えの手伝い (40歳) ・稲刈り手伝い、はでぼし、落穂拾い、オヤツ運び (41歳) ・祖父母の家で田植え、生き物で遊ぶ。家族でやるのが楽しかった (41歳) ・近所に住んでいる親戚の山で親戚みんなで集まりみかんの収穫 (43歳) ・祖母の家で田植え、稲刈りをしたこと、農家だったのでインゲン豆など袋詰めして出荷の手伝いをしたこと (43歳) ・公民館のイベントで、稲刈りの体験。機会は一切使わず、昔の道具を使った体験会でした。千歯こき、唐箕を使ったりしてとても印象に残っています (44歳) ・祖父母の家で米作り (44歳) ・幼稚園で行った芋掘り (45歳) ・がつつり農業体験は無いけれど、通っていた小学校の敷地内に小さな畑があり、各

	<p>学年でジャガイモやさつまいも等をクラスで育てました (45 歳)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家の田んぼで機械で植えられない所の手植えや、ハデ干しを手伝ったり、牛の餌のとうもろこしのサイロ浸けや刈り取り作業 (45 歳) ・学校で畑の栽培など (45 歳) ・子ども会のみかん狩り (49 歳)
50 歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・手伝ってはないが祖父母が米、ミカン、畑をしてるのは見たことがある (49 歳) ・実家での田植え (稲刈り)、山仕事 (50 歳) ・近くの田んぼで遊んでいた。オタマジャクシをとったり、蓮花で花輪をつくる (50 歳) ・学校や近所の方の畑でのさつまいも掘り (50 歳) ・祖父の家で田植えを手伝っていた (50 歳) ・近所に家庭菜園を借りて家族で野菜を作っていた (51 歳) ・田植え、稲刈り、種まき、脱穀など (苗の水やりも) さつまいも、じゃがいも植え、掘り、そら豆、トマト、ピーマン、ナス、キュウリなどの収穫、大豆、小豆の天日干し (52 歳) ・祖父母の家で田植えの手伝い (54 歳) ・家で田植えから稲刈り (54 歳) ・祖父母の家の柑橘の収穫。かごが重かった事。かごのひもに竹を通して、前後を姉と妹と3人で運んでいた。その事を祖父がうれしそうに長年話していた (55 歳) ・農業体験というより農家でした。田んぼで遊んでいました。体験ではないですが、当時は機械も少なく田植えなど近所の方々総出で手伝っていました (56 歳) ・体験出来る所を探して参加、蕎麦作り (56 歳)
60 歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・自宅の農作業、ヒツジ・ヤギ・ニワトリの世話、食肉加工 (トリ)、たき木の伐採、薪作り (62 歳) ・地域の皆で田植え、田植えが終わった、田休みと言ってご馳走を食べていました。柏餅、もぐり寿司などです (64 歳) ・山の手入れやキノコ採り、田植え (67 歳) ・専業農家として田んぼ、果樹園の管理の手間が大変だと思った (68 歳)

続いて、「3～10歳くらいまでの期間の自然体験の機会」については、「自然体験の機会があった」が63名、「機会がなかった」が11名であった（図3-19）。子ども時代の自然に対する印象は、「自然が好きだった」が62名おり、8割近くは、自然が好きだったと回答している（図3-20）。

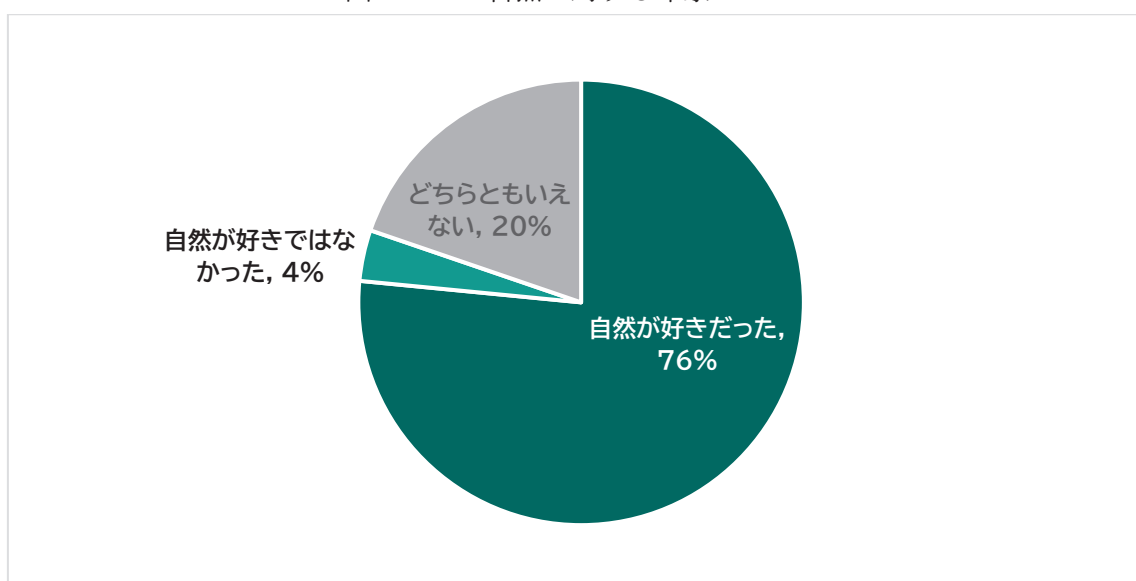
自然とふれあう機会が多かった者が多く、自然に対して好意的な回答の割合が高い。自然体験のシーンで覚えていることの自由記述については、近所での出来事や学校帰りの寄り道に関する記述が多くみられることが特徴的である（表3-6）。

図3-19 3～10歳くらいまでの期間の自然体験の機会 n=82



データ：大人アンケート

図3-20 自然に対する印象 n=82



データ：大人アンケート

表3-6 3~10歳くらいまでの期間の自然体験のシーンで覚えていること
()内は現在の年代

年代	具体的な内容
10歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所の散歩で行った草むらで、初めてバッタを触ったこと (13歳) ・川遊び (14歳) ・よく裏山の竹やぶで、数人で秘密基地を作ってよく遊んでいました。今となってはよくあんなもん作れたなと感じております (14歳) ・あゆをとりに川に行く。たけのご掘り (17歳) ・学校でカエルとカマキリどっちが強いを観察してた (17歳) ・家の周りでよく虫を捕まえていた (18歳)
20歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園が山の中にあって毎日遊んでいた (22歳) ・ビオトープでカエルを捕まえて遊んでいた (22歳) ・セミとりはよくしていた (24歳) ・家の近くの河で亀を探した、親と一緒に近所の海で蝶を取った、川に泳ぎに行った、家族で秋吉台に行った (24歳) ・地元の川で友達と遊んだこと (26歳) ・放課後、家の近くの川で魚を捕まえて遊んでいました。また、休日には祖母や家族と一緒に山に登って山菜取りをし、山で天ぷらにして食べていました (26歳) ・ザリガニ釣り、サワガニ取り (27歳) ・母の釣りについて行ったり、裏山のようなところで遊んだり (島育ち) (28歳) ・小学校に上がる前から、北広島山で毎月のように、焚火や鉈を使っての薪作りなどをしていた (29歳)
30歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・毎年夏には、川でドジョウやハエ、メダカ、スジエビなど、田んぼでおたまじゃくしやカブトエビなどを捕ってました。メダカが家でたくさん孵化したときは嬉しかったです。また、大きな川で遊んでいたとき、水の中を歩いていたら、水深がいきなり腰くらいまで深くなって焦ったことは、今でも鮮明に覚えています。公会堂の裏には、カラスヘビやアオダイショウがいて、棒でつついて遊んでました。(毒があるかないかは判断出来るよう教わってたように思います。)カエルや蝶々、セミ、カブトムシ、バッタ等、近所の子や兄と一緒に捕まえてました。野イチゴが取れる場所(犬の散歩ルート以外で)は把握していて、友達と食べてました。他にも、シロツメクサで花冠を作ったり、四つ葉を探したり、オオバコで引っ張り相撲をしたり (31歳) ・友達と山の中に秘密基地を作って遊んだ (32歳) ・自宅近くの公園や河川で、よく生き物を捕まえ、観察していたこと (34歳) ・マンションの裏が竹やぶでいつもそこで遊んでいた。1日に20箇所くらい蚊に刺されていた。幼稚園の庭でいつも虫を捕まえていた。毛虫を可愛がっていた (35歳) ・図鑑を片手に友人たちと山菜取りや昆虫採集、川や沼での釣りなど (37歳) ・近くの池でザリガニとったり。海が近いので海に行き泳いだり、岩場で遊んだり。よく山登りにも連れて行ってもらった (38歳) ・田舎から都会に引っ越したので、常に自然を求めていたような記憶があります。朝早く家を出て近所の山に歩いて行ったり、友達と学校の裏山に基地を作ったりしました。子どもエコクラブに所属して、近所の山や川、海に出かけて自然について学んだのですが、そのときに教えてもらった鳥の名前は今でも忘れません (38歳)
40歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・秘密基地を作って楽しんだ (40歳) ・学校帰りに寄り道をして、野いちごをよく取っていた。冬になると道路の水たまりが氷になるので、割ったものをビニール袋に入れて学校へ持って行っていた。祖父母

の家の近くに滝があり、夏はそこで海水浴をしていた。祖父母家がぼっとん便所で、下を見るのがこわった。夏に祖父母の家で泊まっていた時、夜、トイレに起きて外へ出ると(夜中にぼっとん便所に入ると落ちたら怖いので外で、もよおしていた)満天の星空に蛙の大合唱が今でも脳裏に残っている。祖父母の家は、離れにお風呂があり、薪で焚いていたので芯まで温かくなれた。冬場はお風呂上がりに外に出ないといけなくて、とても寒い思いをした(40歳)

- ・川で遊ぶ 山できのこ採り(41歳)
- ・幼稚園行くとき、田んぼの中を歩いて、いなごを取りながら行き、幼稚園の先生が佃煮を作ってくれた(41歳)
- ・虫取り、魚釣り、川遊び、学校の帰りに筍掘り(41歳)
- ・家の近くに山があり、走り回ったり、用水路で泥遊びをした(42歳)
- ・夏には虫かごいっぱいになるくらいセミをとっていた。学校の帰り道にイタドリをかじりながら帰ったり、道端のおしろい花でパラシュートを作って飛ばしたりしていた。小さい頃は近くの小川にホタルがいて、ホタルを何匹も取って袋に入れて持って帰り、寝る前まで眺めて喜んでいたが、翌朝、全部死んでいてショックだった。水着を着て自転車に乗り海に泳ぎに行っていた。近所のおじさんが見つけてくれたセミの幼虫が殻を破り出てくるのを眠気と戦いながら見た。家の前の溝に生えているカタバミの茎の芯で妹とお相撲をよくしていた(43歳)
- ・祖母の家が、毎年大雪が降っていたので庭に降った1メートルの雪でかまくらを作ったり、大雪で覆われた斜めの畑で、肥料の袋でソリをしていたこと。豚小屋の餌をいれるレバーを間違っってひっぱり、頭から餌をかぶってしまったこと。裏山で筍を掘ったこと。虫が嫌いなのにムカデがやたらでたこと。暇すぎて祖母の家にいるカメムシの数を数えたら87匹いたこと(43歳)
- ・つつじの花をすっていた(44歳)
- ・家族で吾妻山に登山に行った時、駐車場で放牧されていた牛に、草を手やりしようと近づいた時のこと。可愛い子牛がいたので、近寄っていくと、その子牛の母親が、子牛を押し退けるように私に近寄ってきた。草が欲しいのかなと思ったら、そのまま私を、ツノの生えた頭で吹っ飛ばした。自分の両足が地面から離れたシーンだけ、今でも覚えている。地面に落とされたあと、私は靴が脱げたのも構わず走って逃げた。ツノは刺さりはしなかったが、脇の下をかすっていて血が出た。とても肝を冷やした思い出(44歳)
- ・祖父母の家で同居していた際、山や田畑でよく遊んだ。凧揚げするのも田んぼ、おやつに野いちご、田植えや稲刈り、餅つきなど、一大イベントだったのもよく覚えている(44歳)
- ・祖母宅前の川でザリガニを取ったりして遊んだこと(45歳)
- ・小学校の帰り道でつつじの花の蜜を吸ったり、葉っぱ笛を鳴らして遊んだこと(45歳)
- ・小学校の子ども会で夏にキャンプ場へ行ったり、祖父母の家が県北にあり、近くに田んぼがあったので、盆と暮れの時期だけ草花を摘んで遊んでいました(45歳)
- ・家の田植えの時に田んぼの中でオタマジャクシや、タガメなど生き物を捕まえて遊んだり。山にカブトムシをとりに行ったり、川にギギウや、ハエ、コイを釣りに行ったり(45歳)
- ・近所の川で魚を網で捕まて、家で飼ってみたり。ゴッバツや川エビなど(45歳)

山に湧水飲みに行ったり、祖母とつくし、わらび、ゼンマイなど採りに行っていた(46歳)

川遊び、山奥へ仲間と行ったり。家周辺が山。かなりかなり深い山奥まで仲間と頻繁

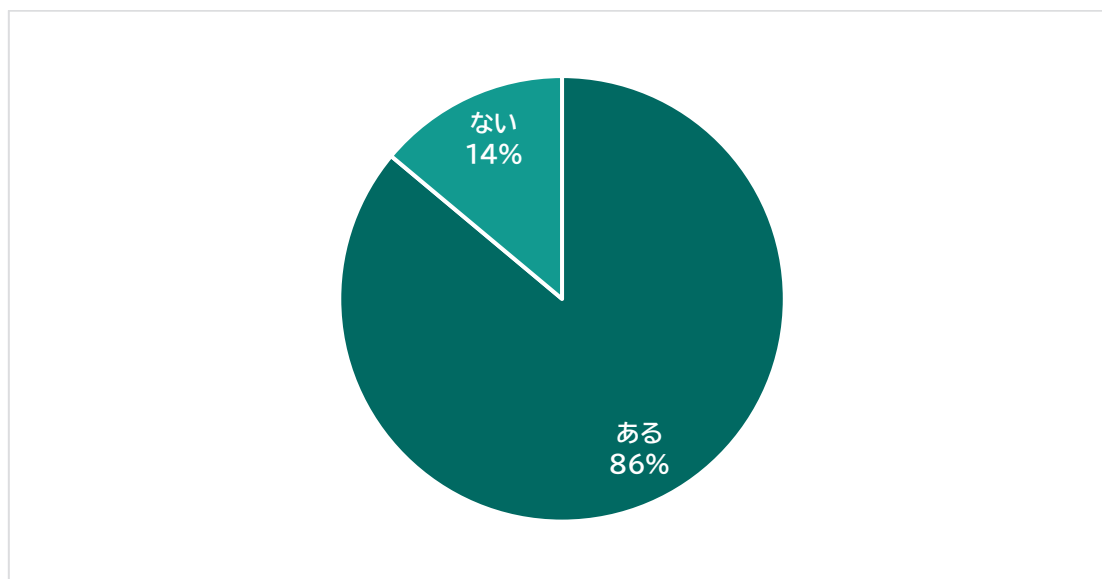
	<p>に行っていた。山の大木にブランコ作ったり、基地つくったり、カブト虫を取ったり、ときには「ガサガサ」とイノシシと遭遇。トトロが出てきそう。今では息子にはさせられない（親になったので、許さないだろう）（47歳）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・祖母が家庭菜園で野菜作り。園の小川でザリガニ釣り。庭でカマキリの卵が孵化し、大量のチビカマキリに驚愕（48歳） ・子どもキャンプの参加、ガールスカウトでのキャンプ、家族旅行で行った沢遊びや海水浴、釣り堀でのニジマス釣り、夏休みのセミ取り、アリをひたすら見ていた幼児期（アリの巣を潰した罪悪感）、帰り道に野いちごを摘んで食べたこと、帰り道に化石が出るところに寄り道していたこと（49歳） ・学校の裏山で遊んだ（49歳） ・家族でキャンプ山や海にキャンプに行った。父が薪で火を起し、飯盒炊きでカレーが定番だった（49歳） ・田舎でカニを取ったり、ミカン畑でミカンを取ったり、菓子を木に隠されたのを探し楽しかった。川で魚を手で取っていてある時、石の間に手を入れた時へビ？みたいなのが出てきてそれ以来見えてない所に手が入られなくなった。川を歩いた（49歳） ・学校から帰ったらよく虫とりに行っていた（49歳）
50歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・休日の川遊びや海での釣り（50歳） ・学校が遠かったので学校帰りに変な道を歩いて草や虫を見つけたりはしょっちゅうでした。クモの巣に昆虫を投げ入れて、絡め取られるのを見るのが好きでした。また、友達2人で川の深瀬に潜った時の耳が変になり、息も苦しかった感覚は今でも覚えています（50歳） ・川でザリガニ、メダカとり。田んぼでオタマジャクシとり。田んぼ蓮花つみ。シロツメクサつみ。近くの草むらで秘密基地づくり。かまくらづくり。稲刈り後の田んぼで遊ぶ。近くの道端にある果物のみを採って食べる。雪合戦、そり遊び（50歳） ・草むらでかくれんぼ（50歳） ・親戚の家（吉和）の用水路で夏、冷たい水に足をつけて遊んだり、夏野菜を畑から収穫して洗ってその場で食べたり、普段しないことがとても楽しかった記憶があります。小学校の裏山にアスレチックが作ってあり（手造り）、放課後よく遊んでいました。グミが出来る時期があり、おやつによく食べていました。家族と行く海水浴。一日遊び、よく日焼けしました。ガールスカウトで行ったキャンプ。夜明け前の一人で目を覚ました時の、何となく寂しい気持ちはよく覚えています（50歳） ・家族と山登りによく出掛けていた（50歳） ・ザリガニ釣り、近所の川で泳ぐ、海で釣り、木登り、全てが日常にあって、夏休みは毎年無人島に家族でキャンプに連れていってもらっていた（50歳） ・湧き水が湧く森が近くにありそこで水を手に掬ったりザリガニを釣ったり木登りをした記憶が幸せの原体験です（51歳） ・キャンプした（51歳） ・稲刈り後の田んぼで弟とキャッチボールや逆立ちなどしていました。田んぼの土で団子を作ったりもしていました。夏には田植えの手伝いで、素足で田んぼに入ってヒルに食いつかれていました。溝でタニシひらいをしたり、しじみ取りをしたこともありました（52歳） ・農業ではありませんが、毎年、盆と正月に父の田舎(旧芸北町)に行き、川で泳いだり魚を釣ったりして遊びました（53歳） ・おたまじゃくしを取りに行ったり、夏休みにセミなどつかまえたり、海では貝をとったりした。シロツメクサで冠を作ったり、蚕を飼ったので桑の葉を集めたりもした

	<p>(53歳)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空き地、裏山で探検 (54歳) ・公園の池で鮒を釣った (54歳) ・キャンプには毎年行きました。火をおこす、テントで寝る、星を見る。非日常が新鮮でした (55歳) ・川に手作りのいかだを浮かべて乗って遊んだり、泳いでいました (56歳) ・習い事での催し、キャンプに参加 (56歳) ・ホテルがいっぱいとんでました。魚がいてホテルがいて海に近かったので夏はまっくろになって魚追いかけてました (59歳)
60歳代～	<ul style="list-style-type: none"> ・魚捕りや虫捕りをよくしていた (61歳) ・海で釣り、モリつき、サザエとり、タコとり、潮干狩り、山でメジロとり、シイノミとり、ヤマモモとり、ニワトリの羽根むしり、木の上の基地作り (62歳) ・蛇が怖かった。いまでも (62歳) ・川で水遊び・魚取り、魚釣りに熱中した。稲刈りの終わった田んぼで花摘みや虫取りをした。街灯に飛来するクワガタやカブトムシを集めて飼育していた。朝のラジオ体操の前にセミとりをした。近くの山に入って基地づくりをした。厳冬期に道の水たまりに張った氷を割って遊んだ。霜柱を踏んで遊んだ。夏休みは屋根に寝そべて天の川や流れ星を見ていた (63歳) ・春には山菜とり、夏は川で泳ぎ、になとり、秋には柿の木に登って柿を食べていました。自然を満喫する生活でした (64歳) ・山や畑や川すべてが遊び場でした。山ではいつも鎌を持って、木を切って砦や弓矢などを作り、木の実をとっておやつにしました。畑などでは、段々畑で鬼ごっこなどをして木小屋で隠れていると知らない間に夕方になり誰もいなくなっていました。電柱がないので、竹と和紙で凧を作って、凧揚げなどもしました。川では、夏休みになると、近所のみんなで川を堰止めてプールを作って泳ぎました。学校帰りには、山道の石の上で宿題をしていました (67歳) ・毎日が自然体験。小川での魚取り (68歳) ・野山で隠れ家を作ったり、竹を切って紙鉄砲や笛を作ったりしていた (75歳)

2-2. これまでの農業体験や自然体験から考え方や暮らし方に影響を受けたこと

「これまでの農業体験や自然体験があなた自身の考え方や生き方（学校生活・進路選択・就職）、暮らし方（自然・環境への意識、生活の拠点）に影響を与えたと感じること」については、「ある」と回答した者が68名いた（図3-21）。具体的なエピソードの自由記述は表3-7に年代別に整理した。「都会よりも田舎で暮らしたい」「老後は田舎で暮らしたい」といった生活の拠点を選ぶ際に影響を与えている内容、「子育てをする時になって自分の原体験を思い出し、子どもに自然にふれることの大切さを感じさせたかった」といった子育てに関連する内容、「自然体験によって感性が高まる」「自分の問題は些細なことを感じるようになった」など、体験による成長や意識の変化に関連する内容がみられた。

図3-21 これまでの農業体験や自然体験が考え方や生き方、暮らし方に影響を与えたと感じること n=82



データ：大人アンケート

表3-7 これまでの農業体験や自然体験が考え方や生き方、暮らし方に影響を与えたと感じることの具体的なエピソード

()内は現在の年齢である。

年代	内容
10歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・山菜を取って食べたりするのが面白い（14歳） ・今は自然が少ない都市に住んでおりますが、部活外で全く自然とふれあわなくなりました。すると自然が、自然で遊んでいた自分が恋しくなりました。そう考えるとより一層自然を守るべきだと感じるようになりました（14歳） ・自然の理由を考えるようになった（14歳） ・自給自足（17歳）

	<ul style="list-style-type: none"> ・都会からほしはら山のがっこうに来ている人が、自然がとてもリラックスできて来たいと思えると言っていて、大切にしていきたいと感じた。将来、自然を都会の人にも感じてもらえるような仕事がしたい (17 歳)
20 歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の問題は些細なことに感じるようになった (22 歳) ・生活の拠点にやや田舎の地域を選んだ (22 歳) ・隠岐諸島(隠岐島前高校)への島留学 (24 歳) ・市民の暮らしに密着した職に就きたいと思った、都会よりも田舎で暮らしたいと思った (24 歳) ・老後は田舎で暮らしたいと思う (26 歳) ・人生の中で何に喜びを感じるのかを考える際、今まで生きてきた記憶を辿るため (27 歳) ・定期的に緑な世界に行きたくなる。都会だと公園などになってしまいますが (28 歳) ・大人になり、登山や林道ツーリング、雪山登山キャンプなどを行っている (29 歳)
30 歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・幼少期、身近な自然とたくさんふれあって遊び、毎日楽しかった。これからも自然いっぱい環境で四季を感じながら暮らしたいと思う。また、近所の子たちと遊ぶとき、集落の家々の畑や納屋なども使いながらくれんぼしたり、鬼ごっこをしたりした。近所の方が話しかけてくれ、梨や柿などをくれることも。大人になって思い返すと、集落の方がとにかく温かくて優しく、自由にのびのび遊べたのだと思う。自身の子どもにも広々とした環境で、みんなから見守って頂きながら育てほしいから子育ては田舎でしたいと思う。仕事も出来れば地元で働きたいと思い、地元の市役所で働いている (31 歳) ・都会で日常生活をしていると自然に対する感性が乏しくなりますが、自然体験に参加することによって、感性を高めることができます (34 歳) ・自然が好きになりました。子どもを山や川に連れていきたいと思うきっかけだったと思います (35 歳) ・農学を専攻できる大学へ進学を決めたこと。地域おこし協力隊として農山村の地域を選んだこと (37 歳) ・高校時代は登山部、大学では環境問題に取り組むサークルに所属 (庄原の林業のお手伝いなどにも行きました)、子どもができてからは夫の実家の山や畑に遊びに連れて行ったり、ほしはらの活動に参加したり。最近は家族で焚き火を楽しんでいます (38 歳)
40 歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもを出産して、自然に対する想いが強くなった。(40 歳) ・この洗剤を使うと川に流れても魚が死なないなど、その後環境がどうなるかを考えるようになった (41 歳) ・住むところは都市部より田舎が好き (41 歳) ・家を探していた時に団地には住みたくないと思っていて、田舎と都会の間の場所に住んでいて建売が多い中、お庭が広い中古の家を選んだこと (43 歳) ・今、広島市内で子育てをしながらマンション等での生活が息苦しく感じられ、毎週子どもがのびのびできる場所に連れて行っていますが、やはり子どもが自由に自主的に活動する力を育むには田舎が 1 番と日々感じます。土、木、草、水があれば子どもはおもちゃや遊具がなくても何時間でも遊ぶのを目の当たりをしています。自然は癒しも自主性も与えてくれる素晴らしい世界だと感じます (43 歳)

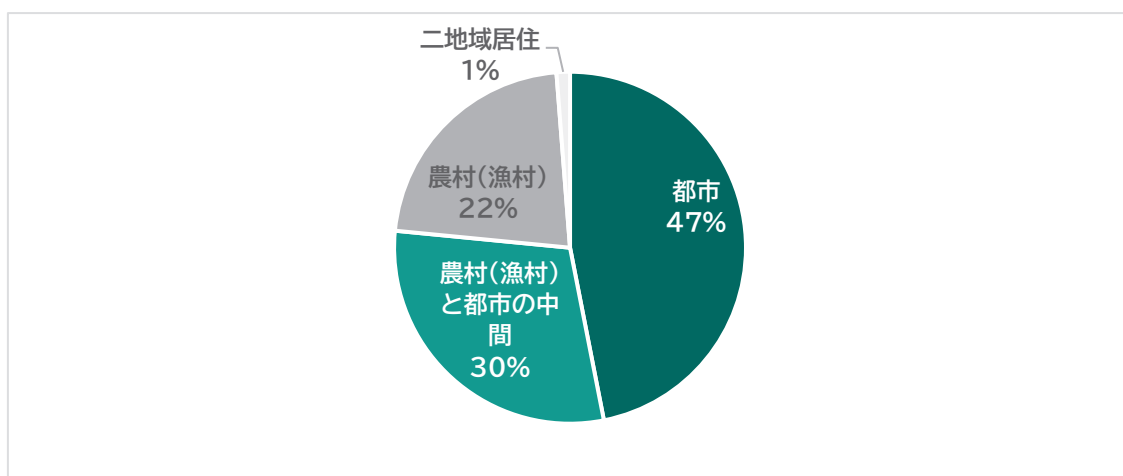
	<ul style="list-style-type: none"> ・自遊人楽校での活動（44歳） ・学生時代、都市部で生活するものの子どもの自然体験に携わるボランティアに従事し、その後Iターンして、田舎暮らしを選ぶことになった。（44歳） ・農業の大変さを感じ、仕事として農業はできないと思いました（45歳） ・季節を感じる事はとても大事だと思います。それに併せて季節の行事を知ったり、昔から伝わる知恵や技術を知る事で、非日常体験を味わうと共に、子どもや先の孫に伝える事も大切だと感じています（45歳） ・祖父母や家族、親戚が集まって共同でワイワイガヤガヤ農作業をするのが楽しかった。そのあとのごはんをみんなで食べたり、大人たちがお酒を酌み交わすそんな雰囲気が好きだった（45歳） ・都会に憧れて出てみたけどやっぱり田舎が好き。今は自然豊かな土地で農業している（45歳） ・子どもの頃は自然が当たり前だと思っていたが、高校くらいから広島市内に出たいと思った。けれど、今は自然がいっぱいであった事に感謝している（46歳） ・子どもが生まれたことにより、実体験として例えばお米や野菜はスーパーで買うものではなく、田んぼで半年以上かけてつくっている、またその過程には色々な苦労があることをしてほしいと思うようになりました（47歳） ・田植え、しめ縄作り（47歳） ・都心での暮らしは、自身で行動しないと自然を感じにくい（48歳） ・自然への好奇心が、いつもわたしをくすぐり、今この場所にわたしを連れてきた。でも成人するまで自然体験から見える社会や暮らしを、知らなかった。農村の暮らしを体験してはじめて、赤毛のアンや大草原の小さな家や唱歌などに描かれた情景を感じることができ始めた。この感じを、多くの子どもたちに伝えたい（49歳） ・20代は田舎暮らしも良いかもと思っていたが、やはり私にはたまに行く位が良いかもと思う（49歳）
50歳代	<ul style="list-style-type: none"> ・自然相手ですぐうまくいかないことが多かったけどそれはそれで色々考える機会が多かったのが良かった（50歳） ・子どもと一緒に参加して、楽しいこともそうでないこともあると分かった。自然の姿を知った上で、将来どういった生き方をするのか考えてほしいと感じた（50歳） ・田んぼに入った足の感じ、素手で草花をつんだり、その場にあるもので遊ぶ事。手足の感じ方、匂い、ヒルがいたり。お米や野菜ができる事を自然と感じながら遊んでいました。娘にそういった感覚を体験して欲しかった。個人が里山の中に入っていくのは案外難しい。当時田舎に住んでいましたが田畑や山を所有していなかったのでどうする事もできなかった。山のがっこうに出会えて良かった（50歳） ・自分自身というよりも子育てにおいて、ゲーム、スマホ、PC等に触れる前に自然を充分感じて欲しいという思いが強かったです（50歳） ・自然の中に身を置く事が、気分をリフレッシュできる性格になった（50歳） ・子育てをする時になって自分の原体験を思い出し、子どもにも自然にふれることの大切さを感じたし、させたかった。同時に自分自身も自然にふれる喜びを改めて実感した。子どもの頃の体験を思い出すようになった（50歳） ・子どもたちともあの自然に包まれながら遊んだ幸せを共有したいなと思いながら過ごし

	<p>てきました (51 歳)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・収穫の喜びを知り、収穫物を無駄にせず食べられるよう工夫する。田舎の良さを知り、住みたいと思えるようになった (52 歳) ・子どもが生まれてから、中山間地域に引っ越した (53 歳) ・自分がいろいろな経験をしたからこそ、自然が荒れたり壊されたりするのを見るのはとても残念な気持ちになり、子どもたちに自然の素晴らしさや怖さまでもを残してやりたいと思うようになりました (53 歳) ・天体観測、スキー合宿 (54 歳) ・次女：山のがっこうの体験や祖父母の農業を手伝う事で、自然相手の仕事は本当に大変だと感じました。それを仕事にしている人への感謝は深まったと思います。また山好き、キャンプ好きは、その時の山のがっこうでの体験が礎になっていると思います (55 歳) ・考え方や生き方ではないですが、山に松茸狩りに毎年言っていたので、今でもなんとなく山の境は覚えています (56 歳) ・料理、火おこし体験など、自分で作る事の楽しさを経験出来、他の催しにも躊躇せず子どもだけで参加出来た (56 歳) ・ホテルがたくさんいました。今は・・・ (59 歳)
60 歳代 ～	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の子どもも自然の中で育てたいと思った (61 歳) ・都市部には住みたくなかったので、農村に住んで、山小屋を作り、ホテルを育てている (62 歳) ・生き物を観察するなかで、植物も動物も生き残っていくためにさまざまな工夫していることが分かります。自然観察をしていると、本などで得た知識が目の前で現実になる喜びに出会い、人に知らせたいと思います。自然を大切にして、次世代に継承し、自分が感じた喜びを伝えていきたいと思い、環境調査の仕事を選びました。そして、調査を通じて知ったことをわかりやすく伝えられるよう環境省環境カウンセラーという資格も取りました。環境アセスメントに関わってきたなかで、人が環境に変化を加え、環境がどのように応答するか、ずっと見てきました。多くのかく乱は時間と共に復元するので、共生という概念が重要だと感じます。復元できない改変かどうか、見極めることが大事です。環境破壊という言葉に多くの人が忌避感を持ちますが、人間は環境を変えることで今までやってきたことを理解しないといけないと思います。賢く環境を利用することが重要で、持続可能な開発という考え方をもっと広めていきたいです (63 歳) ・様々な自然体験が今の生活に役立っている (64 歳) ・一人で静かな山道を歩いていると、自分が森の深い木々と一体化し、小さくなり自然の大きさの中で自我や悩みを忘れることができた。かつて、夏の忙しさの中で自分を見失いそうな時、ふと気付いたキンモクセイの香りに我を取り戻した、一歩先に踏み出すことができた (67 歳) ・若い頃から休日といえば、山 (川を含む) か海に家族で行っていた。今も都会から目の前が海という場所に居を構える生活を送っている。おかげで、その影響か娘も息子もアウトドア関係の仕事やボランティア活動に従事することが多い (75 歳)

2-3. 農村への移住希望と「ふるさと」に対する思い

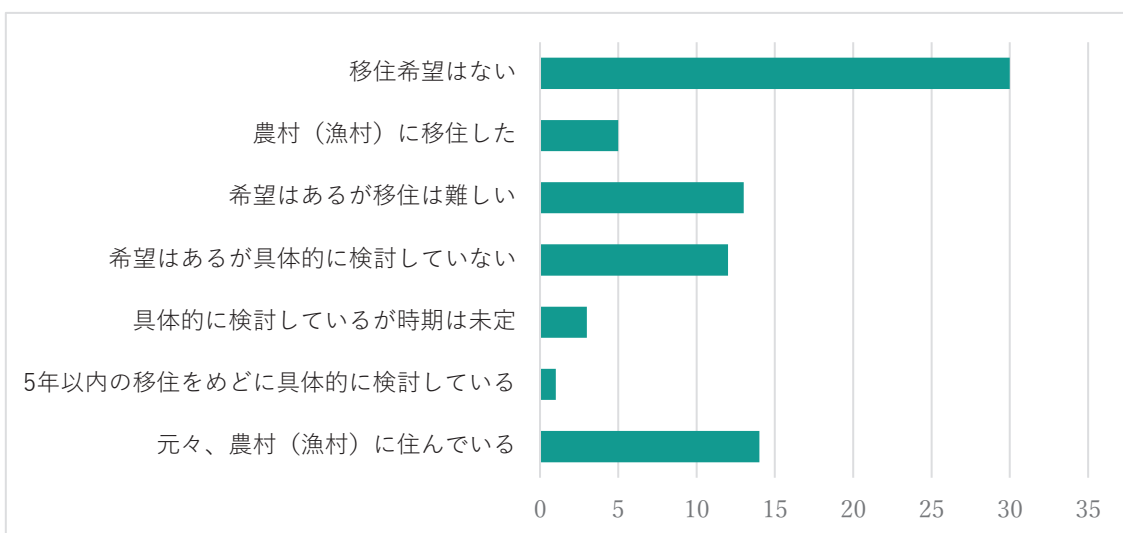
「現在どのような地域に暮らしているか」については、回答者のうち、現在は都市で生活している者が約半数である（図3-22）。「農村への移住希望があるか」については、「移住希望はない」が最も多く、「希望はあるが難しい」「希望はあるが具体的には検討していない」が合わせて25名である（図3-23）。

図3-22 現在どのような地域に暮らしているか n=82



データ：大人アンケート

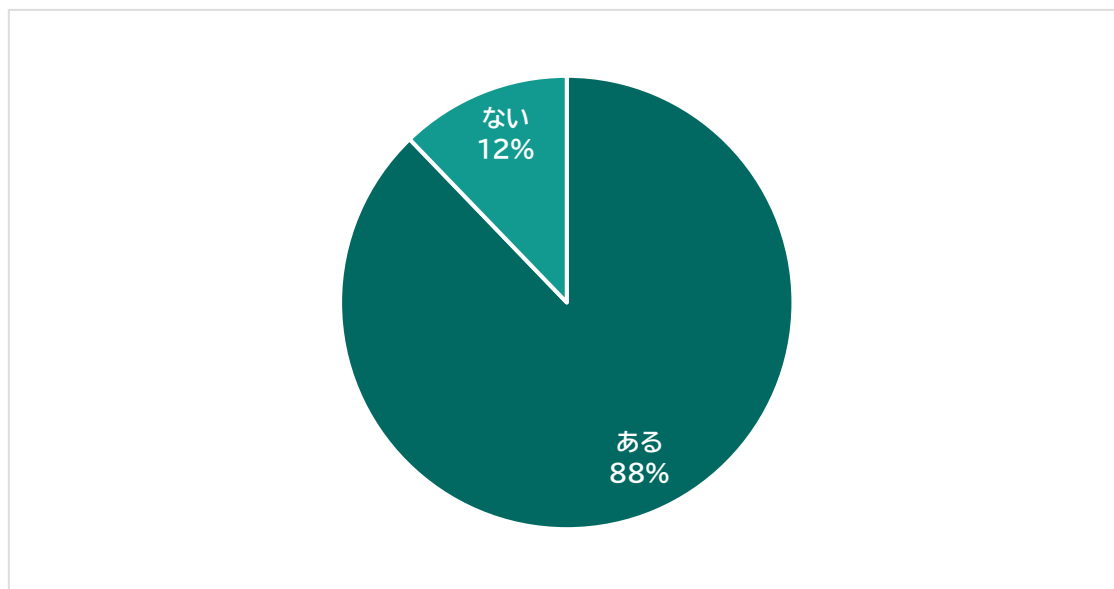
図3-23 農村への移住希望があるか n=82



データ：大人アンケート

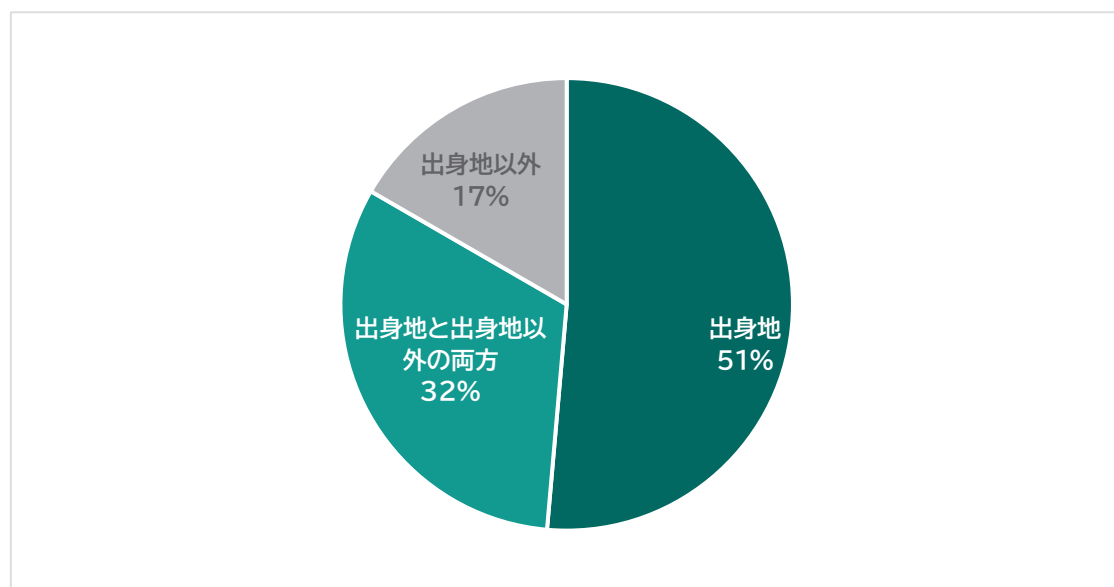
続いて、「『ふるさと』と名付けられる場所や思い浮かべる場所があるか」については、「ある」と回答した者が約9割存在した（図3-24）。「ふるさと」として思い浮かべる場所の内訳は、「出身地」が約半数、「出身地と出身地以外の両方」が3割、「出身地以外」が2割弱であった（図3-25）。

図3-24 「ふるさと」として思い浮かべる場所があるか n=72



データ：大人アンケート

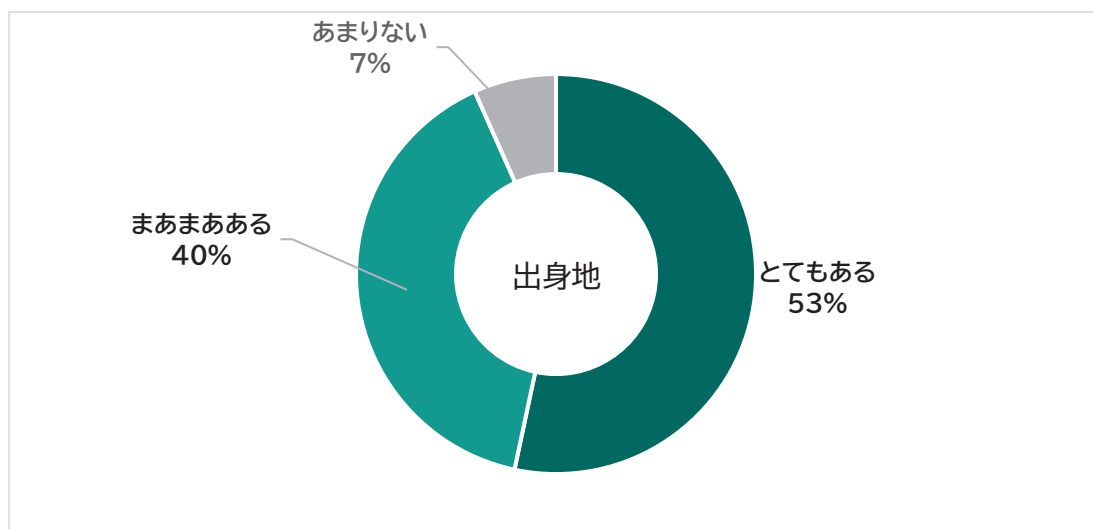
図3-25 「ふるさと」として思い浮かべる場所はどこか n=72



データ：大人アンケート

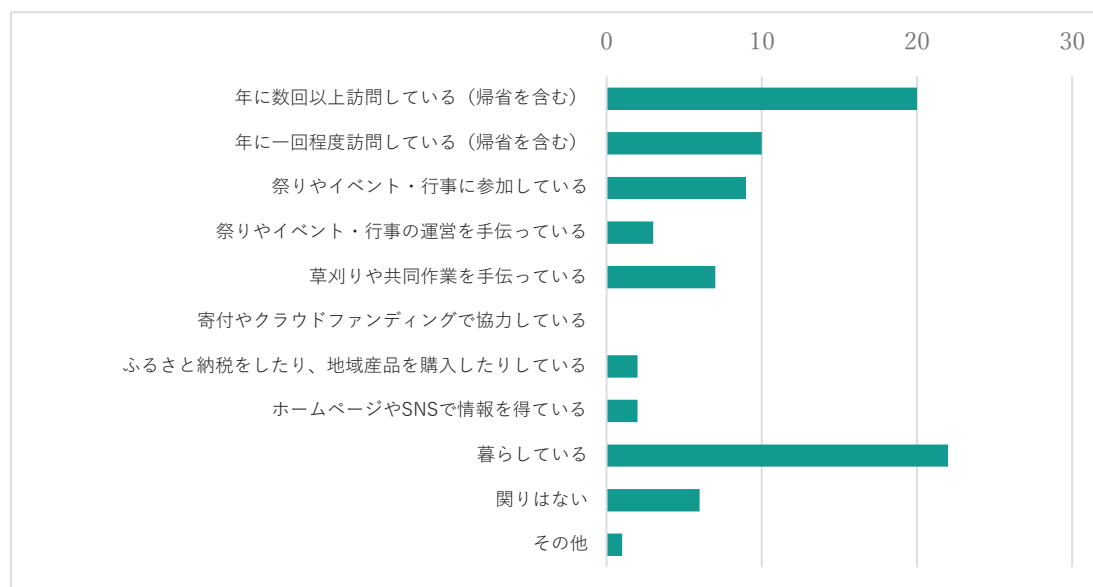
「『ふるさと』への愛着があるか」について、出身地の場合と出身地以外の場合を比較すると、結果はおおよそ同様であり、愛着が「とてもある」が5割、「まあまあある」が4割であった（図3-26、28）。また、「現在『ふるさと』とどのような関係を持っているか」について、出身地の場合と出身地以外の場合を比較すると、出身地の場合は「暮らしている」が最も多く、出身地以外の場合は「年に数回以上訪問している」が最も多く、「ホームページやSNSで情報を得ている」という回答が多い（図3-27、29）。

図3-26 「ふるさと」（出身地）への愛着はあるか n=72



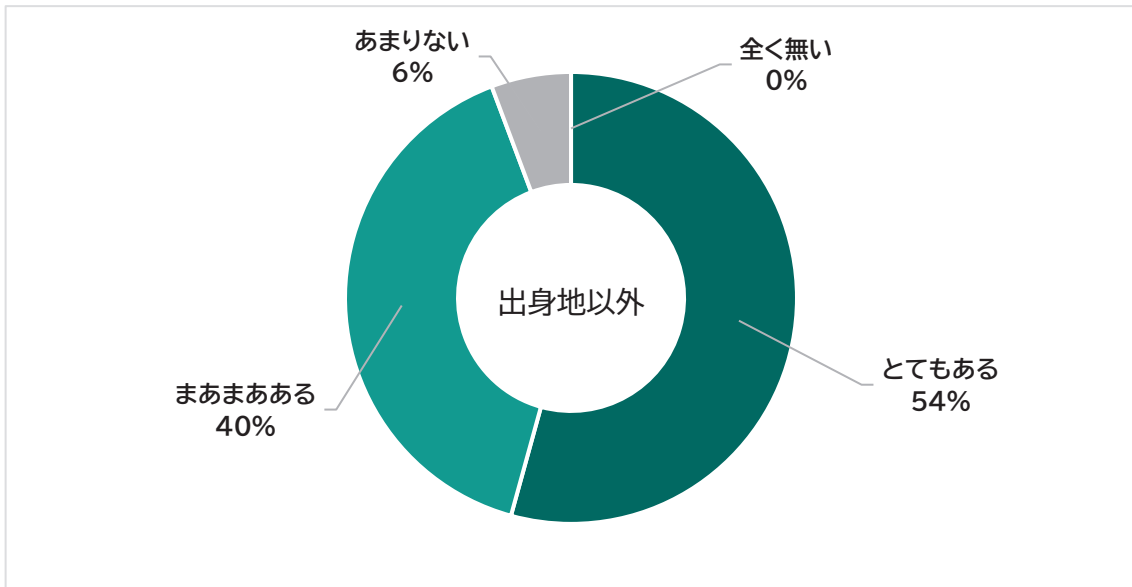
データ：大人アンケート

図3-27 現在「ふるさと」（出身地）とどのような関係を持っているか n=72



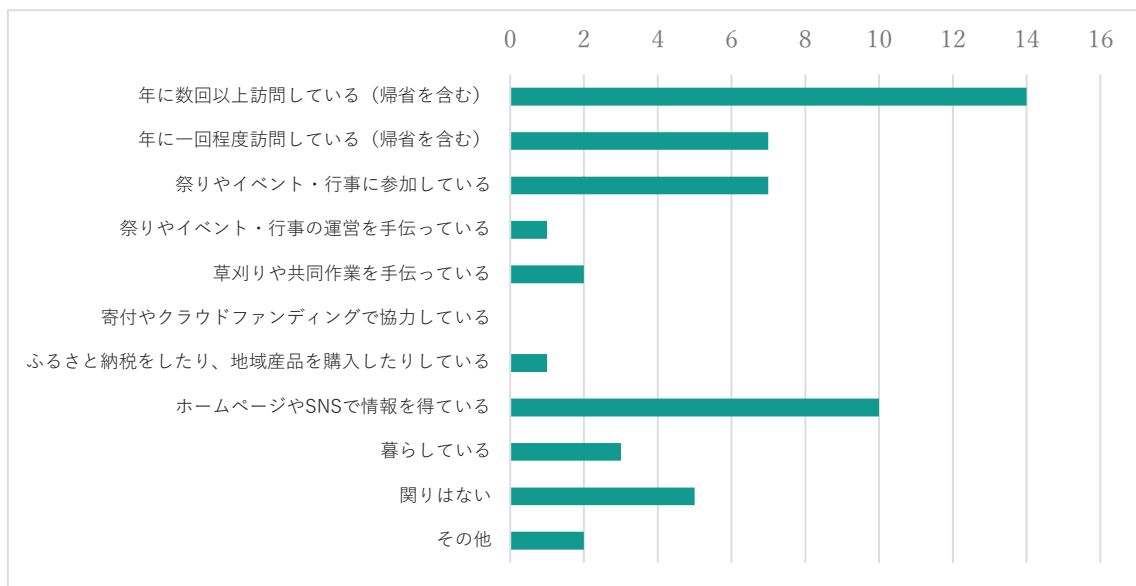
データ：大人アンケート

図3-28 「ふるさと」(出身地以外)への愛着はあるか n=72



データ：大人アンケート

図3-29 「ふるさと」(出身地以外)とどのような関係を持っているか n=72

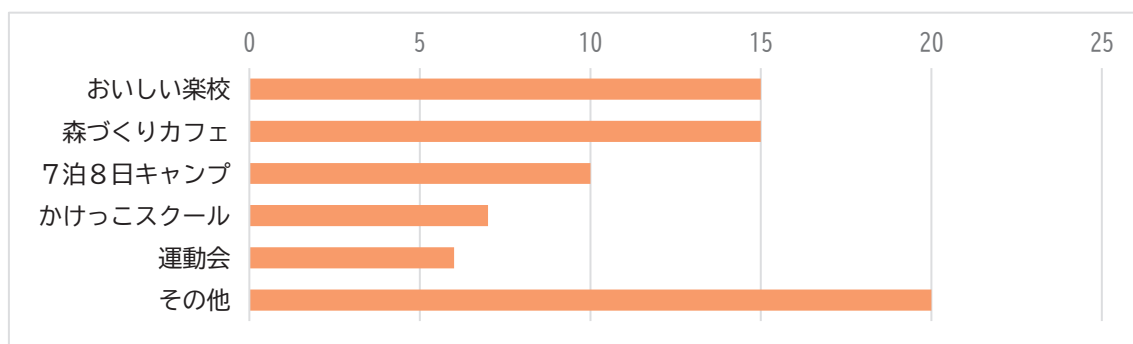


データ：大人アンケート

3節 ほしはら山のがっこうの活動に参加している子ども（小学生以下）の回答

小学生以下の方を対象にしたアンケート調査の結果について、3章の1節2節で掲載していないアンケート結果を以下に掲載する。図3-30は「参加したことがある活動」、図3-31は「とくにおもしろかった・よく覚えている活動」であり、その具体的な内容について自由記述してもらった。また、これからほしはらでやってみたいことを自由記述してもらった。ほしはらでの活動を通じて「成長を感じたことや知ったこと、思い出に残っていること」についての自由記述は表3-8に記した。

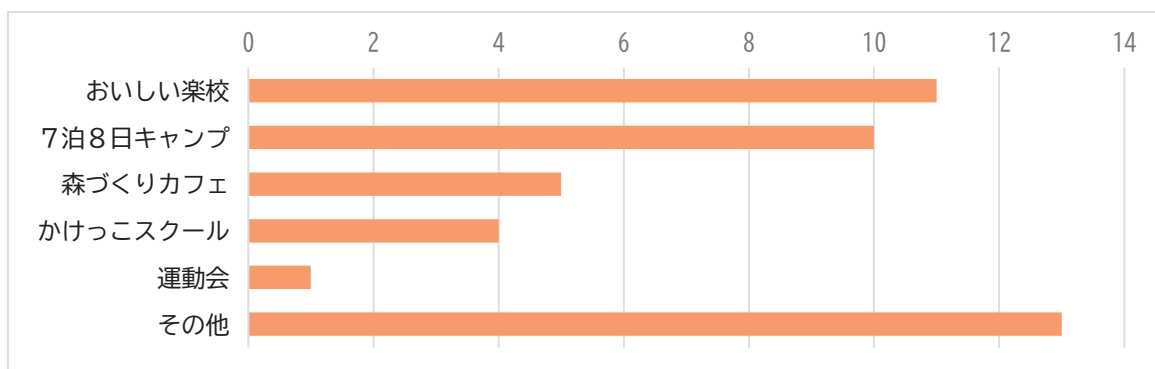
図3-30 参加したことがある活動 n=32（複数回答）



データ：子どもアンケート

注：その他は、森に遠足に行こう、防災子どもキャンプ、竹とり合戦、とんど交流、森のようちえん、年越しキャンプ

図3-31 とくにおもしろかった・よく覚えている活動 n=32（複数回答）



データ：子どもアンケート

注：その他は、森に遠足に行こう、防災子どもキャンプ、竹とり合戦、とんど交流、森のようちえん、年越しキャンプ

<その活動でとくにおもしろかったこと・おぼえていること>

バームクーヘンを作ったこと/友達がたくさんできたこと！！/森にある丸太から飛び移るブランコが楽しい/山の中でのゲーム/川遊び、森遊び、工作/ひものブランコがおもしろかった/コースをぐるぐる何週も走り回ったこと/つり、火起こし/そばを作ることが楽しかった/鬼ごっこが楽しかった！/みんなで遊んだこと/ハンモックで遊んだこと/美波羅川/作業が終わった後のおやつゼリー、クモが怖かった/田んぼで、なえを植えた事が、楽しかった/お米を刈るところ（刈るときに迷路を自分で作りながら刈ったこと/稲刈りが大変だったけど楽しくて面白かった/魚釣り、キャンプ in キャンプ、沢登り、メスティンでご飯作ったのが美味しかった、ジュニア祭り/基地キャンプ、吾妻山、蕎麦打ち/キャンプインキャンプ/7泊8日キャンプで川遊び/7泊8日の夏祭りと川遊びがとっても楽しかった/キャンプインキャンプ/7泊8日のキャンプインキャンプ/葉っぱのお茶作り（にが味が出ておいしくないかと思ったけど、意外とおいしかった。）/虫をさがしたり、観察しました。コオロギをさわられるようになって、嬉しかったです/こびとの家作り、田んぼのいもりとり、はんみょうとり、グミの実・アケビ・なつめとり、数珠玉つなぎ/山に登ったのが面白かった、稲刈りが楽しかった/かぶとむしをみつけた/カエルをいっぱい捕まえたこと。

<これから、ほしはらでやってみたいこと>

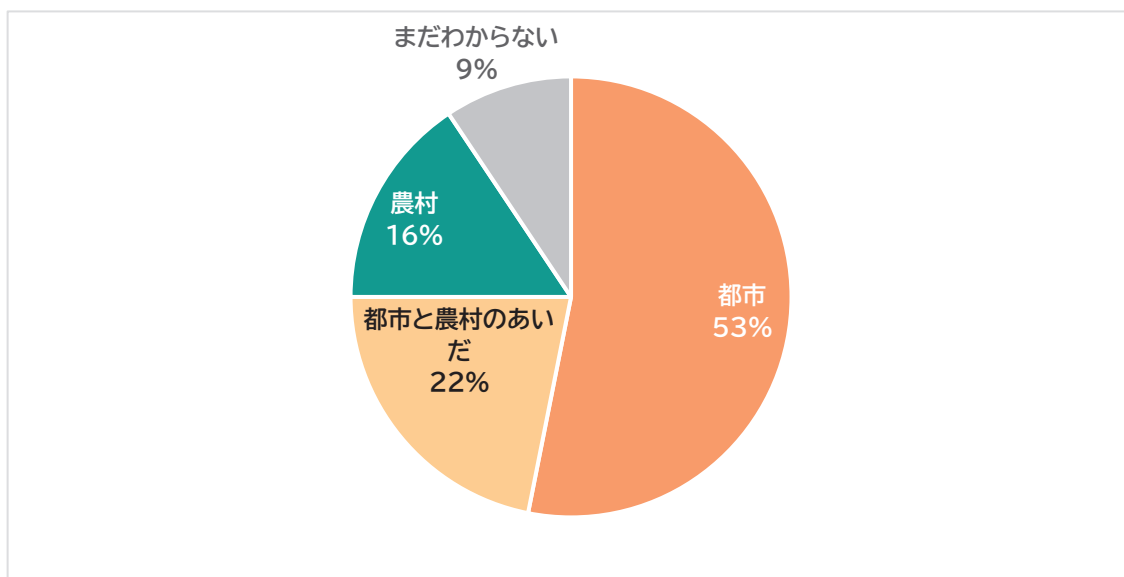
編み機/スイカ割・お祭り・花火・スポーツ大会/釣り/薪割り/校庭に遊具を作りたい/釣りやキャンプ、また焚き火をしたい/ツリーハウスを作る/自然で遊びたい/1日中、川遊び/ムササビを見る/魚釣り、10泊がしたい/年越しキャンプ/小学生だけの基地キャンプ/家族でキャンプしたい/森の整備、畑で何かを植えて育てたい/森の探検隊/釣りがもっとしたい/たくさん木の実を取りたい、たくさん食べたい、食べまくりたい/また稲刈りがしたいです/7泊8日のキャンプに参加してみたいです/森での遊具作り/キャンプや料理/もっとたくさんのメスティン料理を知って作りたい

表3-8 成長を感じたことや知ったこと、思い出に残っていること

カテゴリ	内容
思い出	段ボールの燻製が面白かった/工作できて楽しかった/トンボを取る名人になったこと/吉武の滝の沢登り/森のようちえんに行ったとき、水の滑り台したのを覚えてる/オンラインおしゃべり会で聞いた蜂のこと/しめ縄でリースを作ったこと/ほしはらに泊まれて楽しかった!/友達みんなでハンモックに乗って、遊んだことが思い出です/葉っぱでお茶を作ることが楽しかったです。とてもおいしかったから/7泊8日で帰ってからちょっと背が伸びたような気がしたこと(棚の5段に到達したから)/ムササビの家を作ったのが楽しかった/山登りのこと/粘菌のこと、きのこも楽しかった。森で遊ぶのが楽しかった(木の棒の上を歩いたこととか)/ハンモックの作り方が分かった/初めて作る料理とか、いろんな遊び/沢登りで先頭を歩いたこと/7泊8日で作った替え歌が思い出/森が楽しかったです。どんぐりをとって料理をするのが楽しかった/きのこのこと、流れ星を生まれて初めて見たこと、森へ遠足に行こうのお泊まりに参加者になれたこと
成長	仲間と協力するのが上手になった。稲刈りを経験して、自然の力を感しました/自然に対する理解が深まった/出来ることが増えた。沢登りが1回目のキャンプでは出来なかったけど2回目のキャンプでは最後まで行けたから成長したと思う。

「将来暮らしたい場所」については、「都市」という回答が最も多い(図3-32)。また、その理由についての自由記述を表3-9で整理した。理由については「農村」、「都市と農村のあいだ」、「まだわからない」の理由の自由記述が多いことから、農村での体験を経て具体的なイメージを持っていることが考えられる。

図 3 - 32 将来暮らしたい場所 n=32



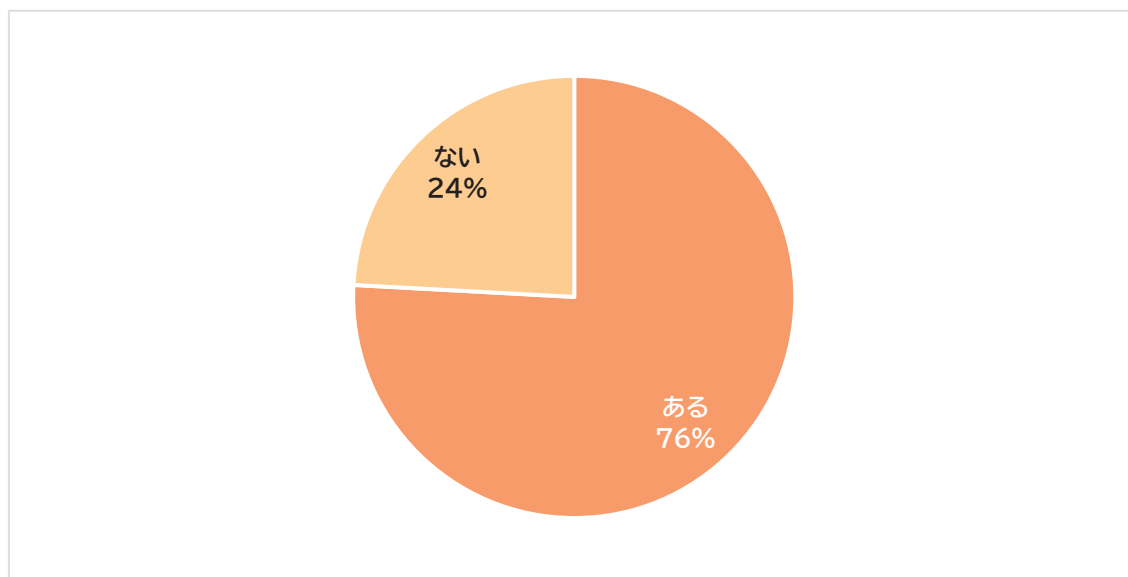
データ：子どもアンケート

表 3 - 9 将来暮らしたい場所の理由

将来暮らしたい場所	理由
都市	楽しそうだから/田舎よりいろいろたくさんあるから/いろいろなお店がたくさんあるから
都市と農村のあいだ	どちらも行けるから/農村と都市のバランスが大事だと思うから/今の尾道のようなところがいいから/森に気軽にいけて、買い物も楽に行けるから/お店にもすぐ行けて便利がいい。農村は自然がたくさんあっていいです/三次みたいな所に住みたいから。
農村	自分の子どもを自然の中でたっぷり育てたいから/自然がいっぱいあるから 川西に住む/自然を楽しみたいから/ゲームとかよりみんなで鬼ごっこか山登りとか川遊びとかしたいから
まだわからない	自分の会社の社長になると、動物や自然保護の仕事の2つがしたい/沖縄は都市かわからないから/あとで変わるかもしれないから/大人になってから決めるから/未来のことは、まだ考えてないから/都市は便利で好きだけど農村は自然が豊かで好きだから/開拓地に住みたいから/賑やかで人がたくさんいるところもいいな。自然がたくさんあるところもいいな。

「『ふるさと』とを感じる場所」の有無は、「ある」が約8割で（図3-33）、「『ふるさと』はどんなところだと思うか」についての自由記述を、表3-10に整理した。場所・雰囲気・自然に関連する記述があることが特徴的である。

図3-33 「ふるさと」と感じる場所の有無 n=32



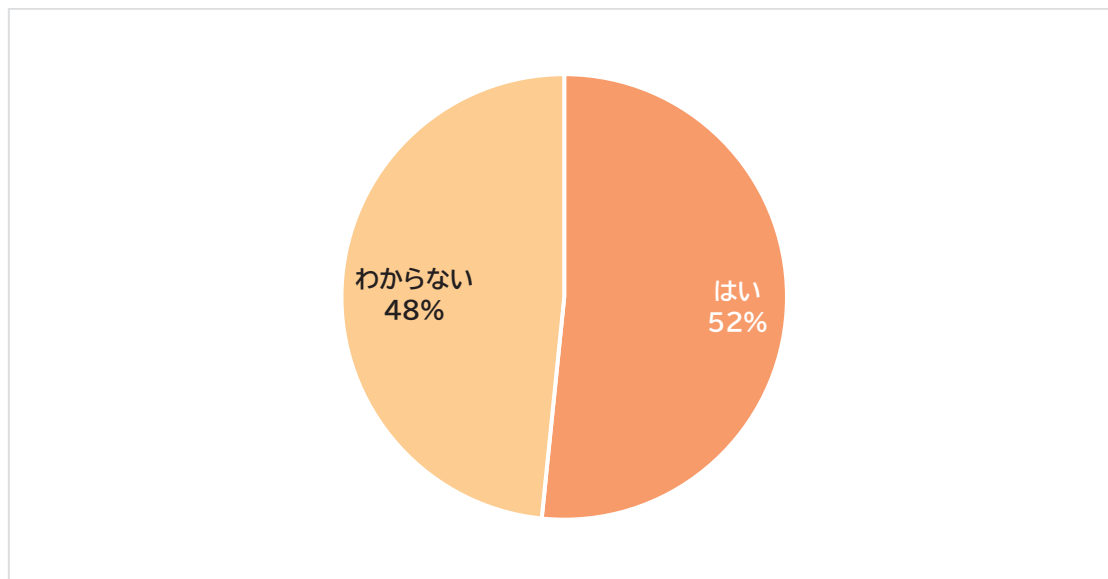
データ：子どもアンケート

表3-10 「ふるさと」はどんなところだと思うか（子ども）

「ふるさと」と感じる場所の有無	「ふるさと」はどんなところか
ある	<p><場所> おじいちゃん、おばあちゃんがいるところ/ばあちゃんち/住んでいる家/ 府中市/おばあちゃん家/江田島（海）</p> <p><雰囲気> 元気になるところ/懐かしい場所みたいな/久しぶりに来た場所・豊かなところ/行くと 温かい気持ちになるところ/安心して暮らせて思い出に浸れる場所/帰れる場所/「帰りました」と言える場所</p> <p><自然> 自然がある/田んぼだらけ/自然がいっぱい自然と一緒に居られる場所/静かで思い切り遊べるところ/森の中/自然で、豊かなところ/自然がいっぱいでいいところ</p>
ない	<p>生まれたところ/地元/自分が育った場所/ふるさとしてなに？/まだわからない/長年住んだところ/生まれた頃に住んでいた所</p>

「これまでの自然体験があなた自身の考え方や生き方、暮らし方に影響を与えたと思いますか」については、はいと回答している者とわからないと回答している者が約半数ずつで、いいえはいなかった。理由について自由記述で回答してもらったところ、はいと答えた理由には、自然を好きになった、大事にしようと思ったという回答がみられる（図3-34）。

図 3-34 自然体験が考え方や生き方、暮らし方に影響を与えたと思いますか。 n=32



データ：子どもアンケート

<はいと答えた理由>

森の中で思いっきり遊ぶことがそれまでなかったから/しぜんのが知れるから/森で遊ぶのが楽しいから/自然のことにもっと興味をもったから/自然を大事にしようという気持ちが強くなった気がするから/わからない。なんとなく。/いもりを家で飼っていてかわいいなと思う、へびも飼おうと思うようになったから/危ない生き物危なくない生き物が分かることがあるので/自然の中で遊んだから、自然がもっと好きになって、遊び方が分かった/山登りの体験を通して、自分でいろいろ考えたりする。自然を守らないといけない/年上の人と話ができるようになった/自由だから/自分で米を炊けるようになった。

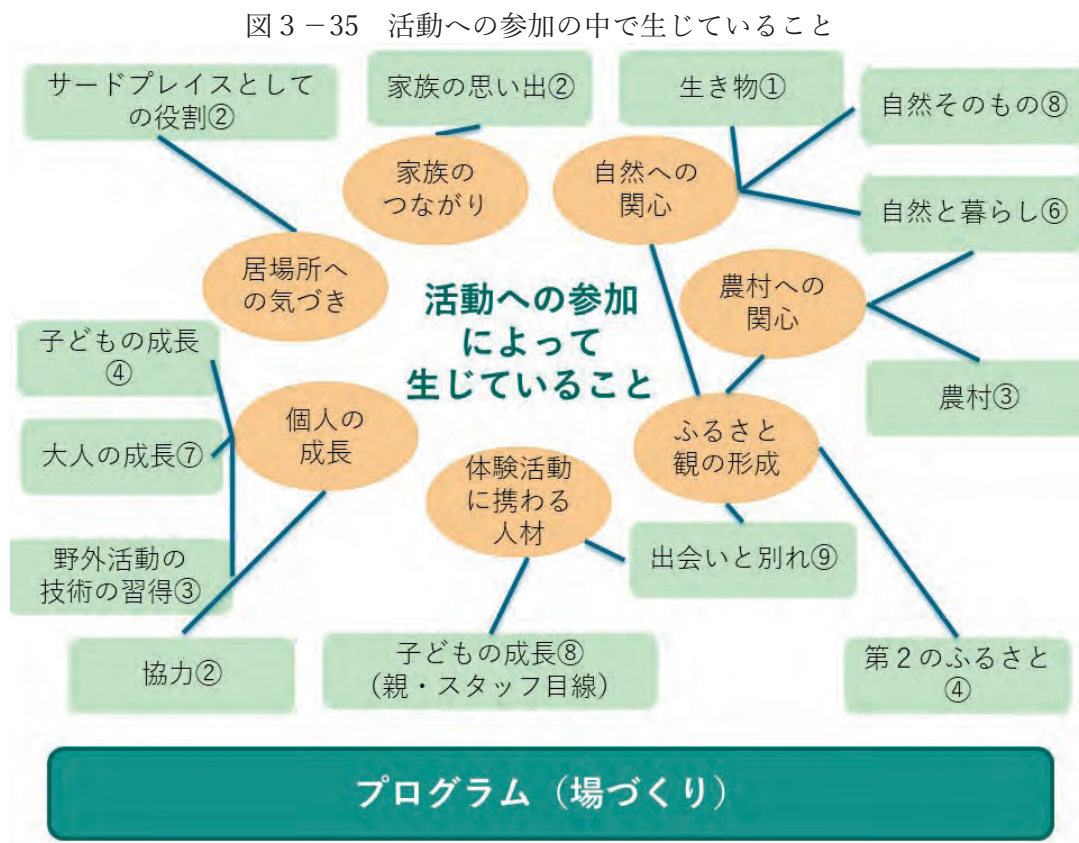
<わからないと答えた理由>

よくわからない/まだ将来のことはわかりません。自然もゲームも好きです。/分からないから/それを生かしたことはないから

4節 考察

4-1. ほしはら山のがっこうの活動への参加によって生じていること

表3-4のほしはらでの体験から成長・影響を受けたことについて、キーワードに分類した(図3-35)。プログラム(場づくり)をベースに、自然への関心、農村への関心、「ふるさと」観の形成、体験活動に携わる人材の育成、参加者個人の成長、居場所への気づき、家族のつながりといった事柄が生じていると考えられる。特に、暮らしや農村への関心にもつながっていること、子どものみならず大人の成長にもつながっていることは、ほしはらの活動における効果の一つの特徴であるといえる。



注：○の数字は、関連する文章の頻出数を示す。

4-2. 地域との関わり

体験地域との関わりについては、「地域の産品を購入したり、食文化を楽しみたい」「地域の祭りやイベント・行事に参加したい」など関わりを希望している者が多い。したがって、

ほしはらの活動や体験地域に関心のある方々と今後どのように交流やつながりを継続的に作っていくか検討することは重要であり、様々な関わり方の選択肢を用意しておくことが必要である（具体的には、地域の行事に関する情報発信、特産品の販売など）。また、多様な人材と地域をつなげる役割も重要であると考えられる。

4-3. 「ふるさと」観

「ふるさと」とはどのようなところか、その見方や捉え方を考察した。

回答者にとっての「ふるさと」は「出身地以外」と捉えている回答が、「出身地と出身地以外の両方」と「出身地以外」を合わせると、約半数あった（図3-25）。出身地以外として思い浮かべる場所にほしはらがあるかどうかは今回の調査では読み取ることができないが、現在全国各地に居住している参加者が、出身地以外の「ふるさと」観を持って生活をしている。

小学生以下の子どもを対象にした「ふるさとはどんなところだと思いますか」の回答には、思い浮かべる場所として、自然に関する内容のほかに、「元気になるところ」「久しぶりに来た場所・豊かなところ」「行くと温かい気持ちになるところ」「安心して暮らせて思い出に浸れる場所」「“帰りました”と言える場所」といったように、その場所から得られる気持ちやつながり感が表されており、原体験を通した「ふるさと」観が育まれていることを感じ取れることも特徴的である。

ほしはらの活動は、自然への関心や知識、野外活動に必要な技術の習得だけでなく、農村での暮らしへの関心や「ふるさと」観の形成にもつながっている。

それは、上田地域または全国の「ふるさと」地域の、いわゆる関係人口のような存在を生み出すことに寄与していると考えられる。担い手不足が進む中で、「ふるさと」地域の活動を様々な関わりによって支えるサポーターになりうる重要な存在と考える。

イラスト 子どもが思い浮かべる「ふるさと」の姿



4 章

インタビュー調査結果から
みえたこと

4章 インタビュー調査結果からみえたこと

1節 11人の参加者のケース分析

1-1. 調査の方法、対象者の概要

20年間の自然体験と交流が一人一人の人生にもたらした影響を明らかにするため、アンケート調査①の中で、インタビュー調査に協力すると回答された方で、活動時の立場が小学生参加者5名、大学生ボランティア1名、親子参加の親5名の計11名（表4-1）を対象に当時の経験とその後の人生への影響についての追跡調査を行った。ほしはらの活動で印象に残っていること、現在の生活や仕事、自然や環境への思い、自身の成長や変化といった質問を大まかに決め、1～2時間程度オンライン会議システムでインタビューした。一人一人の語りから、自然体験が長期的に人生にどのような影響をもたらしているか、また参加者が求める体験の場について、特に「ふるさと」の自然や文化を未来につなぐ人づくりの視点から分析する。

1-2. 分析方法

ICレコーダーに録音した音声ファイルをテキストに変換した。テキストファイルから育った環境、ほしはらに来るようになったきっかけ、印象に残っていること、日常的に思い出すこと、ほしはらでの成長や変化、ほしはらはどんな場か、自然や農村・環境のこと、子育て・子どもが育つ環境、現在の生活や仕事についての9項目を抽出し、ストーリー記録として整理した。次に11人の参加者の語りの傾向を把握するために、テーマをコードとして付与し、サブカテゴリーを付け分類した。なお、インタビュー対象は項目ごとに順に語っておらず、まとめて語った者もあり、また語っていない項目がある者もある。整理したストーリー記録には、11人それぞれの人生や考え方の語りの中で得られる気づきも多いため巻末の資料編をぜひ一読いただきたい。

表4-1 インタビュー調査の対象者

No.	ニックネーム	現在	性別	初めて参加した時の立場（期間）	出身-現在 （移住）
1	社会人Aさん	20歳代	女	小学生参加者（2003-07・2014-16）	島-都市
2	社会人Bさん	20歳代	男	小学生参加者（2005-12）	都市-都市
3	大学生Cさん	20歳代	女	小学生参加者（2008-14）	都市-中間
4	高校生Dさん	10歳代	女	小学生参加者（2015-現在）	都市-（同）
5	中学生Eさん	10歳代	男	小学生参加者（2018-19）	都市-（同）
6	学ボラFさん	30歳代	女	大学生ボランティア（2010-現在）	農村-都市
7	母親Kさん	50歳代	女	親子参加の親（2008-12）	農村-都市
8	父親Lさん	50歳代	男	親子参加の親ほか（2009-現在）	農村-都市
9	母親Mさん	50歳代	女	親子参加の親（2013-16）	中間-都市
10	母親Nさん	40歳代	女	親子参加の親（2016-現在）	都市-都市
11	母親Oさん	40歳代	女	親子参加の親（2021）	農村-中間

1-3. インタビューから抽出した9つの項目と考察

(1) 項目ごとの考察

表4-2 <育った環境>

回答者	サブカテゴリー	コード	具体的な回答
社会人Bさん	都市で育った	都市で育った	マンションとかビルとか住宅街とかばっかり見て育った。セミ採りはマンションの下の木でやった。（※どんな場か）
大学生Cさん		都市で育った	極端なところにいた。三越ダッシュで10秒だった。人が住めないような場所に無理やり住んでいた。クラブの音楽が明け方まで鳴っている中で寝ていた。ほしはらも非日常だし、実家も今思うと非日常（極端な都市）だと思う。どちらが性に合っているかと考えると、今もほしはらが恋しくなる。
中学生Eさん		都市で育った	大阪に住んでいる。 お母さんの実家（祖父母の家）が広島。
母親Nさん		都市で育った	団地の舗装道路でローラースケートをしていた。学校まで30～40分の通学路で寄り道をして、木いちごをつんだり、水たまりの氷を割ったり、川の渦に傘をつっこんだりしていたことを覚えている。
社会人Aさん	自然豊かなところで育った	自然豊かなところで育った	お母さんが潮干狩りやワカメ取り、釣りを教えてくれた。
学ボラFさん		自然豊かなところで育った	自然豊かなところで育った。実家には田んぼもある。川の水が減ったとか、山の土砂崩れとかも気づき、気になった。理

			科が好き。
母親Kさん		自然豊かなところで育った	鳥取の田舎に住んでいた。遊び場は家の外で近くには川や雑木林があるような、そういう取り残された住宅街の一角だった。レンゲやシロツメクサを摘んで首飾りを創ったり、秘密基地作ったり、かくれんぼしたり、近くの田んぼでワラを遊びのおもちゃにして遊んだりした。
父親Lさん		自然豊かなところで育った	大自然に囲まれて育った。山も川もあり、登ったり泳いだりできる。田舎で育った。
母親Mさん		転勤家族で、自然とふれあった思い出がある	横浜、青森、函館、東京と転勤家族だったが、オタマジャクシを取りに行ったり、周りに山や池があったり、蚕を育てたりして自然とふれあった思い出がある。冬は青森で雪遊びした思い出から雪景色が見たくなる。
母親Mさん		子ども時代の自然体験を子どもにもさせたい	子ども時代の自然の中での思い出が楽しかったから、わが子にもさせたいという思いがすごくあると思う。
母親Oさん		自然豊かなところで育った	田んぼがいっぱいのところ。家から幼稚園まで田んぼの間を歩いて通っていた。母が竹の筒に袋がついたものを作ってくれ、その中にイナゴを入れて幼稚園に持って行くと佃煮を作ってくれたみたい。
母親Nさん	祖父母の家が田舎にあった	祖父母の家が田舎にあったが、行くのはあまり好きではなかった	限界集落のような場所に祖父母の家があり、今もお米を作っている。カエルの合唱が耳の中に残っている。草が生えていて蛇や蚊が出るので、あまり行くのは好きではなかった。
母親Kさん		自然が好きで親の影響を受けて育った	両親は県外から鳥取の自然を求めて結婚と同時に移住した。家族で冬は大山にスキーに行き、夏は大山登山と海水浴に度々行っていた。
母親Kさん	親の影響	自然の楽しさと危険を親に教えられた	子ども時代から、自然の中には楽しいだけでなく、危険が潜んでいるという意識が常にある。山の大好きな父の知り合いが大山で遭難して亡くなった。折にふれて山の素晴らしさと命に関わる危険の話をしてくれていた。父と母が自然の楽しさとその厳しさを教えてくれた。
父親Lさん		子ども会会長の活動をする親の姿を見て育った	父が子ども会の会長をしていて、かっこいいなと思って親になった。仕事が終わった後、子どもたちが喜びそうなことを準備したり会合に出たりする姿をみていた。
母親Oさん		親が意識的に自然体験をさせてくれた	親が意識的に自分を「さくらさくらんぼ保育」を取り入れようとしている幼稚園に通わせたり、子どもキャンプに休みのたびに参加したりしていた。
学ボラFさん	3世代家族で育った	3世代家族で育った	父母、兄弟、祖父母の7人家族。

親世代からは、「自然豊かなところで育った」「子どもの時代、親に自然体験の機会を与えられた」経験を多く聞き取った。体験の思い出が、自然への愛着や「わが子に体験させたい」思いがつながっていることが語られている。

表4-3 <ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ>

回答者	サブカテゴリー	コード	具体的な回答
母親 K さん	知ったきっかけ	インターネットで検索した	ネットで田んぼ、田植えとかで検索した。
母親 M さん		情報誌で自然体験ができる施設を調べた	広島府の自然体験ができる施設やイベントを紹介する本に、ほしはらや7泊8日キャンプが載っていたので、電話で問い合わせた。
母親 N さん		知り合いに誘われた	息子が通っている森のようちえんの保護者がほしはらでスタッフをしていて、ほしはら山のがっこうで行われる「おもちゃフェスタ」のチラシをもらったのがきっかけ
母親 O さん		友だちから聞いた	友だちからほしはら山のがっこうのことは結構聞いていた。楽しかったと、すごい昔からパンフレットを見せてもらったりにしていた。
社会人 A さん	親にすすめられた	母親が自然体験に関心があり参加	海の話は母さんが教えてあげられるけど、山の話はわからんけんと言ってくれさせてくれるようになった。島の山は子どもが行くような感じではなく、畑作業やドライブ用のような感じ。イモリのお腹が赤いことなど想像したこともなかった。
社会人 B さん		母親が自然体験に関心があり参加	母親はそば打ちやおいしい楽校のような経験をさせたいというのが多分あった。自然とかそういうのが好きな人。冷凍食品は使わず、玄米や雑穀米などで料理をする健康志向がある。
大学生 C さん		母親が自然体験に関心があり参加	母親は、子どもを自然で遊ばせようという意識が強く、ほしはらの前には他の場所に連れて行って来ていた。他にも北海道の農場で一週間過ごす体験に参加した。
大学生 C さん		母親が制限の少ないプログラムに魅力があって誘われた	母親が、決まったプログラムに沿って制限されるのは苦痛だったので、ほしはらを見つけてきた。
中学生 E さん		父親に教えてもらって参加	こんなんどう？と言われて、一回行ってみたいと思った。
母親 K さん	わが子に体験させたい	わが子に自然体験をさせたい	自然体験ができる場を設定しないと出来ないと感じていたので、自分が知っていたから。
母親 K さん		わが子に田畑での自然遊びをさせたい	子ども時代に遊んだように、わが子に田んぼや畑、あぜ道で体験させてやりたいと思ったが、夫の通勤先で子育てをするにあたって周辺の田畑は私有地なので入れないことにぼう然とした。入っていい場所があると行きやすい。
父親 L さん		わが子に普段住んでいる所とは違う世界観を感じてほしい	わが子に、普段住んでいる所とは違う、広い世界観を感じてもらいたいと思って連れて行った。
母親 N さん		わが子に自然体験をさせたい	普段、都市部にいて自然を感じながら遊べないので、わが子に自然体験させたかった。大人になったときにふっと思い出してくれたら嬉しいと思った。
学ボラ	農村への関心	大学の援農サークル	大学の援農サークルに入っていたから、スタッフ参加でほし

Fさん		ルでスタッフ参加	はらに来た。
母親Kさん		農村で地の人に出会える体験がしたい	作木の坂根さんの農家民宿やほしはら山のがっこうのように、地の人やそこで生活している人がいるところに行きたい。
父親Lさん		中山間地域研究の為	労働組合の役員をしており、自治研の若手リーダー養成である「自治研担い手講座」のコーディネーターとして来た。地域の課題や未来を自分なりに考えて仕事に活かすため、若手の職員と学習の為に来て、都市農村交流キャンプの企画実施を行った。
父親Lさん		おもてなしではなく、一緒にやる都市農村交流のスタイル	都市農村交流でよくあるのは「おもてなし」として準備万端に整えてあることだが、ほしはら山のがっこうの今に続くスタイルは、一緒にやること。そこで得られるものがある。みんなで頑張っ、ひとりじゃできないことが実現していくことを実感できる。
高校生Dさん	家族の影響	兄弟が楽しそうに行っている姿を見て参加	兄が7泊キャンプに行って、めっちゃ楽しいと言っていたから。
母親Kさん		自分も親に自然体験できる場所に連れて行ってもらっていた	自分が親にしてもらったように、わが子にも自然体験ができる場所に連れて行くのが普通のことと捉えている。
社会人Bさん	また行きたいと思った	人とのつながりが魅力でまた行きたいと思った	また行きたいと思ったのは、いろいろな人との出会いがあって、大学生のスタッフさんとかも、また来年来てねと言ってくれた。体験もだが、人とのつながりが一番大きかった。
中学生Eさん		良い思い出が出来たのでまた行きたいと思った	良い思い出も作れたから、もう一回行きたいと思った。
母親Mさん		初めて行った時に楽しく、年間行事に参加するようになった	山菜摘みのイベントが終わった後に裏山を案内してもらい、食べられる草花を教えてもらって楽しかった。田植えや年間行事があり、車でも行きやすく、続いて行くようになった。

活動を知ったきっかけには、親（母親）がインターネットや情報誌、森のようちえんなどの類似活動からのつながり、または口コミで、子どもが自然体験できる場所を探している様子が語られた。

また親（特に母親）が子どもに参加をすすめているケースが多く聞かれた。

親世代は自然体験の場に、教育的な要素よりも、自身が子ども時代に身近な田んぼや畑・あぜ道などの自然で自由に遊んだ思い出を、わが子に体験させられる場所を求めていることが読み取れた。例えば母親Nさんの「普段、都市部にいて自然を感じながら遊べないで自然体験させたかった」という声のように、遊びの中で自然を感じて育てて欲しいという思いを感じた。

さらに母親Kさんは、自然体験の機会が子育ての大切な要素のひとつであるという認識を親から引き継いでおり、「自分が親にしてもらったようにわが子も自然体験ができる場所

に連れていく」という語りは興味深い。

農村への関心では「援農サークル」「農家民宿」「中山間地域での研修」「創る過程に関わる」といった都市と農村をつなぐ主体的な関わりのキーワードが得られた。

ほしはらにまた来たいと思ったきっかけは、社会人 B さんの「体験もだが、人とのつながりが一番大きかった」という語りが印象的である。

表 4-4 <ほしはらの活動で印象に残っていること>

回答者	サブカテゴリー	コード	具体的な回答
父親 L さん	プロセス	試行錯誤	楽しかったことが多すぎて印象に残っていることを選べないくらいある。田植え、稲刈り、ザリガニ釣り、キャンプ、野草のイベント…。野草料理をいろいろ試して、美味しくなかったのも面白かった。こんなはずでは…という体験から進歩していく過程にやりがいがある。
学ボラ F さん	感動	感動	キャンプファイヤー、歌、家からの手紙を読んでいる子どもの姿を見て感動した。
学ボラ F さん	企画力	企画力	ほしはら離れて、あいさんの企画力がすごいと思った。子どもがいたら連れていきたい。
学ボラ F さん	技術	開拓の技術	山づくり、開拓、ちいへの木登り、ひもの使い方
社会人 A さん	原体験	山のイメージは山のがっこう	山のイメージは、イコール山のがっこうみたいな感じがあるかもしれない。今気づいた。
社会人 A さん		山の地域体験	あいあいん家の近くの田んぼに、段の上から凧をあげられる場所があって、ちょっとずるができるので、あそこであげるのが好きだった。 あいあいん家にミサと行って、切り絵をして、実家に飾っている。 学校が建て替わる前のポットトイレが底が全部見えて怖すぎた。
大学生 C さん		命をいただく体験	キャンプインキャンプでウサギの捌き方をやってみたくて地域のの人に話したら、絞めてくださって、叶えてもらった。
大学生 C さん	自由	自由な遊び	お茶摘みのプログラムの時に、みんながお茶摘みしたりお茶をもんだりしているのに、私たちだけ秘密基地みたいなのを作って自由に遊んだのを覚えている。
社会人 A さん	出合い	地域の人との出合い	西川のおばあちゃんの柏餅が本当に美味しくて。民泊以外で行った時も、おばあちゃんがわざわざ柏餅を作って持たせてくれた。
社会人 A さん		スタッフとの出合い 地域の人との出合い	しめ縄づくりはクロスケットとたーちゃんが教えてくれた。
社会人 B さん		スタッフとの出合い	はしもっちゃんや今西さんご夫婦がよく印象に残っている。
社会人		出合いと別れ	楽しかった記憶しかない。もう終わりかと、8日目が来て寂

Bさん			しかった。帰らないといけない。最終日に交換した色紙にもメッセージをいっぱい書いてもらった。
母親Mさん		出会いと別れ	7泊8日キャンプで娘が影響を受け、お世話になったモヤさんが亡くなったこと
母親Oさん		スタッフとの出会い	わが子は、ふくろう先生と虫を取って観察した活動が楽しかったそう。先生と名まえが付くけれど一緒に遊ぶのが楽しかったと言っている。
大学生Cさん	人間関係	安心感	年を重ねて安心感とか甘えとか信頼感があった。
中学生Eさん		緊張	普段関西弁を使っているから、色々あって緊張した。
社会人Bさん	冒険	沢のぼり キャンプインキャンプ	川登り、チームでテントを張って岡田山山頂で飯盒炊爨をしたキャンプインキャンプ。ご飯も作ったことないような頃だったが、すごく楽しかった記憶がある。
中学生Eさん		キャンプインキャンプ	キャンプインキャンプの時に、のこぎりで指を切った。なんか巻いていたら治った。
学ボラFさん		キャンプインキャンプ	キャンプインキャンプで野宿した。芝生で寝たのを覚えている。人生初めて。貴重な経験だった。

印象に残っていることは多様でありながらそれぞれが鮮明に場面を語っている。具体的な地域の人やスタッフの姿、また具体的な地域の場所が登場しており、五感を通した豊かな体験や温もりのある出会いの記憶が、手触り感のある思い出となって、一人一人の中に長期的に生きていることが読み取れる。

表4-5 <日常的に思い出すことがあるか>

回答者	サブカテゴリー	コード	具体的な回答
社会人Bさん	懐かしさ	どうしているか気になる	山のがっこうのHPも何回か見た。母親も会いたい、どうしているかなと言っていた。
大学生Cさん		夢に見る	一ヶ月に一回は夢に見ていた。今でも夢に見る。周りの景色、人、洗濯しているところ、あいあいの歌、自由時間、遊んでいる、渡り廊下、田んぼ、体育館をうろうろしている感じ。
高校生Dさん		ふとした時に思い出す	夏が来ると、こういうこと楽しかったなとか、この子元気にしているかなと思いつく。
母親Mさん		懐かしい	度々親子で懐かしく話をすることがある。息子はドライブでほしはらまで行ったことがある。ラジオにほしはらとつながりのある作木の坂根さん（民宿）が出ると懐かしくなる。
母親Mさん		忘れられない思い出	7泊8日キャンプで平田観光農園に1泊したときに、トイレから豚が出てきた思い出は娘にとって強烈で、今でも笑いながら思い出話で語ることがある。
社会人Aさん	人生の土台	自分の一部とせずとある	私にとっては一部、どこかに多分ずっとあるもの。結構大事な重要な時期を過ごしている感じがあるから。名言シリーズみたいなものがある。
社会人Aさん		ありのままの自分を受け入れる経験	人の話を聞いていない悩みを打ち明けたら、困ってないじゃんと言われて、困っていなかったら大丈夫と思うようになった。

			た。
社会人 Aさん		人を大切にすることを学んだ	すごく好きなスタッフが帰って、他のスタッフが班つきになったときに「あっちゃんがよかった」と言ったことを、「今のは良くない」と本気で怒らせ、やっちゃいけないことといいことの線引きを学んだ。すごい印象的な出来事だった。何やってもいいけど、人のことを傷つけてはいけないという線引きと解釈した。
学ボラ Fさん	初めての体験	初めての体験	手植えや川遊び、沢登りはほしはらが初めてだった。写真見ながらゆっくりしゃべりたい。濃い4年間。
学ボラ Fさん	日常とつながっている	日常に開拓体験を活かしている	私の日常って休耕田の開拓だから。

日常的に懐かしい思い出が長期にわたって蘇っていること、また、物の捉え方など人生に影響を与えられていることが語られた。

大学生 Cさんは何度も「夢に見る」など強く懐かしんでいる様子を語った。社会人 Aさん（当時小学生）の「私にとっては一部、どこか多分ずっとあるもの、結構大事な重要な時期を過ごしている感じがある」という語りからは、体験からの気づきが生き方に影響し、人生の土台となっていることを感じ取れる。

また学ボラ Fさんは大学時代の体験が、日常での休耕田の開拓につながっており、人生のストーリーの中に体験が活かしていることを感じ取れる。

表4-6 <成長や変化について>

回答者	サブカテゴリー	コード	具体的な回答
母親 Nさん	キャンプで学んだ技術を生かした	キャンプで学んだことを他のキャンプで実践できた	長男はこの夏の7泊8日キャンプで得たものを森のようちえんのキャンプで発揮して、先を見通した行動をしたり、ベグ打ちや火の当番など即戦力になっていることを実感できた。
母親 Nさん		キャンプで学んだことを家族に教えてくれた	キャンプで習った料理を一通り家に帰って作って見せてくれた。
母親 Nさん	自信がついた	自己表現に自信がついた	キャンプ中にテレビ取材を受けて自信が付いたようで、他の場面でのインタビューや参観日の発表でも堂々と表現をしていた。
父親 Lさん	たくましくなった	7泊8日キャンプでわが子がたくましくなった	わが子が7泊8日キャンプに2年行った。本人も覚えているし、私もわが子がたくましくなったと思う。帰ってきたら何か変わったというのがある。
大学生 Cさん	経験を積んで積極的になった	経験を生かしていることにチャレンジできた	一人暮らしを始めて、なんでもしていいとなったときに、自分からクリエイティブなところに行ってみようとか、人と関わってみようとか、子どもと過ごすことを選んだりした。ほしはらで過ごさないとそういう意識は芽生えなかったと、中学や高校の同級生を見て思っている。
学ボラ Fさん		経験を積んで、積極的になった	知らない所に一人で飛び込むような子じゃなかった。高校までは普通の子だった。サークルで先輩方といろんなところに行き、出会いの楽しさを知り、いろんな経験をするのが楽しいし面白いし、経験を積んで勉強にもなって性格が変わっ

			たのかもしれない。 電話対応などもサークルで経験して社会人になっても生きている。
大学生 Cさん	苦手意識がなくなった	経験を重ねて、子どもと関わることや虫とふれあうことが苦手でなくなった	中学・高校の同級生は、みんな子ども嫌いだっただ。虫に対して、みんな結構キヤーキヤーしたりしていた。ほしはらでの経験は学校では私一人だけのものと思って生活していた。
中学生 Eさん		虫とふれあって苦手でなくなる	今まで虫が苦手だったが、虫とのふれあいを通して命みたいなことを考えるようになった。
母親Nさん	だれとでも仲良くなれる	だれとでもすぐに友達になれるようになった	7泊8日キャンプで、だれとでもすぐに友達になれるようになった。
社会人 Bさん	新しい環境に飛び込む勇氣	初めて会う仲間と協力して過ごせる	スタッフや仲間と何か物事をやること。あそこで集まった初めましての人たちと、何か協力して、キャンプのご飯を作ったりした経験が、親元から離れて島に行き、知らないところで生活する勇氣につながった。分け隔てなく喋れるようになった。ありがたい経験をさせてもらった。
高校生 Dさん		人見知りでなくなった	初対面の人に自分から話しかけられるようになった。ほしはらでは話しやすい。
母親Mさん	親と子が離れて過ごす経験	7泊8日キャンプで親から離れて過ごす不安を乗り越え、楽しい思い出をつくって成長した	7泊8日キャンプにわが子を参加させるのは覚悟がいった。送って行って子どもを置いていくときのわが子の心配そうな表情は忘れられない。でも迎えに行った時に車の中でキャンプのことを面白可笑しく休みなく聞かせてくれ、こういう風に変わるんだと思った。
母親Kさん	親以外の人の影響を受けて成長した	親以外の人の影響を受けて成長した	親の影響だけでなく、いろんな人の姿や親とは違う考え方、日常とは違う場で生きている人たちとのふれあい得られるものは大きい。
母親Kさん	どんな場でも楽しめる	どんな場でも楽しめる	娘が、その時に会った人、そこにあるもので楽しむことや遊ぶこと、そこにある空間を楽しむことが出来るようになった。
母親Kさん		完璧でなくてもよい	コミュニケーションは完璧でなくてよく、思った通りの展開にならなくても許される感覚を持つことができた。
母親Nさん	子育てが変わった	わが子のタイミングを待てるようになった	わが子にせつかく体験できる場に来ているからもっと体験させたいと思っていたが、森のようちえんの子どもに教えられ、やりたい時にやればいいと見守れるようになり、子育てが変わった。
大学生 Cさん	人と関わるのが好き	人と関わるのが好きになった	私たちの面倒を見てくれていたお兄さんお姉さんを見て、自分も中学生になったときに班長を任されて面倒を見るようになった。初めて参加した夜、泣いていた自分が、泣いている子を寝かしつけてあげたりする中で、人と関わることで自分がすごく好きになった。教員免許を取った。塾で小学生から高校生まで教えている。人と関わることにに対して積極的になった。
高校生		面倒を見る立場	スタッフは大変。面倒をみなくてはいけない。でもやりた

Dさん			い。やりがいがある。みんなかわいい。
中学生 Eさん	人の役に立ちたいと思っている	命の大切さに気づき、人の役に立ちたいと思った	虫とのふれあいを通して、命みたいなことを考えるようになって、人を幸せにするにはどうしたらいいか、人の役に立てる人になりたい、将来は警察官系みたいな人になりたいという思いにつながった。
大学生 Cさん	受容される経験	受容される経験をした	楽園みたいな場所。楽しかった。自分の感情をどれだけ出しても許されるというか、抑圧されなかった。怒っても泣いても、あいあいとか他の人たちが話を聞いたり、そっとしてくれたりしたことで、育ててもらった。
大学生 Cさん	アイデンティティの確立	ほしはらと学校の違いで苦勞した	中学3年生まではほしはらにも行けたから、学校の友だちに合わせるよりも我を出したくて、すごく苦勞した。
社会人 Aさん	多様性のなかで 生きている	多様性を認め合う場づくりに関心を持った	今、学習支援塾みたいところの先生をしている。人を傷つけない限りはOKみたいな世界観が似ている。髪の色やネイルも自由で、授業のスタンスや内容も自由に任されている。発達特性のある子や不登校の子が対象。 キャンプの参加者の時のことですごく覚えているエピソードがある。集合場所から宿泊室になにかの荷物をみんなが取りに行った時、発達特性のある子が帰って来なかった時のこと。理由を聞くとその子が目の前の懐中電灯での遊びに夢中になった様子を楽しそうにあいあい自分が説明してくれた。大らかさというか、こっちに連れていこうとするのではなく、一緒に遊ぶのって楽しいなと思った。似たような雰囲気の中にいると、自分もそうありたいと思う。 キャンプは団体行動だが、たまに疲れたときに一人で違うことをやっても許された経験をした。みんなそれぞれ違う方向をみていたり、ちょっとずれていたりしてもOKという世界観を早い段階で知ることができたはよかった。大学のサークルや職場で生かせた。
社会人 Aさん		世代の違う人との交流が出来る	自分の田舎や山のがっこうで、子どもの頃からかなり年の離れた人と接する経験があり、大人になっても抵抗なく喋れる。最近ジムのおばちゃんたちにめちゃくちゃ可愛がられている。
大学生 Cさん		多様性を認め合う場づくりに関心を持った	ルールにはめないようになった。塾では勉強より先に生活習慣や勉強を嫌いにしないために楽しい話をしたり、好きなことを聞いたりしている。自分に関心をもって色々聞いてくれたことが嬉しかった体験があるから。
父親 Lさん		人との接し方が変わった	人との接し方が変わったような気がする。あの人はいい悪いではなく、いろんな人と出会い、いろんな経験を共有し、その人なりの考え方を素直に面白いと思えるようになった。

多岐にわたる個性的な成長や変化が語られた。それぞれが体験による成長や変化を自身の人生のストーリーの中に位置づけており、その記憶を持ち続けていることが興味深い。

特に、多様性を認め合うことなど、「人」との関わりに関心を持つきっかけとなっている語りが多くあった。

表4-7 <ほしはらはあなたにとってどんな場か>

回答者	サブカテゴリー	コード	具体的な回答
大学生 Cさん	主体性が発揮される場	インスピレーションを發揮できる場	めっちゃ楽しかった。作るのが好きだったが木工させてもらったり、山を散歩したり、自分の思ったように思ったところに行って、思ったことができるのがすごい楽しかった。作ることを自由にのびのびさせてもらえたのが一番良かった。段ボール基地づくりを自分の見たこともない広さで、なんでもあるものを使って、作れるのがすごく嬉しかった。これして遊びたい、ああして遊びたいというのは『やかまし村の子どもたち』とかを読んでいて、インスピレーションが爆発した。好きなだけやらせてくれる夢みたいな場所だった。
大学生 Cさん		自分が考えたように動く力を育てる場	家の周りは自然もそんなにないし、自由に遊びに行くのが難しい感じだったから、自分が考えたように動く力をすごく育ててもらったとっていて、それが楽しかった。
父親Lさん		ほどよく原始的なところが保たれていることで、人の数だけ自由な表現や遊びが生まれる場	将来、準備されているものが増えすぎる傾向が進まずいと思っている。ほどよい原始的なところを保ちつつ、自由なものを表現するような場所がいい。草がぼうぼうのほうが、人の手が入っていないから自由な表現ができる気がする。完成度が高まってしまうと、楽しみを見出せない。人の数だけ遊び方がある場を継続してほしい。
父親Lさん		親も自由に遊ぶことで、子どもたちも安心して自由に遊ぶ場	愛さんの言葉で印象に残っているのは、お父さんとお母さんが楽しんでくださいという言葉で、大事だと思っている。親が自由に遊び、喜ぶ姿を見せることで子どもたちも安心して自由に遊ぶことが出来るのではないかな。
父親Lさん		予定調和があまりない場	予定調和があまりない。一瞬一瞬がハブニング。大まかな時間設定はあるが、柔軟性があり、こっちの方がいいということが起きたら変更するようなおおらかさがある。
父親Lさん		マイペースでいられる場	それぞれがマイペースで、自分と違う考えは意見を聞き、気乗りしないときはそれぞれのスタンスで意思表示している気がする。
父親Lさん		スタッフが、一人一人の主体的な活動を大らかに見守っている場	スタッフは面倒見はいいが、お節介ではない。じっと遠くで見ているような人が多い。自分の言う通りやってくれるのが嬉しいのではなく、その人が次に何をするか、関心を持って接している。こうでなくてはいけないということがなく、大らか。
母親Nさん		スタッフが子どもを一人の人間として接している	スタッフが子どもを一人の人として扱っている姿を見て、自分はなかなか出来ないんで、すごいなと思っている。
母親Oさん		指図されない場	指図する人がいないので、のびのびできる。学校はなんでも命令される。赤ペンもって、ペンに持ち換えて、次はこれですよとか、時間で計られたりする。
社会人 Bさん		自然体験ができる場	自然が周りにないところで育ったので、初めての自然体験は山のがっこうだったと思う。マンションやビル、住宅街ばかり見て育っている子にしたら、すごい大きな自然体験。

高校生 Dさん		農業体験や自然体験ができる場	そばの種まきなどの作業は楽しい。でも沢登りは最初はずごく嫌いだ。一年目はやったことないしやりたくなかった。怖かった。泣きながら登った記憶がある。
中学生 Eさん		虫とふれあえる場	この辺（大阪）にはちっちゃい虫しかいない。ほしはらはカブトムシとふれあえるなど、虫が大量にいる。今まで虫は苦手だったが苦手じゃなくなった。
母親M さん		自然の中でいろいろな人と一緒にいろいろなことが出来る場	わが子に経験してほしいことを経験させてもらえると信頼していた。自然の中でいろいろな人と一緒に何かをしたり、椎茸の駒打ちをしたりなど、いろいろなことをさせてもらえる安心感ができた。
高校生 Dさん	また会いたい人 がいる場	また会いたい人がいる場	最初は全然馴染めなかった。人見知りで7泊キャンプの初めは5日間くらい誰とも話せなかったが、最後のほうでやっとみんなと話せるようになった。また会いたいと思った子がいいたから、小6から中2まで参加した。
学ボラ Fさん		子どもたちと会えるのが楽しみな場	ほしはらに行けば、この子どもたちと会えると、行事のある日にボランティアに行くのが大学時代楽しかった。
学ボラ Fさん		楽しい思い出と知り合いがいる心の拠り所	心の拠り所じゃないけど、そこに行けば楽しい思い出があるし、優しい知り合いがいる場所があるのはいい。
学ボラ Fさん		知り合いがいっぱいいるので地元感がある憩いの場	住むのは安心感ですよね。やりたいこと、困ったことがあったら聞ける人がいたり、誘ってくれる人がいたりする。庄原や三次には知り合いがいっぱいいて、憩いの場。地元より地元感がある。
社会人 Aさん	ありのままの自分 が受容される場	ありのままの自分が受容される場	わがままで大将感が強く、学校だったら疎まれるけど、ほしはら山のがっこうでは誰も気にしていないことが新鮮だった。 忘れ物の持ち主探して、私とはるちゃんのものばかり。学校だったら多分やばいけど、山のがっこうだと、ただのネタみたいな、許される世界観。 あいあい第二の母ポジション。ふるさと感がある。
父親L さん		自分の居心地の良さを考えて、自由に表現して実現できる場	グループの雰囲気が良く、あの人はあだからダメとというのがない。受け入れてくれる雰囲気がいっぱいある。なんでここは楽しいのかと色々な角度から考えて出した答えは、参加して下さる皆さんが、自分の居心地の良さを考えて、それを自由に表現して実現する環境があること。
母親K さん	いろんな価値観 や生き方に会 える場	田舎の人の面白さや多様性に会える場	田舎の人は面白いし素敵。ユニークだし、生きる力があり、賢くて多様性がある。いろんな生き方や感覚でそれぞれが幸せに生きていける方法があることを娘に知ってほしかった。
母親K さん		普段とは違う世界観や空気感を持つ人とつながれる	町に住んでいる人とは違う世界観や空気感を持つ人とつながっていることが、私にはきっと必要。娘にとっても必要。
大学生 Cさん	アイデンティティ を見出す場	学校や家ではない場所で自分が何者かを見出す場	ほしはらの思い出を高校時代から誰とも共有できなかった。ほしはらで生きていた自分とは違う人格が上を占め、ほしはらが楽しかった思い出を、一人で夢に見て思い出すくらいだった。大学受験や親の期待があり、普通の人間として生きていかなければいけない時期がきて、大学に受かったら自由にな

			<p>ると思って高校3年間を過ごした。だから高校時代は学校以外の思い出はない。ほしはらから成長できていない子どものままの自分がいたりとか。</p>
大学生 Cさん		<p>本当の自分を解き放てる場</p>	<p>口に出して否定されるぐらいだったら、自分の中に留めておこうと思うと話せない。ほしはらでの思い出は誰にも否定されたり汚されたりされたくない。 小学校も楽しくなかった、友だちがいなかった。ほしはらが本当の自分を解き放てる場所だった。</p>
父親 Lさん	<p>一緒に創っていく場</p>	<p>自分に出来ることで関われる、関わりの間口が広い場</p>	<p>関わりの間口が広く、特技がある人もない人も、それぞれが自分に出来る範囲で関われる団体。</p>
父親 Lさん	<p>居心地を意識している場</p>	<p>居心地のよい場づくりをそれぞれが意識している場</p>	<p>こういうのが一番過ごしやすいのではないかという場のつくりかたを、意識しているのか、そういう人がたまたま集まっているのか。私は勉強させてもらっている。</p>
社会人 Aさん	<p>親元を離れて体験ができる場</p>	<p>親元を離れてキャンプ体験ができる場</p>	<p>今の一日は短い、10歳くらいの何日間かは多分濃いんじゃないかな。 一週間キャンプはすごい濃い。あの時期に一週間親元離れてキャンプするって素敵。 親からの手紙を読む経験 滝遊びはかなり貴重な経験 ある程度大人か何人かスタッフが見てる環境じゃないと出来ない、親子ではなかなか出来ない、気軽にはできない体験</p>
母親 Nさん	<p>スタッフのおかげで活動が継続できている場</p>	<p>スタッフのおかげで活動が継続できている場</p>	<p>スタッフのおかげで活動ができている。7泊8日キャンプに3番目の子が行く頃まで活動を続けてほしい。</p>

主体性が発揮される場が生まれていく土台について、キーワード＜自由、マイペース、予定調和があまりない、柔軟性、おおらか＞をもって語られていた。特に「自由」が大切な要素として語られていることが印象的だった。また自然があり「草ぼうぼう」など「原始的」であることが、一人一人の主体性やアイデアの発揮にとって重要と感じている語りが印象的だった。

さらに、いろんな価値観や生き方に出会える多様性にあふれる場で、居心地が意識されており、その中で受容が生まれていることが語られていた。

他に、小学生時代に一週間親元から離れて過ごす体験の重みや、学校や家ではないサードプレイスとしての場で自分は何者かを見出そうともがき、アイデンティティが確立していく様子が語られたことが印象深かった。

表4-8 <自然や農村、環境のこと>

回答者	サブカテゴリー	コード	具体的な回答
社会人 Bさん	都市と田舎の比較	隠岐の島は第二のふるさとで、帰りたいと思うことがある	隠岐の島は第二のふるさと。帰っても島に今誰がいるかわからないし、先生も異動されているかもしれないが、帰れる場所と思う。島の人は温かかったので受け入れてくれると思う。 島に帰りたいと思う時はたまにある。満員電車ばかり乗っていると、田舎がいいなと思うことがある。
社会人 Bさん		都市と田舎の比較	都会には都会の良さがある。どっちがいいか、自分の中でわかっていない。どっちの良さもある。
高校生 Dさん		ほしはらに来て、田舎のイメージが変わった	田舎は静かと思っていたが、積極的に挨拶とかする。都市はすれ違ったら挨拶みたいなことはない。 田舎の人は優しい。 空がきれい。星を見たことがなかったが、田舎はめっちゃきれいに見える。 住みたい場所は都会過ぎず田舎過ぎず。
中学生 Eさん		都市と田舎の比較	普段、都市に住んでいて、畑などが見えないので、田舎にはまだ慣れない。でも、畑仕事を手伝ったり虫を取ったりする経験をキャンプでしたり、家族で稲刈り体験をしたりして面白かったので、色々やりたいと思う。 暮らしたい場所は大阪。スーパーが近いし、色々あるし、ユニバがあるから。
大学生 Cさん	ほしはらでの経験を通して自然を感じられる場所を選んだ	ほしはらでの経験が楽しかったので、自然と感じられる暮らしが好きになった	奈良公園から歩いて10分くらいのところに住んでいて、自然が近い。夜、ウシガエルの声や鹿の鳴き声が聞こえる。生活の拠点をこういうところに置きたいと思っていた。ほしはらでの経験が楽しかったし、これが好きと思う。 仏像を見に行くときに道なき道を行ったりすることがあるが、山歩きの身のこなしに全然抵抗がない。危ないことやかぶれの木の知識などを備えさせてもらった。
社会人 Bさん		山のがっこうで自然とふれあう機会を経て、隠岐の島の高校に島留学した	高校三年間、隠岐の島の高校に島留学した。寮生活や島の子との交流、海で遊んだりサザエを食べたりするなどの経験をした。山のがっこうで自然とふれあえる機会があったからこそ島に行きたいという気持ちになった。見つけたのは母親だが、自分で親元を離れて経験したいという気持ちで島留学を決めた。
学ボラ Fさん	農村と関わっている	休耕田をキャンプ場にしたいと開拓している	職場の先輩に誘われて、職員のメンバー6人で休耕田を耕してキャンプ場にしたいと開拓している。草ぼうぼう、低木もある。開拓は楽しい。田んぼも譲り受ける予定。先輩は土地を購入。周りの農家は自分の土地も買ってくれないかなと言っている。開拓が進んだら子どもたちにも経験させてやりたい。 大学時代は援農サークルに入っていた。
学ボラ Fさん		大学時代に援農を経験した	大学時代の援農サークルで印象深かったのは、草刈りが多かったこと。積雪の中、ひもで背負って丸太を運んだのが印象的。おばあちゃんも一緒にいて、自分たちがいなかったらお

			ばあちゃんおじいちゃんで行っていたのかと、衝撃を受けた。しんどい作業の方が覚えている。研修を年に一回受けて、草刈り機も使っていた。
母親 M さん		社会課題を解決していくためには、多様な主体が自分ごととして関わる姿勢が大事	大崎上島の地域づくり活動に作業療法士として関わっている。地域の力が高齢化によって落ち、自分のことで精いっぱい人を助けられなくなってきていることを感じていたのので、健康を支え、助け合える地域を守る活動に意味を感じている。社会全体で課題意識を共有し、様々な主体が協力しあって課題を解決していかなければ社会は変わらないと思う、自分も関わっている。
社会人 A さん	日常生活で自然体験はしていない	日常生活で自然体験はしていない	今はもう本当に自然体験的なものはない。行っても公園とかでちょっと緑があるところに行くくらい。
高校生 D さん		日常生活で自然体験はしていない	休日に自然豊かな場所などに行くことはない。行きたいとは思う。誰かに誘われたら行くかもしれない。
母親 N さん	田舎暮らしの理想と課題	田舎での子育てに憧れるが、子どもが少ない地域は運動不足になると聞き、躊躇する	自然豊かなところで暮らしたい。森のようちえんを通して、田舎での子育てに憧れる。一方で、バス通学の地域では子どもが歩かなくなり運動しなくなる話を聞き、ある程度子どもがいるところがよいと感じている。
母親 O さん		ほっとする田舎に引っ越したいが、持ち家のローンがあるので難しい	出身地は人に貸していて、ふるさとという感じがしない。今住んでいる家がホッとする。もっと田舎に引っ越したいが住宅ローンで購入した家なので難しい。
社会人 A さん	自然を愛する姿	自然を愛するスタッフとの出会い	キャンプでスタッフと一緒にリンスとシャンプーを手作りしたり、洗濯板で洗濯したりした。自然的な感じを楽しんでいてナチュラルテイストの中にいるいまいどんとはしもっちゃんが輝いて見えた。自然を愛するっていいなって思った。
社会人 A さん	体験交流の場づくり	体験交流を支える地域の人やスタッフがいる環境は貴重	子どもたちのためにお姉さんお兄さん、おじさんおばさん、おじいさんおばあさんが集まっている環境は、隣の家の人の顔も見たことがない都市にいと新鮮と思う。
学ボラ F さん	環境問題への関心	子ども時代、自然環境や自然破壊に関心があり、環境を学べる大学を選んだ。	子ども時代、自然環境や自然破壊に関心があった。そういう本もよく読んでいた。中学校の理科もすごく面白かった。県立大は環境科学科があったから入った。ゼミは農業経済学で、色んな地区の集落営農法人でアンケートをするなどした。 (援農サークルに入ったのは) ボランティアをやってみたかったし、環境保全やビオトープ作りに興味があったから。
社会人 B さん	地域への関心	田舎では自然と地域は切り離せない	島前高校が地域視点で物事を考える授業が多く、自然と地域について考えることがしたいと感じるようになった。田舎とか離島だと、自然と地域は切り離せないと思う。
社会人 B さん		地域に関心がある	大学ではお年寄りが集まり愛される巣鴨の商店街の変容を地域視点で考えて研究していた。
母親 N さん	自然の中でのびのびと子育てがしたい	のびのびと育つことができる環境を探して、森のよう	森のようちえんに通うようになったのは、わが子がすごく動き回る子だったので、決まりの多い園ではなく、のびのびと昆虫に興味を持ったりしながら育つ幼稚園が向いていると感

		ちえんを選んだ	じたから。
母親 K さん	農村への理解	地域経済の循環を意識し、地産地消を心がけている	広島県産、鳥取県産、中四国地方、西日本、国産の農産物を購入したいと意識している。 旅先ではその地域にお金が落ちるように意識している。
母親 K さん		農村で幸せに生活する対価が落ち、農業や景観が維持されることは大事	農村の人たちが幸せに生活できているから棚田が維持されている。そこに生きていくことが幸せだと感じる対価が落ちることはすごく大事なことです。 日本の自給率には大きな問題があり、意識していかないと立ち行かなくなる。それは自分自身や子どもたちに直結する。
母親 K さん		棚田でお米を作っている人の姿が見える消費者が増えるとよい	娘は多分、棚田でお米を作っている人たちの姿が見える。そういう人が増えるといい。

都市と田舎の比較が多く語られた。その中で、高校生 D さんが「田舎は静かと思っていたが、積極的に挨拶とかする。都市はすれ違ったら挨拶みたいなことはない。」と田舎の印象が体験によって変わったことを語り、都市とは違う人と人の関わりによるにぎやかさを捉えていたことが印象的だった。

体験を通じて自然が好きになり、大学生 C さんのように自然が近い生活拠点を気に入っている例が語られる一方、体験の思い出はありつつも都市での日常生活を送っており、自然とのふれあいにはつながっていない人もいた。

他にも、子育てが田舎暮らしを考える機会になることや、子育ての場として田舎暮らしを選択するにあたっての課題、農村への理解を広げたいと考えていることなど多岐にわたって、日ごろ自然や農村、環境のことを考えていることが語られた。

表 4-9 <子育て・子どもが育つ環境>

回答者	サブカテゴリー	コード	具体的な回答
母親 M さん	自然体験の必要性	子ども時代に自然と仲間に揉まれて人生の土台をつくれる機会は大事で、体験の機会をつくる必要がある	自然の中で仲間や土・風などの空気感の中で揉まれて時間を過ごしたことは、わが子の人間の土台になっている気がする。それが欠けたら生きていくことはなんとなく難しいと思う。五感を使い、自分の体全体を使って時間を過ごすことが大事。そういった経験は当たり前に出ていたが、今、社会が変わっていき、経験したくても出来ない子がたくさんいる。ほしはらの活動のような場所で補完できることが大事。
母親 N さん		森のようちえんや自然体験イベントがないと、自然体験ができる機会がない	普段、自然体験をする機会は、森のようちえんの卒園生で年に一回森に集まる行事など、イベントに参加したときくらいで、なかなかない。
母親 N さん		わが子に自然遊びをさせたい母親は多い	小学校の役員会で自分の子どもが自然遊びができる場所に行っている話をすると、自分の子どもにも自然遊びができる場所に行かせたい母親は多い。
母親 N		学校での野外活動	小学校での野外活動で、テントを張ったり野外炊爨をしたり

さん		で、キャンプ体験が先生の負担が大きく出来なくなっている	するなどのキャンプ体験をしなくなっている。野外教育ができる指導者が少なくなり、また大きな学校だと先生が活動を見きれないからと言っていた。
母親Kさん	農村体験の必要性	農村体験は子どもの教育に必要で、学校教育などで行うことが望ましい	学校教育での農村体験の機会は子どもの教育にとってメリットが大きい。いろいろな経験ができるし、地域の人、宿の人とふれあうことができる。農村の経済循環にも貢献できる。
母親Oさん	外遊びをする子どもがいない課題	外で遊ぶ子どもがいないことに課題を感じている	外で遊ぶ子どもがいないことに課題を感じている。また小学校でタブレット端末が配られ、家に持ち帰り、ゲームに夢中になっていると聞く。同意しない家庭は持ち帰っていないため、わが子は持ち帰っていない。
母親Oさん	自然との関わりのなかで子どもを育てたい	わが子に自然との関わりのなかでのびのびと育てられる環境を与えたい	さくらさくらんぼ保育の園に子どもを通わせた。幼児期に字を書かせたり、じっと座らせたりする保育園に違和感を持っている。自然体験を通して、例えばお米や洋服がどうやって出来ているか知る機会を持てる。体調が悪くなったら様子を見ることもお母さんたちに伝えたい。先人の知恵を活かして自己治癒力を高める方法もある。
母親Oさん	個性を活かした教育を望んでいる	子どもの個性を活かした教育を選んでいる	オルタナティブな教育が得られる場所や個性を活かした教育が受けられる学校に子どもを通わせている。
母親Nさん	子どもの遊びに制限が多くなっている課題	管理責任が問われる社会の中で、子どもの遊びに制限が多くなっていることに課題を感じている	小学校で遊ぶ時間も減っているように感じる。遊びの内容も制限されており、ブランコは立ち乗りや二人乗りが禁止され、1年生は校庭の遊具の使い方を先生に教えてもらうまで遊べない。先生たちも縄跳びで目に砂が入ったくらいで家に電話対応をされていて大変だと思っている。
母親Nさん		のびのびと遊べる環境が子どもには必要	ほしはらでは、決まりきった遊び方ではなく、好きなように自分が思うように遊んでほしい。
母親Oさん	母親の居場所の必要性	産後のお母さんの居場所づくりをしている 自然と関わる暮らしをしている	子育てを始めた頃しんどかった経験があり、2019年から産後のお母さんをサポートする団体を運営している。それとは別に、母親3人でお米づくりを始めた。メンバーの一人は居場所づくりをしている50代の方。

今の時代の子育てに悩み、模索する様子を、多くの親(母親)が当事者として語っていた。

子育て環境の中で自然とのふれあいが必要である一方で、その機会が少ないことについて課題感を持っており、外で遊ぶ子が少ないこと、自然の中での遊び方を知らない子どもや親世代がいること、学校でタブレット端末が配られたことで直接体験の機会に影響が出ていること、学校教育で野外活動が出来なくなってきたことなどが語られていた。母親Kさんは、学校行事として農村宿泊体験の実施を望むことを語っていた。

また、近年、学校教育で禁止や制限が多くなっていると感じており、個性を活かした教育や子どもがのびのび遊べる場を求めている声を聞き取った。

表4-10 <現在の生活や仕事>

回答者	サブカテゴリー	コード	具体的な回答
社会人 Aさん	都市住まい	都市住まい	2020年に結婚した。千葉に住んでいる。車が運転できないから都会にいるほうがアクセスは楽。
社会人 Bさん		都市住まい	東京に住んでいる。学校が関東だったのでこっちで就職活動した。コロナ禍で帰りづらい時期だった。
母親 Kさん		都市住まい	(広島市に住んでいる)
母親 Oさん	自然豊かなところで暮らしている	自然とふれあって暮らしている	田んぼや山があるが住宅街もあるところに住んでいる。この春から近くの畑を借り、子どもは自然とのふれあいを楽しんでいる。
社会人 Aさん	都市と田舎の比較	都市と田舎の比較	本当に流れてここに住んでるだけで、住み続けたい意志があるわけではないけど、便利だから住んでる。旦那と二人とも田舎育ち、子育てイコール田舎でするものとは思っている。小さい子が電車に乗っているが、わが子が電車に乗っている姿を想像できない。
社会人 Bさん		都市と田舎の比較	地元広島に帰る選択肢もあった。東北もいい、親元を中学から離れたので47都道府県どこでもいい。自分が何をやりたいかが大切。
学ボラ Fさん		都市と田舎の比較	都会暮らしは初めて。田舎暮らしの方が合っている。
母親 Nさん		転勤	転勤族のため、夫の勤務先の都合で今の場所に暮らしている。
社会人 Bさん	自分探し	就職活動での自分探し	コロナの時期に就活、就職。観光業は厳しい時期。食は絶対欠かせないから大丈夫と思い、スーパーに就職。たまたま水産部門に配属され、魚が好きなので良かった。
大学生 Cさん		就職活動での自分探し	仏像とか美術とかを使って教育普及したいが、働き口がない世界だから、仕方なく一般企業も就職活動している。芸員になりたいが、下積みが10年必要など厳しい世界と聞き、なれないと思っている。
高校生 Dさん		進学での自分探し	進学は県外に行こうと思っている。理学療法士になりたい。一昨年手術したときに理学療法士さんが優しくて、自分もそういう人になりたいと思ったから。
中学生 Eさん	所属	中学生	バスケ部 中1
母親 Mさん	子育て	大学生の親	息子は大学院生。
母親 Mさん		娘が進路で自分探し	娘は自由学園に通っている。自分の考えを言える姿に憧れて、入学した。(小学生の頃に参加者)
母親 Nさん		学校以外の子どもの過ごし方	わが子は家で過ごしていることが多い。時々友達と公園に行くことがある。周りの子どもも習い事や塾に行っている人が多い。
母親 Nさん		子どもの数	子どもは3人いる。テレビ番組の影響で大家族は楽しそうと憧れを持ち、子どもがたくさん欲しいと思っていたが、現実

			は思い通りにならず、思い描いていたのとは違っていた。
母親Oさん		孤独な子育て経験	結婚で福山に来た当初は、友だちがおらず、孤独な子育てで、うつ状態になりかけていた。
母親Mさん	ほしはらでの出会い	ほしはらでの親同士の出会いが今も続いている	ほしはらで親同士出会った方々と今も時々ご飯を食べに行ったり、家に泊まったり、親交が続いている。

進学や就職、仕事の都合で現在都市に住んでいる人が多い一方、都市と田舎を比較している人が多かった。社会人Aさんは「子育てイコール田舎でするものとは思っている」、社会人Bさんは「47都道府県どこでもいい。自分が何がやりたいかが大切」、学ボラFさんは「都会暮らしは初めて。田舎暮らしの方が合っている」という語りから、暮らしの場として今後田舎を選択する可能性を持つ人が一定数存在していることが感じ取れた。

ほしはらでの親同士の出会いが続いている母親Mさんの語りも興味深かった。同じ「第2のふるさと」を持つ友だちとのつながりが継続していると解釈できるのではないだろうか。

(2) 11人のインタビュー全体を通じた考察

1. 子ども時代の自然との関わりについて

<育った環境>では、それぞれが育った場所に関わらず、子ども時代の自然との関わりを語るケースが多かった。

自然豊かなところで育った全員が、子ども時代の体験や情景を、草花遊びや虫などの生き物とのふれあいを例にとりながら、好意的に語っているのが印象的であった。

都市で育った社会人Bさんや母親Nさんも都市の中にある身近な自然でセミ採りや木いちごつみ、水たまり遊びなどをして遊んだ思い出を好意的に語っている。

一方、都市で育った母親Nさんは田舎の祖父母の家に行くのは草が生えていて蛇や蚊が出るからあまり好きではなかったと語っている。日常生活では草や虫、生き物とのつきあいを経験する機会が少なく、田舎に行くと慣れない環境に対応しなければならないことから苦手意識が働いていたことが感じ取れる。

子ども時代に獲得した自然に対する印象は、例えば母親Mさんが「子ども時代の自然の中の思い出が楽しかったから、わが子にもさせたい」という思いにつながっているように、未来の選択肢に影響している。

2. 虫への苦手意識と「慣れ」が生じる場について

都市で育った中学生Eさんは、<どんな場か>において、大阪では小さい虫くらいしかいないから虫が苦手だったが、ほしはらに来たら虫が大量にいて苦手じゃなくなったと語っ

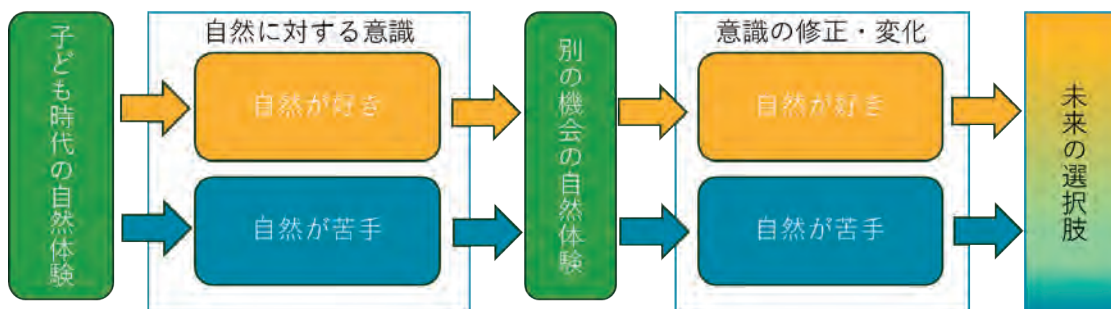
ている。Eさんに虫への「慣れ」や「受け入れ感」が生じたことが感じられる。

都市で育った大学生 Cさんは<自身の成長や変化>で、学校の同級生は子ども嫌いだったり虫に対してキヤーキヤーしたりしていたが、Cさんは影響されないうでいたいという思いがあり、孤独を感じたことを語っている。Cさんが虫に苦手意識を持たなかった理由は、<来るようになったきっかけ>で、ほしはらに来る前にも別の場所で自然体験プログラムに参加していたことが語られていることから、虫への「慣れ」が生じていたのではないかと考えられる。

さらに Cさんは、虫が苦手な人が多数派である学校の同級生の「場」で、少数派を意識させられていることから、虫が苦手になる過程には「場」の影響があると感じられる。自然体験の場では、虫に「慣れ」ている人が一定数いることや元々虫好きな人も集まることから、虫が苦手な人が少数派となる。また苦手意識を持つ人もまだそういった意識が定まっていな人も、楽しく虫とふれあっている仲間やスタッフの姿に多く出会える「場」である。そのような「場」の影響を受けながら虫の苦手意識が変化していくことが想像できる。

苦手意識が和らぐと、世界が広がる。自然体験や農村での暮らしでは草や虫、蛇や蚊などの生き物との付き合いは避けられず、苦手意識によって一定数の人々が遠ざけている世界があるとすれば、中学生Eさんのような「慣れ」の変化が生まれ、生き物への関心、さらに命の大切さへの気づきから人の役に立ちたいという思いにつながっていく過程は大変興味深い。

図4-1 自然への苦手意識と自然体験



3. 子どもへの苦手意識と自然体験

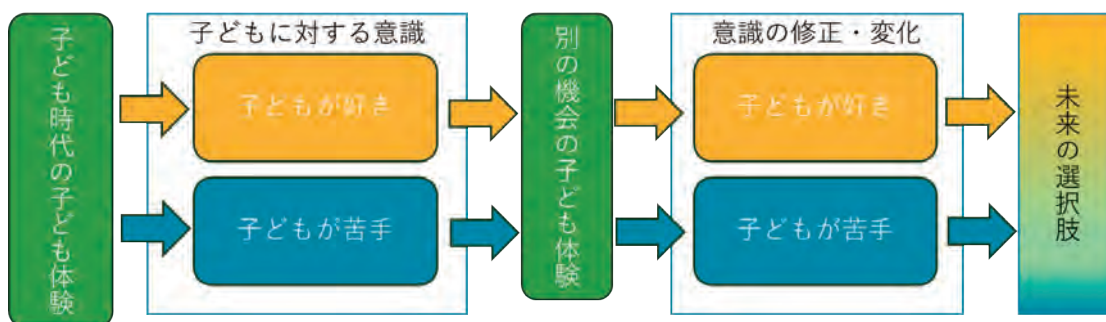
また興味深いのは、Cさんが虫と子どもを同列にとらえて、同級生の苦手意識と自身の違いを語っていることである。現代社会の中で、子どもたちが虫と同様に、異年齢の子どもに接したり世話をしたりする機会が少なくなっていることを示していると思われる。

Cさんは<自身の成長や変化>で、子どもキャンプに何年間か参加する内に、初めの頃は泣いていた自分が、泣いている子を寝かしつけてあげたりする立場となったこと、そしてその経験を通じて人と関わることで自分がすごく好きになったことを語っている。

少子化社会の課題に対して、異年齢集団の子ども同士、世話をされて育ち、また世話をす

番が巡ってくる経験を重ねる場があることによって、子どもとの関わりに「慣れ」、好きになる機会が生まれるとすれば、自然体験の場がひとつの役割を持つことが期待できる。

図4-2 子どもへの苦手意識と自然体験



4. 都市部に移住する「流れ」～子育ては田舎で

<現在の生活や仕事>では、進学や就職のために都市部に移住しているケースを多く聞き取った。初めて参加した時に小学生の参加者であったインタビュー対象の内2人は社会人になっており、1人は結婚していた。社会人Aさんは因島、社会人Bさんは尾道市の街なか育ちだが、進学や就職のため関東の都市に移住していた。都市を選んだ理由としてAさんは「流れ」で便利だから、Bさんは関東の大学卒業後、コロナの影響で帰りにくかったことと自分がやりたい就職先を選んだことを挙げている。他にも大学生Cさんは進学のため関西に移住していた。高校生Dさんは広島県外への進学を志望している。母親Mさんの長女は広島から関東の中高一貫校に進学していた。

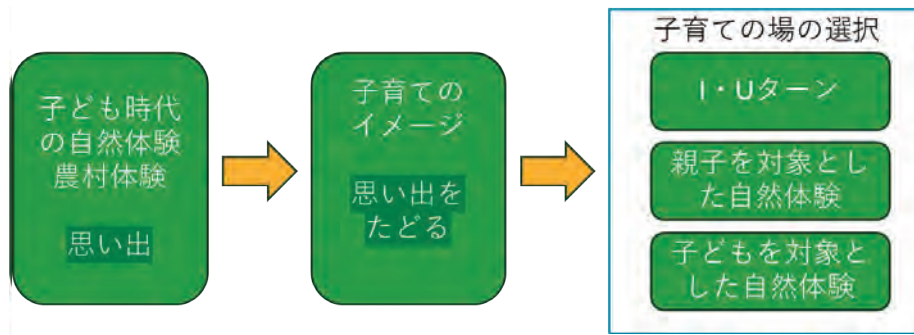
出身地域（都市・農村）に関わらず、自然体験を経たインタビュー対象者も中国地方から関東や関西の都市へ進学や就職を機に移住する「流れ」の中にいることが読み取れる。

一方で、社会人Aさんは、夫婦とも田舎で育った経験から子育ては田舎とするイメージを持っていると語っている。また母親Oさんは自然豊かな地域での暮らしを子育てに生かしていた。Oさんの語り全体からは、自身が通った保育園や子ども時代に参加したキャンプ経験の中で、子どもが自然体験や外遊びの中で育つ実感を得たこと、また自分自身が純粋に自然への好奇心や愛着を獲得し、畑を借りたりしながら親子で自然とのふれあいを楽しんでいることが読み取れる。

こうしたことから、子ども時代に自然を体験して育った人々が、進学や就職で一旦より大きな都市へ移住するものの、自然豊かな地域での子育てをイメージする姿が一定数あることが読み取れる。

子育てを機に農村へ移住できる環境や、自然の中で子育てができる場が求められているといえるのではないだろうか。

図4-3 自然体験や農村体験による子育てイメージの形成



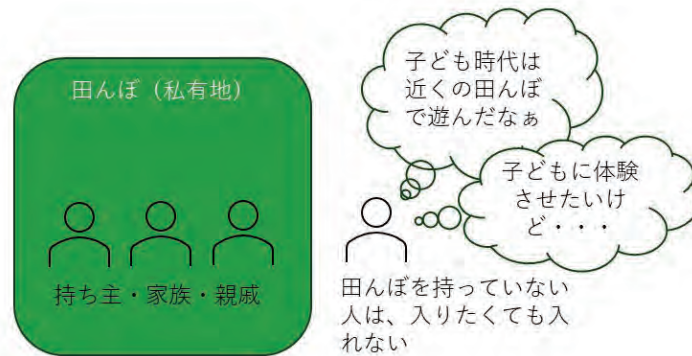
5. 農村ならではの自然体験の場を求める姿

<ほしはらに来るようになったきっかけ>では、親が自然体験をどのように捉えて、わが子に行かせたいと思っているのか、具体的に語っている方が多いことも興味深い。自然そのものの原体験、食と農の体験、田畑やあぜ道といった「農村ならではの自然体験」を求める声とともに、自然の中での主体的な遊びを通して創造性を育む機会、広い世界観を感じる機会といった「豊かな人間性が育まれる自然体験」を求める声があり、それは自身が子ども時代に体験的に学んでいることが考えられる。

母親Kさんは、田畑での自然遊びをわが子に体験させたくても、そこは個人所有地なので入れず、体験出来ない状況を語っている。

農村に「ふるさと」を持たない人が増える中で、そこに体験が出来る場が開かれていることが求められている。

図4-4 農村ならではの自然体験の場を求める姿

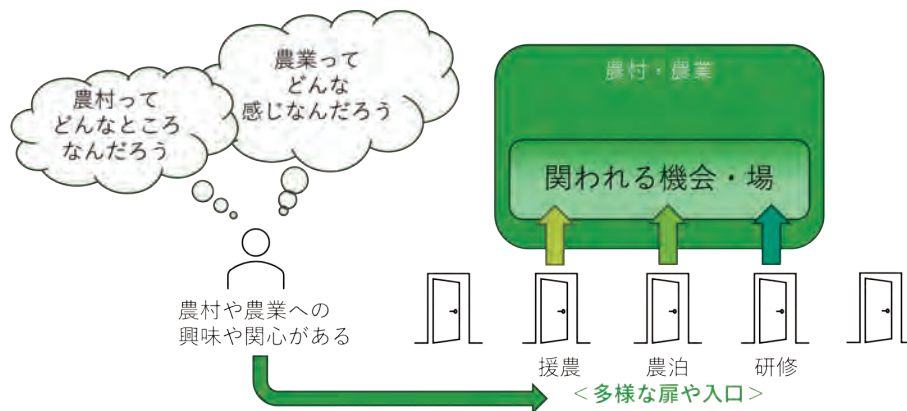


6. 農村とつながる扉

親や学生ボランティアには、農村への関心がきっかけで来るようになった者があった。学ボラFさんは「援農サークル」、母親Kさんは「農泊」、父親Lさんは職場の「研修の場」と、三者三様であった。

農村側もまた関係人口を求める中で、「援農」「農泊」「研修」などといった具体的な関わり場面の扉を開き、またその情報を分かりやすく公開していくことが必要である。

図4-5 農村とつながる扉

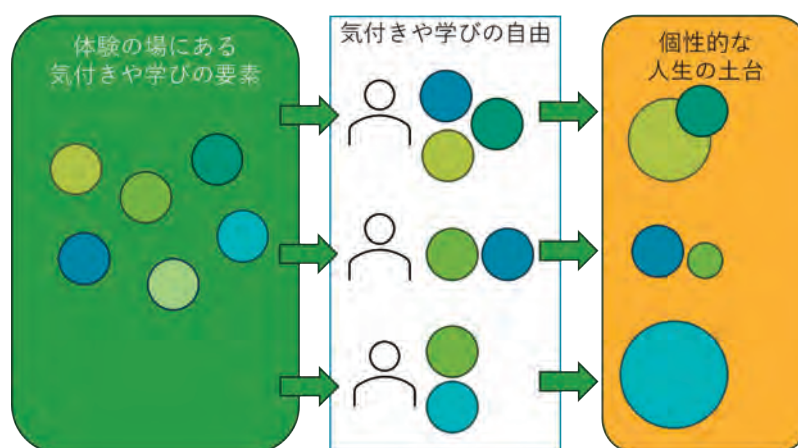


7. 学びの自由の中で得た人生の土台

<日常的に思い出すこと>では、懐かしさや人生の土台となっていることが多く語られた。特に、一人一人の物語の中で生きている思い出の中には、その人を時に支えていると思われるものも読み取れたことが興味深い。

それは同じ出来事のなかに参加していた集団の中でその一人に起きた気づきや学びであり、学びの自由の中でその一人が自らのその時々に関心事に基づいて学び取ったものである。そのような自由な学びがいつも生まれており、それらが個人の人生において土台となっ ていたり大切なストーリーの一部となっ ていたりする可能性があることをどこか念頭に置きながら、今ここでの一期一会を大切に体験の場に関わる人々の輪が広がっていくとよい。

図4-6 学びの自由の中で得た人生の土台

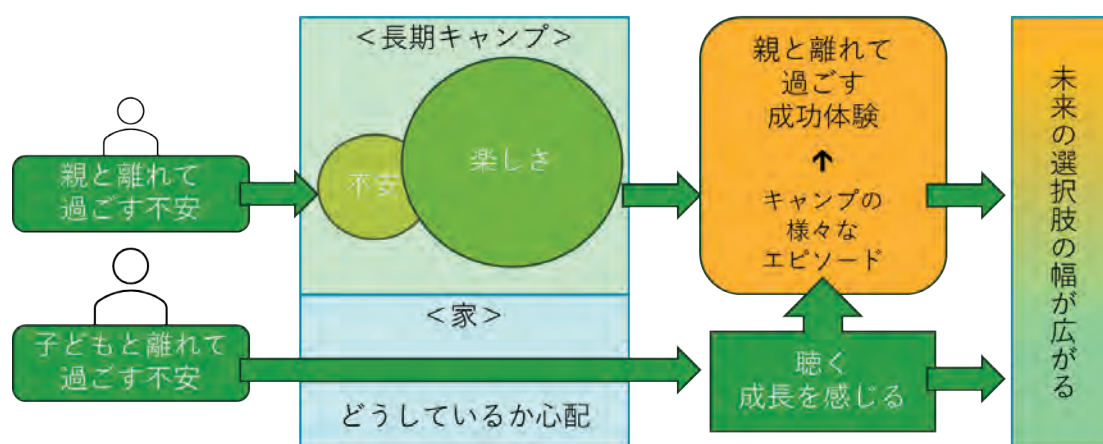


8. 親から離れて過ごす経験

<成長や変化>では、体験から学んだことを自分なりに持ち帰り、日常生活に生かしていることが多く語られた。中でも社会人Bさんが、長期キャンプを通して親元を離れる経

験や仲間と協力しあう経験をし、新しい環境に飛び込む勇気を得たことが、島根県の隠岐島前高校への島留学の選択につながったと語ったことは印象的だった。母親Mさんは母親の立場から、子どもと長期離れることに覚悟がいったことや、迎えに行った時にわが子が親と離れた場で楽しく過ごしたことを感じ取り、こんなふうになるのかと成長を感じたことを語った。〈現在の生活や仕事〉のなかでMさんの長女は中学校から親元を離れて東京都の自由学園への進学を選んだと語っており、長期キャンプ参加経験が親と離れて生活する選択につながった可能性があり興味深い。

図4-7 親から離れて過ごす経験



9. 多様性を認め合う経験

先述の島留学を選んだBさんは、長期キャンプで分け隔てなく喋れるようになったとも語っている。社会人Aさん、大学生Cさん、父親Lさんは、体験の場でのいろんな人との出会いを通じて多様性を認め合うことに関心を持ったことを語った。さらに〈どんな場か〉において母親Kさんは田舎の人の生きる力やいつもとは違う世界観・コミュニティとつながることが必要だと、多様性と出会える場を求めていることを語っていた。

このように、ほしはらでの経験によって、父親Lさんがいう「人との接し方」が変わっていったことが、数人から語られていた。

ほしはらの体験の場は、プログラムによって違いがあるが、赤ちゃん連れの親子から高齢者までの多世代が、学校や学力・職業や立場・居住地の違いを超えて集まり、農村の自然の中で同じ時をフラットな関係性の中で過ごしていることが特徴である。そのような多様性にあふれた関わりの中で、お互いに影響しあっている。

今、地域社会において、隣近所の付き合いが希薄になるなど人の関わりが薄れ、自分や家族とは違う価値観や生き方、仕事をする姿や遊ぶ姿、子育てや介護をする姿に出会える機会が減少している。

そのような課題の中で、多様性社会を生きる時代に必要な経験を、体験交流の場は補完し

ていると捉えることができるのではないだろうか。

10. それぞれの主体性が発揮できる場に必要、自然と人の懐

<どんな場か>について、大学生 C さん、父親 L さん、母親 N さん、母親 O さんは、主体性が発揮できる場であることを語っている。それぞれの語りをつなぐとほしはらは「自由」で「予定調和があまりない」、「マイペース」が「大らか」に認められ、「子どもを一人の人として接する」、主体性を大切にしたい「指図されない」体験の場であると捉えられている。それらのことを好意的に、または今後も大切にしたい価値と捉えていることが印象的であった。

その中で、大学生 C さんが「自然」は自由な遊びを通して自分が考えたように動く力を育ててもらえる場と捉えていることや、父親 L さんが「草ぼうぼう」なほうが人の手が入っていないから自由な表現ができる気がし、人の数だけ遊び方がある場を継続してほしいと語っていることは、主体性が発揮できる場として「自然」の懐の深さを示しているといえるだろう。

さらに<どんな場か>において、社会人 A さんは子ども時代にありのままの自分が受容されたこと、父親 L さんは参加者それぞれが自分の居心地の良さを考えてそれを自由に表現して実現する環境があることを語っている。そういった居心地が主体性の発揮につながるのであろうが、それはその土台に多様性あふれるメンバーの存在があってこそ実現すると考える。多様性が集まることによって予定調和が成り立たない状況が生じ、大らかさが生まれると考えるからだ。また天候の影響や獣害など人の思い通りにはいかない自然との付き合いも、ここに集う人の懐深さに影響していると捉えてよいのではないか。そしてそれが、違いをお互いに受容しあって生まれる居心地や、主体性同士の化学反応で生まれる新たな発見の楽しみ、自分とは違う考えを持つ人や、未知にあふれている自然への関心へと循環していつているのだろう。

2 節 3 人の地域住民のケース分析

2-1. 調査の手法、対象者の概要

ほしはらの活動を地域住民がどのようにみているのか、また関与しているのかを明らかにするために、以下の3人にインタビュー調査を行った（表4-11）。対象者のほしはらとの関わり、活動当初からの思いや地域住民の反応（地域住民A・Bさんのみ）、体験活動に参加する子どもたちの成長について、農村での子育てについて（IターンCさんのみ）、1～2時間程度、対面でのインタビューを行った。

表4-11 インタビュー調査の対象者（地域住民）

No.	年代	ニックネーム	性別	ほしはらや上田町との関わり
1	70歳代	地域住民Aさん	男	NPO法人ほしはらの山のがっこう副理事長
2	80歳代	地域住民Bさん	男	田んぼの体験担当
3	40歳代	IターンCさん	女	2010年頃上田町へIターン

2-2. 分析方法

11人の参加者のケース分析と同様に、ICレコーダーに音声を記録し、テキストに変換した。3人の地域住民のインタビュー調査の語りの中で共通する内容を＜地域の反応＞＜子どもの成長＞＜継承＞のカテゴリに分類した。なお、整理したストーリー記録には、3人それぞれの人生や考え方の語りの中で得られる気づきも多いため巻末の資料編をぜひ一読いただきたい。

2-3. インタビューから抽出した3つの項目と考察

表4-12＜地域の反応＞

地域住民Aさん	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚の話をする際に、当時は上田というのをはっきり言えないというか、道も悪いし、お店もないし、行商が物を売りに来るようなところだったし、川西のなかでも上田の人は山猿とか、田舎もんというイメージで、そういうコンプレックスみたいなものは当時あった。田舎者という感じで、自分だけじゃなしに、そういうのはあった。 ・（ほしはらの活動について話をもちかけた時）目を丸くするというか、「ほんまに来るんか？」というか、反対はせんけども、「いっぺんやってみー」「納得するように、いっぺんやってみいや」「足をひっぱりはせんけーやってみいや」という感じだったと思う。
地域住民Bさん	にぎやかになるということは、祭りごとが好きじゃけえ、人が寄ることはいいことじゃ、やれやれいような感じじゃけえ、まあここ使ってみいや、いような感じじゃけえ。
IターンCさん	<ul style="list-style-type: none"> ・入ってきた途端に、地域の方が掃除なんかもやり始めて、すごい手厚かったんですよ。「住みたいんです」って勢いはあるんだけど、と言ってもうちの田舎はここまでハード

	<p>でなかったから、普通の一軒家だったので、いろいろ分からないこともあって、そこに集うおじいちゃんおばあちゃんも「よう来た、よう来た」って言うてくれて。それも作戦だったって最近言われましたけど（笑）ここにおることが楽しいと思ってもらおうと思って、運動会とか、「あなたはあの人に話かけんさい」とか、話し合っとうらしくて。〇〇さんが来たときには、〇〇さんにどうやって楽しんでもらおうかって、話しながらしよったんよって。</p> <p>・移住されたいろんな人の話を聞くんですけど、すごい閉鎖的な移住先もあるんですよ。だから、だめだってなって、帰っちゃった人もいるし。そういう話をきくと、この町の人たちは、垣根がないというか、それをすごく感じました。</p>
--	--

ほしはらの活動が始まる以前より、地域を盛り上げたいという意識から、地域住民同士の交流や景観の整備などに取り組む中で、田舎へのコンプレックスから、新しいことに取り組む前向きな姿勢へと徐々に地域住民の意識が変化していったと考えられる。ほしはらの活動を開始する際には、反対意見が出てこなかったことは、「様々なことを自分たちでやってきたので大丈夫」という地域住民の自信があったからであると考えられる。

さらに、ほしはらの活動を積み上げてきたことや、上田地域の祭りや運動会に地域外からの参加者を受け入れるといったように、地域外からの交流者を受け入れる素地があったため、移住者を受け入れることに対してもオープンな対応であったと考えられる。移住者にとっても、地域住民との垣根をあまり感じることなく地域になじみやすかったという事実につながっていると考えられる。

表4-13＜子どもの成長＞

地域住民 Aさん	20年もたつと、小学生で体験した子が大人になり、大学生、社会人になったり。彼らがまたリーダーとして戻ってきてくれた、リーダーとかスタッフとしてね。ここで体験して育ったリーダーだから、初めて参加する子どもの気持ちをよくわかるよね。
地域住民 Bさん	そりゃまあ、来て田んぼの中入って泥んこになってやった、ゆう、ああいう秋のイネを刈っての、かゆいのに、はでにしたとか。そりゃまあ、やっぱりある程度歳がいったら、あの頃面白かったとか楽しかったって記憶には残っとう思うよ。
Iターン Cさん	<p>7泊8日いったとて、あまり珍しくはないですよ。沢登りとか、プログラムの「わあ！はじめてー」っていうのはないんですけども、安心できる大人たちがあって、そういうところに行くと全然違うだろうなと思って参加させたんですけど。7泊8日でほんとに彼女は変わったので、それは行かせてよかったとすごい思っで。</p> <p>同級生もいないし、心配だなと思いはじめて。ちょうどその時に、うちの隣にYさんという方が引越してくれて。次女の一個下の女の子だったんですけど、仲良くしてたから二人で（キャンプに）行っておいでって。一人だったら絶対行ってなかったと思う。色んなタイミングがあって7泊8日に行ったんですけども、そっからすごく、苦手は苦手なんですけども、頑張るといふか。</p> <p>知らない人とは苦手なんですけども、行くようになりました。（苦手だから）やらないじゃなくて、行けるときは行くみたい感覚で。子ども同士の関わりが、親が介入しないとなかなか難しいというのが、田舎の欠点かなと思います。</p> <p>常にどうかなって思うのは、子どもの数が少ないことに対しての、もう少しわちゃわちゃと遊べてもいいし。親の送迎がないと遊びにいけないとか。</p> <p>でも家も広いので、すごく自由な人たちに育ったなーというのは（思いますね）。</p>

長年スタッフとして活動に関わっている地域住民 Aさんは、長期的な視点での子どもの

成長について言及している。また、IターンCさんは、同級生が少なく、子ども同士の交流に大人が介入する必要があるといった農村での子育ての特徴がある中で、ほしはらの活動に子どもを参加させることで、デメリットを補っていることが特徴的である。

表4-14<継承>

地域住民 Aさん	<ul style="list-style-type: none"> ・つないでいくことが大事と思っている。これから先につなぐことはもちろん大事だが、これまであったことを、今を素通りさせるのではなく、過去を現在に、現在を未来につないでいくのはいろんな意味で大事なんじゃないかな。 ・昨日ね、ほしはらという冊子、学校があったときに当時の子どもたちや学校の先生やPTAの役員が上田の歴史をカタチにして残して、残すだけでなく、残す過程で昔のことを理解するというのを見て、自分らが知らなかった事とか、大事なことに改めて気づかされたことがあるんだけど、それを次につないでいく責任があるなど。どういう形でつなげていくかというのは、なくなっていいものもあるけど、大事にしたいもの、知らず知らずのうちに失っているものもあるよね。
地域住民 Bさん	<ul style="list-style-type: none"> ・伝えようおもや、全部じゃけど、ゆうても今の考えが違うけえのお。ああする、こうする、ああせい、こうせい、ゆうか、やってみせるほうがいいんじゃないか。やってみせて、今の田植えでも、こがに植えるんよゆうてやってみせるが、見せて教える。口でゆうても。まあ、田んぼやら畑仕事やら理屈どおりにはいかんけえね。
IターンC さん	<ul style="list-style-type: none"> ・Sさんのやり方は手の触感とか、ああいうのってすごいなと思うんですよ。全部がそうじゃなくていいんですよ、随所にそういう大切なことが残していけるつなぎ方がすごいいいなと思うので。

地域の魅力や培われてきた仕組み、知恵を伝える・残すという思いを3人からそれぞれ聞き取ることができた。地域住民Aさんは、過去を残す過程で昔のことを理解する大切さと、以前は存在していたが生活が変化し便利な時代になることで、家族間や兄弟間にあった助け合いの仕組みが気づかぬうちに消失していることへの危機感を示唆している。

地域住民Bさんは、子どもに伝えるには自ら体験することの重要性を示している。

IターンCさんは、地域住民の高齢化、担い手不足を感じながらも、地域住民の知恵や技術を残しながら自分自身が担い手として、お茶畑の景観や地域住民が持つ知恵や技術をつないでいきたいという思いを持っている。

ほしはらの活動は、3人のような、地域の魅力、地域住民の魅力を次につないでいきたいと思い行動する地域住民に支えられていると考えられる。

5 章

ま
と
め

5章 まとめ

1節 自然体験による子どもの豊かな育ち及び「ふるさと」への心理的基盤の形成に関する総合分析～調査結果より明らかになったこと～

1-1. 前提となる社会の捉え方

中山間地域の人口減少や少子高齢化、里山保全、生物多様性の保全、持続可能な食と農のつながり、景観保全など、様々な課題への解決アイデアを探る中で、自然や農村に対する理解をもって、都市農村が一体となって未来を創る視点と、担い手となる多様な主体の育成が重要である。その人材育成の場として、農村における自然体験の機会、中でも、農村における自然体験による「ふるさとへの心理的基盤」の形成が、関係人口や移住者につながることを期待されている。

1-2. 調査結果より明らかになったこと

本調査研究では、「子ども時代の自然体験が、移住や関係人口増など、これからのふるさとを担う人づくりとつながる」という仮説のもと、自然体験参加者の「ふるさと」に対する意識変化を明らかにし、さらに農村地域における子どもの自然体験の場づくりを検証した。

3章から4章による検証によって、「ふるさと」として思い浮かべる場所は、約半数の方が出身地や祖父母の家があるところであると捉えている一方、それ以外にも「ふるさと」があり、その両方と捉えている人が約3割いることが分かった。そして自然の中での体験やそこで出会える人との関わりが「子ども時代のよい思い出」として印象づけられ、「ふるさと」観を獲得していることが分かった（図3-24～29）（表3-5～7）。

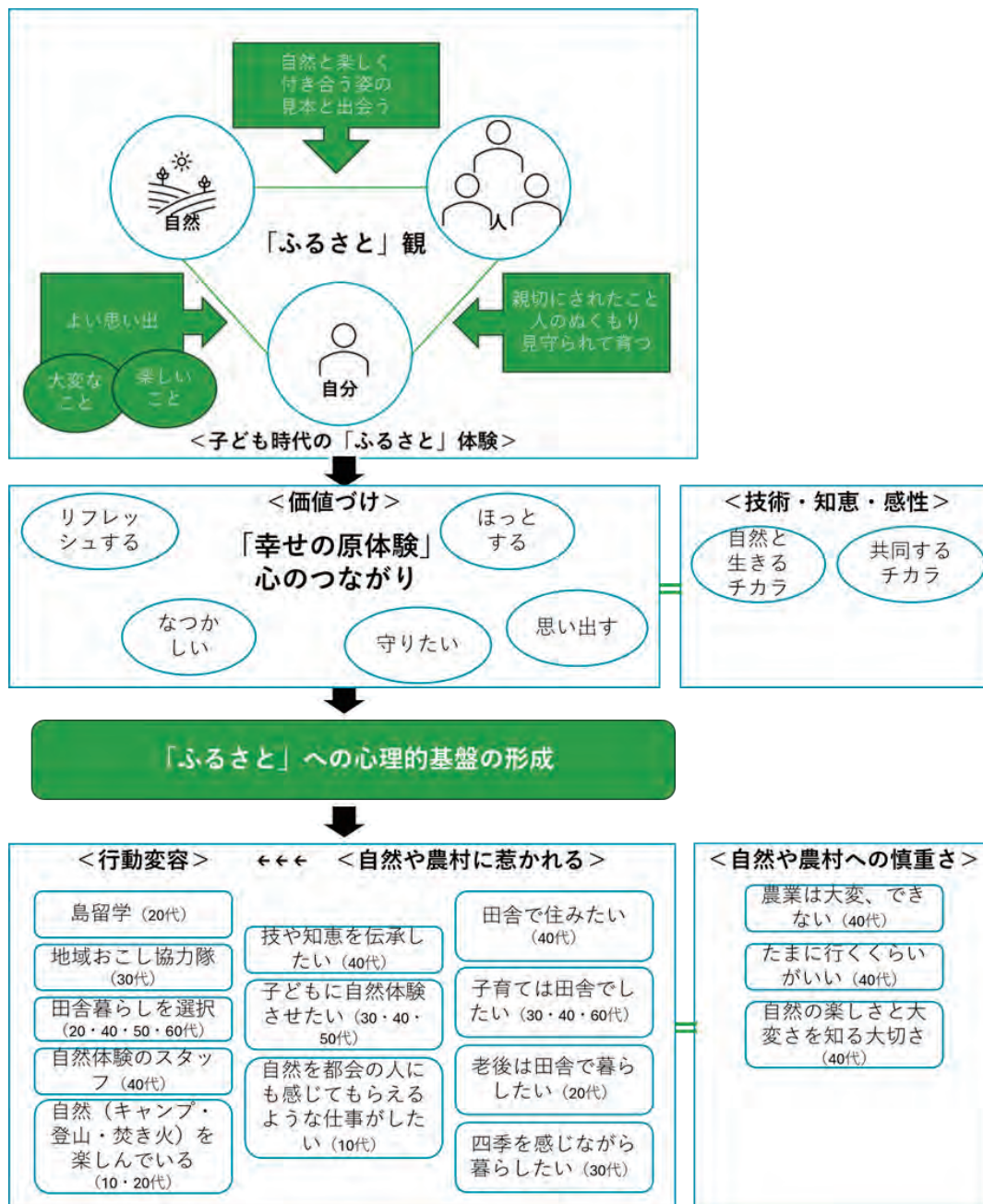
また、ほしはらのような自然体験の場は、出身地や祖父母の家での体験と共に、「ふるさとへの心理的基盤」を形成する機会となり、特に個々に自由な遊びを通して固有の気付きや学びの獲得が起きたことが、その後のストーリーにとって重要な一面となり、人生を支える捉え方や考え方の基礎になっていることが明らかとなった（表3-3～4と表3-5～6の比較）（表4-2～10）（図4-6）。

つぎに、次世代を担う子どもたちが「ふるさと」に愛着を持つ体験の機会をつくることは、長期的な視点に立ったとき、今後の中山間地域づくりにとって重要な視点であるとして調査分析をすすめたところ、子ども時代に「ふるさとへの心理的基盤」が形成された大人は、「子育て」をきっかけに「ふるさと」での思い出や学びを思い出し、自らが得た「ふるさとへの心理的基盤」を引き継ぐ手段として農村への移住や子どもの自然体験の機会を求め、また行動していることが分かった（表3-7）（表4-3～5・4-9）。

このように調査全体から、一人一人が子ども時代の「ふるさと」体験によって「ふるさと」

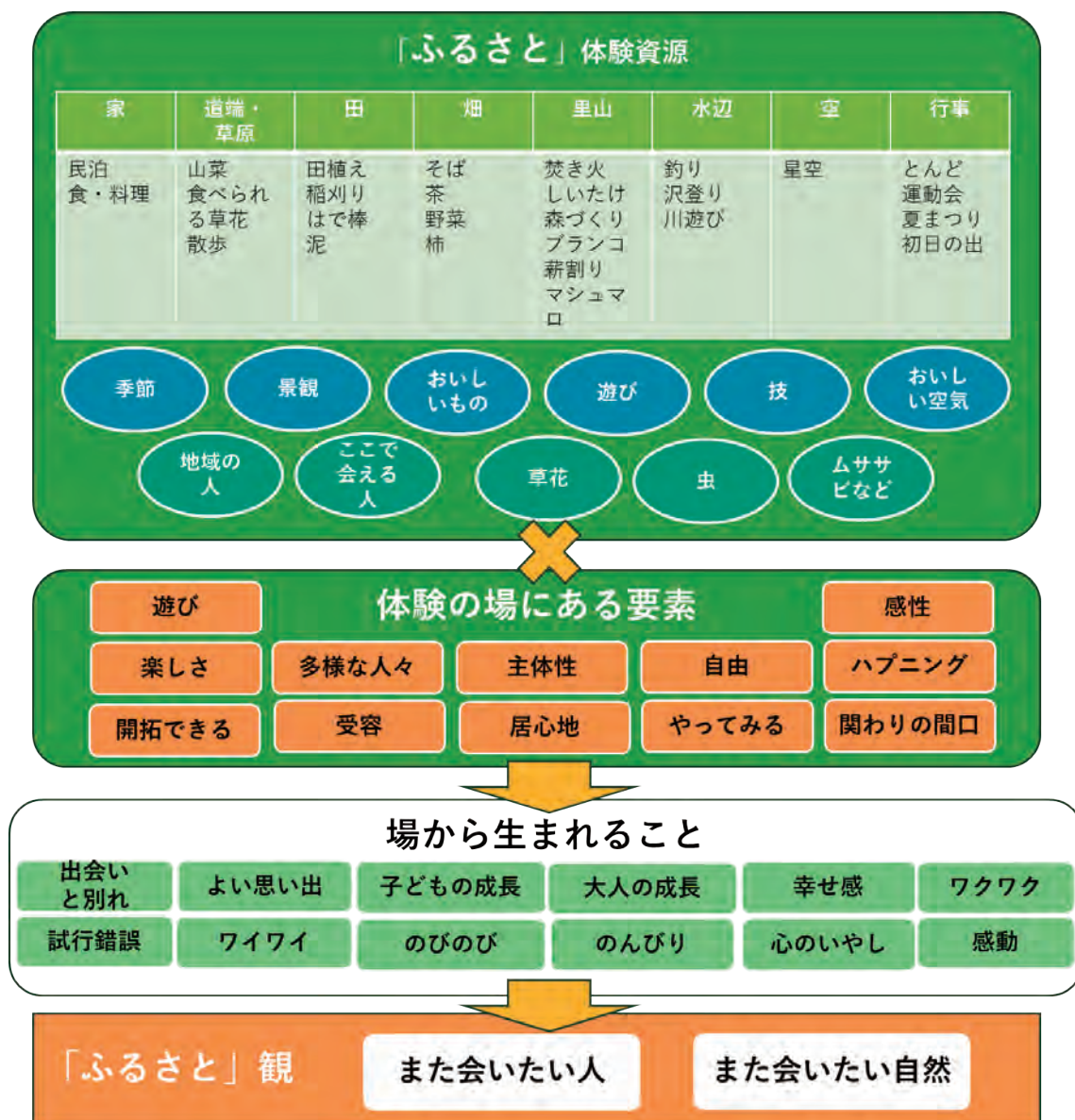
観を得ていくプロセスにおいて共通点となるポイントや、「ふるさと」を「幸せの原体験」として価値づけることが、自然や農村へ思いを寄せる行動変容につながっていくプロセスを見出すことができた。

図5-1 「ふるさとへの心理的基盤」形成や行動変容が生まれるプロセス



さらに、自然体験の思い出や、体験が人生に与えた影響の聞き取り、また子どもが捉える「ふるさと」の姿 (表3-4・3-7・3-10・図3-33・表4-2~10) から、「ふるさと」体験の場に必要要素と「ふるさと」観の関係を捉えることができた (図5-2)。

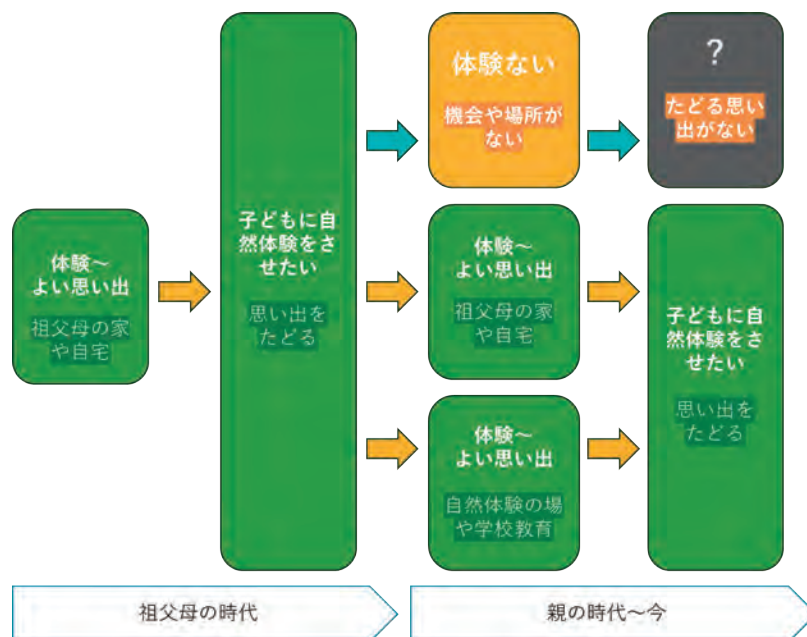
図5-2 「ふるさと」体験の場に必要要素と「ふるさと」観の関係



1-3. 今後の課題と社会に必要なことについて

ここで課題となるのは、子どもたちが「ふるさとへの心理的基盤」を形成する機会を得られない場合、その継承が途絶える可能性が考えられることである。継承が途絶えないようにするためには、行政、教育機関、NPOなどの団体、地域によって、個々の関心やライフスタイルに合った様々なつながりの扉が開かれている社会が必要である（図5-3）。

図5-3 「よい思い出」による自然体験の機会の継承



1-4. 持続可能な社会づくりの担い手育成に向けた追加の視点

今、子どもたちが「都市で生きるチカラ」を得る機会は多くあるが、「都市と農村どちらでも生きることができるチカラ」を育む機会が不足しているという視点を追加したい。

これから「都市と農村のつながり」についての教育の機会は、持続可能な社会の担い手育成や個々の未来への選択肢を広げる意味において、ますます重要となっていくと考える。言い換えれば、今、日常的に農村に想いを馳せたり、農村を暮らしの場として選択したり関わったり、自然環境保全に携わったりする人材を社会全体で育成する必要がある。

「農村で生きるチカラ」とは、元々日常生活の中で体験的な学びによって獲得されてきたものであり、自然とうまく付き合いながら、地域の人と調整しあい、山や田畑にある資源を暮らしに取り込み、創意工夫をしながら楽しく暮らしを創っていくチカラであるといえる。

しかし、都市はもちろん、農村にあっても生活が都市化されてきており、これらの体験を日常生活から得ることは難しくなっている。

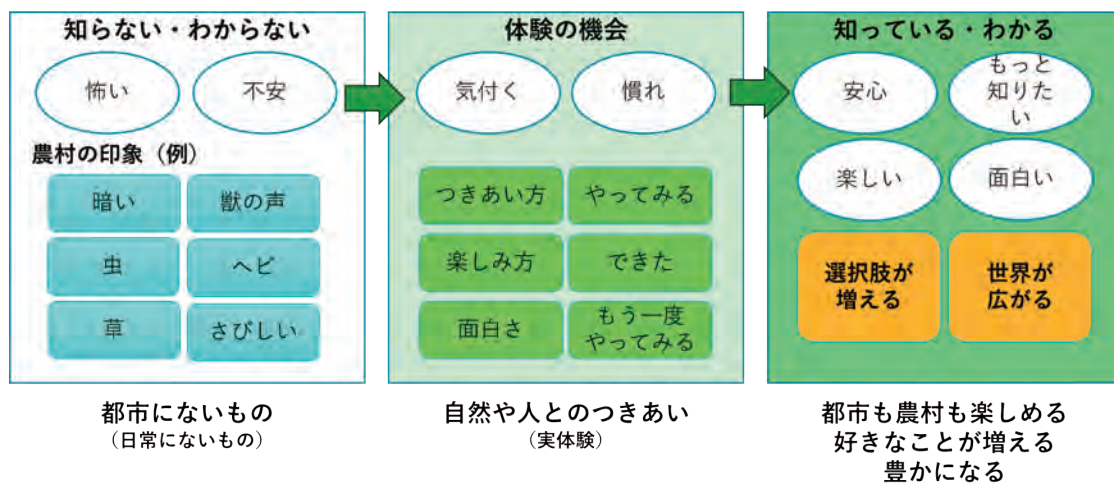
調査では、ほしはらでの子ども時代の体験を経て、都市から島根県立隠岐島前高校への島留学を選択した例や、同じように都市から自然が近い環境での生活拠点への選択をした例など、体験の機会によって自然や農村と関わる選択肢が広がった例を多数見ることができた。

体験交流の場として開かれた地域において参加者は、自然と暮らす中で思い通りにならないことやハプニングを、個性あふれる人々が互いに調整しあい、創意工夫を楽しみ、それらをもって豊かな人生としていく姿に出会うことができる(表4-6~9)。そのような気

づきが生まれる場が「農村で生きるチカラ」を感じ、学び取る機会となり、未来を担う人を育てている（図5-4）。

地縁のつながりがある農村地域を持たない人が増える中で、体験交流の場は、「豊かな人生」「持続可能なこれからの社会づくり」の両方にとって必要な場であるといえる。

図5-4 体験の機会と自然や農村を楽しむ人の関係



2節 体験交流による地域づくり

この節では、地域づくりの視点で上田地域の住民の関与の特徴について整理するとともに、他地域で参考となるような実践体制と農村の自然体験の場づくりにおいて必要な工夫について整理した。

2-1. 体験に必要な地域住民の様々な関与

本調査で明らかにしたような、農村における自然体験による効果を生じさせるためには、活動地域における住民の理解と関与が必要不可欠である。

ほしはらの活動においては、地域住民が、多様な役割を様々な度合いで担っている。

それらには「直接的」「半直接的」「間接的」な関与があると考ええる。

直接的な関与としては、例えば、民泊体験で子どもの受け入れを行うなどの役割がある。体験参加者は上田地域のおばあちゃんが作ってくれたお餅を気に入って、そのおばあちゃんにつながりができた（社会人Aさん）。その他、体験の講師として田植えやタケノコ掘りを教えたり、田畑や山の一部を体験の場として提供したりと、直接的な関与は体験プログラムを進める上で重要な部分を担っている。

一方、地域住民の暮らしが営まれていることによって、田畑や畦が管理され、道沿いに四季折々の花や実が見られる農村ならではの心なごむ景観もまた、体験にとって重要な要素を担っており、これは間接的な関与であるといえる。上田地域では例えば、お茶畑の景色に感動したことによって移住が生まれ、その後、農村景観を守るための継業につながった（IターンCさん）。

アンケートやインタビューでは表現されていないが、例えば体験参加者が地域をお散歩しているときに、地域住民が「どこから来たん」「去年も来とったかね、大きゅうなったねえ」などあたたかい声をかけ、小さなふれあいが自然に生まれることは、半直接的な関与である。地域に受け入れられていることを感じる重要な要素となっている。

このように、農村における自然体験には、地域住民の様々な関与が必要不可欠である一方で、住民の負担感が大きくなると活動を継続することが困難になることが予想される。

そのため、図5-5で示したように、自身の体力やライフステージ（子育て世代、親の介護をする世代、フルタイムで働く世代など）に合わせて自分が対応できる範囲で参加・手伝うといったように、地域活動との関わり方や濃度の「行ったり来たり」が可能である地域づくりが重要であると考ええる。

2-2. 効果的な活動を実践していくための体制の工夫

ほしはらの活動を支える体制について、上田地域、活動の参加者や講師・サポーターと当NPOについて関係を整理した(図5-7)。次のような人材交流や多様な関わりが、継続的な活動につながっていると考える。

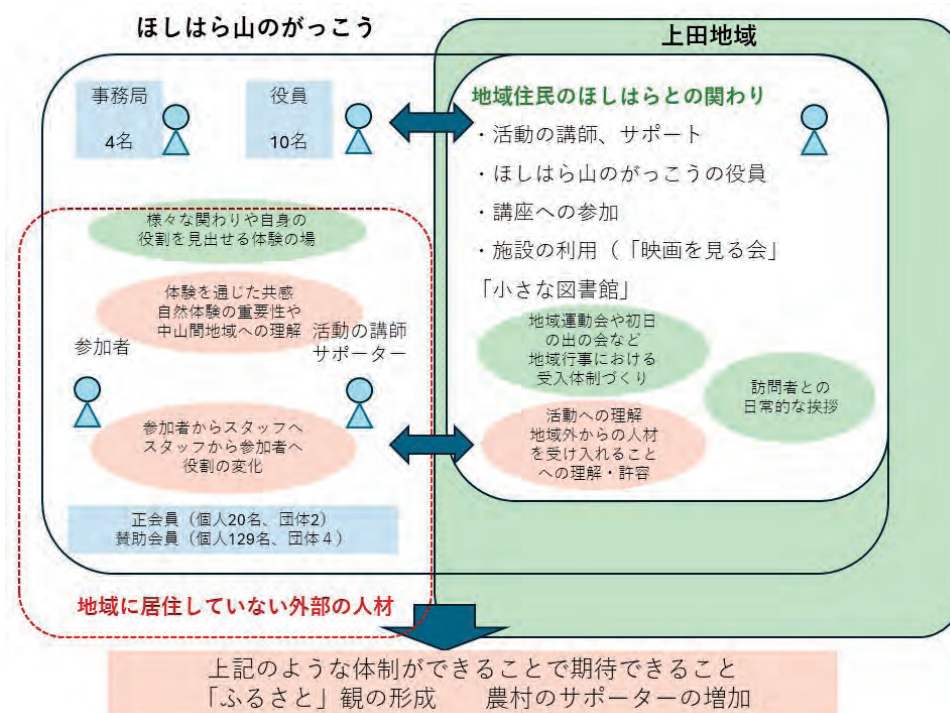
「地域住民」はほしはらの活動に対して、「活動の講師やサポーター」としての役割や「役員」を担っており、時に講座などの「参加者」として参加している。また地域住民同士や親戚・同窓生などが交流する場として施設(校舎)を利用している。

また、地域住民が中心となって行う地域運動会や初日の出の会などの行事を、交流者が一緒に楽しめるように設定するなど、地域側が受入体制をつくっている。さらに自主的に、活動参加者が地域で散歩しているときにあいさつを交わしたりしており、来訪者に地域のあたたかさを感じさせている。

「活動の講師・サポーター、役員」には、活動開始当初から地域外の者もあり、地域内外の視点を大事にしている。また参加者が活動の講師・サポーターへと立場を変化している場合もある。活動の参加者としての関わりだけではなく、様々な関わりを見出せる体験の場づくりをすることで、参加者からスタッフへ、またスタッフから参加者へと立場を変化させていくことができている。

地域外からの「参加者」や「サポーター」は、外から目線で地域資源を見つめ、地域住民にその価値を伝えることで、地域資源の再発見や誇りの醸成につながっている。

図5-7 ほしはらの体制とそれぞれの関わりの工夫

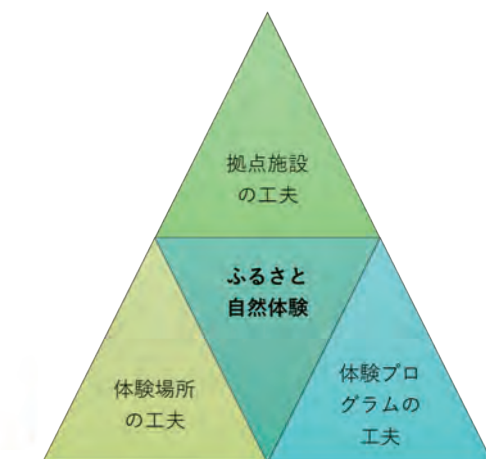


2-3. 農村の自然体験の場づくりにおいて必要な整備とその工夫

以下の3つのポイントが農村の自然体験を充実させ、ひいては「ふるさとへの心理的基盤」を形成すること、そして当該地域の全国のサポーターを増やすことにつながると考える。

- ① 拠点施設の工夫（例えば、地域のシンボルでもある元校舎を利用できること、空き家などを体験施設として利用でき、地域の暮らしとの関わりを感じられること）
- ② 体験場所の工夫（田畑や森など農村体験に必要不可欠な資源を体験の場として活用できること、開拓など自由度の高い利用ができること）
- ③ 体験プログラムの工夫（体験を通じて農村の人や自然、暮らしとふれあい、愛着が生まれること、自由度や寛容さがあること）

図5-8 充実した農村の自然体験の3つのポイント

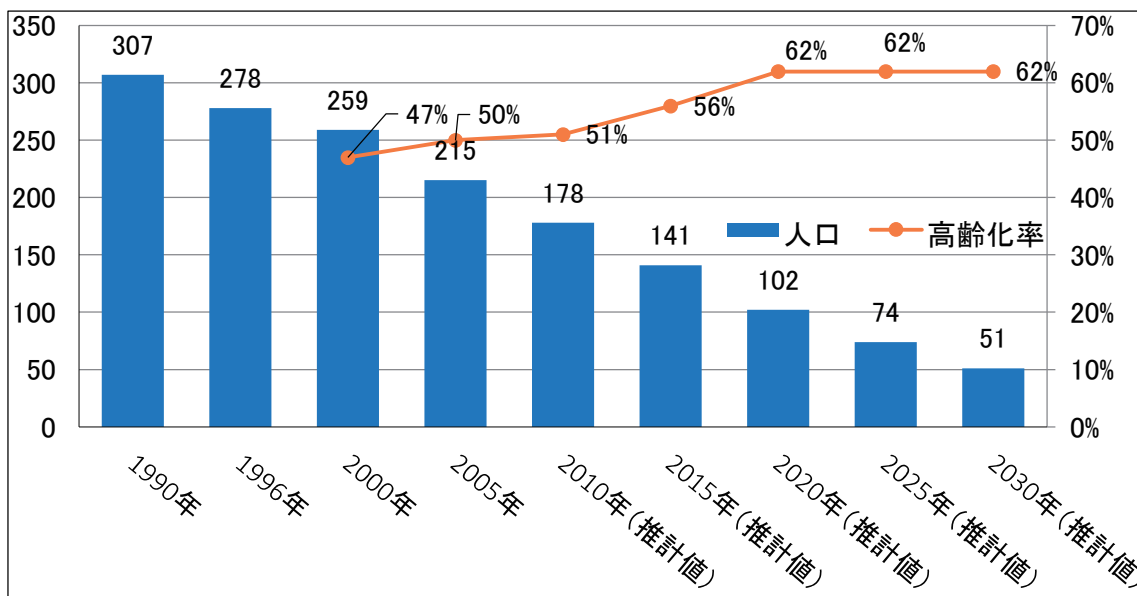


2-4. 体験交流と移住定住

上田町の将来推計人口について、2000-2005年時点のデータを用いて推計値を算出した場合（図5-9）と、2015-2020年時点のデータを用いた推計値（図5-10）を比較すると、総人口の将来推計値は改善している。今後、総人口が右肩上がりになるのは難しいかもしれないが、過去の推計値よりもゆるやかに人口が減少しているといった特徴がみられた。

IターンCさんのインタビュー内容にもあったように、Iターン者に寛容である背景には、長年、地域外からの参加者との交流を行い、関係性を築いてきたことがあり、移住定住者にとって居心地のよい、オープンな地域の雰囲気につながっていることが考えられる。

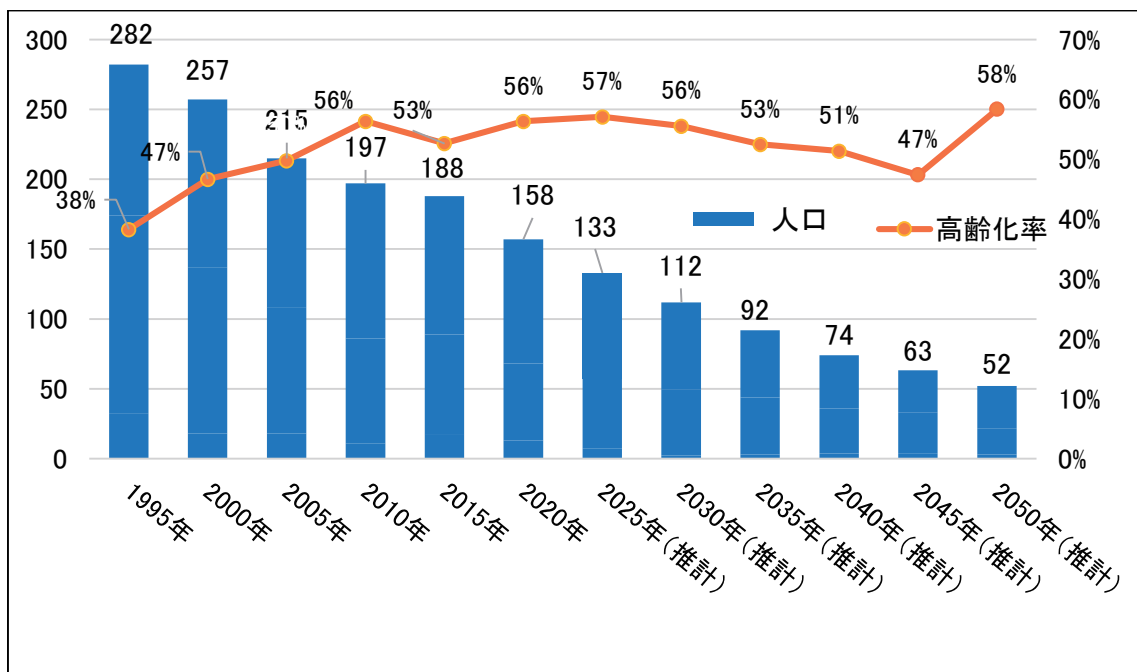
図5-9 上田町の今後の人口予測（2007年時点）



データ：国勢調査（2000、2005年）をもとに島根県中山間地域研究センター人口推計 Excelシートを用いて作成。

注：2010年以降は推計値である。

図5-10 上田町の今後の人口予測（2024年時点）



データ：国勢調査（2015-2020年）のデータをもとに、島根県中山間地域研究センター人口推計 Excelシートを用いて作成。

注：2025年以降は推計値である。

おわりに

今後、持続可能な暮らしができる社会づくりを推進していく過程において、農村や自然環境に関心がある人材を増やすことは、さらに重要になる。特に人口減少が進む中山間地域において、人手不足は喫緊の課題であり、IU ターン者だけでなく、農村の暮らしや景観、生物多様性の保全など自然環境に関心がある人たちを増やし、関わりを創り出していく必要がある。

そのなかで、子どもの自然体験を通じた学びの機会づくりを推進し、「ふるさとへの心理的基盤」をもった人材育成に力を入れることは、未来への投資となる。都市農村交流や体験による効果はすぐに形として見えるものは少なく、また、効果が現れるまでに時間がかかる。しかし、今回の調査によって、体験参加者一人一人の多様性あふれる「成長」が育まれていていた事実を、物語として数多く得ることができた。また農村における自然体験活動は、「ふるさとを次世代につなぎたい」「子どもの自然体験の場を支えたい」という共感を基にした未来の担い手を育成し、交流によって農村地域に活気をもたらし、移住者を受け入れやすい地域づくりにつながる事が明らかとなった。

今後、様々な地域で農村における自然体験活動が行われ、これらの効果を拡大していくためには、地域住民、行政、教育機関、民間企業や団体が連携しあって活動を担っていく必要がある、社会全体としても活動の効果を理解し、支援することが重要である。

おわりに、今回の調査研究に際して協力して下さった皆さまに、心からお礼を申し上げます。特に、心を開いてご提供くださった、たくさんの自由記述やインタビューでの詳細な語りは、この研究題に留まらず、様々な視点で大切なことを伝えてくれる貴重な資料であり、宝物である。

資
料
編

資料編

ストーリー記録

1. 11人の参加者のストーリー

社会人Aさん

<プロフィール>

1993年生まれ。因島出身。当初小学4年生。2003年開校したばかりの頃から子ども対象の体験塾に参加。以降約3年間、年間を通して地域のとんどや民泊などの行事も含めて参加した。7泊8日子どもキャンプには2004年から3回参加。2014年から数回スタッフとして参加。現在千葉県在住。



因島の友だちと参加～フキノトウ摘み

現在の生活や仕事

2020年に結婚した。千葉に住んでいる。1回就職して、辞めて、実家帰ってる時期もあったりして。で、またこっち出てきてて、ちゃんと仕事せずにいたんだけど、コロナの時になんかオンラインでも仕事できるかもみたいな風潮になった時に、オンラインだったら家で仕事するのいいなと思って、やり始めたっていう感じだから、ちゃんと就職したっていう感じではないかな。

車が運転できないから、なんか都会にいる方がアクセスは楽。今本当に流れでここに住

んでるっていうだけで、ここに住み続けたいっていう意思があるわけではないけど、便利だから住んでるっていうのはあるかな。

でもその、旦那ちゃんとしゃべるので、自分たちがもう2人とも田舎育ち、こっちで子育てするっていうのは想像できないなっていうのはありますけどね。もし、その子ども育てるとかなったとしても、子育てイコール田舎でするものとは思ってる。電車とか乗っていると、ランドセル背負ってるちっちゃい子とかが電車乗ってきたりとかするけど、なんかそういうのを想像できないというか。

ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ

1番最初は小4とかだったと思う。私と友だちが多分、本当に(ほしはらの活動を)始めます、ってなって、母が…。

なんかうちお母さんが、そもそも山のがっこうに通わせてくれたのは、海の話は母さんが教えてあげられるけど、山の話はわからんけんって言って、行かせてくれるようになって。海系はまあ、うちのお母さんが潮干狩りなり、ワカメ取りに行ったりとか、釣りしたりとかってのは、お母さんが教えてくれて。

そもそも山自体がなんかそんな子どもが行くような感じじゃないもんね、因島の山って。おじいちゃんおばあちゃんが畑作業に行くみたいな、山のドライブ用みたいな感じ。イモリのお腹が赤いとか想像したことなかったもん(ほしはらの田んぼ体験でイモリを初めて見た)。

山のイメージは、もうイコール山のがっこうみたいな感じがあるかもしれない。他の地域のとこ、多分それぞれどこも違うんだろうけど、そのことってさ、今、今気づいた。

ほしはら山のがっこうの活動で印象に残っていること

え、なんか凧あげ、普通に地面からこうあげよったけど、あいあい(スタッフ)ん家の近くの田んぼから、段になっとって、段の上から(凧を)あげれるって、ちょっとずるができる場所があって。あそこであげるの好きだった。

民泊で、あいあいん家に友だちと一緒に行って、なんかあのなんて言う…切り絵？(神楽の切り絵を作った)あれまだ家にある。実家に飾ってある。



民泊で作った神楽の切り絵

(民泊で)西川さん家に行きましたね。そう、おばあちゃんの柏餅が本当に美味しくて。多分私めちやくちやそれ言ってたから、その後、山のがっこうの違うやつに行った時も、なんかおばあちゃん、わざわざおばちゃん(息子の妻)に持たせてくれたりとかして、何回か柏餅を持って帰った。1番最初はうんそうそう、民泊に行って、なんか多分出してもらって、食べて、もうこんなに美味しいものがあるのかと思って。それをなんか結構行く度に、三次に行くたびに、もらってた気がする。

結構でも断片的な記憶だけど、しめ縄作りはまじで覚えとって、しめ縄。コロスケ(スタッフ)とた一ちゃん(地域の方)が教えてくれた。

あとね、(学校が建て替わる前の)トイレがね、もう怖すぎたのはすごい覚えてるけどな。

(ポットトイレの)底全部、底ですよ。あの、へこんでて、真ん中だけ底じゃなくて、全底。大人からしたら多分またいでも、落ちんと思うけど、子どもからしたら、もう、またいだら、そのままズコって落ちるんじゃないかっていう恐怖だった。



民泊で柏餅づくり

自然や農村、環境のこと

いまいどん(スタッフ)の、その一緒にいたので覚えているのは、キャンプの中で、なんか、リンスとシャンプーを手作りしようみたいになって、手作りしたり、なんか一緒に洗濯板で洗濯するみたいな。(それ)を一緒にやって、そういう自然的な感じ?を楽しんでる、そういう姿が私はなんかね、輝いて見えてたのよ。いまいどんと、はしもっちゃん(スタッフ)がなんか輝いてたの。ナチュラルテイストの中にいる2人がすごい輝いてて、あ、自然を愛するっていいなって思った。微笑んでた。

今、自然体験をすること

うーん、ないかな。ま、行っても公園とかでちょっと緑があるところに行くとか。あとは実家に帰っても…いやないかな。今はもう本当にそういう自然体験的なものってないかな。

だって、こっちに住んでたら、隣の家、隣の部屋の人の顔見たことないもん。なんか、そういう世界が当たり前の子たちからしたら、なんかああいう、子どもたちのために、そのお姉さん、お兄さんなり、おじさん、お婆さんなり、おじいちゃん、おばあちゃんなりが、あ

あやって、集ってくれるっていう（山のがっこうの）環境ってかなり新鮮と思う。



地域の方との交流

日常的に思い出すことがあるか

私にとっては結構なんか、本当一部みたいな感じはあるかも。結構大事な重要な時期を過ごしてる感じがあるから。なんか一部…どこかに多分ずっとあるものって感じはするから。

なんか、ちょいちょいそのあいあいの、私の中で名言シリーズみたいなのがあって。

例えば、これスタッフになった時か、もうちょっと大きい時と思うんですけど、「私、人の話全然聞いてないんよね」ってあいあいに言ったら、「でも、それで困っとらんじゃん」って言われて。あ、困っとらんかったら、別に人の話聞いてなくても大丈夫なんだって思ったのも覚えてるし。

あと、なんか1回だけあいあいにガチで怒られたことあって。そう、でもあれはね、完全に私が悪いんだけど。なんかあの一、その大学生のスタッフが来てくれた時に、私が多分参加者側で、あっちゃん（大学生の班付スタッフ）をすごい私が好きだったから帰ってほしくなかったんだけど、7泊8日のどっかで帰っちゃう。で、代わりのスタッフが来るよみたいな。女の人、名前覚えてないけど、来てくれて。で、もう私的那个人に会った時に、「あっちゃんがよかったのに」って言ったの。そ

したらあいあいにすごい真顔で、「今は良くないよ」って言われて。

あいあいが本気で怒ってると思って、あー、今は謝った方がいいみたいなの、私が悪いから謝った方がいいって言われたのが、本当にあいあいを怒らせたなと思ったのを覚えてる。そう、いい意味でなんかなんだろ。そのやっちゃいけないことと、いいことの線引きみたいなの。さっきのなんか、何やってもいいけど、人のこと傷つけちゃダメだよみたいな線引きなのかなって、私の中では解釈したっていう。そうそう、そうそう、これはすごい印象的な出来事だったかな。

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場か

わがままの1番多分大将感が強かったね。なんか、その学校でそういう風にやったら、ちょっと疎まれちゃうけど、ほしはら山のがっこうでそれやっても誰も気にしてないというか。それが結構新鮮だったのかもしれない。

うん、私、覚えてるのが、7泊8日の時に落とし物（持ち主探し）の時に、ほぼ、私とRちゃんのやつばかりで。そんなんとかも、学校でやったら多分やばいけど、なんか山のがっこうだったら、もうただのネタみたいな、感じだったのをすごい覚えとる。そうそう、なんかそれも許される世界観っていう。

ああ、なんか私にとってあいあいは、なんか第2の母ポジションだから。

会えんくなっても、じゃ、誰かに、「お母さん以外に、もし、その質問する人いないけど、なんかお母さん以外で、そういう母らしい人いますか」って言ったら、100%、あいあいって答える。

ふるさと感めっちゃある。

その今、今の1日とかだったら、その短く感じるけど、だって、10歳ぐらいの何日間かだったら、多分濃いんじゃないかな。

(1週間キャンプは)すごい濃い。あれはめちゃくちゃいい経験よね。あの時期に1週間、親元離れてキャンプするって素敵。

遊びとかもそうだし、なんかやっぱ(親からの)手紙読むとかも。ああいうのって、多分山のがっこうに行かんかった子とかは、多分ほぼ100パーすることない経験と思うし。

あれもそうだし、うーん、なんか恒例のあの滝登りとかも。滝遊びって、多分本当に多分、子ども時代に滝遊びをしたことがあるっていう人の人口ってめっちゃ少ないと思うよね。そう、かなり貴重な経験なはず。

そうだし、やっぱある程度大人が何人かこう見てる環境じゃないとできないから、多分親子でやるとかも結構まあなかなかないんじゃないかなと思うから。気軽にはいけない。

自身の成長や変化について

そうね。今、私、山のがっこうとは全然違うけど、なんて言うんだろう、学習塾じゃなくて、学習支援塾みたいなのこの先生みたいのやってて。そこはなんか同じ感じ、何やっても、人を傷つけない限りはオッケーみたいな、世界観のなんか、その雰囲気似てるから。

だって、塾の先生なのに、髪の毛もネイルも先生側も何も、あれなくて、うちらも、やり方、授業のスタンスも全部内容も含めて、全部自由っていう。

ただ、なかなかやっぱ1対1とか1対少数とかで、じゃないと実現しづらいから、大衆向けではないのはわかるけど。

(この塾は)もう1対1、マンツーマンで。授業の前後とかで、他の先生とか生徒も含んで、会話とかして、授業自体は1時間半マンツーマンって感じ。

うん、2年ぐらいやってるかな。その今の塾はその発達特性の子、まあ、不登校の子とか、

中高生(が対象)。仕事自体ほぼ9割以上はもうオンラインでやるから。

あ、なんか、その系のエピソードで、私すごい覚えとるのが、なんか、私もまだ参加者の時、だけど、中学生とかなんかな、ちょっと上の方で。4年生ぐらいの男の子で、ちょっと結構特性が強い子がおって、その子がね、なんかね、なんだっけな。なんか取りに行ってくださいって、みんな荷物置いとる部屋に取りに行ったんだけど、帰ってこんみたいな時があって。で、その理由はあいあい説明してくれたんだけど、その子が荷物取りに行ったんだけど、目の前に懐中電灯が見えて、懐中電灯だと思って、懐中電灯をつけたら、懐中電灯の光が天井に映って。それが、わーきれいだーってやってて、違うことがまた始まってみたい感じで、彼はその部屋から戻ってこなかったんよ。っていうのをあいあいめっちゃ楽しそうに私に話してて。そう、なんかそのなんて言うんだろう。あの、大らかさっていうか。

そうそうそう、なんか、こういうのもなんかその怒ったり、怒ったりっていうことはないけど、こっちに連れてこうとするんじゃないで、一緒に、わー本当だ。天井に映ってきれいだねって遊ぶのって楽しいなって思った。

そんな時は私にはできんからあいあいすごいなって思ってたんだけど、なんか今、その、似たような雰囲気の中環境の中にいると、そうありたいなって思うから。

(他にも、長期キャンプの時)なんかこう団体行動だから、たまに疲れて、ちょっとひとりで違うことやったりとかはしてたと思うけど、でも(それが許されるから)、基本的にはあの環境はかなり好きだったかな。

その経験があったからかわかんないけど、それがオッケーなんだっていう世界観をその時に知れたから、大学で入ったサークルも、今の職場も、みんなそれぞれ違う方向を見てて

いい、みたいな。その同じ方向なんだけど、みんなそれぞれちょっとずつずれてていいよっていう環境を選べたのはあるかもしれない。

やっぱり、それを早い段階で知れたっていうのって、結構価値があると思う。それで言うと、私、最近ジムのおばちゃんたちにめちゃくちゃ可愛がられてる。

その、田舎育ちっていうのも、そもそもの育ちもあるけど、山のがっこうとかで、そういううちっちゃん時から、かなり年の離れた人と接することを覚えたというか、大人になってからでも、すごい年が離れてる人見ても、なんか抵抗なくしゃべれたりとかはするかも。

社会人 B さん

<プロフィール>

1998 年生まれ。尾道市出身。当初小学 1 年生。2005 年 11 月より数年間、子ども対象の体験塾に参加。2007 年からは親子対象の体験塾に妹(当初 2 歳)・父母の家族 4 人で参加。2007、2008、2012 年の 3 回、7 泊 8 日子どもキャンプに参加。現在東京都在住。



初参加の日～大豆できなこや豆腐づくり

現在の生活や学校

(就職して)今 2 年目ですね。地元広島で、帰るっていう選択肢もあったんですけど、なんだろうな、ま、学校が関東にあったっていうのもあって、こっちでまあまず就職活動するって。そもそも(コロナ禍で)帰りづらい時期だったんで。東北でもいいかなとか思ったりしたんですけど、なんかどこでもいいって言ったらあれだけど、親元を中学から離れて行ったぐらいだから、別に 47 都道府県どこに行ってもいいかなっていうのは、うん。住む場所もまあ大切ですけど、何を自分が、何がやりたいかっていうのが大切かなと思いますね。

観光も興味があって。公務員とかそういうのも色々考えてたんですけど、ちょうどコロナ禍の時期、就職だって。観光業とかも、もう結構厳しい時期とかでもあって。いろんな視点から将来考えた時に、やっぱり、食っているのは、ずっと、コロナが続こうが、もうなん

か、人間が生活していくには絶対欠かせないことで、絶対大丈夫だろうって、続くだろうっていうのもあって、やっぱりそういうのも。スーパーとかもいいかなって思って。そういうご縁がありまして。

水産っていうのは、本当は決められなくて。上の方が君は水産だとか、そういう風に決めるんで、本当に魚はご縁があったな。でも隠岐の学校*行ってたっていうので、多分それで水産にさせられたんじゃないかな。でも、魚はもう好きなんで、すごい良かったかなとは思いますが。

***隠岐の学校**=島根県立隠岐島前高等学校。2008 年から『島留学』として、日本全国からの生徒を募集している。

ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ

いきなりキャンプじゃなかったような気がするんですよ。そば打ちか、なんかおいしい楽校でしたっけ。特に母親はそういう経験させたいっていうのは、多分あったと思いますね。母親はもう本当機械とか、それこそあんまり好きじゃなくて。スマホもなかなか持たなくて、持ちたくないみたいな。今はさすがに。僕が高校入った時に、ずっとガラケーだったんですね、なんか頼むからスマホにしてくれって。やっぱり機械とかそういうものより、やっぱり自然とかそういうのが好きなんじゃないかなと思います。

結構、ほとんどあんまり冷凍食品とか出てきた覚えなかったんで。それこそ、玄米とか雑穀米とかなんかよく出てきてたなどは。そういう健康志向はありますね、多分今でもあります。

(今自分は)普通にカップラーメンも食べますが、やよい軒(チェーン店の定食屋)と

かで雑穀米とか選べたりしたら、なんか自然と食べたいなって思う時もあります。

結構昔はよく（家族）キャンプとかも行ってたなと思います。今思い出すと、部活とかやってたら、そっちに親もなんか巻き込んでってなっちゃうんで。

あ、中学校の頃は、もうどうしても最後の（7泊）キャンプに行きたくて、なんか野球の練習だいぶ休んでいったような気がします。

7泊8日子どもキャンプにまた行きたいと思った理由

それはやっぱりいろんな人との出会いがあって、大学生のスタッフさんとかも、また来年来てねって言って、みたいな感じ。そういう、ま、もちろん体験とかもなんですけど、人とのつながりがなんか一番大きかったんじゃないかなと。



キャンプで大学生スタッフと

ほしはら山のがっこうの活動で印象に残っていること

はしもっちゃん（スタッフ）。よく印象に残っていますね。今西さんご夫妻（スタッフ）も。

川登りと、一番印象があるのは、なんかチームで本当にテント張って、なんだ、岡田山でしたっけ？なんか、山登ったなっていう。泊まった記憶ありますね。飯ごう炊きで、

ごはん自分たちで作ってっていう。もう当時からしたら、ご飯も作ったことないような。なんかでもすごい楽しかったなっていう記憶があります。

嫌な思い出は1個もないですけどね。楽しい、楽しかったっていう記憶しかないです。なんか、逆にもう終わりかっていう、なんかもう8日目が来て寂しかったような。帰らないといけな。

（最終日に参加者同士で寄せ書きした）色紙は実家にあると思うんですけど、僕のそこにはないですね。なんかすごいいっぱい書いてもらったんで、捨ててないと思うんですけど。

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場か

そうですね、もう自然がもう周りにない、そんなない家だったんで。（育った家は）駅の近くなんで。

本当に大きい自然体験は、もう初めての自然体験は山のがっこうなんじゃないかなと思いますね。本当に、特に公園でとかならまあ、あるかもしれないですけど、ちゃんと、がつつりした自然体験ってというのは、もう山のがっこうが初めてだったような感じがします。



そばの収穫

本当にマンションとかに、特にもうビルとか住宅街ばかり見て育ってる子にしたら、もうすごい、大きな自然体験です。

セミ採りは、自分の家のマンションの下の
なんか木でやってました。アブラゼミとかク
マゼミ。けっこうまあ来るんで。なんかもう
整えられた木で、木に集まったセミを採って。

日常的に思い出すことがあるか

あります、あります。山のがっこうのホーム
ページとかも何回か見たことあります。

ああそうだ。多分母親も会いたって言って
ましたね。どうされてるかなって言ってま
したね。

自身の成長や変化について

そうですね、一番はなんかスタッフさんと
か仲間と何か物事やるってことです。ね。
やっぱりあそこで集まった初めましての人た
ちと、何か協力して、キャンプのご飯作っ
たりとか、そういう経験っていうのも、なかな
かちっちゃい頃からできなかつたんで。そう
いう経験がやっぱり後に自分から親元離れて
島に行って、知らないところで生活するって
いう、ちょっと勇気じゃないですけど、そう
いうのにもつながってたりで、初対面の人と
かとも、そんなに分け隔てなくしゃべれるよ
うにはなつたかなと思うんで、すごくありが
たい経験をさせてもらったかなと思ってます。



沢登り

自然や農村、環境のこと

高校3年間、(隠岐の島の)海士町にいたん
ですけど、もうその頃から、結構注目を浴び
てる島だったんで、色んなところから、やっぱ

調査とかメディアの方とかよく来られてまし
たね。

まあ、普通科の高校なんで、なんだろう、普
通の高校生と基本は変わらないんですけど、
やっぱり寮生活だったり、都会とかの高校と
はまあ全く違う。もう、すぐそばに海がある
山があるっていう、そういう生活だったんで、
すごい新鮮でしたね。

普通に部活とかはやってました。野球を。
部活終わってそのまま海行ったりもしまし
たし、すぐ徒歩10分くらいに海岸があつた
んで、結構しょっちゅう行ってました。なん
かもう、野球のユニフォームのまま入って
たりした。ベランダでちょっと拭いて、その
まま風呂入ったりしてました。

サザエとかは食べましたね、結構。もうそ
のままつぼ焼きとか、バーベキューみたい
にするか。寮で、結構バーベキューとかを
やってたんで、一年に何回かな。そういう機
会とかもあつたりして。そういうことやら
してもらったり。

あと、海士町がなんかサザエカレーって
いうのを推してるんですよ。レトルトで結
構売ってたりするんですけど。そういうのも
食べましたね。ま、結果的には、サザエカ
レーよりサザエそのまま食べた方が美味し
いなって思った。いや、やっぱ最初は結構
独特でしたね、肝とかは。でも、やっぱ島
の子がもうみんなもう食べるっていうか、
サザエとか海のもので育ってるので。そ
ういう影響はあつたかなと思う。

島での交流のこと

面白かったです。もう島の子とも結構仲良
くなって、未だに仲良くしてる子もいま
すし。(島の子は)結構最初はまあ内気
っていうか。1学年50、60人ぐら
いだったんですけど、大体もうほぼ半
分半分で、島の子と県外から来た子
が。県外生も多く来るから、慣れてん

かなと思ったんですけど、結構そんなことなく、最初はみんなもう島の子は島の子でなんか集まったりしてたんですけど、徐々にまあ打ち解けてじゃないですけど、仲良くなっていったかなっていう。

カルチャーショックはなかったか

そうですね、いや僕は結構なかったですね、それこそ、山のがっこうで、もうそういうとこにちっちゃい頃から経験さしてもらってたんで、まあ、怖いもの知らずと言いますか。そんなに、怖い、なんかカルチャーショックみたいなものなかったです。

隠岐の高校に行ったきっかけ

なんかそういう、(山のがっこうで)自然にふれあえる機会があったからこそ島に行きたいなっていう気持ちになりましたし。結構ほぼ自分で高校はそこ行きたいって親に言って決めたんで。

あ、見つけたのは母親なんですけど、まあ、ちょっとこういうのあるよ、みたいな感じで紹介されて、あ、ここにちょっと行ってみたいみたいな感じで、もう、すぐオープンキャンパス行って、もうそこで決める、ここに決めたっていう感じだったんで。

やっぱなんか普通の尾道の市内の高校に行ってるっていう高校生活よりもちょっとチャレンジして、親元離れて経験したいなっていう気持ちが多分当時強かったんじゃないかなと思います。

隠岐での経験からつながること

でも僕、今(隠岐に)帰ってもなんかもうすごい、今島にいる人が誰なのか、正直わかんない。先生とかもやっぱり異動されたりして、

僕のことわかってくれるんだろうかっていう。でも、帰れる場所だとは思いますが。島の人はあったかかったんで、はい、みんな受け入れてくれるかなとは思いますが。

そうですね。(隠岐は)やっぱり、第2のふるさとかな〜とは。

(大学は)埼玉なんですけど。地理なんです。地図とか結構好きだったんで、まあ小さい頃から。まあ、地理に興味あったんですけど、やっぱ島前高校が地域視点で物事考える授業とかたくさんあったんで、自然と地域のことについて考えるっていうのが、自分の中でもやりたいなっていうのはありました。

やっぱり田舎とか離島だと、自然と地域は切っても切り離せないことだなっていうのは思いますね。

大学では商店街のことをやったんですけど。あの、巣鴨(東京都)になんか、結構お年寄りが集まる商店街があるんですよ。ここの変容じゃないですけど、昔からずっと今までお年寄りに愛される商店街はなんでなんだろうとか、そんな感じで、地域視点で考えて、研究してましたね。

また、島にいたらどうでしょう。いや、でも島も帰りたいなって思う時はたまになんかあるんで。なんかもう満員電車ばかり乗っていると、もう本当に田舎がいいなと思ったりすることはあります。

都会には都会の良さはあるんですけど。なかなかどっちがっていうのは、なんかまだ自分の中でわかってないっていうか、どっちの良さもまああるかなっていう感じで。

大学生 C さん

<プロフィール>

1999 年生まれ。広島市中区出身。当初小学 3 年生。2008 年 6 月より数年間、年間を通して親子対象の体験塾に母子で参加し、2 回目からは姉と 3 人で参加した。2008~2014 年の 7 泊 8 日子どもキャンプに参加。現在奈良県在住。



ブドウの収穫と加工体験

現在の生活や仕事

仏像とか美術とかを使って、教育普及とかをしたいなっていう風に、第一志望は思っているかなっていう感じ (大学院在学中)。でも働き口のない世界だから、まあちょっと仕方なく、他の一般企業もちょっと就職活動してみたりとか、今してる最中かな。

なんか昔からすごい美術が好きだった。作るのはへたっぴだったけど、見て何かを、それこそ妄想することがすごく好きで。

美術って結構意思の伝達であったりとか。

仏像に初めて出会ったのがいつかはちょっと覚えてないんだけど、人の願いを込められて作られて、同じ願いを持ったたくさんの人たちと相對してきたものと、今、自分も全く同じ目線で見られるっていうものがなかなかないなと思って。その人と同じ感情で、ものを見ることができるとなった時に、仏像っていうのがこう一番そういう願いの対象になりやすい。立体物だし現身だしっていうところで仏像面白いなって思っ

やっぱり 10 年は下積みが必要だよとか、博士、留学行ってないとダメだよとか、すごく厳しい世界だなっていうのを大学院入って、いろんな人とか話してたりとか、あちこち行ったりするうちに、やっぱり話を聞くようになって。学芸員になりたいけど、なれないだろうなって、今思ってる。

自身が育った環境

もう結構極端なところにいたから。三越ダッシュで 10 秒だったから。人が住めないような場所に無理やり住んでたから。そう、やっぱりあのクラブの音楽で、夜ずっと明け方まで鳴ってる中でずっと寝てて。今でも。

逆にほしはらも非日常だし、実家も今思うと非日常だなって思うけど。

でも、それを天秤にかけて、どっちが性に合ってるかなって考えた時に、やっぱりほしはらが恋しくなるから。今も。

ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ

なんか、母さんが小さい頃から、私たちに自然で遊ばせようっていう意識がすごく強くなって、ほしはらの前に、広島県の阿戸町っていうところにあるアート村っていうところで、ずっと遊んでたのね。それはなんか、どっかかという、しっかりと決まったルールがあって、プログラムがあって、それに従って遊ぶっていうもので。でもなんかちょっとこう決まったプログラムに沿ってやるのが制限されるっていうのがちょっとこう母さんの苦痛だったのかな。それで、(ほしはらを)お母さんが見つけてきて。

で、お茶摘み、最初がお茶摘みで。

私と母さんだけで行って、帰ってきて、姉にこういうところがあるんだよって言って。お茶摘みが春とか、その夏の前だったから、次、7 泊 8 日キャンプで、そんな時、私は 7 泊 8 日

キャンプが2回目で、姉が初めましてだから、私が姉に「ここはこうだよ、こここうだよ」ってめっちゃ説明したの覚えてて。

他にも（ほしはら以外に）いろんな農場行ったりとか。小学校1年生の時に、北海道の農場で1週間過ごしましょうみたいなのに参加して。

ほしはら山のがっこうの活動で印象に残っていること

普通にSくんと（お茶畑で）秘密基地みたいなん作った。みんながすごい頑張ってお茶摘みしてたり、お茶を炊いたりもんだりしてるのに、私たちだけずっと遊んでたなって思ってる。なんだっけ、タケノコの若いを取って、天ぷらにしてもらって、食べたのを覚えてる。

一番覚えているのは、キャンプインキャンプで、（班ごとのキャンプ地として）フルーツ農場にいかしてもらったことがあって。なんか色々…ウサギ肉とか…。(『冒険手帳』が愛読書だった自分とSくんが、ウサギがたくさんいるのを見て、本に載っていたウサギのさばき方をやってみたくて農場にいる地域の人に話したら、しめてくださったエピソード。)

片道、子どもの足で荷物抱えて1時間弱ぐらいしたんだっけな、そこまで。よく行ったと思う。行って、ウサギ肉もあのさ、ちゃんとさばいてあるものだったけど、鍋にして食べさせてもらって、なんかそういうこう、でもそこでしかできない経験だったなと思うかな。

そう、ここなら叶えてもらえるっていう、甘えてたのかな。ここなら非日常があるから、やらしてもらえるとっていう、まあ、年を重ねていったことでの安心感とか、甘えとか、信頼感とか、まあ甘えかな、とかがあったんだろうな。



ウサギの肉を調理しているところ

日常的に思い出すことがあるか

あった、ずっと夢に、1カ月に1回は夢に見てた。周りの景色とかいた人とかは、もう本当に、昨日のここのように思い出せる。今でももう夢に見るし。あ、ここ、山のがっこうだなんて。大体お昼とかで、なんかこう洗濯してるところとか、なんかあいあい（スタッフ）の歌が聞こえてくるとか、なんかみんな今自由時間だな、遊んでるとか。

校舎の裏にこう渡り廊下があって、そこで洗濯物とかして。そっち側に田んぼがあって、で、もうちょっと行くと、体育館があって、みたいなところとかを結構うろうろうろしてる感じかな。



自由にのびのび遊ぶ場所

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場か

めっちゃ楽しかった。私、作るのが好きだったから。木工させてもらったりとか、なんかそう山、ちょっと山というか、その辺こう散歩したりとか。自分の思ったように思った

ところに行って、思ったことができるのがすごい楽しかった。

私、なんかなんだらう、市内に戻ると、やっぱり自然もそんなにないし、結構自由に遊びに行くのが難しい感じだったから。こう自分の思いのままに、ま、危ないことはさすがにできないけど、自分が考えたように動くっていう力をすごい育ててもらったかなっていうの思ってた、それが楽しかったなって覚える。

なんか結構やっぱり作るこつっていうのを、自由にのびのびさせてもらえたのが一番こう良かったかなって。

なんかこう、実家が、今実家出てるんだけど、実家がすごくこう狭くって、自分たちの部屋がなくて、それにすごい憧れてたのね。だから、姉とする遊びも結構もう(家の中で)秘密基地作りとかっていうのがすごく多くって、それをこう、すごい自分の見たこともない広さで、なんでもここにあるものを使って、家が作れるの? ってなって、(段ボール基地を作って泊まる体験) すごいそれが嬉しかったのかなって思ってる今。



段ボール基地を作って泊まる体験

これして遊びたい、ああして遊びたいっていうのは、結構、お母さんがすごい本を読み聞かせるのが好きだったから、そういうものを読んで。アストリッド・リンドグレーンの『やかまし村の子どもたち』とかを読んで、それで、ちょっとなんかこれ作れそうだなと

か、あれできそうだなっていうインスピレーションが爆発したんじゃないかな。

こう遠慮なく、好きなだけやらしてくれるのが本当に夢みたいなお場所だったなって。

そう、ほしはらの思い出を、もう高校入って以来、ずっと誰とも共有せずに、生きてきちゃったから、今ちょっと半分泣きそうになりながらしゃべってる。やっぱり、車で2時間ぐらいかかるから。連れていってもらわないといけなかったし。

ほしはらで生きてた自分とは別の人格の方がやっぱりこう…上を占める、それで、もう完全にほしはらが楽しかったっていう思いも、一人で夢に見て思い出すぐらいで、そう思っちゃって。

そうそうそう、やっぱり大学受験もあったし、やっぱり親の期待もあったり、どうしてもなんだろう、普通の人間として生きていかなきゃいけない時期が来て。それで、もう大学に受かりさえすれば自由になると思って、高校3年間は過ごしたかな。

あんまり、こう、学校以外の思い出はない、高校3年間は。だからその、まだほしはらから、成長できてない子どものままの自分がいたりとか。

なんか、やっぱりタイミングだったなと思うし、もしかしたら、今、母さんとか、姉ちゃんとかに話しても、なんか「あーあったあった懐かしいね」みたいな話になるのかもしれないけど、なんかちょっとこう口に出すのをためらってしまうというか。

ちょっとそうやって、ひょっと口に出して、否定されるぐらいだったら、自分の中に留めておこうっていう判断を選んでしまうことが結構あったりとか。

どうしてもほしはらでの思い出は絶対に否定されたりとか、汚されたくない。絶対に。

小学校楽しくなかったし、小学校楽しくなかった、友だちいなかったもん。それこそ、ほ

しはらが本当の自分を解き放てるどころだった。

自身の成長や変化について

ほしはらで、それこそ、自分の話になるけど、私たちの面倒を見てくれてたお兄さん、お姉さんのことも見てたし、こう年が上がるにつれて、どんどん下がが増えていって。

で、私が中学生になった時、どっかの年であの班長を任せてくれた年があったじゃない？そのこととかもすごく覚えてて。

私、結構自分は自由なくせに、他の子たちがきちっとしてないと嫌なタイプだった。

班長の集まりで、結構その他の班長、Sくんとか、同い年の子たちはみんなすごいこう自由にさせてるのに、私だけ班の子はしっかりしてくれないって言ってて。

うん、なんかでも、面倒見てもらって色々教えてもらって、今度ちっちゃい子たちの面倒を見て、こう夜中、私が初めての夜はワンワン泣いてたのに、泣いてる子を寝かしつけてあげたりとか、そういうことをするようになって、なんか結構その、人と関わること自体がすごく好きになって。

私ね、美術の教員免許取ったのよ。中学と高校かな。あと、塾で小学生から高校生まで教えてたりとか、人と関わることに對してすごくこう積極的になったかなって思った。

ほしはらでの自分と普通の広島市内での生活の自分。どっちがほんとの自分かって言ったら、多分ほしはらにいる自分の方が近いと思うのね。自由奔放にやりたい方向になんでもやるし、こう、あまり周りの人のことを考えないというか、そういう面が市内、その学校とか、実家の生活では受け入れられなかったから。

ずっと抑圧されてきてて、で大学に入って一人暮らしを始めて。もうなんでもしてもいいってなった時に、ちょっともっと自分から

クリエイティブなところにちょっと行ってみようかなとか、ちょっと人と関わってみようかな、人と関わるのも、いろんな人との関わり方があるけど、子どもと過ごすの楽しいよなって思って選んでみたりとか、そういう経験は多分ほしはらで過ごさせてもらえないと、絶対にそういう意識が芽生えなかったなっていうのは、その中学と高校の同級生を見てて、結構思ってた。

そのみんな子ども嫌いだったり。あと、やっぱり結構虫に対して、みんな結構キャーキャーしたりとかっていうのもそう。



虫とのふれあい

ほしはらでの経験は、この学校にいる学年の中だと、私一人だけのものだって思って生活してたかな。

それがやっぱり最初のうちは、中学3年生までほしはらにも行けたから、合わせるよりも、我を出したくて、すごく苦労したなって思ってた。

なんかほしはらはもうすごい、樂園みたいな場所なのかなって。楽しかった。自分の感情をどれだけ出しても許されるというか、抑圧されなかった。

怒っても泣いても、あいあいとか、他の人たちがこう話を聞いたり、ちょっとそっとしておこうってしてくれたりとか。それがこう育ててもらったというのは、なんかちょっと変な話だけど

(自分は) まず結構ルールにはめないようになった。

結構、その塾の先生って言うても、いろんなタイプがあって。私は勉強よりも先に生活習慣とか、勉強を嫌いにならないっていうのをすごく考えて。とにかく楽しい話をしたりとか、何が好きなのっていう、他人に興味を持てるようになったなってすごく思う。

それはやっぱりこう、何かこう思い出すことの中で、今何してんの？とか、何作ってんの？とか、なんか、どうしたの？とか、色々話を聞いてくれる人たちが(いて)、それをしてもらえたのが嬉しかったなっていう体験があったからかな。

自然や農村、環境のこと

農山村はないけど、今通ってる大学が…今、奈良にいて、奈良公園から歩いて10分ぐらいのところなのね。だから鹿がいるわけ。構内に40頭ぐらい住んで。結構自然に近いところに住んでるから、夜、ウシガエルの声が聞こえたりとか鹿の鳴き声が聞こえたり。そういうのが苦じゃない。というか、逆にもう、ず

っと生活の拠点をこういうところに置きたいなってずっと思ってた、そう、そういうところでは、やっぱりそのほしはらでの経験が楽しかったし、これが好きだなって思うことになってるのかな。

学校見学に来た時も、あ、ここいいわ、みたいな感じで選んだりとかして。もちろん奈良に来たのは、仏像の勉強するためなんだけど。でも、やっぱりそのこう、自分に一番合った環境を無意識に選んだのかなと思って。そう、そんな感じかな。

結構その仏像見に行こうっていうのは、1日中歩きたい感じになるから、その教師に張りついていくと。その中で道なき道を行ったりとかするのはこう全然、あの山歩きの身のこなしとかは全然抵抗がなくて。とか、ちょっとここ危ないとか、この木触ったらかぶれそうだなとか、そういうのは全然こう見ても大なり思うし、ていうのは、なんか備わせてもらったのかなと思って。

高校生 D さん

<プロフィール>

2003 年生まれ。広島市西区在住。当初小学 6 年生。2015～17 年、7 泊 8 日子どもキャンプに参加。2021 年からジュニアスタッフとしてキャンプに参加。



ほしはらの森でハンモック

現在の生活や仕事

19 歳になった。進学、県外に行こうかなと思っている。理学療法士になりたい。一昨年に手術をした時に、痛すぎて、一週間ずっと寝たきり。理学療法士さんが優しくて。自分もそういう人になりたいな、みたいなの。

ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ

お兄ちゃんが（7 泊キャンプに）行って、帰ってきた時に、なんかめっちゃ楽しいって言って、でもその時、一人っていうのは無理だったから、2 年後とかに行っただけですけど…自分から（親に）行きたいって言いました。

日常的に思い出すことがあるか

え、なんだろうな。なんかふとした時に。あ、こういうこと楽しかったなとか、この子元気にしているんかなとか。夏が来たら、近づくと、あ～って思い出す。

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場か

楽しかったけど、みんな顔見知りじゃないですか。（みんな顔見知りと感じたから）最初は全然なじめなくて…。1 年目。最初は 5 日間くらい、ほんと誰とも話せんくて、人見知りなのもあったし。ほんと最後のほうで、やっとみんなと話せるようになって、てな感じですよ。

また会いたって思った子がおったのが一番。小 6 から中 2 まで（参加して）、中 3 は受験生で行けなくて。

（そばの種まきなどの作業は）全然たのしい。川も楽しい。でも沢登りは最初らへん、めっちゃ嫌いでした。登るのもやったことないし、最初 1 年目とかはやりたくなかったです。うん、こわかった。めっちゃ泣きながら登った記憶がある。



中 2 のときの三度目の沢登り

自身の成長や変化について

やっぱり人見知りじゃなくなったかも。なんか誰とでも、初対面の人とでも自分から話しかけられるようになったとか。

なんでなんだろう、なんか、みんな話しやすいっていうのもあったし、話したら全然仲良くなるんだけどっていうタイプで、そんな感じで。

人見知りじゃなくなった場

たぶん、ほしほらだと思います。(普段は)話しかけてきたら全然話すんだけど、みたい感じ。

スタッフの体験を通して

スタッフって大変だなと思いました。キャンパーだった頃は、ただ遊んでって感じだったけど、スタッフになってからは、面倒をみないといけない。結構やんちゃな子とかもいるじゃないですか。面倒みるとかが大変でした。

やりたい。やりがいがある。かわいい。みんなかわいい。今年も行きたかったです。



キャンプに高校生スタッフとして参加

自然や農村、環境のこと

農村の印象

あ、変わったかも。うん変わった。最初はすごい静かなイメージがあって、自分の中では。でも行ってみたらなんかみんな、なんていうんだろう、積極的に挨拶とかしてくれるし、けっこういいなと思ったりした。人が。優しい。都市は、田舎みたいにすれ違ったら挨拶、みたいのではないと思う。

あとふつうに空とかがきれい。星を見たことが、ちゃんときれいなのを見たことがなかったから。こういうところってめっちゃきれいに見えるんだな〜って。

休日に自然豊かな場所や、農業体験などに行くこと

いや、ないかな。(行きたいとは)思うけど。行く人おったら全然行くんだけど。なんか一緒に誰か行こうやっていう人がおったら行くかもしれん。

将来住みたいところ

都会過ぎず田舎過ぎず。

中学生 E さん

<プロフィール>

2009年生まれ。大阪市在住。当初小学3年生。
2018~19年、7泊8日子どもキャンプに参加。

現在の生活や学校

元気。えっと、バスケット部。今中1です。

ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ

いやなんか、お父さんから、こんなのどう？
みたいな言われて、1回行ってみたいなと思っ
て、それでなんか知った。

キャンプ自体初めてじゃないけど、こうい
う感じのキャンプは初めてです。お父さんと
かお母さんとテント張ったりとか（したこと
はあった）。

お母さんの実家が広島。（広島のおじいちゃん、
おばあちゃんちに行くときは）色々、人生
ゲームとか温泉行ったりとかしました。

ほしはら山のがっこうの活動で印象に残っていること

全体的に楽しかったし、なんか良い思い出
も作れたから。うん、やっぱもう1回（行き
たい）。

やっぱ大阪に普段住んでるから、慣れない
ってというか、普段関西弁使ってるからやっぱ
なんか色々あって緊張しました。

のこぎりで指切ったことです。山奥で。初
めて行った時、（キャンプインキャンプ地が）
山奥当たって、そこで。なんか巻いたら治
りました。



1年目は岡田山山頂でキャンプインキャンプ



2年目は田んぼの横でキャンプインキャンプ

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場か

もうこの辺なんか、ちっちゃい虫しかいない
んで、（ほしはらは）カブトムシとか、ふれ
あえるってというか、今まで虫苦手だったん
ですけど。なんかほしはら来たら、虫大量に
おって、苦手じゃなくなりました。



カブトムシをつかまえてふれあう

自身の成長や変化について

今まで虫苦手だったんですけど、（虫とのふ
れあいを通して）なんかそっから命みたいな
こととか考えるようになって、人を幸せにする

にはどうしたらいいかなと思って、そっからなんかつながっていったっていうか。

あ、もう僕はそう思っています。人の役に立てたらいいな、そういう人になれたらいいなと思ったんです。どっちかといえば、警察官系みたいな感じの。



キャンプ中のフリープログラムで標本づくり
を選択した

自然や農村、環境のこと

農村の印象

いや、まー、ちょっと変わったんかな。普段都会に住んでるから、なんていう、畑とか見えへんから、まあまだ慣れないなって。

農村に行きたいと思うこと

まあ、あの一、思いますね。いや、まあ、なんか畑仕事をなんか手伝ってみたりとか、虫

取ったりとか色々したい。いや、おじちゃん家では、やってないっすね。ほしはらと、家族で（ほしはらじゃない）他のところに行った時に稲刈り1回しました。まあ面白かったですね。



キャンプインキャンプで出会った農家で
畑仕事を手伝うことになった

暮らしたい場所

うん、大阪に暮らしですかね。やっぱスーパーが近いっていうか、まあ色々あるし、やっぱユニバあるから。

学ボラFさん

<プロフィール>

1991年生まれ。岡山県真庭市出身。当初大学生。2010年に県立広島大学庄原キャンパスの援農サークルメンバーとしてふるさと自然体験塾にスタッフ参加。2011年からは7泊8日子どもキャンプに学生スタッフとして参加し、就職後も岡山県から時々来ている。現在岡山市在住。



大学時代にボランティアスタッフとして参加しはじめた

現在の生活や仕事

今、岡山市に出ている。2年間だけ人事交流で。

職場と家の往復だけ。都会暮らしは初めて。都会暮らしより田舎暮らしの方があっている。

週末、たまたま席が隣だった先輩と休耕田を耕している。開拓。草刈りして、キャンプ場にしたい。職場の先輩と数人で、メンバーは女性2、男性4人くらいのメンバー。開拓すごく楽しい。けっこう草ぼうぼう、低木も。

色んなところに先輩が問い合わせていて、農家じゃないけど農業の技術職だから農業もやってみたかったらしい。田んぼも譲りうける予定。

今は開拓が楽しい。先輩は土地を購入。周りの農家は、自分の土地も買ってくれないかなと言われている。もう少し開拓が進んだら子どもたちにも経験させてやりたい。

自身が育った環境

自然豊かなところで育っている。実家、田んぼもある。周辺も田んぼあるようなところ。父母、兄弟、祖父母、7人家族で住んでいた。地区の同級生は3人くらい。小学校は同級生35人くらい。

小学校の頃から近くに自然があると、川の水が減ったとか、山の土砂崩れとかに気づく、気になった。もともと理科とかも好きだった。

自然環境、破壊のことに関心あった。そういう本もよく読んでいた。中学校の理科もすぐおもしろかった。理科の先生変わり者だった？教科書に書いていないものも教えてくれて、おもしろかった。

県立大にいったのはやりたい学問があったから。環境科学科。自然とか興味あったから。ゼミが農業経済学、集落営農法人。色んな地区でアンケートしたり。

ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ

ほしはらに来たのは、県立大の援農サークルに入っていたから。農林業ボランティアサークル。スタッフ参加でほしはらに。

サークルに入ったのは、ボランティアやってみたかったし、環境保全とかも興味もあって。ビオトープ作ってみたかった。

ほしはら山のがっこうの活動で印象に残っていること

野宿（キャンプインキャンプで）。芝生で寝たのを覚えている。懐かしい。テント取りに帰ったけど、一回出たあとでテントもらえなかった（24時間本部施設に入れられないルールがある）。野宿は人生はじめて。貴重な経験だった。

思い出いっぱいありすぎて、聞かれると難しい。キャンプファイヤー、歌ったり、(家か

ら届いた)手紙よんでいる子どもをみて感動した。7泊8日(キャンプ)が強烈だった。

ほかにも楽しいこといっぱいあった。山づくり。開拓。ちいにい(スタッフ)が木登り、ひもの使い方、印象的だった。ほしはら離れて、あいさん(スタッフ)の企画力がすごいと思った。子どもがいたら連れていきたい。

日常的に思い出すことがあるか

それはもう、私の日常ってその休耕田の開拓だから。そうそう手植えもしたし、川遊びもしたし。沢登りとか。あれはほしはらが初めてですね。写真見ながらゆっくりしゃべりたいけど、なんかいっぱいありますよね。濃い、濃い4年間。



子どもたちと沢登り

ほしはら山のがっこうや農林業ボランティアサークルはあなたにとってどんな場か

そのサークルの部長やってた時期は。私電話かけなかったですかね、そろそろですかね?今年これありますか?みたいな。ほしはらに行けば、この子どもたちに会えるとか、やっぱ。楽しみでした。

心の拠り所じゃないけど、なんかそこ行けば楽しい思い出があるし、みんな優しい、なんか、知り合いがいる場所があるっていいですよ。うまく言えないけど。

住むのはやっぱ安心感ですよ。なんか、あれしたいなってなったら、あの人に聞けばいいかみたいな。なんか困ったことあれば、

あの人にちょっと聞いてみようかなとか。確かに誘ってくれますしね、みんな。これやるけど来る?みたいな。うん良い人ばかり。

庄原、三次は完全に。憩いの場です。地元よりも地元感あると思う。知り合いいっぱいいるし。

大学の先輩おもしろかった。ほしはらけっこう来ていたメンバーで、楽しかった。

サークルの中で印象深かったのは…草刈り多かった。変わった手伝いでいうと、積雪のなか、おじいちゃんおばあちゃんと丸太をはこんで、ひもで背負って。おばあちゃんも一緒に、それが衝撃的だった。

自分たちがいなかったら、おばあちゃんおじいちゃんやってたのかと思うとすごいなと思った。

しんどい作業の方がよく覚えている。草刈り機も使っていた。大学で草刈り研修もやっていた、年に1回は。

自身の成長や変化について

難しいですね、性格は変わったかもしれないですね。

だって、高校まではこんなに知らないところに一人で飛び込むような子じゃなかったから、本当に普通の高校生だったんです。平日日中勉強して、普通に部活して、家に帰ってみたいな。

大学でそのサークルに入ったことによって、先輩方と一緒にいろんなところに行って、なんか出会いの楽しさを知りみたいな。いろんなことを経験するのが楽しいし、面白いし、自分の経験にもなっていくっていうのが、勉強にもなって、それで、性格変わったかもしれない、成長したのかな、成長したかも。そうですね、そうかも。社会人になって、やっぱ電話とかって緊張するじゃないですか。なかったですね、なんか、大学時代にサークルの

専用携帯持ってたんで、電話対応とか全然してたし。

社会人でも確かに生きてるかもしれん。

1
章

2
章

3
章

4
章

5
章

資料
編

母親 K さん

<プロフィール>

参加当時、夫の転勤で府中市に在住していた。2008年5月より数年間、親子対象のふるさと自然体験塾に当初5歳の長女と夫の3人で参加。長女は2012年の7泊8日子どもキャンプに参加した。現在は広島市在住。



親子で稲穂を絵手紙に描く

現在の生活や仕事

ぼちぼち働き始めてね、パートじゃけ、ほどほどなんだけどね。

(長女)もうね、毎週テストでね。すごい大変。大学生。

自身が育った環境

鳥取の田舎に住んでた。遊び場は家の外で近くには川や雑木林があるような、そういう取り残されたような住宅街の一角だった。当時はまだゲームとかそういう遊びがなかったから、単純にそこにある物で遊びよったよ。レンゲやシロツメクサを摘んで首飾り作ったり、秘密基地作ったり、かくれんぼしたりしよったよ。近くには畑も田んぼも沢山あるんだけど、農家さんって畑をきれいに管理しとってじゃない。例えばね、収穫した後のワラをきれいに積んどってんよ。それをね、毎日わざわざ外してワラを座布団やら布団に見立ててごっこ遊びのおもちゃにしとったんよ。ワラだらけになって。崩すことも楽しいし、ワラがなんともいい匂いがするんよ。

なのにね、農家さんに怒られたことが一度もない。次の日行ったら元通りにしてあるんよ。今思えばね、ひどいことをしとったんよね。ほしはらに行つて気がついたんよ。どれだけ迷惑かけとったかってことに。

でも、いたずらしとるつもりはなかった。農家さんは誰が悪さをしとるんか知つてただろうね。でも、それを注意することもなかったんだよね。心が強いというか。

私は心が狭いところがあるけんね。自分だったら怒つとったと思う。でも、やっぱりそういう目でこう子どもって見てあげることで、すごく大事なんだなつて思う。悪意がなくてしてることでたくさんあると思うんよ。目の前にあるもので遊ぶことで大事だと思う。

私の両親は県外からの移住者でね。今で言うIターンなんよ。大山が大好きでね。鳥取の自然を求めて結婚と同時に移住した人なんよ。冬は大山にスキーに行つて、夏は大山登山と海水浴に度々行きよった。地元の人は当時、好んでそういうことをする人は少なかったように思う。身近にありすぎて注目しなかったのかもしれないね。私は両親の影響と住環境がそういう感じだったからね、日々の遊びも、外遊びが多かつたわ。

私の弟たちは男の子たちのグループがあるんよ。やんちゃな外遊びをする人たち。まあ、毎日泥だらけで帰つてくるから親に怒られよつたわ。

川で遊んだりもするんだけど、大人にこの川で流されたら海まで流れてしまうから入ってはだめつて言われてるのに、皆こっそりその川で遊ぶんよ。そしたら流れがきつくて、なんか背筋がぞつとする感じがした。弟は実際に流されたことがあつて、友だちに助けてもらつたらしいんだけど、友だちいなかったら海まで流されていただろうね。子どもながらに弟の命の危険を感じたよ。だから、私は

弟とは別に遊んでたけど、弟が常にどこで何しとるんか見張っとった。やんちゃだからさ、他にもしょっちゅう無茶するわけよ。

自然の中での遊びって、楽しいことだけではなくて、その中にやっぱり危険が潜んでるってことは、常にあった（意識にある）。

自然の中の危険を意識する大きなきっかけになったのは、山の大好きな父の知り合いが、大山の春山で遭難して亡くなったんよ。家族で大山登山する時、毎回その山の素晴らしさと命との危険の折り合いみたいなものを、不運も含めて必ず話してくれたね。遭難して亡くなられた場所で必ず手を合わせてた。父と母が自然の楽しさと、その厳しさを教えてくれた。それでも父は山が好きで、今でも山に行くんよ。

ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ

ネット検索でほしはらを見つけたんよ。田んぼで検索したんかな、田植えとか。自分が親からそういう影響を受けてるから、自然の中に娘を連れて行ってあげたかった。そういう場を設定しないと、なかなか難しいっていうのを体験的に自分が知ってたから。

私にとっては（子どもと自然体験をすることは）普通のことというか。ちょうど町から離れたところに主人の転勤で引っ越したから行きやすかったっていうのはあると思うけど。仮にずっと広島市内の街中にいても、何らかのことは絶対してたとは思う。ほしはらにたどり着けたかどうかはちょっとわからないけど。



親子で参加した田んぼの体験

あと、田舎に引越して思ったのが、田んぼにしても、畑のその辺のあぜ道にしても、私有地になるから、田舎に私たちがポンと行っても、入っていけないのよ。私は大人になってしまったので、私有地に入っていけなくなっちゃって。子どもの頃みたいに田んぼに入って行けない。せっかくそこに田んぼもあるし、山もあるし、お花も咲いてるのに、その一歩が入っていけなくて。

だから入ってもいいですよっていう入口を探してた。でもなかなか見つからなかった。何度も道端で車を停めて見るんだけど、そこでぼう然とするというか、何もできない。

そういう意味でも、ほしはらみたいな形がないと、なかなか難しいのかなって。見つけたときは嬉しかった。入ってきていいんだよっていう場所があるっていうのは、行きやすかった。

街中で募集している自然体験に参加するのもいいことだね。でも、私がこだわるのは地の人。そこで生活してる人のところに行きたい。

ほしはらもちろんそうだし、例えば坂根さんところ（三次市作木町の農家体験民宿）もそうだよ。坂根さんのところは、ブッポウソウっていう鳥が夏に来て、その保護活動をしてるってこともあったけど、三次で一番奥はどこだ、みたいな感じで探して、あ、ここだってピンときた。

他には、パパが旅行好きだから、必ずどこかに行くんだけど、地の人が経営してる民宿とか、あいあい（スタッフ）みたいに外から入って、そこで住んで経営してるような小さいホテルみたいなところに長女を連れて行ってあげたかった。

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場か

ほしはらも、坂根さんととも、私たちにとって大切な場所だったよ。

田舎の人ってね、面白いし素敵なんだよね、とっても魅力的な人が多い。すごくユニークだし、生きる力があるっていうか、賢い、多様性があるっていうか。

どうしても私たち家族の環境って、同じような人が同じような感覚で、悪い言葉を使えば井の中の蛙、いい言葉を使えば、連帯感があって、同じような考えを共有し合って、共感し合って生きていてね。一方でちょっと違う世界があって、もっと違う生き方もあって、いろんな感覚で、それぞれが幸せに生きていく、いろんな方法があるってことを娘に知ってほしかったから。そういう意味では場所としてほしはら山のがっこうはあるんだけど、そこにいる人たちっていうのも合わせて大事なキーワードになるね、とっても。

町に住んでいる人と違う世界観みたいなものを持って人、ちょっと違う空気感だったりが見れる人とつながってるのは、私にとっては必要なんだよね、きっと。長女にとっても必要だけど。



地域の神楽を体験交流

成長や変化について

長女

ほしはらに行き始めてからの長女の変化は、たくさんありすぎて、何をあげていいかわかんないけど。その時に出会った人、そこにあるもので楽しむことができるようになったね。

例えば、ほしはらに行ったら、長女が私から離れて、あいあいやいまいどん（スタッフ）、他の参加者の子どもたちのところに自分から行ったりする。私ではなくて周りにいる人に意識が行く。で、そこにある場であるもので遊ぶ。そして、そういう空間を楽しめるようになったよ。

それって普通と言えば普通だけど、すごく大事なことのような気がする。

旅行で沖縄の離島に行っても、地元のおばあがやってる B&B、民宿に宿泊するんだけど。やっぱり私じゃなくて、おばあやおじいや宿泊のお客さんたちと長女が楽しんでる。ほしはらでやってたことを旅行先でも自然としてた。

もちろん私もある程度そうなるように設定はしてるんだとは思うけど、私の影響だけを大きく受けながら成長するより、いろんな人の姿や、私とは違う考え方とか場で生きてる人たちとふれあうことで、得られるものって大きいと思う。

今思ったけど、コミュニケーションをとって完璧じゃなくてもいいとか、思った通りの展開にならなくても許されるというか。途中で途絶えても、それもまた仕方ないというか。それでも、いいかって思えるのもいいね。

自然や農村、環境のこと

(普段、農産物を買うとき) せっかくだったら、広島県産、鳥取県産、中四国地方、西日本、国産の物を買いたいって気持ちは常にあるよ。

また旅行の話になっちゃうけど、わが家ではパパが夏休みに行きたいところに行くのが最優先なんよ。で、パパがこれだという行き先に、はいはいって家族3人、ミッションで行くんよ。行き先の地の人に会って、できれば宿泊は地の人が住んでるところに泊まって食べる。その土地にお金が落ちるようにっていうのも気にしている。

例えば、棚田100選みたいなどころに行ったとするじゃん。あ、きれいだね、で帰らずに、できたら、ちょっと割高でもそこで育ったお米を買うとか。地域の人が必要な対価を得られて、次のお米を植えて。そこを維持する。食べ物を育てるには、住む人たちが幸せにその地で生きていくことで営みが維持でき

るわけで。幸せに生きていけなければ、それは幸せになれる場所に移動するね、当然、農村にそこで生きていくことが幸せだと感じる対価が得られるってすごく大事なこと。

特に日本国土は限られてるし、自給率も低くてとても大きな問題があるわけで。それは結局、自分自身、子どもたちに直結することだね。意識していかないと立ち行かなくなる。

長女は、お米を作ってくれる人たちの姿が見えてる。そういう人が増えるといいね。

子育て・子どもが育つ環境

(学校教育で) 以前、宿泊研修とかで行っていた行事を、農村とかに場を変えというのが面白いと思うよ。子どもたちを送り込むのは、メリットが大きいと思う。大きな施設を作って維持するのは多額の資金が必要だけど、坂根さんのところのような農村の民宿とか利用すれば、そういった大きな資金は必要ないしね。なにより子どもたちがいろいろな経験ができるし、地域の人、宿の人とふえあうことができる。そして地域に経済的メリットもあって経済の循環が起きる。考えるだけでワクワクするよ。そんなことになるといいなって思う。

父親Lさん

<プロフィール>

広島市在住。2009年5月～8月、広島県職員連合労働組合役員として若手リーダーの養成講座をほしはらで実施。以降7泊8日子どもキャンプや森づくり等のボランティアスタッフとして参加。家族とは、2010年から当初5歳の長女と2人で、2012年から当初1歳の長男と妻が加わり4人で、年間を通して体験塾に参加。2015～16年には長女が7泊8日子どもキャンプに参加。現在は、長男と参加している。



家族4人で参加

自身が育った環境

出身地は白木町です、広島市の安佐北区ですね。(今住んでいる家とほしはらの)ちょうど中間あたりの。大自然に囲まれ、山も川もあって、登ったり泳いだりできるところで育ちました。だから、結構田舎で育った方かなとは思いますが。

私の父親が、子ども会の会長をされていて、今の愛さん(スタッフ)見たら、なんか自分の若い頃のようにだって言うかもしれないです。私もそういう父親を「ああカッコいいな」って思って親になりましたから。会長だからっていいことひとつもないんですけど。お金ももらえないし、仕事終わった後、色々、地域の会合に出て、次に子どもたちが喜びそうなもん準備したり。父ちゃん頑張ってるなって感じでした。

ほしはら山のがっこうに来るようになったき

っかけ

私が、結婚した直後ぐらいだったと思うので、(年齢が)34か5だったでしょうか、県の職員で労働組合の役員をしてたんです。

それで、どこの職場で働くにしても、やっぱり地域の課題と、その地域の未来を自分なりに考えて、自分の仕事に生かさんといけんじゃないかいうことで、自分よりちょっと若い20代の職員と一緒に、こちらに来さしていただいたんです。無理を言って。

コーディネーターが2人で、参加者が8人、合計10人。私はコーディネーターだったんですけど、ほとんど参加者でした。

当時、ほしはらの学校は、愛さんや当時のスタッフさんがとても頑張ってらして、その頃から有名は有名だったんです。で、まあ、私も外からちょっと視察させていただこうかなと軽く考えていたんですが、愛さんがすごい積極的で、最初の一言が「だったら、一緒にイベント作りましょう」だったんですよ。視察じゃなくて、一緒に動いてみた方が色々わかるんじゃないってことで、ヒントはあげますから、短期的な、都市農村交流キャンプを実際に考えてみませんか。

素人集団ではあるけども、来てもらった人に、ほしはらを楽しんでもらって、なおかつ、こういう地域で自然の大切さであるとか、素晴らしさを学んでもらうために、どういうイベントを用意して、どういう人を呼んで手伝ってもらえばいいのかっていうのを、土曜日、日曜日にみんなでほしはらに集まって、ああだこうだ言いながら準備してました。

それで最後、1泊2日のキャンプだったんですけど、参加者で分担決めて、2日間やり通したという。

私らも大変は大変だったんですけど、楽しかったですね。

ひとつの成功体験ではありましたが、参加者のみんなが、じゃあ引き続きなんかの形で(都市農村交流を)やってるかという、そこは仕事とか家庭とかの関係もあるので。でもいい勉強になったんじゃないでしょうか。今話をしても、皆さん覚えてらっしゃいますし。

農林関係の参加者は2人で、畜産関係を合わせても3人。あえて(参加者の職種を)散らしたというのもあるんです。農林関係で固めると農業を中心とした地域振興という視点になっちゃいますから。むしろ、こういう分野に全然縁がない人が、中山間地域の未来をどう考えるか、いろんな当事者がいてもいいなと思ったんです。

班ごとに地域の農家でカレーライスレシピを聞き取って調理する企画のこと

このキャンプの目玉企画に「ご当地カレー」というのがありまして、面白いなと思ったのは、子どもたちが否が応でも農家さんと接するんですよ。初めて会うおじちゃんおばちゃん、おじいちゃんおばあちゃんと話をする。野菜少し分けてくださいとか、今何が美味しいですかとか。で、それを持って帰って「みんなでカレー作って食べましょう」「どこが一番美味しかったかな」という企画なので。

地域(農家さん)の人も呼びました。私らの側からすると、「え、そこまでやるの?というかやっていいの?」という感じでしたけど、みんな楽しんでましたし、何より地域の人が優しかったですね。裏で愛さんが色々動いてくださったと思うんですけど。

都市農村交流って言っても、よくあるのは、おもてなしとか、もうすでに準備万端整ってるんで、そこで遊んでもらうとか、なんか一緒にやるとかっていうのはあると思うんですけど。

ほしはら山のがっこうには、昔から「来たからには、ちょっと一緒にやってみない」というスタイルがあって、これ面白いなと思うんですよ。

今でも「森づくり」など、いろんな企画がありますが、事情を知らない人が聞くと、「なんで参加費払ってまで労働?」って。でも、やっぱりそこで得られるものがあるんですね。

みんなで頑張って、後ろ振り返ってみたら、「あ、ここに道ができたんだ」とか、その場で達成感が味わえて、みんなで何かひとつのことを頑張るって素敵だよって。

そういう喜びを見つけた人は、次からも来てくれるんだなって感じます。ほとんどの人が「疲れたな」では終わらないんです。

実際、今、ほしはら山のがっこうも、色々スタッフの皆さんが頑張ったり、参加者にも手伝っていただいたりして、一人じゃできないことがどんどん実現してますもんね。

遠くにある夢でも、だんだん近づいていくんだなってというのが、長いことおじゃますると、実感できることがあって。続けるって素晴らしいなって思います。

ちょっと長くなりましたけど、きっかけはそんなところで、珍しいかなと思っています。

家族が来るようになったきっかけ

きっかけは私だったと思います、やっぱり。決まったところしか行かない生活よりも、地球は丸いです、世の中広いですっていうのをなんかの形で(わが子に)感じてもらいたいなと思ってました。あとは私がね、「子どもは放っときゃ育つ」みたいな考えの人なんで、色々見せて放っとうって。

(娘は7泊キャンプに)2年ほど行かしてもらいましたが、本人も覚えてるし、「あれで私はたくましくなった」と言ってます。やっぱり、どこのご両親も言われてるかもです

けど、帰ってきたら、なんか雰囲気変わったっていうのはありました。

ほしはら山のがっこうの活動で印象に残っていること

もうどんなシーンって言っても、楽しかったことが多すぎて。私も歳ひろって記憶力も衰えてるんで。そうですね、田植えもそう、稲刈りもそう、ザリガニ釣りもそう、キャンプもそう。スタッフでちょっと部分的にお手伝いしたキャンプ。そうね、ダンボールハウスとかも作った。

そういえば、最初に参加した野草のイベントは別な意味でインパクトが強かったですね。かなり初期のイベント(おいしい楽校の前身)で、当時は料理がすごい原始的だった。

野山の野草を摘んで帰って、食べれるものを簡単に炒めたり、味付けて食べましょっていう日に、野草入りのバターを作ってみたんですが、まだ料理のノウハウが蓄積されてない時期だったから、これがもう「これ食うの?」っていうぐらいの味で。

それもまあいい思い出です。その野草があんまり美味しくなくて、ちょっと食べごたえも悪いというのはわかりました。

初期の頃はそれはそれで今思い出すと面白かった。でも、当時は比較の対象がないから、まあ、結構手探りで、参加者も我慢してたブブがあったなど。まあこれはしょうがない。

だから、今のほしはら山のがっこうに来られる方は、そういう喜び(?)が味わえないかもしれない。最初から快適だから。

一旦昔に戻って、こんなはずでは…っていう体験から、だんだん進歩してって、やりがいを感じるには、もう1回原始化しないと。

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場か

私も他の参加者もそうですけど、特技があるとか、森林整備のプロとか、建築のプロとかじゃないんです。だけども、まあ中には特技持ってる人もいて、ナイフ研ぐのが上手いとか、木を切るのが上手いとかね。

それで、これといった特技はないけども、逆に、誰でもできることはしますよと。でも、あまり難しいことをさせないでねっていう。

まあ、ほしはらは関わりの間口が広いんですよ。プロしかいないっていう団体じゃないんで、何もできなくてもね、ご飯食べに来てくださって言うてもらえるので、甘えさせてもらってます。水戸黄門で言うと、八兵衛さんかな。スケさんカクさんみたいに強くないし、忍者のヤヒチとか、トビザルみたいに動ける人でもない。笑かし系の八兵衛さん。だから来る者拒まずですよ。何もできなくてもいいけど、楽しんでってという雰囲気があるので。

ほしはらのスタッフさんの雰囲気がいいのは、あの人はあだからっていうのをお互いに認めてるからだと思うんです。どうだからいいとか、ダメとかいうのがなくて、あの人はあだからしょうがないよねって。多分みんなそうで、愛さんこんな風にできてるんだから、もう治らないよって。少し変なところがあっても治らないけど、別に困らないからいいかっていう。



稲刈り

そういうところが大事なんだと思うし、近づきやすい人って、受け入れてくれる人だと思うんです。そんな(受け入れてくれる)雰囲気、ほしはらにはありますよね。ほしはらのイベントに参加された方は、多かれ少なかれ感じてらっしゃるんじゃないかと。

私は、長いこといるせいか、そういうところについて目が行くようになっちゃって。なんでここは楽しいんだろうというのを色々、色々な面から考えて、つまりそういうことじゃないのかっていうのが、最近出た答えです。

参加してくださる皆さんが、自分の居心地の良さを考えて、それを自由に表現して実現できる環境があるじゃないですか、ほしはらには。結構自由度があって、スペースもあって。

一方で、私が密かに「将来こういう方向で行くとまずいかな」と思ってることもあって、それは、自由な発想以前にもう既にできている、準備されているものが増えすぎること。この傾向が進むとどうなるんだろうと思うことはありますね。

ほどよい原始的なところを保ちつつ、自由なものを表現するような場所。草がぼうぼうのところがあってもいいし、むしろ、そっちの方が全然人の手が入ってないから、自由な表現ができるような気がするんです。

昔のほしはらを求めすぎかもしれないですが、私が楽しみを感じやすい部分はそういうところであって、あんまり完成度が高まってしまうと、次何しようっていう。

具体的な例で言うと、鳥が池のほとりでやった坂登り競争のように「ここに坂があります。好きに遊んでください」とか、森づくりカフェでの「山盛りの落ち葉があります。好きに遊んでください」みたいなことです。いくらでも人の数だけ遊び方がある。

愛さんの印象に残ってる言葉に、「お父さんとお母さんが楽しんでください」っていうのがあって、これは大事だなと思ってるんです。

だから、ほしはらの自然の中で、お父さんお母さん、普段、子どもたちの前で見せない顔で、やりたい放題やっちゃってください。あなた方が喜ぶことで、子どもたちが気づくこともありますっていう。お父さんお母さん、こんなに楽しんでどうしちゃったのって思うくらいに。

それで、子どもも安心するんじゃないですかね。あ、ここまではやっていいんだ、大人がやってんだから、多分オッケーなんだっていう。お家帰って同じことをすると怒られるかもしれないけど。

先日、落ち葉にみんなで埋もれたこと

あれは、あんまり深い考えはなかったんですよ。せっかくこんなに落ち葉があるんだから、ちょっと掃除して集めとくかって、最初勝手にやってたんです。

そしたら、なんか子どもたちが面白そうだって集まって来て、お掃除係が増えて。いつの間にか大きな山ができて。何が楽しいんだろうと思って見てましたけど。

その後、何するかと見ていたら、集めた落ち葉に埋もれたり、助走をつけてダイブして芸術点を競ったり、実に楽しそうに遊んでいました。



落ち葉の山

だから面白いのは、予定調和があんまりないこと。一瞬一瞬がハプニングなんです。猪木が「一寸先はハプニング」って言いましたけど、ずっと先もハプニングなんです。

もちろんイベントの段取りとかスケジュールは決まってるんですけど、時間の流れがゆったりだったりで、観光ツアーみたいに「はい、あと5分で出ます」っていうのがないんです。だから、30分くらい遅れても誰も気にしない。で、これやる予定だったけどこっちに変更とか、みんなこっちの方がいいんだったら、じゃあそうしようっていう大らかさがありますよね。

最初の頃は「いいのかこれで」って思いました。社会人としてはダメだけど、社会人じゃないからいいのかな。社会人の方がダメなんかもしれない。

自身の成長や変化について

やっぱり、さっきの話とつながるんですけども、人との接し方が変わったような気がします。あの人はいいとか悪いとかではなくて、いろんな人と出会って、いろんな経験を共有して、その人なりの考え方を「ああ面白いな、自分とは違うけど、面白いな」って素直に思えるようになりました。

ほしはらのスタッフの皆さんも、似たような人ばかりなんです。あんまりわがままな人がいない。

マイペースなんだけど、自分以外の人に「なんかそれダメ」とかそういうことは言わないの。「やってるな、しょうがないな」っていう感じ。

お互いみんなの意見も聞くし。「あ、この人こう思ってるんだ。でも、自分ちょっと違う考えなんで、話してみるか」みたいな感じで。

「自分あんまり気乗りせんな」っていう時は、みんなそれぞれのスタンスで意思表示している気がしてます。

そのへん、スタッフの皆さんうまいんですよ。面倒見のいい人ばかりなんですけど、お節介じゃない。じっと遠くで見てるような人が多いんです。

だから、自分の言う通りやってくれたら嬉しいじゃなくて、「この人次何するかな」っていうことを楽しみにしているんでしょうね。でも、誰かが楽しいことやったら一緒になって笑うし。反対に危なかったら、「ちょちょちょ」って。みんな大らかですよ。こうでなくちゃってということがないから、ここは。

愛さんの考えにスタッフの皆さんが賛同されてるからだと思うんです。意識してされているかわからないですけど、どこで身に付けられたのかな、すごいなど。

だから、「ああ、こういうのが一番過ごしやすいのではないかな」っていうのを、皆さん常に意識されてるといえるか、そういう人がたまたま集まってるだけかもしれないけど、私は勉強させてもらってます。

母親 M さん

<プロフィール>

参加当時は廿日市市に在住。2013年4月より数年間、親子対象のふるさと自然体験塾に当初小学3年生の長女と2人で参加。当初中学2年生の長男も時々一緒に参加した。長女は2013～2014年の7泊8日子どもキャンプや2016年の防災子どもキャンプ、長男は2014年の7泊8日子どもキャンプに参加した。現在、呉市在住。



参加2回目の田植え

自身が育った環境

生まれたのは横浜なんだけど、2年ごとぐらいに私引越してしてるから。青森とか函館とか東京とか。本当それこそオタマジャクシを取りに行っって、帰り道がわからなくなっちゃってみたいの、横浜も昔はそんな感じだったからね。小学校1年生か2年生の時ね。ちょっと行ったら、山の中とか、うん、池があったりとか。

友だちから蚕をもらってね、分けてもらって、家族みんなで桑の葉を取りに行っって。横浜にあったの、それが近所に。うちの親とかもこの間も言っってたけど、「よくあの時に桑の木があそこにあったことよー」って言っって。「あれがあったからね、蚕を飼えたよね」とかって。ちゃんと蛾になっってね、部屋の中ぐるぐる飛んだから、キャーっって感じで窓開けて逃がしたりとか。

あとやっぱり北国のね、北海道とか、あの青森の方だったから雪で遊んだ思い出とか。

あれはね、やっぱ忘れられない。だから私、冬になったらもう雪景色を見たくて見たくて。

ねー、すごい楽しかった、そういう思い出がやっぱりあるんだろうね。だから、やっぱり子どもにもさせたいとか、うん、そういうのもすごいあると思う。

現在の生活や仕事

長男

大学院の1年生。コンクリートの研究。建築関係の方に行っただけど、橋を作るコンクリートと家を作るコンクリートとは成分が違っってどうのとかって実験して、強さを確かめたりとか。なんか私もよくわかんないですけど、そんなことをしてるらしい。

長女

自由学園*（に通っっている）。私が「友の会」っっていう、衣食住家計を勉強するよな全国組織の会があるんだけど、その広島の会に入っってたのね、ずっと前からね。その友の会っっていうのが自由学園とつながりがあっって。羽仁もと子さんっという日本初の女性ジャーナリストの人が、その自由学園を立ち上げて、友の会も立ち上げてっっていうことで、関連があっって。

ちょうど長女が6年生の時に広島で、その自由学園の出張授業みたいなのがあっった、小学生対象のね。で面白そうだから行っってみようよっって、誘っって行っったのね。

その学園の生徒さんたちも、お手伝いに来てくれて。生徒さんたち、やっぱすごいもう自分の意見もテキパキ言っうし、みんなの前でね。授業の間もすごい上手にサポートしたりとか。やっぱすごいな、さすがだなと私は見てたんだけど、長女もその姿にすごい憧れたみたいで。自分も自分の考えをみんなの前で言ったいとか言っえる人になっりたいっってずっと思ってるんだけど、公立の中学校行っった

としても、自分はきっと変わらない、ずっとこのまんまだと思う、だけど、自由学園に行ったら変わる、自分が変わる気がするんだって言って、「行きたい、行きたい」と。

「お母さん、この学校すごいね」ってあんまり言うから、秋の美術工芸展っていう行事があった時に、見に行ってみる？って言って、一緒に行ったんね。ただ、もうやっぱり素晴らしくって、で、本人もなんか行きたくなくなっちゃってっていう感じかな。

長女が6年生の時は、長男は中学校3年生だったからね。中学校のほら色々、内情とかを言うじゃない、家に帰ってからね。で、長男が、なんかすごい先生に目つけられて、怒られてばかりの人だったから…もうすごかった。だから、家に帰ったら「あの先生に今日こうやって怒られた」どうじゃこうじゃってすごい言うわけよ。それを（長女は）聞いてるから、あんな学校行きたくないとか、ちょっとね、そういうこともあったかもしれないけど。

やっぱりね。理想と現実は違うというか。根本的なところはすごい、自分はここに来てよかったと思うって。ま、色々嫌なこともあったし、生徒同士の人間関係とかが難しくってもうやめたいと思ったことが何遍もあるけど、でもそれを自分で正解にしていかなきゃいけないよねっていうのを思ったみたいで。今は嫌だけど、例えば、大人になったらよかったと思えるようにしたいとか。自分とぴったり合う人なんかね、少ないからね。だから、そういう人たちとうまくというか、どういう風にして折り合いをつけたりとか、自分の中で納得させながら、勉強できたかなとは思っただけね。

*自由学園=東京都にある私立学校。1921年（大正10年）自由な人間教育をめざす女子の学校として、羽仁もと子（初代学園長）、吉一（同理事長）が設立。

自身

（ほしはらで親同士として出会った）Tちゃんとか、Uちゃんとかは時々会ったりとかして。一緒にご飯食べたりとか、それこそ、Uちゃんのところには何回か泊まらせてもらったしね、長女と一緒に。なんで知り合ったのとかって他の人に言われたら、いつもね、ほしはら山のがっこうっていうところがあるね、とかって…。こんなに近いところに住んでるのに、三次で知り合ったんだよね～とかって。

ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ

私がね、広島の実験ができるとか、子どもと一緒に遊べるとか、そういう施設とかイベントとかの本を買ったのね。で、その中にほしはらが書いてあって、7泊8日のキャンプのことも書いてあったのね。

え、すごいと思って。それで私電話かけたら、あいあい（スタッフ）が出て、「うちの子も同じ年だよ」って言われて。よろしく願います、待ってますとかって言ってきて、あ、同年の子がいるんだと思って。

田植えも楽しかったしね。あの山菜だ、デコちゃん先生（自然観察の講師で元上田小学校教諭）の時、本当に初めて行った時の、終わった後に、あいあいとデコちゃん先生と私たちとで、ちょこちょこ裏庭というか、裏山というか、案内してもらって、もうちょっと色々教えてもらって。なんかこれは天ぷらにしたら食べられるとか、色々お土産ももらって。そういうこともあって、あー楽しいと思って。

なんかその次、田植えがあって、年間の行事が（あって）。だから、あ、行こう行こうって言って。ここならね、車でも行きやすいとこだし、とかって言って。

長男はね、あの時は野球部の方が忙しかったから行ってない。長女と2人で行って、途中から長女の友だちと。



春の摘み草をして食べる体験

ほしはら山のがっこうの活動で印象に残っていること

(7泊8日キャンプに参加したのは)あの年だからね。モヤさん* がいらっしやった最後の時がね、長女が小学3年生だったからね。キャンプのすぐ後だったもんね(単独登山中に亡くなった)。本当、長女はね、うん、ありがたかったと思う。

*モヤさん=故・宮本雅行氏。当時、広島県シェアリングネイチャー協会理事長、公益財団法人日本シェアリングネイチャー協会理事、ほしはら山のがっこう顧問。

学校から帰ってきた時に私が言ったのね。「モヤさんがね…」って言ったら、もう絶叫。嘘?って言って、絶叫して、布団の中に入っちゃってから出てこなかった。

で、ほら、キャンプの後に、みんなで寄せ書きの色紙をもらって帰ったでしょう。モヤさんもね、長女に一言書いてくださってたんだけど、その色紙の裏に赤いペンで、どうしてモヤさんがいっちゃうの、死んじゃったの、いなくなったの?みたいなことを、こうぶわっと長女がね(書いてて)。

最初のキャンプだったっていうこともあるんだろうけど、あのキャンプ最終日に迎えに

行って、帰りの車の中で、もう長女がずっともう途切れることなく、そのキャンプでこうだった、ああだったっていうのをね。それが、1つ1つが面白すぎて。

そう、すごい喧嘩が多い班だったらしくて、なんかね、色んなことがあったみたいで、もう本当に面白おかしく聞かせてもらって。で、モヤさんの話もすごいいっぱい聞いたから、うんなんかね。本当にあれはもうショックだったね。

だからモヤさん亡くなられた後ね、私はお会いしたのは本当に最後の日だけだし、長女から話聞いただけだけど、本当に素晴らしい人だったんだろうなと思ったから、あのモヤさんのホームページだったか、なんかブログとかかな、それを全部印刷してファイリングして。すごい面白かった。本当にお会いできてよかったなと思って。



モヤさんとキャンプの朝のネイチャーゲーム

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場か

なんだろうな、まあでも、なんか、ここに来てたら間違いないみたいなの、そういうのはあったかもしれない。

私が経験してほしいと子どもに思っていることがほしはらに来たら、経験させてもらえるっていう、そういうのはすごい信頼して行けるみたいなのところはありましたね。

いろんな人と一緒に何かをやるかとか、一緒に遊んだりとか、それも自然の中でいろんなね、椎茸の菌打ちやったりとか、そういう

ことまでさせてもらえて、だからほしはらに通ってたらそういういろんなことがさせてもらえるっていう安心感ができたというか、そういうのがあります。

日常的に思い出すことがあるか

ほしはらの話とかあいあいの話、度々するのよ。長男ともするしね。長男はバイク乗っているから、で西条にいるでしょ。だから「会いに行けば？あいあいのところ行ってきたらいいじゃん」って言って。で行ったらしいのよ、ほしはらに。そしたらあいあいが他の人としゃべってたって言って。自分も友だちといたし、あ～とか言って帰ったらしい。声かければいいじゃんって。そうそう、でもまた行くと思うよ。

作木の坂根さん（三次市作木で農家体験民宿をされている方で、ほしはらともつながりがあり、中村さん親子も泊まって交流していた）、時々ラジオとか新聞に出るでしょ、そんな時に言ったら、わ～懐かしい懐かしいって言って。すごい言っててね。

長女とこの間言ったのはさ、キャンプインキャンプの時に、平田観光農園でキャンプインキャンプしたのね、あの人。そしたら、トイレ行こうと思って、トイレの戸をバツと開けたら豚が「ブウ」って言って、ダダダッて行ったっていうのね。

その話がおっかしくって、その当時からすっごいウケてたんだけど、なんかトイレの話になって、そういうことがあったよねっとか言って。やっぱ強烈だったよね。もう聞いてびっくりしちゃったけど、ああいうことがあったと思って、この間笑ったけどね。

成長や変化について

7泊8日の時に、親が全くノータッチなので、なんか子どももやっぱり参加するに覚悟がいるんです。

あの、長男はそんなことなかったと思うんだけど、長女は本当にあの最初の、あのキャンプの時の、1日目一緒に行って、私がじゃあねって言って、帰る、車で帰った時のあの顔が私はどうしてもちょっと忘れられられなくて。お母さん帰ってしまうの？一週間会えないの？みたいな、こうものすごいそういうオーラが出てたような顔だった。だから、私はすごいちょっと心配だったんだけど。

でも、迎えに行った時のあの、帰りの車の中でぶわーっとそのキャンプのこと、ずっと休みなく、おもしろおかしく、あの人聞かしてくれたってというのが、あ～なんて言ったらいいかな、あ～、こういうふうに変わるんだって思いました、私は。

自然や農村、環境のこと

大崎下島っていう、橋ではつながってるんですけど、本土から行ったら30分ぐらいかな、車で、っていうところに、久比っていう集落があって。そこで「介護とかがいらなくて、高齢者の方が長生きして、最後まで自分のやりたいことを自分の力でできる地域にしたい」という方々が集まられて、一般社団法人まめなっていう団体を立ち上げて。今は食堂であるとか、地域の方の集まる場所みたいなのを古民家を改修して作って、地域の人と外の人をつなげていくような活動を、今しています。

本当に高齢の方がほとんどっていうような地域なので、若い人がいないけど、その「まめな」が活動することで、大学生であるとか、若い人とかが何日か泊まったりとか、インターンで来たりとかっていうことで、だんだん活気が出てくればいいねって今ちょうど言っているところ。だけど、ま、なかなかそんなにすぐにはね、地域は変わらないので。

その中の一環として、看護師さんたちに移住してもらって、そこの地域で訪問看護もそうだけど、健康で皆さんが過ごせるような仕

掛けというか、仕組みというか、そういうのを地域の中で作っていかうっていう風な感じでやってるところです。だから、北海道出身の人とか、大阪出身の人とか、Wさん（三次出身でほしはらとつながりがある方）みたいな3人が今看護師で移住して。Wさんなんかは週に4日は訪問看護の仕事で。それが介護保険のサービスなのでお金もいただいた上でもする。私はリハビリのね、作業療法士として訪問をしているって感じかな。

やっぱ島の人みんな優しいよね、すごい優しい。もうだから楽しいし。

病院がたくさんあるわけではないしね。例えば、ヘルパーさんとか、地域を支えるような職種の人がたくさんいる地域ではないので、皆さんそれぞれが自分で自分の体を守らなくちゃいけないっていう意識はすごいある。

地域の中でしっかり元気で生活していただきたいと思うけど、地域の力が今なかなか落ちてきてる。残念ながら。そういうのはすごい感じてたので、地域のところから健康を支えるっていうその姿勢はすごい共感してて。で、自分の住んでるところから割と近いからね。私も車で30分あったら事務所まで行けるので。だからさ、そういうところにあるんだったら、やりたいと思って、で、手を挙げたって感じかな。

都市部だったら、ヘルパーさんとか事業所とかがたくさんあるし、それこそ訪問看護とかも、利用者さんの奪い合いじゃないけど、たくさん事業所があって、どんどん私たちが行きますからみたいな感じだからサービス過剰というか。利用する人達も介護保険の保険料を毎月払っているじゃない？そうすると、自分が払ってるんだから使わないと損みたいを考える人もいるのね。だから自分がちょっと病気になった、体がついていう時に、サービス使わせてくれ、風呂入らせてくれとか、ち

よっとどっちかというサービス過剰になりがち。

だけど、そうでない地域だったら、お願いしたくてもできない、家族が頑張らないといけないとか、地域で助け合いをしないと。

例えば救急車呼ぶときに、家族がいなかったら、近所の人と一緒にいって行かないといけないじゃない。そこは地域の支え合いで、自分が乗っていくんだ、みたいな、自分の使命として考えているような中年世代の方がいらっしやったりだとか。昔からそういうつながりがあった地域だから、しんどい時に助け合える、おかずを持って行ってとかね、そんな助け合いみたいな感じかな。

店も本当にないからね、生活の中で助け合いたとか、自分でがんばろう、工夫してなんとかしよう、あるもので何とかしようとか、そういうのがやっぱり強いなって。

だけど今は地域住民がみなさん高齢化していて、人を助けてあげたくても自分のことで精一杯になってきちゃうと、なかなかそこがね、上手く回らなくて、っていうところが出てきているので、そこがやっぱり課題かな。

だからさ、もう本当に不必要なサービスがまかり通っていると、やっぱり保険料どんどん上がっていくよね。

国としては、地域住民がリーダーとなって、地域の通いの場をつくってください。みんな体操する会でもいいし、ご飯作って食べる会でもなんでもいいんだけど、そういうのを住民主導でやってくださいっていうのをすごい言ってる、ずっと前からね。

社会の政治のことであるとか、なんかいろんなことで、え、おかしいじゃんっていうことあるけど文句を言ったところで変わらんじゃない？

自分がこう、少しでも動いていたりとか、みんな協力して動かないと、その「なんで」っていうものは変わらないから。やっぱり文

句言ってるだけじゃダメだなんていうのはすごい思うよね。

子育て・子どもが育つ環境

自然の中で色々採まれて、仲間と一緒に、それこそ土だとか、風とか、そういう空気の中で時間を過ごしたっていうのは、なんか、人間の土台になっているような気がする。だから、私、それが欠けたらやっぱり難しいと思うんだよね、生きていくのって、うん、なんとなくね。

五感を使って自分の体全体を使って時間を過ごすっていうのはすごい大事。

なんかさ、それは私たちより、もうちょっと前の世代の人たちなんか、本当に当たり前として、子ども時代からあったようなことが、

今、社会が全部変わっていったから、経験したいのにできない子もいっぱいいるからね。

だから、多分ほしはらがあったりとか、そういう自然があるところに行くことで、そこがちゃんと補充で補完できるっていうのは、すごい大事なことだと思う。

私たちもそうだったから、うん。

私と長女が、例えば一緒に山行ったところで、ああいう経験はできなかったでしょう。それが、ほしはらがあってくれたから、豚に出会えた（笑い）。

仲間と喧嘩しながらね。キャンプインキャンプができたりとか。そういうことがね、させてもらえたから。すごい大事だと思う。

母親 N さん

<プロフィール>

広島市在住。2016年にほしはら山のがっこうを会場に行われた「おもちゃフェスタ」に親子で遊びに来た。2021年より現在まで、親子対象のふるさと自然体験塾に4人で参加。当初長男8歳・長女5歳・次女2歳。長男は2021～23年の7泊8日子どもキャンプに、また長男と長女は2022年から子ども対象の体験塾にも参加。



子ども3人と参加している

自身が育った環境

最終的には団地、やっぱりいわゆる。あんまり団地って車がそこまでメインでなければ、来ないじゃないですか。住宅街でも。舗装されてる廊下ですよ、ローラースケートその頃はすごい流行って。ずっとやってました。

岡山に住んでたことがあって、(学校まで)行きだけですごく時間かかるところで、30～40分ぐらいはかかるんですよ。だからすごく寄り道はしてました。木いちごとか、水溜まりの氷を割るとか。川で、なんて言うんですか、あの、こういう渦が巻いてて、どこにつながってるかわからないところに傘を突っ込んでみたりとか。本当にこれほど行くんだらうみたいな。

で、野良犬が当たり前の時代だったので、付いてくるし、みたいな。なんか怖い体験もありつつの感じだったんです。

自身の祖父母の家のこと

世羅です。世羅でも結構奥です。もう限界集落みたいな感じですね。今でもお米を作ってるみたいなんですけど。だからカエルの声が聞こえる、田んぼだから、カエルの声すごい大合唱なんですよ。それがやっぱり耳の中にまだ残ってて。

あんまり行くの嫌でしたね。なんか、蚊とかなんか草?もあるしとか、そのね、ぽっとな(トイレ)はいいけど、蛇が出てくるかもわからんし、草が生えとって蚊に刺されるとか。あんまりそう好きではなかったですね。

現在の生活や仕事

子どもたち

まず、長男はずっと家ですね。たまに公園行ってるか。友だちがいるみたいです。木曜日はちょっと習い事に行ってますね。

みんなやっぱり習い事とか塾かな。うちの学校はちょっと塾率が高いかな。

うち、転勤族なんで。今主人の勤務先がこっちだから、ま、ここに住んでるって感じですかね。

(子どもは)もっと欲しいと思ってましたけど。なんか大家族っていうテレビがね、昔何回かあったじゃないですか。憧れてて。(見たのは)何才?もう中学校とか。絶対楽しそうと思って。そう、あれ見るのがすごく好きで、だから、なんか多ければ多いほどなんかこうね、楽しいなと思いつつ、うん思ってたんですけど。

でもやっぱり現実はどうかな。思い通りにならんし。やっぱり、思い描いた想像とは違いますね。(森のようちえんに通ったのは)3人ともです。

ほしはら山のがっこうに来るようになったき っかけ

そう、やっぱ住んでるところが、車とかアスファルトばかりで。やっぱり平日はもうね、学校でも遊ぶ時間が取れないし。

なんか、自然を感じさせられるっていうか、遊ばせられるところを（と思って参加することにしました）。

やっぱりちょっと体験できるし、大人になって、ふっと思い出してくれたら、それはそれで嬉しいなと思って。

一番最初（に来た行事）はあれです。あのTAKE-1 グランプリ*。ほしはらでやった、おもちゃフェスタ*です。

ゆうちゃん（広島森のようちえんに子どもを通わせている、ほしはらスタッフ）が森のようちえんで配って。チラシを。男の子だし、興味があって。で、行きました、森のようちえんのお友だちと行きました。（長男が）年中（の時）。

（ゆうちゃんと）森のようちえんに入るためのプレようちえんっていうか、週1みたいな感じで行くのが一緒だったんです、それがきっかけですね。

***TAKE-1 グランプリ** 自分が削った木のミニカーを、竹を割ったコースで走らせて競う。身近な里山の木や竹に親しみ、遊びや創造性・工夫する楽しさを感じるプログラムとして、三次市に本部がある一般社団法人ひろしま森のおもちゃ協会が実施している。

***おもちゃフェスタ** 木のおもちゃや手づくりおもちゃなどにふれて遊ぶイベント。実行委員会形式で、主に子育て中の親がスタッフとなって実施していた。TAKE-1 グランプリが生まれた。



TAKE-1 グランプリ

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場ですか。

ゆうちゃんを見て、いっつも、なんでゆうちゃん怒らないんだろうって…。すごくうまいなと思って。全部説明をするじゃないですか、その説明の仕方も上手だし。なんか子どもじゃなくて、一人の人として扱うっていうか。

この前のそば打ちでも、なんかもうやりたくないんだったら、もうやっちゃえとか言うて思うけど。なんかちゃんと、後でブーブー言うからちょっと確認しようって言って「どうする？」っていう確認とかがなんかすごいなと思って。

なんかすごいな、そのスタッフさんのおかげだなというのは、もうすごい常々あって。もう続けてください。3 番目（の子が 7 泊キャンプに行く頃）まで。

自身や子どもの成長や変化について

自身

あんまりいちいち気にならなくなったかな。なんか、昔はせっかく森のようちえん入っただけ、田植えとか、どろんこ遊びあるじゃないですか、そういう時に「行け」とか言うて。1 年に 1 回しかないし、何のために通わせとるんって。

(でも長男は) 田んぼの苗を投げたり、手渡しの係。泥に入らずに、ちょっと楽(して)じゃないけど…。

田植えをする前に、泥んこ遊びができるんだけど、そういうのも、1年に1回だし、今しかできんし、森のようちえんならではじゃんみたいな感じ。体験をやろう、やろうやって、引っ張っとったら、当時の年中さんか年長さんに「もう嫌がってるんだからやめて」って言われて。「今タイミングじゃないよね」ってなってる。

まあ、そのやりたい時にやればいいのかと思って。無理にね、あんまりこう、やりなさいとは言わんくなりましたかね。

本当はね、なんか、木登りとかもやったらいいのにとか、思うけど。きっとタイミングじゃないし、やりたくない時なんかなって言う。ちょっと待てるって言うか、まあ見守れるようになったのかなとは思ってる。

(子育てが)変わりました。いや、そこに入らなかつたら、絶対違うと思います。

長男

今回その親子キャンプっていうか、森のようちえんの行事があって(卒園児も参加できる機会)。テントあるんですけど、なんか初めてその長男が即戦力になって、めっちゃすごい、なんだろう、7泊8日のキャンプの得たものをすごく発揮できてる姿をなんかこう間近で見れて。

ゆうちゃんにも言ったんですけど、家族用のテントがあるにしても、この棒がこう、こういう風にやってとか、なんか、今までは全然だったけど、こう先を見越して、自分で組み立てるとか、ペグを打つとか、火の当番をするとか、すごく活きているなっていうのはすごい今回の夏、実感できました。

(キャンプでテレビ取材の)インタビューとか、受けてたじゃないですか。それでなんか

こう勢いづいたのか、この前あれなんだっけ、どっかテレビ局のカープの選手の会があって、たまたま当たって行ったら、なんか「俺インタビュー受けるよ」みたいな。私も主人もそういうタイプじゃなくって、恥ずかしいっていうタイプなんで。「俺、インタビューどうぞ」みたいなので、受けてテレビに出たりとか。

この前参観日があって、英語だったんですよ。前で発表するのも、みんなは紙を見て言ってるんだけど(長男は紙を見ないで発表)。

だから、そういう経験を、まあなんかこう、ほしはらでもその7泊、あれですごく、成長…。なんかそれで、すごく自信がついて、出来るのかなって言うのと。なんかその誰でも結構友だちにすぐなれるから。

(キャンプから)帰ってきたら一通り習ってきたのを(料理しました)。メスティンうどんどか。ゆうちゃんが(教えてくれた)鶏塩うどんだったっけ。

2階の社宅みたいなところなんですけど、ベランダで、あの牛乳パック(でホットドッグづくり)をやったって言って、牛乳パックをとにかく集めてって言って、まあなんか集めて、それをベランダでやったら、あ、なんかやばい、これ、ちょっと間違えたら火事で通報されるよねって言って。

自然や農村、環境のこと

うん、暮らしたいですよ、自然豊かなところで。バスは通っておいてほしいです。

子どもを育てる中で、田舎を、森のようちえんでも憧れて。小学校を機に転校しちゃう子も何人か見てるんですけど、山奥すぎると、今度は運動しなくなるって言われて。小学校もバスだから、そこのバス停まで送って、で、また迎えにバス停まで行ってとかだったら、なんか何しに田舎に来たんかなって。

そうそうそうだから、全然動かなくなったって話を聞いて、なんか懂れるけど、体が動かせなかったら意味ないなど。

だから、まあ、ある程度やっぱ子どもがいるところがいいのかなと思う。

森のようちえんを選んだ理由

すごい動き回る子だったんですよ(長男)。

幼稚園が当時ちょっと教育路線だったのかな、私たちが行った年代が。すごく厳しくて、なんか泣いてる思い出ぐらいしか…。自分が楽しく、写真を見たら、楽しそうなんですけど、なんか私としては、なんかすごいもうなんだろう、結構「折り紙を折りなさい」とか、すごく厳しいっていうか、お勉強に。お勉強は先行してやる幼稚園だったので。

もうこの時代しか遊べないじゃないですか。小学校に入ってね、また勉強。私が勉強嫌いなんで。勉強嫌いですね、嫌いでした。嫌い嫌い。なんかこう、先生が怖いからやろっかなみたいな。

だから、ちょっともうこれは、決まりきったところでは無理かなと思って、この子が。男の子だし、こうなんかね、昆虫とか興味とか持ってもらえたり、なんか、のびのびとと思って行かせたのがきっかけ。

中国新聞にたまたま、森のようちえん特集で、“おてんとさん”と“まめとっこ”さんが載ってて、募集がちょっと“まめとっこ”さんは、入りたいって時にもうなんかしてなくて。“おてんとさん”はまだしてたんで、そっちに。

で、昭和感を感じたんです、その写真が。ちょうど鼻水が垂れてたりとか、なんか、そっちの方がなんかちょっとしっくりするなと思って。

当時、廿日市に住んでたので、(通園時間が片道) 50分。もう今ね、考えられないですけども、その当時はここに入れたっていうのがあったから。

なんか色々(他の)幼稚園も見に行ったんですけど、すごい狭い園で。決まった遊具で遊ぶっていうのが…。もう森のようちえんを見てしまったがために、なんかその中で？みたいな、安全を確保されてて、みたいな。それはちょっと違う。やっぱここがいいなと思って。

この子で終わりだと思ってたんです。もう廿日市からだったら、もうね。小学校上がったら、廿日市からだったら到底通えないと思って。終わりかなと思ったんですけど、たまたま廿日市の住んでるところを退去してくださって言われて。

で、西区に、会社の系列の(家が)あったんで、西区だったら通える距離だったので、それで3人通わせてました。

子育て・子どもが育つ環境

自然遊び、卒園生で年に1回森に集まるっていうのがあって。行けたらそれぐらいですけど、(普段は)森遊びって言ったらもう、ないですね。公園とか。

そういうイベントとかで行かしてもらって、もうここでっていう感じですかね。まだ次女が通ってるので、たまに(森のようちえんに)行くけど。

この前、(ほしはら山のがっこうの体験塾の)そばの時に石臼だったじゃないですか。あ、懐かしいと思って。あの帰りに、思い出を探ってみたら、(自身の)小学校で先生が持ってきてくれて。で、なんかこれをみんなで挽いて、うどんとして食べようって言って、なんかすごい平べったい、なんかね、麦かな、ずっとやって。今では考えられんですよ。なんか、何日も何日も挽くから、粉がその辺にあって。なんか、暇があったらみんなやって、みたいな感じ。

なんかそれ授業の一環だったのかなとかって思うんですけど、その記憶がその石臼を見

て、なんか思い出して、蘇ってくるんですね。なんか、体験したことが蘇ってくるから、その子たちも忘れるかもしれないけど、ふとした瞬間に思い出して、あいあい(スタッフ)のこととか、こう言ってたなとか、思い出してくれたら嬉しいなと思って。

とにかく遊びまくって、みたいなの。



ほしはらの森でムササビの巣づくり

小学校では、本当に遊ぶ時間がないので、とにかく身体を動かしてって。(小学校は)休憩も決められ、とにかくずっと座って、体育以外は座ってっていうか、体育でもやっぱり先生が見本を見せてこうだよみたいなの。決まりきってるっていうか。

例えば、ブランコでもいろんな乗り方ができるじゃないですか。立ち乗りとか、座り乗りとか、こう2人乗りとか。だけど、今は一人乗りよね。1年生は座って、あ、6年生もらしいです。座ってこぐだけ。なんか、こう、段をあげたりとか、ダメだね。

遊具に対しても、使い方をまず1年生は習ってからじゃないと遊べないんです。だから、入学してすぐに外行けるじゃなくって、入学して何ヶ月間は、外出ない。この遊具はこう

やって遊びます。先生がまず遊具に対しての遊び方を教える。

だから、ほしはらでは、もうとにかく、好きなようにもう自分が思うように遊んでっていう感じですかね。

すごく先生たちもやっぱりこのね、コロナにも、でしようけど、すごい対応に追われてると思います。何かあったらすぐ電話くるし。縄跳びしてて、砂に入ったぐらいで、「目に砂が入りました」とか電話来るから大変だなと思って。

(保護者同士)価値観がちょっと似てると、楽っちゃ楽。小学校で役員しているんですけど、ちょっと温度差はあるなと思う反面、この子がそういうところ(自然遊びが出来る場)に行ってるって言ったら、母は行かせたい人が多くって。子どもだけで行くかって言ったら行かないじゃないですか。行かせたい人多いですね。

なんか(野外教育が)できる人も少ないし。ちょっと聞いた話では、野外活動はまだなんですけど、5年生から行けるじゃないですか。私たちの時はカレーを作ってみんなで食べたけど、(今は)先生が見きれないって。まー、その火に対して。あのカレーを作ったりする時に…。作らない、バイキングです。うちの学校ちょっとわかんないんですけど。なんかやっぱり大きい小学校、6クラスとかあると、それを作るのだけでも、先生が見てとかチェックしてだから先生も見きれないって言って…。

テントでも寝たじゃないですか。(今は)宿泊棟みたいところで寝るんですよ。ほんと野外なんですかね。

母親 O さん

福山市在住。2021 年子ども対象のふるさと自然体験塾に長女（小学 5 年生）と次女（小学 1 年生）が参加。また親子対象の体験塾に親子 3 人で参加。子どもが通っている保育園卒園児のお泊まり会先として施設を利用したこともある。



親子参加した吾妻山での自然体験

自身が育った環境

（出身は）鴻巣市（埼玉県）。田んぼがいっぱいのところ。今はもう結構ベットタウンだけど、私がちっちゃい時は田んぼがいっぱいで。家から幼稚園まで、田んぼの間を歩いて行って。

幼稚園で、なんか竹の筒に袋がついてるのを、…それ母が作ってくれたのかは、全然覚えてないんですけど、歩きながらイナゴを入れて持ってくと、向こうで佃煮作ってくれたみたい。それ、私の母から聞いたんで、私は覚えてない。何でも作る保育園だったけ。コマを回す紐とかも全部親が作ってくれる幼稚園だったけえ。それも多分親が作ってくれたのかな。

親の意識があって。近所の人からそこがいいよって教えてもらって、そこに。まだその時は認可とかされてなかったから、なんかものすごく高かったみたいで、鴻巣市で一番高い幼稚園だったらいいですよ。

そうそうそう、そこが「さくらさくらんぼ保育*」。斎藤公子先生のさくらさくらんぼ保育を取り入れようとしていた時だったんです、私が幼稚園にいる時は。

小学校に入ってから、しょっちゅう、親が子どもだけのキャンプに参加させてくれて。トムソーヤクラブみたいなの。なんかご飯作ったり、大学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちと一緒にご飯作ったりとか、キャンプの歌だったりとか、キャンプファイヤーしたりとか。休みのたびに参加させてもらってたかな。

昔は新宿（のホテル）で働いて。埼玉だったから、都内までみんな大体仕事に出て。でも、そのホテルが、都合で閉まることになって。

高校生の時からユース hostel でアルバイトさせてもらって、アルバイトというか、ほとんどボランティアだったけど。住み込みで。働くというかね、楽しくって。

ホテルが好きだったのかな。でも本当、その時も色々経験させてもらって。で、そこが閉まるってなって、占い師に、地方に行きたかったけえ、私はどこの地方に行くと私に向いてるか見てもらったら、そしたら、岡山だった。こっち方面だった、中国地方で。もうおもしろいでしょ。

岡山にちょうどオープンするホテルがあったけえ。で、そこで働いてる時に、友だちから父ちゃんを紹介してもらって、それで結婚して福山に来て。

*さくらさくらんぼ保育 = 斎藤公子先生が埼玉県深谷市でスタートした自然遊びや食育、リズム遊びを取り入れた保育の実践。日本全国に取り組まれている保育園がある。

現在の生活や仕事

結婚して福山に来たから、友だちおらんしさ、子ども生まれても友だちがおらんくて、もうほぼ鬱みたいなの。

父ちゃんは病院で、福山の病院で働いている。

(今住んでいるところは) 田舎の方だと思うけど。田んぼもあるし、山もあるけど、住宅地も結構ある感じです。芦田川と高屋川に挟まれてて。だけえ、川に行くと、ヌートリアとか、エビとか色んな生き物はいっぱいいて。

しかも畑を始めたんです、この春から。無料で借りてて。もう歩いていける。すぐそばなんですけど。

そしたら、畑にカエルがいっぱいおったんですよ。もう虫だらけで、子どもたちが大喜びで。犬も一緒に行くんですけど、楽しそう。ザリガニとかもおったりとかして。手伝ってほしいのにね、畑に行くと、なんか楽しいみたいで、遊んでる。畑仕事は手伝ってくれないっていう。

ほしはら山のがっこうに来るようになったきっかけ

そこが思い出せなくて。ふくろう先生(自然観察指導員の講師)の、日帰りの、あの昆虫採集の。大人は参加しない。子どもだけ参加で、親はまた後で迎えに来てねっていう。ああ、親は近くのカフェに。

なんで見つけたんだろうかね。それがわからないという。でも、最初から多分、その友だちと行ったような気がしないんですよ。最初は家族だけで行ったような気がして。

でも前から友だちからは、ほしはら山のがっこうのことは結構聞いてたんです。なんか、楽しかったよって、すごい昔からパンフレット見せてもらったり。

だけど、なんか遠いから。そう、来てみたらそう遠くなかった。



里山のいきものとふれあうプログラム

ほしはら山のがっこうの活動で印象に残っていること

子どもたちはほんと、そのふくろう先生のペットボトルで虫採って観察できるやつが一番楽しかったんですって、2人とも。

「追いかけるのがすごい楽しかった〜」って。一緒に、そう、一緒に遊ぶっていうのが。先生じゃないところが。ふくろう先生、先生って名前がつくけど。それが楽しかった〜って言ってて。

下の子はやっぱり、たんぽぽ保育園の卒園児の会で、お泊まりに行かせてもらったのが、それはやっぱり自分の代だったから、連れがよかったから、それが楽しかったって。

初日はもう集まってバーベキューして、みんなで寝て、次の日は川遊びして帰ったって感じです。

ほしはら山のがっこうはあなたにとってどんな場か

ほしはら山のがっこうがさ、すぐ隣とかだったらさ、すぐ行けるんだけど。ちょっとなかなか、よし行くぞってね。

ほしはらとか行くとね、指図されないじゃないですか、なんてったって。みらいのこども舎*もだけど、指図する人いないじゃないですか。あれしなさい、これしなさいって。学校と違って。

学校ってなんでも命令されるじゃないですか。はい、赤ペンもって、ペンに持ち換えて、

はい、次はこれですよ、とか。なんか、時間で計られたりとかして、そういうもんじゃないですか。そこがのびのびね、できたんでしょうね、きっと。いろんな大人にも出会えて。

***みらいのこども舎**=地域の人や自然との関わりの中、生きることをたのしみ、こどもの時間をじっくり味わい、ともに学び合うことができる認可外の野外活動団体（尾道市向島）

自然や農村、環境のこと

出身地の鴻巣の家は、今、人に貸してしまってる状態で、私の妹も違うところに住んでいますし、母も山梨に住んでいますし、なんか、ふるさとって感じがあんまりなくて。ふるさと、なんか…どこですかね。でも、ここ家に帰ってくるとホッとするんですよね。やっぱり。

いや、もうもっと田舎に引っ越ししたいって父ちゃんに言うんですけど、嫌がられて。住宅ローン払ってて。なんかね、借りてるとこだったらね、なんかどこでもね。

子育て・子どもが育つ環境

自然を取り入れた子育て

さくらさくらんぼ保育のところで子どもを育てたくて、福山でちょうど見つけたのがたんぼぼ保育園。自然児に育てたかった。自然系な保育園で。ほしはら山のがっこうのような、自由に遊べる。

布おむつで、さくらさくらんぼのリズムを取り入れてるところ。(娘は2人ともその保育園を卒園した)

なんか、近くの保育所と違って、字を書かせたりとか…、小学校に上がってからやればいいのにみたいな。それになんかじっと座ってないといけなかったり、上履きに履き換えなないといけなかったりとか。なんかもう面倒くさい、みたいな。

やっぱり、自然体験は素晴らしいですよ。だって、お米がどうやって出来てるか知らないし。洋服だって、どうやって出来てるか知らないし、これが綿なの？みたいな、綿の花見せると「え、これ何？」みたいな、ねえ。

うちの母は、鼻水が垂れたら、すぐお医者に連れていく人だったけんさ。保育園で「様子を見るってことをしてもいいんだ」って。それをね、お母さんたちに伝えていきたいなって、そういうのも伝えていきたいなって。

それに自然療法でもね、子どもたち、自分で治す力持ってるっていうのを…。すぐ医者に連れていかないといけないって、そう思ってるお母さんたちがすごい多いからね。(夫は)そう、病院で働きよって。病院大好き、自分が体調悪くなったら、まず薬飲んで。

いいんだけどね。そういう自然でお手当で、自然でね…。この間もビワの葉っぱを頭に乘せてたら熱が下がったんだけど、先人の知恵というか。なかなか表にはあんまり出しにくいよね。

外遊び

最近の子、全然外で遊んでないんですよ、誰もいないんですよ、外に子どもが。いっぱい近所に小学生いるはずなのに、全然外に出てこないという状況で。もっともっともっと外で遊ぶ体験をね。

多分その遊び方がわからないと…。

公園らしきものはないんですよ、でも、草っぱらはあるから、土手、河川敷ですし。草っぱらはあるからね。歩いてたら、いろんなものいるじゃないですか。楽しいしね、水辺があったらいろんなものいるし。それが多分、遊び方がわからないのか、大人が誰も遊んでないから、子どももどうやって遊んでいいかわからないのか。

そもそも、赤ちゃんの時から、赤ちゃんどう遊んだらいいかわからない。私もそうだったけど、そこからじゃないのかなって。

福山市、タブレットが配られてるんです、小学校で。タブレットに夢中みたいで。なんかゲームとかしてるらしいですよ、うちの子どもに聞くと。宿題のタブレットで出てるものもあるみたいですし。

うちは持ち帰り同意しなかったから持って帰ってないんですけど、なんかみんな同意しないといけないものだと思ったみたいで、他のお母さんたちは。だけんみんな毎日持って帰って、また次の日持っていくみたいなことみたいですね。

オルタナティブな学びや暮らし

(長女)

長女は、みらいの子ども舎に今、週3ぐらいで行ってるんです。地元の小学校にはほとんどあんまり行ってなくて今、自分で電車乗って行ってもらってます。電車乗って尾道駅まで行って。で、尾道駅から渡船に乗って。で、自転車。

中学校、埼玉の方に行くかもしれんけん。ばあちゃんは、今、山梨県におるんです。なんか、埼玉で寮の学校があって、そっちに行くかもしれなくて、上の子は。

テストがなくて、自由な学校があって。そこに3食オーガニックの食事が出る。本人がそこがいいなって言って。

私がちっちゃい時から意外にもあったみたいで、その学校。自由の森学園。寮は狭き門みたいで、かなり。

なんかすごい羽ばたいてって。なんか多分自然とふれあって1回ちっちゃい時に遊んでたからこそ、こうやって、自分の行きたいところに行くんじゃないのかなってすごい思うんです。

(次女)

下の子は2年生から広瀬(福山市内全域から編入できる小学校)に転校したんですよ。

(自身)

私がやっているやつですか?2019年の10月に立ち上げて。助産師が産後のサポートをずっとしたいって、たまたま、たんぼぼ保育園系列で知り合って。70代の助産師とたんぼぼ保育園の元園長だった70代の栄養士と私の3人で今してるんですけど。

自分も1人目の時、子育てが大変だったんで、しんどいお母さんが一人でも減ったらいいなと思って一緒に今させてもらって。WAM助成*をもらえて。ちゃんと国からの助成金もらえて、今、毎週1回やってるんです。

0歳児の親子が来てて、食べることの大切さ、離乳食の食べさせ方。

離乳食、みんなお母さん、最初インスタントを持ってきたんですよ。お湯をかけたからお粥ができるとか。みんな作り方知らなかったのよ。びっくりでした。

だんだん離乳食を自分で作れるようになって。子どもは、子どもの悩みだけど、実は親の悩みであるみたいな。

お母さん自身が「大丈夫だ、私はこれで合っている」、「大丈夫だ、この子はこの子で大丈夫」っていう、その気持ちが最近のお母さんたちあんまりない。自己肯定感とかも。

毎週会うたびに助産師と栄養士が、みんなずっと続けてきてくれるけど、毎週毎週「すごいね」って言って、お母さんが変わると子どももすごく変わって。

お母さん同士もすごい仲良くなられてて。8組ぐらいが限度かな。広さもありますし、スタッフも3人しかおらんので。

今、任意団体だけ、NPO 法人とかどんな形にしたらいかなって話してます。今度聞か

してください。産前産後の「大きな木の下で」
っていう任意団体。

***WAM 助成**＝社会福祉振興助成事業、政策動向や国民ニーズを踏まえ、民間の創意工夫ある活動や地域に密着したきめ細かな活動等に対し、助成を行い、高齢者・障害者等が自立した生活を送り、また、子どもたちが健やかに安心して成長できる地域共生社会の実現に向けて必要な支援を行うことを目的としている

今度お米作り始めるんですよ。発足会をこの間したんです、お友だちと。みんな初めてなんだけど。私入れて3人でお米作りの主要メンバーなんだけど。でも、自然農で、お米作りをもう何年もしてる先輩がおるけ、一緒に見てもらってる。

その一人の人が、「居場所」を持ってて。加茂町っていうもっと田舎なんですけど。一軒家を買って、親子で楽しいことをしてくれてるところがあるんです。

その目の前の田んぼがあって、そこのおじいちゃんがもう田んぼを「もうわしは歳だけえ、やらのよ」って言って、「使う？」って言ってくれたみたいで、そこをお借りすることに。一反。何人かでやれば大丈夫かなみたいな。もう楽しくて。

女子、女子、みんな母3人。ひとりの人は同級生なんですけど、子どもが。居場所をやってる人はもう孫がいる人だから、50代～60代それぐらい。

(居場所は)「とんとん文庫」っていうんです。あ、本もいっぱいあるんです。いい本もいっぱい取り揃えられてるんですけど、でも別に文庫活動だけじゃなくて。

最近、近くに福山平成大学があって、子ども学科？保育士を目指してる学生さんとかが放課後來てくれてたり、遊び相手とか。昼間はパン作りとか、アロマ作りとか、ヒンメリ作りとか、なんかいろんなのやってるところで。

私は仕事（「大きな木の下で」）も、その場所お借りしてさせてもらったりっていうことも前あったんです。ちょっと今は、たくさん親子が来てくれるようになったので、とんとん文庫からすぐ近くのところをお借りしてるんですけど。

でも、1歳以上の子は、歩けるようになった子は外に出ていくんですよ。庭がないんですよ、今のその拠点は。近くに公園とかはないところなので、外遊びができない状況なんです、今のところは。とんとん文庫は庭があるんですよ、山も。1歳過ぎて歩けるようになったら、土と絶対ふれあって遊んだ方がいい、もう室内ではなく、外で遊んだ方がいいってすごく、その元園長と栄養士が言うけ。

ちょっと歩けるようになった子は、とんとん文庫の方でまた活動しようかなっていうのも、今ちょっと検討中なんです。

2. 3人の受入地域住民のストーリー

地域住民に対しては、ほしはら山のがっこうの活動をどのように見てきたか、地域の外から上田地域に人が入ってくることに對してどのような印象を抱いているのかなどについて対面にてインタビュー調査を行った。〈 〉内は、インタビュー調査者の補足である。

地域住民 A さん

〈プロフィール〉

三次市上田町で生まれ育ち、就職後は広島市で数年間在住、その後Uターン。ほしはら山のがっこう副理事長。1947年生まれ。



地域の反応

ほしはらの活動が始まった時に、地域からはどのような反応がありましたか？

「良いことだね」というよりは、目を丸くするというか「ほんまに来るんか？」というか。反対はせんけども、「いっぺんやってみー」「納得するように、いっぺんやってみいや」「足をひっぱりはせんけーやってみいや」という感じだったと思う。

ほしはらができた当初も、当時の熱がまだあった時で。「わしら、これとこれをやってきたけえ、やってみようや」って。例えばハワイアンダンス？集会所で、シェイカー振ってカクテル作って。

〈(岡田山の山頂を整備した話)「わしらあれもやったけ、これもできるよ」と、ノリが早い、面白がるというか、やってみようじゃないかというノリがありましたよね〉

なんとかなるよと。それで、なんとかなるんよね。神楽でも、人数が足らんようになって足腰が悪くなって、正座もできんくなったら女性も入れてやろうよって。

〈ほしはらができてから、ここで起きた出来事で覚えていることを教えてください〉

この場所をほしはらとして残すようになって、3月いっぱい廃校になったんだけど、地元で管理することになって、「わしはせんよ、まだそういう器じゃないけ」と断ったんだが、断るのが下手だからセンター長になって。ただ、その時は本当にできるんだろうかという自信もないし、これだけの建物を・・と非常に心配だった。その秋に台風がきたんよ。自分の家もあちこち壊れたんだけど、これはひどいことになった、学校どうなったかと見に来たら、ガラスも割れたりしとったけど。こんな建物を預かって、台風で壊れた時にどうするか、の話とか全然していなかったし。校舎を残してもらったのはいいけども、みんなに寄ってもらって片付けるとかになったら反感をかってもしけないと。あれは、頭の中に残っとるね。案ずるよりはなんたらでもないけど、自分が勝手に心配しとったけど、ええ具合になっていった。

〈誰かが号令かけたわけでもないのに、皆が心配して学校に集まって、水浸しのところを片付けて、雨漏りしているところにバケツおいて。自分の家も大変なのに、みんなで片付けたのをよく覚えている。〉



地域住民の意識の変化

<かつては上田町出身であることが恥ずかしいと思う地域住民が多かったという話を聞いた>

結婚の話をする際に、当時は上田というのをはっきり言えないというか、道も悪いし、お店もないし、行商が物を売りに来るようなところだったし、川西のなかでも上田の人は山猿とか、田舎もんというイメージで、そういうコンプレックスみたいなものは当時あった。田舎者という感じで、自分だけじゃなしに、そういうのはあった。

地域のビジョンについて

真っ暗なことが資源なんだと。都会には真っ暗なところがないけ、星がきれいとか、天の川を実際見たことがないし、という話から、(地域の)みなさんの考えが変わってきた、そういうきっかけになったのが、(廃校活用の)検討委員会の募集だった。

どっちにしても田舎なんだけん、田舎で都会のような暮らしをするには無理がある。せっかく田舎に住んどるんじゃけ、田舎に来てよかった、田舎が楽しいと、誇りをもって住める地域というビジョンをつくった。それは、このほしはらがきっかけになった、と私は思っている。大きな影響があったと思っている。

そういう、描かれたもの(ビジョン)があると、みんなも同じ方向にむけるというか。

15分も行けば三次に店はあるんじゃけ、車はあるし、外にみんなが向いていったら何もできんかったと思う。なにもないという、店がなくなったという壁にぶちあたった時、そこで見直したり立ち上がったりでできる組織があったから発展していったと。そういう経緯を一個一個おさえていったら、たしかにいろんな階段を、踊り場もあったりして立ち止まりながらも、同じ地域をね、なんとかがんばってやっていこうというね。

地域外の人との交流による効果

来てもらった人はほとんど感動してくれて、そういうのが新たなエネルギーに転嫁して。関わった方も知らなかったことを教えてもらって、山菜にしても山ほどあっても(自分たちは)食べる習慣もないし、そんな美味しいもんだと思ってなかったし、興味がなかったけど、「あ〜そうなんだ」と、だんだんとそういうものに興味を持てるようになって、教えられたというかね。

今一番ありがたいことは、森のようちえんですよ。それから里山に住む生き物のU先生、森のようちえんのMさんとかね、かけっこスクールMさん、そういった人がここを利用して活動していて、Tさんもいるし、おもちゃフェスタのHさんとかね、そういう方がここを拠点にいろんなことで支えてもらっている。ここまで成長してきたということは、これはすごくありがたいことですし、生命力を感じるというかね。

Iターンですよ、これも大きいと思うんですよ。Iターン者がここに住もうかという時に、ある程度開かれた地域、自然の環境もだけど、人間関係も、子育てもここでしたいという想いに至っているのは地域性が風通し良くないとね、そういう住みたい町にはなかなかないと思う。今の子育ても、小学校の生徒も上田は多いんじゃないかな。

ほしはらの活動における子どもの成長をどのように捉えているか

20年も経つと、小学生で体験した子が大人になり、大学生、社会人になり。彼らがまたリーダーやスタッフとして戻ってきてくれた。ここで体験して育ったリーダーだから、初めて参加する子どもの気持ちがよくわかるよね。

自分らが体験して育ってきているから、そういう意味ではふるさとに帰って来たような感じよね。そういうのを見ると余計ね、感動する。歴史でもある。

過去から現在、現在から未来へとつなぐもの

昨日ね、“ほしはら”という冊子、学校があった時に当時の子どもたちや学校の先生やPTAの役員が上田の歴史をカタチにして残して、残すだけでなく、残す過程で昔のことを理解するというのを見て、自分らが知らなかった事とか、大事なことに改めて気づかされたことがあるんだけど、それを次につないでいく責任があるなど。どういう形でつなげていくかというのは、無くなっていいものもあるけど、大事にしたいもの、知らず知らずのうちに失っているものもあるよね。

形が消えたんじゃなしに・・・例えば、昔の暮らしの中で薪をずいぶん使っていたよねという話をした。薪を使って五右衛門風呂をね、当時は水道があるわけじゃないから、池や川から水を汲んできてね、五右衛門風呂に入ってる。家族は、おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さんおって、兄弟が3人も5人もおって、それが田舎のあたりまえの暮らしで、家畜もいて、牛も1頭くらいおって、鳥も何羽かあった。母屋という家と、風呂は別棟に小さい風呂場があって、(今みたいに蛇口をひねると)水が出るわけでないし、外から「(湯加減)どんな？」って声をかけて火加減を確認して、「熱い」と言ったらバケツで水を汲んで渡して、「ぬるいね」といったら焚口にいつ

て木を一本いれて、風呂からあがった時に、水持ってきてくれたり、火を焚いてくれたりしたら、「ありがとう、良い湯だったよ」と言ってる。それが当たり前の生活の仕組みだった。

家のまわりの山も入らんけん、だんだん荒れてくる。ものすごく不便だけど家族で支え合って声掛けあって、生きていくというのがそういう中で、誰にも言われなくても、子どものころから身に付いていくというか。今は蛇口をひねったら水が出て、お湯が出て、便利はいいんだけど、そういう中で一番大事な家族で支え合って生きていこうというのが培われていかないよね、子どもの頃から。ものすごく不便だけど家族で支え合って声掛けあって、生きていくというのがそういう中で、誰にも言われなくても、子どもの頃から身に付いていくというか。今は蛇口をひねったら水が出て、お湯が出て、便利はいいんだけど、そういう中で一番大事な家族で支え合って生きていこうというのが培われていかないよね、子どもの頃から。自然と兄弟が3人おったら、お互いに持ち場持ち場で、「今日はあんたの番ね」と、子どもなりのルールをつくったりとか、そういう生きる知恵を(誰かに)教えられなくても(自分たちで)作っていったりね、そういうことは失われてきてると思うよね。

薪を活用したり、家族のなかのふれあいがあったり、それを(現代社会において)どうやって補っていくか。それをしていないと地域も家庭もだんだんと薄れていく。そういうことがつなぐことの重要な要素の一つだろうと思うよね。

つないでいくことが大事と思っている。これから先につなぐことはもちろん大事だが、これまであったことを、今を素通りさせるのではなく、過去を現在に、現在を未来につないでいくのはいろんな意味で大事なんじゃないかな。



これからの上田地域

荒廃している農地は増えるよね。今、戸数は80戸を切った。ここ5年間で14戸減った。こういうテンポで減ったら、あっという間に集落が全滅してしまうんでは。施設に入られたりとかいう話は、あちこちで（聞く）。そのまわりはどうしても荒れてくる。それじゃ代

わりに守ってやるということは、自分らのところだけでも1年1年しんどくなっていく。あきらめるしかないか。ただ草だけならいいけど、鳥獣被害で作ったものが全滅になったら、作る意欲がなくなってしまうから。水害とかでの被害はないが、鳥獣被害で手をつけられんようになったっていうのはあちこちで聞きますね。

もちろん若い人を中心にどんどんやらんといけんが、ここに残って生きがいがある地域というのも魅力にならないといけんよね。自分も年取ったらここに住みたいんだということにつながっていかんと。高齢者の「こう」は「光」という地域を目指したらいいんじゃないかな。

地域住民 B さん

<プロフィール>

三次市上田町在住。田んぼの体験を長年担当。
1941年生まれ。



廃校活用して都市農村交流を進めることに対する地域の反応

〈町内会の集まりで廃校になることについて夜遅くまで話し合っていたこと、何か覚えていますか?〉

いやー覚えてらん。まあ、どうなるかな、というような(思い)が先だったけえの。学校を倒してしまう、こがなの(校舎)を任せられたゆうても、手に合わんじゃないかのお。小人数の町内会くらいのもんに、やるけえゆわれても。そいで、(校舎を)今のように残すことになってから地震対策したんかの。

〈都市農村交流活動が始まって、色んなことで地域の協力してもらったり、地域の夏祭りや運動会に都市部からの人も参加させてもらっている。それは他の町にはあんまりないことで、地域からの反発はなかったのかとよく聞かれる。地域だけでやったほうがいいという意見もあるだろうし、どういう風に調整してきたんですか?〉

別に反発するもんがおらんじゃない。地域の人数が減ってって、運動会が成り立たんような状態になりよるんじゃけえ、他の地域から山のがっこうに来てくれる人がおるけえ運

動会が成り立つようになったゆうて、逆に喜びよったわけじゃけえ。よそものを引っ張ってきってから、「あんた、上田の町内会の運動会なのに何事か」いうようなのは聞いたことがない。

いい塩梅じゃない。山のがっこうの子どもらがおるけえ、あんな賑やかな運動会が出来る。じゃなけりゃ運動会になりゃせんで、上田のもんが寄っても、なんぼもおらん。みな出てくりゃあで、ある程度人間はおるけど、出てこんのじゃけえの。じゃけえ運動会にならんだろ。紅白に分かれたんか、昔は中西東いうて3チームでやりよったんじゃが、成り立たんようになったけえ、紅白かなんか二つにわけて今はやりよるようなことだったんで。それでも成り立ちそうになかったんが、今の山のがっこうの子どもたちが入ってくれるけえ、お父さんお母さんもの、じゃけえ成り立つようになっとったわけよ。反発は聞いとらんの。「いい塩梅じゃのお」いうくらいで。

当初は、山のがっこうすることに対して反発するもんもおったし、わしら協力せんいうもんもおったよ。じゃが、成り立っていくけえ、やっぱりそういうようなことを言いよった人も、掃除草刈りとかの、出てきてくれよるわけじゃけえ。当初はやっぱり反対しても、歳をひらうんと、なんとか山のがっこうが運営できていくということとなると、協力するために出てきてくれる。じゃけえ今になって、当初のことを話しを掘りだしてするもんはおらんよね。

田んぼの体験について

〈最初に田んぼ体験するんだったらうちの田んぼを一枚使えばいいんじゃないかって保井さんが言ってくれて、それをきっかけに長年田んぼ体験をお願いしてきた。〉

賑やかになるいうことは、祭りごとが好きじゃけえ、人が寄ることは良いことじゃ、や

れやれというような感じじゃけえ、まあここ使
ってみいや、というような感じじゃけえ。



子どもたちとの体験で印象に残っていること

ただ植えにくるときと秋の収穫よの、あんと
きに来るだけじゃけえ、間につろうてどう
のこうはないわけじゃけえ、まあ泥遊びや
ら田んぼの中の虫を取ったりするのを喜んで
子どもらがの、遊ぶのが目的で、イネをつく
るのが目的じゃなく泥んこになることが楽し
みで来よるんだと思う。米が出来て秋の収穫
が楽しみじゃいうことはまあ、ないだろう
思う。

〈大人は、思い出と一緒に余計おいしい
という気持ちがあるかもしれない。〉

そりゃの、田んぼの中入って泥んこになっ
てやった、秋のイネを刈っての、かゆいのに、
はでにしたとか。そりゃあ、やっぱりある程
度歳がいったら、あの頃面白かったとか楽し
かったって記憶には残っとう思うよ。

〈地域住民Bさんのように、農家としてずつ
と地域で頑張っている人とふれあうことで、
じいちゃんばあちゃんの家に行くみたい思っ
てもらえると良いなと。〉

昔はここへ（保井さん宅へ）来よったけえ
のお、小屋へ。小屋で昼を食べよった。コロナ
の前までやとった。トラックのシートをバ
ーっと広げてから、その上へテーブル出して。
30人くらいきよったんか。なんかいっぱいお
ったよの。



ほしはらに子どもたちが来るようになってか らの変化

ちようどここへ田植えなんか、秋に稲刈り
なんか来たら、そりゃあ谷が賑やかになっ
ていいねえゆうて、上（かみ）のほうの年寄り連
中が言う感じで。活動に全然携わるわけじゃ
ないけえね。まあ、ほいじゃが子どもがおる
ことは活気づく、賑やかでいい、くらいよ。子
どもの声がすりゃあの。

今の子どもたちに伝えたいこと

伝えようおもや、全部じゃけど、ゆうても
今の考えが違うけえのお。”ああする、こうす
る、ああせい、こうせい”よりも、やってみせ
るほうがいいんじゃないか。やってみせて、今
の田植えでも「こがに植えるんよ」ゆうてや
って見せる、見せて教える。口でゆうても、田
んぼやら畑仕事やら理屈通りにはいかんけえ
ね。

やってみせるとか、愛ちゃんが言いよった
ように、スイカやらキュウリやらズッキーニ
やら三日にいっぺんはもがにゃいけんもんが、
一週間にいっぺんじゃ食べたもんじゃなくな
る、おいしいのはおいしいんよ。

今の子どもたちや親としたら、考えられん。
おいしいのは甘みがあってよう実とるんじ
ゃけえ。きゅうりでも種だして、皮むいて。今
の若いのは、こんなものは食べれんでしょ
うが。あがなってから、かす漬けやら塩漬けし
て、引っ張り出して干して、酒の粕漬け、奈良

漬よの、売りよるのはウリの奈良漬よ。あが
になるんよ、キュウリも。わしらは経験があ
るけえ、そういうふうにしてでも食べるけど。
やっぱりやってみにゃね、経験してみにゃ、

やっぱりおいしいもんでも、捨ててしまうよ
うになるし。

1
章

2
章

3
章

4
章

5
章

資料
編

I ターン C さん

<プロフィール>

2010 年頃上田町に家族で I ターン。1981 年生まれ。Tetoteo 代表。



子ども時代の自然体験

どんな子ども時代を過ごしていたか

すごく田舎なので、熊野川っていうとてもきれいな川があって、そこで遊ぶのが大好きで。夏は本当、真っ黒になって、橋からダイブしたりとか。ちょうど(それまで)できていたことができなくなる、禁止になっていくような時代。鮎をつかみ取りしたり、勝手に取ったり。魚釣りよりも、つかむのが好きで、サワガニ取ったりとか、鯉をつかまえては離して、オオサンショウウオがおったりもしたんですよ。山に勝手に入って怒られたりもしてたし。

大学時代の自然体験

大学でまた兵庫県の岡山寄りの播州赤穂の福祉大学に言っていたので、そこでは、YMCA の野外リーダーをしたりして、子どもとキャンプをしていました。その頃から、企画をしてイベントをするというのをやっていましたね。一番印象的だったのは、一週間キャンプですね。姫路なので山も川もあるんですよ、山から海にリヤカーをひいて、あんまり覚えてないんですけども、楽しかったですよね。姫路となると人口も多いので、結構な子ども

たちが、姫路のキャンプ場に毎日、来るんですよ。100 人とか来るんですけど、何人もの大学生で自然体験をするみたいなのをやっていました。基本そういうところが好きなんだと思います。

田舎での子育て

関西で就職後、上田に移住した経緯

わたし自身が結構、子ども時代でもいろいろ悩んだりとか考え込んでしまう方なんです。そういう時に、自然に助けられたという記憶があって、まぎらわしてもらったりとか、それこそ、自分の家の屋根に布団敷いて寝たりとか。あの環境だったからなんとか頑張れたじゃないですけど、そんなような気がしていて、今思えばですよ。そういうのがあったので、自分は田舎で子育てがしたいなと思ったんですよ。

いろいろ探して、結局、土地勘があるのは中国地方だったので、こっちで探したときに、主人が務められそうな場所もあって、家もすぐ見つかりそうだったので。最初は三次市内の方にいたんですけど。当時妊娠中で、結構勢いで来たんですけど。「自然、子育て、育児」でキーワードで検索すると、ほしはら山のがっこうが出てきて。

田舎での子育てに対する不安

あんまり記憶にない。子育てへの不安の方が多かった。(子どもが)すごいアトピーだったんで、ずっとかゆくて泣いているし。愛さんに相談して、三次の子育ての、けっこう移住したりとか転勤で、地の人じゃない人たちが集まる、「かどや」ってところ(を紹介してもらって)。そこを紹介してもらって、そしたら結構、三次の地の人じゃない人たちが、タイミングで集まっていて、自然的な子育てに興味がある人たち、例えば紙おむつじゃなくて、布にするとか。おむつなし育児とか無添加の

食事とかにすごい興味を持っている、お母ちゃん先輩たちに会って、そこに行ったら「大丈夫よ」とか「いつか治る」「カラダが強くなれば治まる」とか、アドバイスをもらったり、聞いてもらったりとかしたので、すごく助かってました。



田舎での子育てについて

常にどうかなって思うのは、子どもの数が少ないことに対しての、もう少しわちゃわちゃと遊べてもいいし。親の送迎がないと遊びにいけないとか。同級生が、長女の場合は女の子がいない状態で成長して、今は二人いるんだけど。川西の下の方の子だから、遊んだりもできないけど。大丈夫かなという不安は、社会に出るときとか、中学に上がる瞬間とか、そこで一気に学校が大きくなるので、大丈夫かなとか心配はあったので。そういう意味で（ほしはらの）7泊8日キャンプを体験させたりとか。

7泊8日行ったとて、あまり珍しくはないんですよ。沢登とか、プログラムの「わあ！はじめてー」っていうのはないんですけども、安心できる大人たちがおって、そういうところに行くと全然違うだろうなと思って参加させたんですけど。7泊8日でほんとに彼女は変わったので、それは行かせてよかったとすごい思ってた。

子どもの変化について

知らない人とは苦手なんですけども、行くようになりました。（苦手だから）やらないじゃなくて、行ける時は行くみたいな感じで。子ども同士の関わりに、親が介入しないとなかなか難しいというのが、田舎の欠点かなと思います。

でも家も広いので、すごく自由な人たちに育ったなーというのは（思いますね）。1番驚いたのは、今、中3の長女が。コロナの時にすごい助かったなって思いました。田舎なので、遊びたい放題だったので、家から出ちゃいけないとかもなかったの。小学6年生だったと思うんですけども、一人部屋がほしいって言い出して、一人の空間が欲しいって言って。「自分で作りんさいや」って言ったら、ティピーって言って、竹でつくるテントみたいなのを作り方だけ教えたんですよ。動画を見せたんですよ。そしたら本気になって、竹を自分で8本くらい切り出して、周りにあるシートみたいなのはホームセンターで買ってきたんですけど。使っていない机を持ってきて、その上に布団を敷いて、3日くらいその中で彼女は過ごしたんですけど。鹿、イノシシも来たらしんですけど、雨の音とかも心地いいとか言って。色々たくましく育った。



移住者からみた上田地域

2010年ぐらいに空き家があって来たんですよ。今は貸してないんですけど、大家さん

は良いって言ってくれてたんだけど、ご親戚の方が、自分が定年退職した時に帰ってきたいとかがあって、期間限定での貸し借りになってたんですよ。

入ってきた途端に、地域の方が掃除なんかもやり始めて、すごい手厚かったんですよ。「(上田に)住みたいんです」って勢いはあるんだけど、と言ってもうちの田舎はここまでハードでなかったから、普通の一軒家だったので、いろいろ分からないこともあって・・。そもそも、なんで移住してきたかという、(ほしはらの校舎を見て)木造のこんなかわいい建物があるんだって(思って)。そこに集うおじいちゃんおばあちゃんも「よう来た、よう来た」って言ってくれて。それも作戦だったって最近言われましたけど(笑)ここにおることが楽しいと思ってもらおうと思って、運動会とか、「あなたはあの人に話かけんさい」とか、話し合っとならしくて。Yさんが来たときには、Yさんにどうやって楽しんでもらおうかって、話しながらしよったんよって。

(他地域に)移住されたいろんな人の話を聞くんですけど、すごい閉鎖的な移住先もあるんですよ。だから、だめだってなって、帰っちゃった人もいるし。そういう話を聞くと、この町の人たちは、垣根がないというか、それをすごく感じました。

移住者から地域住民へ

ここに来たとき、(校舎の)かわいらしさと、人の良さと、茶畑の美しさと、とにかくそういうので決めたので。最初はほんとに、すごい素敵な建物だな、場所だな、から始まって、今は逆に私がほしはらを紹介する立場になって。

ふらっとここにたどり着く人がいて、その時にスタッフがいない時には、勝手に紹介したりとか。自慢したくなる場所になりましたね。自分もここを守っているじゃないけど、

関わらせてもらっているの。20年も続いて本当にすごいなと思います。

お茶畑について

最初におったところはお茶畑を通らないので、見学に来た時にきれいだなとは思ってたんですけど。今の家はお茶畑を通して家があるんですよ。ずっと行き来する中で、暮らしの中に溶け込むように茶畑があって。静岡とかの、農業みたいな感じではなくて、里山の暮らしの一部に溶け込んでいる茶畑がすごい好きで。

わたしが来てからだったと思うんですけど、一部が太陽光発電になってきたんですよ。残念だなあとすごく思っていたけど、Sさん夫婦が高齢で、管理されている大変さを聞いていたので。それくらいだったんですけども、いよいよSさんがやめようかという話を聞き始めて、それがちょうど、私が上田町に来てから10年位の時、そのときにすごく思ったんですけども、ずっと上田に来てからいろいろしてもらってきたんですよ。

野菜はくれるし、スイカを12個くらいもらったりとか。町内会だよりも「餅つきがしたいから、石臼と杵を持っていたらください」と書かせてもらったら、一緒にやろうって言ってくれたおじいちゃんがいる。年に1回餅つきをしています。コロナになってから、電気の餅つき機になったりはしたんですけど、「あんたと餅つきすることが、一年頑張れたという証拠じゃけえ」って、毎年誘ってくれていて、ずっと餅つきしている。

全部してもらってばかりなんですよ。いつも何か返したいなと思うんですけども、皆さん、全部自分でなんでもやって、おいしいものたくさん育てとってじゃし。

なんかできることないかなあって思って、(上田に来てから)10年くらい経った時に。ようようみなさんの足腰がダメになってきた

りとか。やっぱりもう移住者というよりも住民、まちの若い人、頼りになる人みたいに思ってくれるようになったのか、「これちょっと頼みたいんじゃないけど」とかいうのを言ってくださるようになったんですよ。それがきっかけで、四つ葉会っていう生産者グループさんが「わたしが出来んようになってきたけ、ずっとやってきた“はぶそう茶”をやってみるか」って。

どうせなら、はぶそう茶以外にも自分の強みを生かして、大好きなまちでおカネが儲けられるような循環を作れたらいいなって思うようになって、移住して10年くらいたったときに。（そこからほうじ茶シロップが誕生）

過去を未来へつないでいく

ほしはらもそうですけども、関わってくださっている方がどんどんカラダが動かないかになってきた時に、若い人たちの人数は限られていて、少ないんですよ。どうなるんだろう、というのはいつも片隅にはあるんだけど、それを考えて何もしないより、できることをするしかないって思った時に、今自分ができるのは、この土地の暮らしを楽しむことと、はぶそう茶は休耕田を活用して少しでも作ること、お茶畑を守っていくことと、お茶の製茶の技術を継承することかなって思って、今やってるんですけど。

人が少ないっていうのが、なんていうかな・大きな機械を入れて人数が少なくって出来るやり方も絶対あると思うんですけども、Sさんの今のやり方がすごい好きなんです。例えば、何度で何分間乾燥させたら、このくらい乾燥しますよっていうデータがあるとするじゃないですか。

Sさんのやり方は手の触感とか、ああいうのってすごいなと思うんですよ。全部がそうじゃなくていいんですよ、随所にそういう大切なことを残していけるつなぎ方がすごいなと思うので。

そうになると、ほうじ茶シロップも300万くらいする機会を入れてしまえば一人でもできるんですよ。でも、そうではなくて、ここで雇用もしたい、ここに住むおかあちゃんにも少しでも働いてもらいたいっていうのがあるので、一本一本手作りで。茶葉自体がそんなにたくさんないので、小ロットでできる仕組みを大切にしているんですけど。そうすると人がやっぱりもっといてほしいなとか思っています。

自分にできる残し方って何だろうと最近よく考えていて。わたしのマンパワーだけでは、限界も感じていて、体力的にも発想的にも。もちろんみんな手伝ってはくれるんですけど。そうなったときに、自分は、もともと障がい者福祉のことが好きだったので、農福連携じゃないですけど、障がい者の就労支援を立ち上げて、そこでマッチングさせていい仕組みができないかなと、まちにとっていい方向になっていかないかなって。

この前あいさんがね、これまでの20年とこれからの20年、質が変わるじゃないですけど、これからの20年どうやって残すことに貢献できるんだろうって考えたときに、そんな感じのことを今は思っています。

スマホやパソコンで回答できます。
<https://forms.gle/omXduIHhektvXWw1o8>

<https://forms.gle/Yuw63M13KrnYj5K6>
 小学生用は、こちらです。

- 農林水産業
 自営業・個人事業
 主婦・主夫
 パート・アルバイト
 会社員
 公務員・団体職員
 中学生
 高校生
 専門学校・大学生
 その他: _____

あなたについて教えてください。
 アンケート回答内容は集計で公開するため、個人が特定されることはありません。

1. 氏名
 お名前を教えてください。
 記入例) 星原さち子 (田舎: 大聖)

2. 現在の年齢*

3. 性別*
 1つだけマークしてください
 男性
 女性
 その他

3

4. ご職業*
 ・職業をお持ちの方は当てはまるものをチェック
 ・その他を選んだ方は職業をご記入お願いします
 当てはまるものをすべて選択してください

- 農林水産業
 自営業・個人事業
 主婦・主夫
 パート・アルバイト
 会社員
 公務員・団体職員
 中学生
 高校生
 専門学校・大学生
 その他: _____

5. ご職業の詳細
 ようしければ、職業の詳細を教えてください
 (例) 図書館の学芸員 NPOでOOに属する仕事
 職業以外にスタッフとして、又はボランティアで参加している活動があれば教えてください

6. 出身地*
 都道府県をご記入ください

7. 出身の市町村*

8. 現在お住まいの都道府県*
 都道府県をご記入ください

9. 現在お住まいの市町村*

4

ほしはらでの活動について教えてください。

10. はじめて参加した当時あなたは・・・*
- 1つだけマークしてください。

- 乳幼児
 小学生
 中学生
 大人（参加者）
 スタッフ
 参加者・スタッフ両方の立場で参加

11. はじめて参加したのは何年くらい前ですか。*

12. ほしはらでの活動への参加期間はどのくらいですか。*
- 1つだけマークしてください。

- 数回だけ参加
 1～2年間くらい参加
 3～5年間くらい参加
 6年～10年間参加
 11年～15年間参加
 16年以上参加
 スタート当初からずっと参加

13. 現在あなたは活動に参加していますか。
- 1つだけマークしてください。

- 参加している
 参加していない
 しばらく休んでいる（また参加したい）

5

14. これまでに参加したことのある活動を選択してください。*

その他の例：森に遠足に行く（子ども対象） 師匠子どもキャンプ 古民家ワークショップ 竹取合戦 と
人と交流 会員招待行事（霊巖山・冬三期） 森のようちえん（共催） 年越しキャンプ

当てはまるものをすべて選択してください。

- おいしい薬液（田嶋え・船岡り・そは）
 森づくりカフェ（ほしはらの森づくり・森あそび）
 かけっこスタイル
 7泊8日キャンプ
 合同運動会
 その他

15. 特に印象に残っているものはどれですか。*
- 1つだけマークしてください。

- おいしい薬液
 森づくりカフェ
 かけっこスタイル
 7泊8日キャンプ
 合同運動会
 その他

16. 選択した活動で、印象に残っていることをぜひ教えてください。

活動に参加した理由を教えてください。

17. はじめて参加した理由は？

あてはまるものをすべて選択

当てはまるものをすべて選択してください。

- 自然体験をしたかった
 奥山での体験をしたかった
 環境教育に興味があった
 地域づくりに興味があった
 知り合いや家族から誘われる
 講師やスタッフに惹かれる
 子どもに体験させたかった
 家族の思い、出づくり
 その他： _____

6

18. 2回目以降の参加理由
あてはまるものをすべて選択してください。

当てはまるものをすべて選択してください。

自然体験をしたかった
 鹿山町の体験をしたかった
 環境教育に興味があった
 地域づくりに興味があった
 知り合いや友達ができる
 講師やスタッフに会える
 子どもに体験させられた
 家族の思い出づくり
 その他: _____

19. あなたにとって体験したことは*
1つだけチェックしてください。

大変良かった
 良かった
 普通
 良くなかった
 大変良くなかった

20. 体験したことはどのようにあなた自身の中に残っていますか。*
1つだけチェックしてください。

ほとんど覚えていない
 アンケート回答中に思い出した
 たまに思い出したことを思い出す
 よく体験したことを思い出す
 体験したことが成長につながった実感がある
 体験したことが人生を変えた
 その他: _____

21. ほしはらでの体験の思い出
思い出に残っているシーン、成長を感じたこと、影響を受けたこと、今役に立っていることなどを教えてください。

7

今後のほしはらや、体験地域との関わりについて教えてください。

あなたは今後、ほしはらや体験地域にどのように関わっていきたいと思いますか。

22. ほしはらとの関わりについて
あてはまるものをすべて選択
当てはまるものをすべて選択してください。

活動に参加したい
 スタッフとして関わりたい
 情報を受け取りたい
 会員として活動をサポートしたい
 寄付、クラウドファンディングで協力したい
 関わることは出来ない
 その他: _____

23. 体験地域との関わりについて
あてはまるものをすべて選択
当てはまるものをすべて選択してください。

地域の情報を受け取りたい
 地域産品を購入したり、食文化を楽しみたい
 地域の祭りやイベント、行事に参加したい
 地域の人とのコミュニケーションを築きたい
 祭りやイベント、行事の組織や運営を手伝いたい
 寄付やクラウドファンディングで協力したい
 なにか地域のために何かをしてみたい
 その他: _____

24. これからのほしはら山のつこうへの希望や事などがあれば教えてください。

8

ほしはらアンケート (小学生以下用)

体験や7はくキャンプに来てくれたみなさん、こんにちは。

らいねん20周年（しゅうねん）をお祝いするため

ほしはら山のびっごうアンケートをすることにしました。

どうぞ協力をお願いします！

よめぬい選手（かんじ）などがあつたときは、おうちに人に書くなどして、かいてくださいね。
わからないところは、とほしてくださいね。

アンケートのつからぬ返してきます。
<https://forms.gle/ywv63Mj3KmyE5sk6>

1. なまえ（ニックネーム）

なまえとニックネーム（あれば）

2. あなたは何者ですか？

3. ほしはらの活動で、参加したことのあるものを選んでください。当て

はまるものをすべて選択してください。

- おいしい薬坂（田んぼ・そば・さんさい）
- 菜づくりカフェ
- かけっこスクール
- 7月8日キャンプ
- 運動会
- その他（森に遠足に行こう・防災子どもキャンプ・竹とり合戦・とんど交遊・森のようちえん・年こしきキャンプ）

4. とくにおもしろかった・よく覚えているものはどれですか？

当てはまるものをすべて選択してください。

- おいしい薬坂
- 菜づくりカフェ
- かけっこスクール
- 7月8日キャンプ
- 運動会
- その他

5. その活動で、とくにおもしろかったこと、おぼえていることを自由に書いてください。

6. ほしはらに行こうと思ったのはどうしてですか？当て

はまるものをすべて選択してください。

- 自然体験をしたかった
- 熊山の体験をしたかった
- あたらしい友だちをつくりたい
- しげんの先生やスタッフに会いたい
- 友だちに会いたい
- おやにすすめられた
- その他

7. ほしはら山のびっごうでの体験はどうでしたか？

1つだけアースしてください。

- とてもよかった
- よかった
- 良かった
- よくなかった
- とてもよくなかった

8. ほしはらでの体験をおして成長を感じたことや、知ったこと、思い出に残っていることや時々思い出出すこと、また会いたい人などを教えてください。

執筆者

特定非営利活動法人ほしはら山のがっこう

浦田 愛

島根県中山間地域研究センター

貫田 理紗



自然体験による子どもの豊かな育ち及び「ふるさと」への心理的基盤の形成に関する総合的研究～20年間の自然体験がもたらしたもの～

発行：特定非営利活動法人ほしはら山のがっこう

島根県中山間地域研究センター地域研究科

2024年3月末